

箕面市粟生間谷東所在

粟生間谷遺跡

旧石器・縄紋時代編

—国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う旧石器・縄紋時代遺跡の調査—

本文編

2003年2月

(財) 大阪府文化財センター



栗生間谷遺跡近景（東から望む）



栗生間谷遺跡出土主要石器



ブロック1 出土主要石器



ブロック3出土主要石器



ブロック6 出土主要石器



1 : チャート 2 : 硅質ホルンフェルス 3 : 泥質ホルンフェルス 4 : 緑色岩ホルンフェルス
5 : チャートホルンフェルス 6 : 砂質ホルンフェルス 7 : フエルサイト 8 : 石英斑岩 9 : 蔽打痕のある礫

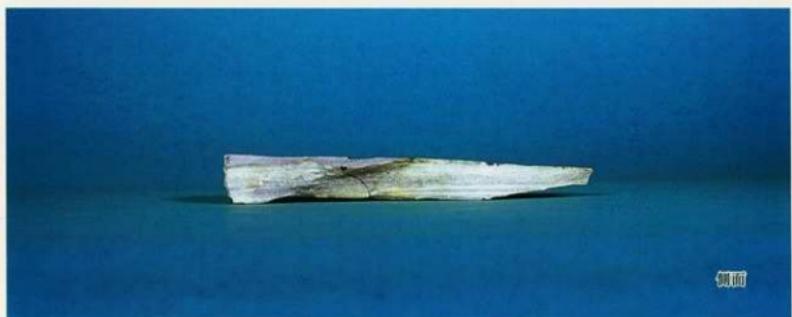
礫集中部出土各種礫



土坑81出土サヌカイト板材（2021）



裏面



側面



表面

土坑81出土サヌカイト板材（2022）

序 文

栗生間谷遺跡は、大阪府の北部、箕面市の東端で茨木市との境目に位置し、北側に北摂山地がせまり、南側に勝尾寺川が流れ、その河川が形成した段丘上および丘陵の先端部にあたります。

住宅・都市基盤整備公団（現都市基盤整備公団）では、箕面市と茨木市にかけての「国際文化公園都市（彩都）の地区区画整理事業」を進めることとなり、当センターがその建設に先立って発掘調査を行うこととなりました。栗生間谷遺跡の調査は6ヵ年にわたり、その後2年間の整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査の成果から、南面する丘陵の緩やかな傾斜地に、これまで知られていなかった後期旧石器時代の遺跡が検出されました。その石器の出土状況から、数群のブロックが形成されていることが判り、石器組成や石材組成から、これまで確認されてきた畿内的な石器の様相とは異なる要素をもった石器群であることが判明しました。また、それらに伴う火山灰も検出されて、分析結果より、AT降灰以後の石器群であることが判りました。

縄文時代は、旧石器時代に続き草創期から早期の石器群が出土し、変わらぬ人間活動があったことが窺われます。しかしながら、その後しばらくは明確な営みの痕跡が見られません。後期になり再び活動が認められるようになり、晩期まで続きます。隣接する徳大寺遺跡では、縄文時代晩期の住居址も検出されています。

弥生時代および古墳時代は、遺構が全く検出されず、遺物もわずかに上層の包含層に混入している程度でした。

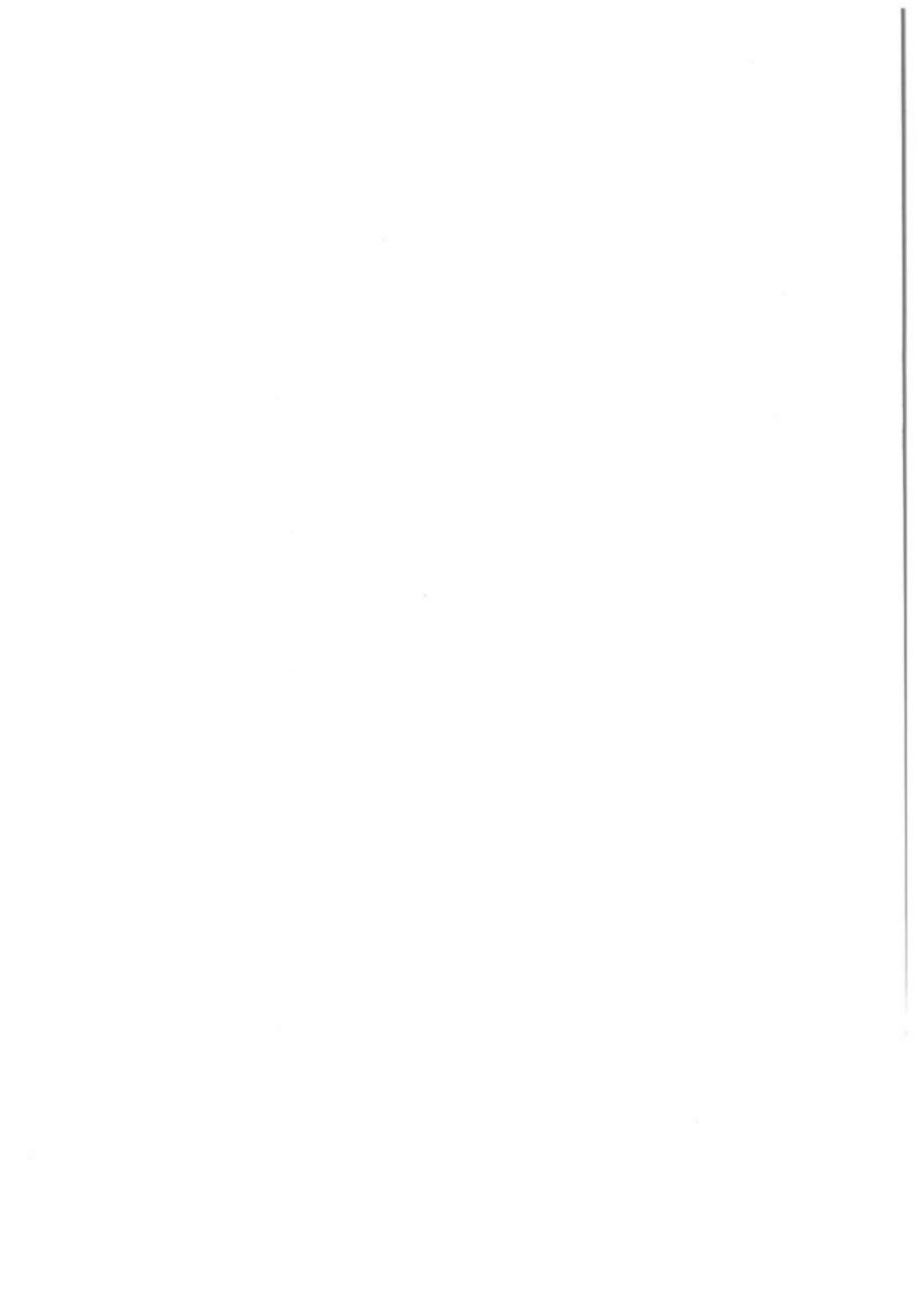
当遺跡で再び人々の活動が活発になるのは、奈良時代以降で、地鎮のためか奈良三彩の小型壺にガラス玉が納められたものが出土しています。これ以降、中世にかけて掘立柱建物百数十棟が検出され、それらの変遷が明らかになり、中世集落の復原が可能となりました。

なお、『勝尾寺文書』にみえる文献史学で研究されてきた「栗生村」と、発掘調査の成果で得られた中世集落の成り立ちを比較することも出来ました。

最後に、発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました地元関係各位をはじめ、都市基盤整備公団関西支社、大阪府教育委員会、箕面市教育委員会、茨木市教育委員会に深く感謝して序の言葉とします。

2003年2月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好



例　　言

1. 本書は国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う粟生間谷遺跡（あおまだにいせき）発掘調査報告書である。なお、粟生間谷遺跡は大阪府箕面市粟生間谷東3丁目地内に所在する。
2. 発掘調査及びそれに伴う整理事業は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会と財団法人大阪府文化財調査研究センターが都市基盤整備公団の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は（その1）1994年7月～1995年3月　　〔（財）大阪府埋蔵文化財協会〕
（その2）1996年6月6日～1997年1月31日〔（財）大阪府文化財調査研究センター〕
（その3）1997年2月1日～1999年3月31日
（その4）1997年6月1日～1998年3月10日
（その5）1998年6月1日～1999年3月10日
（その6）1999年3月5日～2000年3月10日
（その7）1999年5月1日～2000年3月10日に実施し、
整理事業は2000年6月1日から2002年2月28日まで実施した。
4. 発掘調査・整理作業ならびに本報告書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府埋蔵文化財協会（1994年度）・財団法人大阪府文化財調査研究センター（1996～2001年度）が実施した。（その1）は技師上林史郎・岡本圭司が担当した。（その2）以降は北部調査事務所が調査を所管した。（その3）は北部調査事務所所長玉井功、調査第1係長小野久隆の指示の下、技師新海正博・山本美野里が、（その4）は北部調査事務所所長藤田憲司、調査第2係長金光正裕の指示の下、技師新海・信田真美世・専門調査員瀬戸哲也（現沖縄県立埋蔵文化財センター）が、（その5）は技師森本徹・亀井聰が、（その6）は技師新海・信田・専門調査員木村健明（現東大阪市教育委員会嘱託職員）が、（その7）は技師森本・専門調査員福島正和（現（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）が担当した。本書に関わる整理作業は北部調査事務所長小野久隆、調査第2係長森屋美佐子の指示の下、技師新海が行ない、主査上野貞子が写真を担当した。
なお、報告書執筆には北部調査事務所をはじめとする当センター職員の協力を得た。
5. 自然科学的分析については、以下に記した方々に依頼し、その結果を本書に掲載した。

サスカイト・黒曜石産地同定	薬科哲男（京都大学原子炉実験所）
¹⁴ C年代測定	（株）地球科学研究所
火山灰分析・微化石分析	（株）川崎地質・渡辺正巳〔（株）文化財調査コンサルタント〕
6. チャートの産地同定の検討については井本伸廣（京都教育大学名誉教授）、有舌尖頭器に関しては光石鳴巳（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、縄紋時代の石器に関しては田部剛士（奈良大学博士課程前期）の諸氏から玉稿を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
7. 大阪府八尾南遺跡第6地点出土の旧石器資料に関しては大阪府教育委員会所管の資料を使用させて頂いた。大阪府教育委員会大野　薰・山田隆一の諸氏には資料の貸し出し、実測・写真撮影の許可等の便宜を図って頂き、さらには遺跡についての御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

8. 免山 篤氏には所蔵資料の実測・写真撮影の許可を頂き、採集地点について御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
9. 発掘調査及び整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏ならび諸機関に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略、順不同)
- 岡村道雄・白杵勲〔文化庁〕、会田容弘〔郡山女子大学〕、小野 昭〔東京都立大学〕、織笠 昭〔東海大学〕、白石浩之〔愛知学院大学〕、井本伸廣、山中一郎〔京都大学〕、松藤和人〔同志社大学〕、鶴柄俊夫〔同志社大学資料館〕、山口卓也〔関西大学博物館〕、泉 拓良〔奈良大学〕、河瀬正利・竹広文明・中越利夫・藤野次史〔広島大学〕、松沢亜生〔笠懸野岩宿文化資料館〕、保坂康夫〔山梨県埋蔵文化財センター〕、伊藤 健・比田井民子〔(財) 東京都埋蔵文化財センター〕、諏訪間順〔小田原市教育委員会〕、龟田直美、長屋幸二〔岐阜県立大垣東高校〕、鈴木忠司〔京都文化博物館〕、中川和哉〔(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター〕、光石鳴巳〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館〕、松浦五輪美〔奈良市教育委員会〕、佐藤良二〔香芝市立二上山博物館〕、趙 哲濟・絹川一徳〔(財) 大阪市文化財協会〕、大船孝弘〔(財) 高槻市芥川緑地資料館〕、賀納章雄〔吹田市立博物館〕、奥井哲秀〔茨木市教育委員会〕、福田 薫〔箕面市教育委員会〕、久保弘幸・山本 誠〔兵庫県教育委員会〕、大谷輝彦・中川 猛〔姫路市教育委員会〕、免山 篤〔茨木市文化財保護審議委員〕、小野秀幸〔(財) 香川県埋蔵文化財調査センター〕、曾我貴行〔高知県教育委員会〕、沖 憲明〔広島県教育委員会〕、有本雅己〔日本考古学协会会员〕、黄 昭姫〔同志社大学博士課程後期〕、岡田憲一〔奈良大学博士課程後期〕、田部剛士〔奈良大学博士課程前期〕、内山ひろせ〔広島大学博士課程後期〕、近畿旧石器交流会、大野 薫・橋本高明・森屋直樹・山田隆一〔大阪府教育委員会〕
10. 発掘調査及び整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た。

——発掘調査——

有澤恭子、石井 佑、石川奈々絵、石黒智美、石塚貢子、市川奈緒、伊礼よしの、上河善子、内山義行、梅田陽子、岡部純子、鹿島真由美、勝間悠有子、黒川泰隆、荻田知宏、近藤昌則、酒井 貢、佐々木恵美、澤田正明、高倉淳子、高田泰子、高見 文、田中千賀、塙本浩哉、辻 康男、百々暉、殿岡佑介、富田卓見、中馬雄一、仲辻晃明、成田晃一、野口佳子、橋本牧子、幅 伸吾、日高圭吾、樋口玲子、平田麻希、藤本知弥、降井寮治、松田智子、向井 朗、村岡 讓、村上八重子、渡邊健一郎、渡邊健二

——整理作業——

伊藤栄二、立岩美津子、津田春子、野口 淳、野口佳子、森川 実、森先一貴

11. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は(財)大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

12. 表紙の揮毫は当センター総務部 白橋鐘道による。

凡　例

1. 本報告書は、本文編・実測図版・付表編・写真図版編の3分冊で構成されている。
2. 挿図の縮尺はその対象によって異なっており、必ずしも一致していない。各図版のスケールを参照されたい。
3. 遺構および断面図中の標高は東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値である。
4. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは、国土座標の第VI座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北は座標北を基準としている。ちなみに、座標北は磁北より東へ $6^{\circ} 40'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 12'$ 振れている。また、座標の記載は全てm単位とする。
5. 遺構名は新たに付け直さず、調査時に付したものそのまま使用した。従って、一部に粟生間谷遺跡報告書－古代・中世編－の遺構名称と異なるものがある。
6. 遺構図における断面位置は「L」形によってその位置を明示した。
7. 粟生間谷遺跡出土石器の実測図および写真図版における遺物番号は、出土石器全点に付加した通しの管理番号である。縄紋土器に関しては掲載資料に関してのみ通し番号を付した。石器・土器とともに実測図と写真図版の遺物番号は同一のものである。
8. 八尾南遺跡第6地点出土石器の実測図および写真図版における遺物番号は、接合資料に関しては既刊の山田隆一編 1993『八尾南遺跡Ⅱ 旧石器出土第6地点の調査』 大阪府教育委員会 の接合資料番号に準じ、そこから剥離される個別の石器に関しては剥離の順序に従い新たに番号を付した。
9. 免山氏所蔵資料の石器実測図および写真図版における遺物番号は、採集地点毎に通し番号を付加したものである。縄紋土器に関しては掲載資料全点に対して通し番号を付加した。石器・土器とともに実測図と写真図版の遺物番号は同一のものである。
10. 遺物実測図の縮尺はブロック1出土石器が1/1、それ以外の石器が3/4、礫器が2/5、縄紋土器が1/2を基本としている。一部にスケールアウトしているものがあるため、各図のスケールを参照されたい。
11. 挿図に表れる●や▲等の記号は各挿図の凡例を参照していただきたい。
12. 本文中や挿表に表れる略号は以下の通りである。

Kn：ナイフ形石器・Ka：角錐状石器・RS：円形搔器・ES：搔器・Sc：削器・Dr：石錐・PE：楔形石器・No：ノッチ・HS：敲石・RF：2次加工ある剝片・UF：微細剝離ある剝片・Fl：剝片・Cp：碎片・BC：背部整形剝片・Co：石核・To：異形部分磨製石器・Sa：サヌカイト・Ch：チャート・An：安山岩・Sh：頁岩・Qu：石英・Cr：水晶・Si：粘板岩・Rh：流紋岩・MH：泥質ホルンフェルス・Ja：碧玉・ST：珪質凝灰岩・Sn：砂岩・Gr：花崗閃綠岩・Po：ヒン岩・Qz：珪岩
13. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
14. 本書の執筆については目次に記した。また、編集は新海が行なった。

目 次

巻頭カラー図版

- | | | |
|------------------------|------------------|------------------|
| 1. 栗生間谷遺跡全景 | 2. 栗生間谷遺跡出土主要石器 | 3. ブロック 1 出土主要石器 |
| 4. ブロック 3 出土主要石器 | 5. ブロック 6 出土主要石器 | 6. 碠集中部出土各種砾 |
| 7. 土坑81出土サスカイト板材(2021) | | |
| 8. 土坑81出土サスカイト板材(2022) | | |

序文

(財) 大阪府文化財調査研究センター 理事長 水野 正好

例言・凡例

第1章 調査の経過と方法	1	
第1節 発掘調査の経過	(新海正博)	1
第2節 発掘調査の方法	(新海)	3
第2章 位置と環境	6	
第1節 地理的環境	(新海)	6
第2節 歴史的環境	(新海)	7
第3章 調査の概要	13	
第1節 調査の概要	(新海)	13
第2節 層序と火山灰	(新海)	14
第4章 出土石器の整理方法	16	
第1節 接合資料と母岩別資料	(伊藤栄二)	16
第2節 石器記載と旧石器時代の遺構に関する用語法	(野口 淳・森川 実)	18
第5章 旧石器時代の遺構と遺物	20	
第1節 ブロックの設定	(新海)	20
第2節 ブロック 1	23	
1. 石器分布	(新海)	23
2. 石器組成と石材組成	(伊藤)	25
3. 出土石器	(伊藤・森川)	34
第3節 ブロック 2	40	
1. 石器分布	(新海)	40
2. 出土石器	(伊藤)	40
第4節 ブロック 3	41	
1. 石器分布	(新海)	41
2. 石器組成と石材組成	(伊藤)	43
3. 出土石器	(伊藤・森川)	55
4. 石器製作技術	(伊藤・森川)	59

第5節 ブロック4・ブロック5	61
1. 石器分布	(新海) 61
2. 出土石器	(伊藤) 64
第6節 ブロック6	65
1. 石器分布	(新海) 65
2. 碰集中部	(新海) 70
3. 石器組成と石材組成	(伊藤) 85
4. 出土石器	(伊藤・森川) 86
5. 石器製作技術	(森川) 93
第7節 ブロック7	(新海) 94
第6章 繩紋時代の遺構と遺物	95
第1節 繩紋時代の遺構	(新海) 95
第2節 繩紋時代の遺物	103
1. 出土土器	(新海) 103
2. 出土石器	(田部剛士) 110
第7章 包含層出土の遺物	115
第1節 石器の分布	(新海) 115
第2節 出土石器	(伊藤・森川) 115
第8章 基礎分析	121
第1節 碰集中部の検討	(新海) 121
第2節 ブロックの構成と遺跡形成過程の検討	(野口) 130
第3節 ブロック1・3・6の分析・比較	(森川) 152
第4節 栗生間谷遺跡におけるブロック出土石器の検討	(伊藤) 165
第5節 栗生間谷遺跡出土の縄文石器の位置付け	(田部) 175
第6節 丹波帯におけるチャートの産出状況と栗生間谷遺跡出土のチャート石器群の関係について	(井本伸廣) 183
第7節 チャート石材の分布と石質について	(森先一貴) 191
第9章 八尾南遺跡第6地点石器群の分析	197
第1節 遺跡の概要	(新海) 197
第2節 八尾南遺跡第6地点の接合資料	(森川) 197
第3節 八尾南遺跡第6地点における遺跡形成過程の再検討	(野口) 219
第10章 自然科学的分析	239
第1節 自然科学的分析の概要	(新海) 239
第2節 栗生間谷遺跡出土サヌカイト製造物および黒曜石製造物の原材産地分析	(薦科哲男) 240
第3節 栗生間谷遺跡出土炭化物の ¹⁴ C年代測定	[(株) 地球科学研究所] 265
第4節 栗生間谷遺跡の火山灰分析および微化石概査	[(株) 川崎地質・渡辺正巳] 267

第11章 考察	279
第1節 瓜破台地周辺における石器群の様相～原材料の搬入と技術変異のあり方について～	
.....(森川)	279
第2節 チャートを主体とした石器群の比較検討(手島美香)	299
第3節 大阪府北摂地域出土の有茎尖頭器について(光石鳴巳)	311
第4節 近畿地方における金山産サスカイトの利用について	…(田部)	321
第12章 国文地区内試掘出土資料および免山 篠氏所蔵資料	333
第1節 國際文化公園都市地区内試掘調査	333
1. 試掘地点の概要(新海)	333
2. 出土遺物の概要	333
(1) 繩紋土器(新海)	333
(2) 石器(森先)	334
第2節 免山 篠氏所蔵資料 (国文地区周辺)	334
1. 田中代地点	336
(1) 繩紋土器(新海)	336
(2) 石器(森先)	337
2. 神田平地点	339
(1) 石器(森先)	339
3. 竜ノ前地点	340
(1) 繩紋土器(新海)	340
(2) 石器(森先)	341
4. 庄ノ本遺跡	342
(1) 石器(森先)	342
5. 大中地点	342
(1) 繩紋土器(新海)	342
(2) 石器(森先)	343
6. シオ田地点	343
(1) 石器(森先)	343
第13章 総括(新海)	344

挿 図 目 次

- 図1 國際文化公園都市全体図
 図2 粟生間谷遺跡調査区配置図
 図3 國土座標系とそれによる地区割り
 図4 粟生間谷遺跡地区割り
 図5 周辺地質図
 図6 北摂（豊中～高槻）地域の主要旧石器・
 縄紋時代遺跡分布図
 図7 粟生間谷遺跡旧石器時代ブロック・縄紋時代遺構分布図
 図8 ブロック1平面・断面図
 図9 ブロック1石器平面・垂直分布図
 図10 ブロック1石器平面分布図（中世遺構との関係）
 図11 ブロック1等距離円図（r=40cm、上：全点・下：石材別）
 図12 ブロック1チャート色調別・サスカイト産地別平面分布図
 図13 ブロック1チャート母岩別平面分布図（1）黒色（その1）
 図14 ブロック1チャート母岩別平面分布図（2）黒色（その2）
 図15 ブロック1チャート母岩別平面分布図（3）赤・緑色
 図16 ブロック1重量別平面分布図
 図17 ブロック1水洗選別資料回収点数（石材別）
 図18 ブロック1水洗選別資料回収重量
 （左：チャート・右：サスカイト）
 図19 ブロック1器種別平面分布図
 図20 ブロック1ナイフ形石器・ノッチ平面分布図
 図21 ブロック12次加工ある剝片・
 微細剝離ある剝片平面分布図
 図22 ブロック1石核平面分布図
 図23 ナイフ形石器模式図
 図24 ブロック2石器平面・垂直分布図
 図25 ブロック3平面・断面図
 図26 ブロック3石器平面・垂直分布図
 図27 ブロック3等距離円図（r=60cm）
 図28 ブロック3チャート母岩別・サスカイト産地別平面分布図
 図29 ブロック3水洗選別資料回収点数
 図30 ブロック3重量別平面分布図
 図31 ブロック3器種別平面分布図
 図32 ブロック3ナイフ形石器平面分布図
 第33 ブロック3削器・搔器・石錐平面分布図
 図34 ブロック32次加工ある剝片・
 微細剝離ある剝片平面分布図
 図35 ブロック3石核平面分布図
 図36 ナイフ形石器模式図
 図37 ブロック3出土背部整形剝片
 図38 ブロック4平面・断面図
 図39 ブロック4石器平面・垂直分布図
 図40 ブロック5平面・断面図（上）、石器平面・垂直分布図（下）
 図41 ブロック5水洗選別資料回収点数・重量別分布図
 図42 ブロック6平面・断面図
 図43 ブロック6断面図
 図44 ブロック6石器及び縄集中部平面・垂直分布図
 図45 ブロック6等距離円図（r=60cm）
 図46 ブロック6チャート色調別・サスカイト産地別平面分布図
 図47 ブロック6チャート母岩別平面分布図
 図48 ブロック6重量別平面分布図（1）
 図49 ブロック6重量別平面分布図（2）
 図50 ブロック6器種別平面分布図
 図51 ブロック6サスカイト製ナイフ形石器平面分布図
 国52 ブロック6チャート製ナイフ形石器ほか平面分布図
 国53 ブロック62次加工ある剝片平面分布図
 国54 ブロック6微細剝離ある剝片平面分布図
 国55 ブロック6サスカイト製石核平面分布図
 国56 ブロック6チャート製石核平面分布図
 国57 縄集中部平面・復元断面図
 国58 縄集中部出土 織打痕有
 国59 縄集中部等距離円図（φ45cm）
 国60 縄集中部縄分布密度（点数）
 国61 縄集中部石材別平面分布図
 国62 縄集中部破損状況平面分布図
 国63 縄集中部重量別平面分布図
 国64 ナイフ形石器模式図
 国65 ブロック7平面・断面図（上）、石器平面・垂直分布図（下）
 国66 丘陵部断面図

- 図67 川合裏川東扇状地状地形断面
- 図68 土坑559(上)・土坑15(下)平面・断面図
- 図69 繩文時代遺物集中地点
- 図70 土坑70平面・断面図
- 図71 繩文時代河川
- 図72 川合裏川東扇状地遺構分布図(その6調査区)
- 図73 pit251・土坑79 平面・断面図
- 図74 溝24はか平面・断面図
- 図75 土坑81平面・断面図
- 図76 川合裏川東扇状地(その7調査区)遺構分布図(上)・落込71(中)・pit148(下)平面・断面図
- 図77 栗生間谷遺跡出土石器分布図
- 図78 離心距離別縦分布点数グラフ(実測値)
- 図79 離心距離別縦分布点数グラフ(単位面積あたり点数)
- 図80 ゲナスドルフ遺跡検出の大型テント状遺構
- 図81 ブロック6・釋集中部関係図
- 図82 栗生間谷遺跡各ブロックの規格格円図
- 図83 ブロック1・3・6石器垂直分布の解析図
- 図84 ブロック1構成クラスターの規格格円図
- 図85 ブロック3構成クラスターの規格格円図
- 図86 ブロック6構成クラスターの規格格円図
- 図87 大阪平野周辺のおもな後期田石器時代遺跡
- 図88 ナイフ形石器の諸属性
- 図89 ナイフ形石器の長幅分布
- 図90 ナイフ形石器の長厚分布
- 図91 栗生間谷遺跡の主要ブロックにおける石器群
- 図92 淀川流域およびその近隣旧石器遺跡における石器群の様相
- 図93 繩文時代草創期～早期の尖頭器
- 図94 繩文時代草創期～早期の削器
- 図95 丹波帯の地質概略図
- 図96 調査地点分布図
- 図97 八尾南遺跡第6地点周辺の遺跡分布図
- 図98 八尾南遺跡第6地点基本層序柱状図
- 図99 記載上の概念
- 図100 剥片の長さ・幅散布図
- 図101 八尾南遺跡第6地点南群全体図
- 図102 八尾南第6地点南群2ブロック接合状況
- 図103 八尾南遺跡第6地点中央群全体図
- 図104 八尾南遺跡第6地点中央群4・5・6ブロック接合状況(1)
- 図105 八尾南遺跡第6地点中央群4・5・6ブロック接合状況(2)・5ブロック接合状況(1)
- 図106 八尾南遺跡第6地点中央群5ブロック接合状況
(検討対象外資料)
- 図107 八尾南遺跡第6地点中央群5ブロック接合状況(2)～(4)
- 図108 八尾南遺跡第6地点中央群5ブロック接合状況(5)・中央群7ブロック(1)
- 図109 八尾南遺跡第6地点中央群7ブロック接合状況(3)・(4)
- 図110 八尾南遺跡第6地点北群全体図
- 図111 黒曜石原産地
- 図112 サスカイト及びサスカイト様岩石の原産地
- 図113 金山・五色台地域サスカイト・黒曜石様ガラス質安山岩の原産地
- 図114 C14年代の補正曲線図
- 図115 C14年代の補正曲線図
- 図116 試料採取地点
- 図117 (その3)No1・2地点の火山ガラス粒数比・重量比
- 図118 ブロック1の火山ガラス粒数比・重量比
- 図119 ブロック3の火山ガラス粒数比・重量比
- 図120 ブロック4の火山ガラス粒数比・重量比
- 図121 ブロック6の火山ガラス粒数比・重量比
- 図122 遺物集中地点2の火山ガラス粒数比・重量比
- 図123 分割剥片の模式図
- 図124 刺離技術A・B模式図
- 図125 八尾南遺跡第6地点の石核
- 図126 八尾南遺跡第6地点の石器
- 図127 八尾南遺跡第6地点の技術構造
- 図128 接合No69の素材復元図
- 図129 「原離集積遺構」の石核
- 図130 NG89BH次石器群の接合資料
- 図131 NG89BH次石器群のナイフ形石器
- 図132 NG97AB次石器群の接合資料・ナイフ形石器
- 図133 NG97AB次石器群の分割剥片
- 図134 「打面構成」チャート(上)・サスカイト(下)
- 図135 自然面の付着 チャート(上)・サスカイト(下)
- 図136 北摂地域出土の有茎尖頭器(1)

- 図137 北摂地域出土の有茎尖頭器（2）
 図138 北摂地域出土の有茎尖頭器（3）
 図139 北摂地域における有茎尖頭器の出土地
 図140 蛍光X線分析実施遺跡及び板状石材出土遺跡の分布
 図141 蛍光X線分析結果による時期毎の石材組成

- 図142 近畿地方における板状石材（1）
 図143 近畿地方における板状石材（2）
 図144 国際文化公園都市地区内試掘調査地点及び
 免山氏遺物採集地点分布図

表 目 次

表1 旧石器・縄紋時代遺跡地名表	表26 重量の度数分布
表2 粟生間谷遺跡における接合資料一覧表	表27 打面幅の度数分布
表3 粟生間谷遺跡における母岩別資料一覧表	表28 打面厚の度数分布
表4 粟生間谷遺跡ブロック別石器組成	表29 打面構成
表5 粟生間谷遺跡ブロック別器種別重量	表30 打面形態
表6 粟生間谷遺跡ブロック別石材組成	表31 打面調整の頻度
表7 粟生間谷遺跡ブロック別石材別重量	表32 刺離角の度数分布
表8 粟生間谷遺跡疊集中部疊種組成	表33 背面構成
表9 ブロック1石材別石器組成	表34 自然面の付着
表10 ブロック1母岩別石器組成	表35 最大長の度数分布(石核)
表11 ブロック3石材別石器組成	表36 最大幅の度数分布(石核)
表12 ブロック3母岩別石器組成	表37 最大厚の度数分布(石核)
表13 ブロック4・5母岩別石器組成	表38 最大厚の度数分布(石材別)
表14 ブロック6石材別石器組成	表39 計量属性の代表値
表15 ブロック6母岩別石器組成	表40 ナイフ形石器の属性表
表16 疊種組成表	表41 淀川流域の旧石器時代遺跡における石材組成
表17 近畿・中国地方の主要「疊群」の属性	表42 淀川流域の旧石器時代遺跡における石器組成
表18 主要な旧石器時代住居状遺構	表43 粟生間谷遺跡出土石器消長表
表19 粟生間谷遺跡各ブロック・構成クラスターの一覧表（1）	表44 チャートの石質評価
表20 粟生間谷遺跡各ブロック・構成クラスターの一覧表（2）	表45 刺片の長さ度数分布
表21 サスカイト・チャートの構成比	表46 刺片の幅度数分布
表22 チャートの色調別構成比	表47 刺片の厚さ度数分布
表23 最大長の度数分布(刺片)	表48 刺片の重量度数分布
表24 最大幅の度数分布(刺片)	表49 刺片の打面幅度数分布
表25 最大厚の度数分布(刺片)	表50 刺片の打面厚度数分布

- 表51 打面構成
- 表52 打面形状
- 表53 剥離角の度数分布表
- 表54 接合資料の大きさ・剥離回数・利用パターン
- 表55 接合資料別にみた剝片の大きさ
- 表56 接合資料別にみた剝片の利用／折損状況
- 表57 接合資料に含まれる剝片・石核属性表（1）
- 表58 接合資料に含まれる剝片・石核属性表（2）
- 表59 接合資料に含まれる剝片・石核属性表（3）
- 表60 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（1）
- 表61 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（2）
- 表62 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（3）
- 表63 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（4）
- 表64 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（5）
- 表65 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（6）
- 表66 各サスカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（1）
- 表67 各サスカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（2）
- 表68 原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値
- 表69 岩屋原産地からのサスカイト原石66個の分類結果
- 表70 和泉・岸和田原産地からのサスカイト原石72個の分類結果
- 表71 和歌山市梅原原産地からのサスカイト原石21個の分類結果
- 表72 粟生間谷遺跡出土黒曜石剝片の元素比分析結果
- 表73 粟生間谷遺跡出土サスカイト製石器・剝片の元素比分析結果（1）
- 表74 粟生間谷遺跡出土サスカイト製石器・剝片の元素比分析結果（2）
- 表75 粟生間谷遺跡出土サスカイト製石器・剝片の元素比分析結果（3）
- 表76 粟生間谷遺跡出土サスカイト製石器・剝片の元素比分析結果（4）
- 表77 粟生間谷遺跡出土サスカイト製造物原材の各産地における採取確率の一例
- 表78 粟生間谷遺跡出土のサスカイト、黒曜石製石器・剝片の原材产地推定結果（1）
- 表79 粟生間谷遺跡出土のサスカイト、黒曜石製石器・剝片の原材产地推定結果（2）
- 表80 粟生間谷遺跡出土のサスカイト、黒曜石製石器・剝片の原材产地推定結果（3）
- 表81 粟生間谷遺跡出土のサスカイト、黒曜石製石器・剝片の原材产地推定結果（4）
- 表82 分割剝片の属性
- 表83 工程Ⅰ（Ⅰ～Ⅲ類剝片）の折損状況
- 表84 Ⅳ類剝片とその石核の折損状況
- 表85 石器群の内容
- 表86 定量的属性の代表値・標準偏差
- 表87 打面の有無
- 表88 打面形状
- 表89 打面構成
- 表90 自然面の付着
- 表91 板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡 石器組成
- 表92 定量的属性の代表値
- 表93 「最大長」度数分布表
- 表94 「最大幅」度数分布表
- 表95 「最大厚」度数分布表
- 表96 長幅比度数分布表
- 表97 「打面形状」
- 表98 「打面構成」
- 表99 自然面の付着
- 表100 北摂地域出土の有茎尖頭器一覧
- 表101 蛍光X線分析による石器石材の産地同定結果

遺物実測図版目次

- 第1図 ブロック1 ナイフ形石器・ノッチ実測図
第2図 ブロック1 2次加工ある剥片・
微細剥離痕ある剥片(1)実測図
第3図 ブロック1 微細剥離痕ある剥片(2)・剥片(1)実測図
第4図 ブロック1 剥片(2)・石核(1)実測図
第5図 ブロック1 石核(2)・接合資料(1)実測図
第6図 ブロック1 接合資料(2)実測図
第7図 ブロック2 石錐・剥片ほか実測図
第8図 ブロック3 ナイフ形石器実測図
第9図 ブロック3 石錐・削器・接器実測図
第10図 ブロック3 2次加工ある剥片(1)実測図
第11図 ブロック3 2次加工ある剥片(2)・
微細剥離痕ある剥片実測図
第12図 ブロック3 剥片(1)実測図
第13図 ブロック3 剥片(2)実測図
第14図 ブロック3 剥片(3)実測図
第15図 ブロック3 石核(1)実測図
第16図 ブロック3 石核(2)・接合資料実測図
第17図 ブロック4 ノッチ・2次加工ある剥片ほか実測図
第18図 ブロック5 2次加工ある剥片・剥片ほか実測図
第19図 ブロック6 ナイフ形石器(1)実測図
第20図 ブロック6 ナイフ形石器(2)実測図
第21図 ブロック6 ナイフ形石器(3)・
円形彌器・角錐状石器ほか実測図
第22図 ブロック6 2次加工ある剥片(サスカイト)実測図
第23図 ブロック6 2次加工ある剥片(チャート)・
微細剥離痕ある剥片実測図
第24図 ブロック6 剥片(1)実測図
第25図 ブロック6 剥片(2)実測図
第26図 ブロック6 剥片(3)実測図
第27図 ブロック6 剥片(4)・石核(1)実測図
第28図 ブロック6 石核(2)実測図
第29図 ブロック6 石核(3)・接合資料(1)実測図
第30図 ブロック6 接合資料(2)実測図
第31図 ブロック6 接合資料(3)実測図
第32図 ブロック6 接合資料(4)実測図
第33図 ナイフ形石器(1)【包含層ほか出土】実測図
第34図 ナイフ形石器(2)【包含層ほか出土】実測図
第35図 ナイフ形石器(3)・彌器(1)【包含層ほか出土】実測図
第36図 彌器(2)・削器(1)【包含層ほか出土】実測図
第37図 削器(2)・楔形石器【包含層ほか出土】実測図
第38図 2次加工ある剥片(1)【包含層ほか出土】実測図
第39図 2次加工ある剥片(2)・微細剥離痕ある剥片
【包含層ほか出土】実測図
第40図 剥片(1)【包含層ほか出土】実測図
第41図 剥片(2)【包含層ほか出土】実測図
第42図 剥片(3)【包含層ほか出土】実測図
第43図 石核(1)【包含層ほか出土】実測図
第44図 石核(2)【包含層ほか出土】実測図
第45図 石核(3)【包含層ほか出土】実測図
第46図 有舌尖頭器・尖頭器【包含層ほか出土】実測図
第47図 石錐【包含層ほか出土】実測図
第48図 石匙・石錐・削器・異形部分磨製石器
【包含層ほか出土】実測図
第49図 両面加工石器・板状石材【包含層ほか出土】実測図
第50図 香川県産サスカイト【包含層ほか出土】実測図
第51図 板状石材【土坑81出土】実測図
第52図 磨石・石皿ほか【包含層ほか出土】実測図
第53図 敷石・凹石【包含層ほか出土】実測図
第54図 楔紋土器実測図(1)
第55図 楔紋土器実測図(2)
第56図 楔紋土器実測図(3)
第57図 楔紋土器実測図(4)
第58図 楔紋土器実測図(5)
第59図 楔紋土器実測図(6)
第60図 楔紋土器実測図(7)
第61図 楔紋土器実測図(8)
第62図 八尾南遺跡第6地点出土石器(1)
第63図 八尾南遺跡第6地点出土石器(2)
第64図 八尾南遺跡第6地点出土石器(3)

- | | |
|-------------------------|---------------------------------|
| 第65図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (4) | 第88図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (27) |
| 第66図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (5) | 第89図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (28) |
| 第67図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (6) | 第90図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (29) |
| 第68図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (7) | 第91図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (30) |
| 第69図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (8) | 第92図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (31) |
| 第70図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (9) | 第93図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (32) |
| 第71図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (10) | 第94図 国文試掘 (S21地点) 出土石器実測図 (1) |
| 第72図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (11) | 第95図 国文試掘 (S21地点) 出土石器実測図 (2) |
| 第73図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (12) | 第96図 国文試掘 (S21・S31地点) 出土繩紋土器実測図 |
| 第74図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (13) | 第97図 田中代地点採集石器実測図 (1) |
| 第75図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (14) | 第98図 田中代地点採集石器実測図 (2) |
| 第76図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (15) | 第99図 田中代地点採集石器実測図 (3) |
| 第77図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (16) | 第100図 田中代地点採集石器実測図 (4) |
| 第78図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (17) | 第101図 田中代地点採集石器実測図 (5) |
| 第79図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (18) | 第102図 田中代地点採集石器実測図 (6) |
| 第80図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (19) | 第103図 神田平地点採集石器実測図 |
| 第81図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (20) | 第104図 堂ノ前地点採集石器実測図 (1) |
| 第82図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (21) | 第105図 堂ノ前地点採集石器実測図 (2) · |
| 第83図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (22) | 庄ノ本道路ほか石器実測図 |
| 第84図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (23) | 第106図 田中代地点採集繩紋土器実測図 (1) |
| 第85図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (24) | 第107図 田中代地点採集繩紋土器実測図 (2) |
| 第86図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (25) | 第108図 堂ノ前地点・大中地点採集繩紋土器実測図 |
| 第87図 八尾南遺跡第6地点出土石器 (26) | |

写 真 図 版 目 次

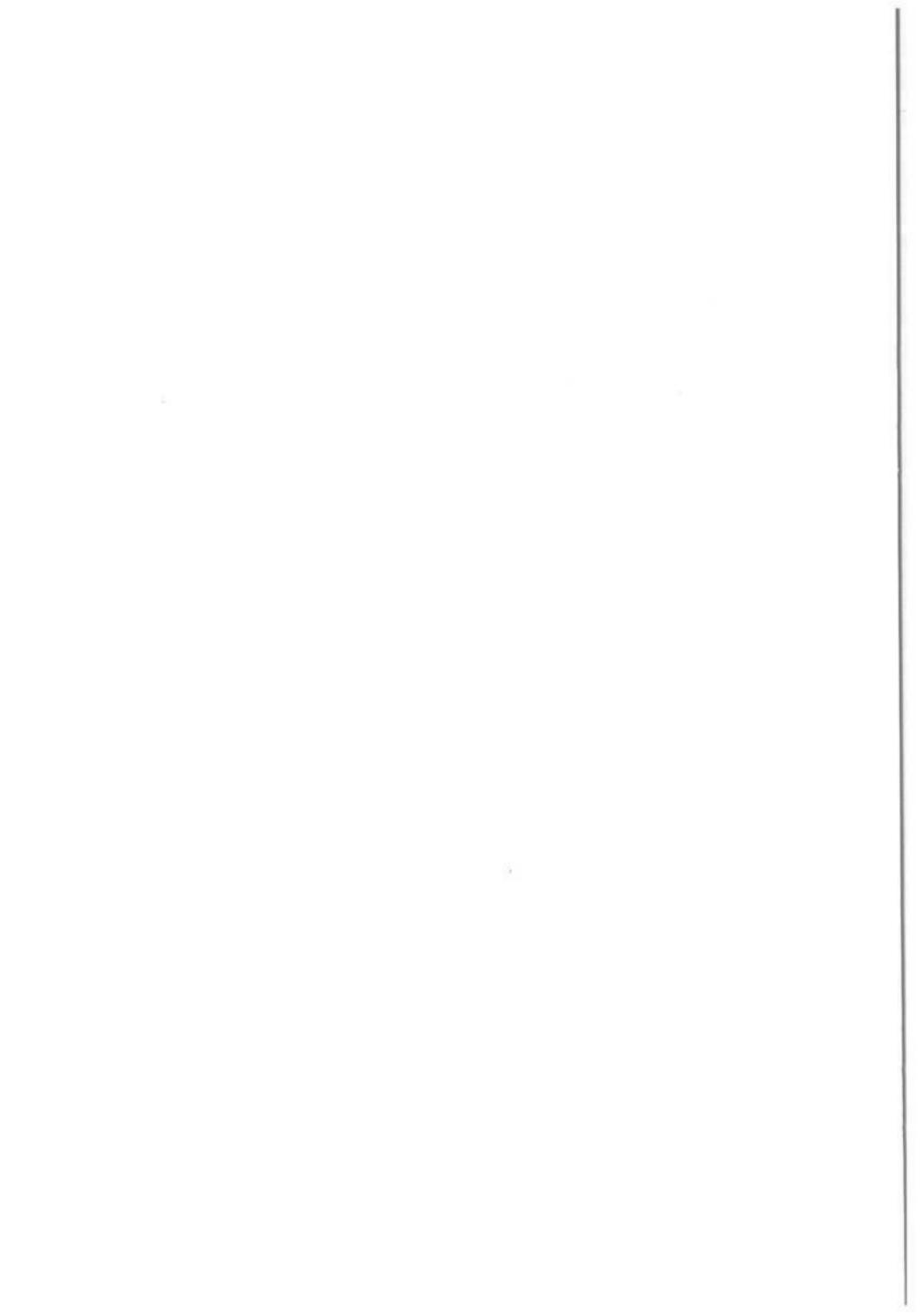
- | | | |
|-------------------|--------------------|--------------------|
| 図版1 乗生間谷遺跡周辺航空写真 | 図版10 繩紋時代遺構 (2) | 図版19 ブロック1出土石器 (4) |
| 図版2 旧石器時代ブロック (1) | 図版11 繩紋時代遺構 (3) | 図版20 ブロック1出土石器 (5) |
| 図版3 旧石器時代ブロック (2) | 図版12 繩紋時代遺構 (4) | 図版21 ブロック1出土石器 (6) |
| 図版4 旧石器時代ブロック (3) | 図版13 繩紋時代遺構 (5) | 図版22 ブロック2出土石器 |
| 図版5 旧石器時代ブロック (4) | 図版14 繩紋時代遺構 (6) | 図版23 ブロック3出土石器 (1) |
| 図版6 旧石器時代ブロック (5) | 図版15 繩紋時代遺構 (7) | 図版24 ブロック3出土石器 (2) |
| 図版7 旧石器時代ブロック (6) | 図版16 ブロック1出土石器 (1) | 図版25 ブロック3出土石器 (3) |
| 図版8 旧石器時代ブロック (7) | 図版17 ブロック1出土石器 (2) | 図版26 ブロック3出土石器 (4) |
| 図版9 繩紋時代遺構 (1) | 図版18 ブロック1出土石器 (3) | 図版27 ブロック3出土石器 (5) |

図版28 ブロック3出土石器（6）	図版59 ブロック6出土石器（20）	図版90 包含層ほか出土石器（29）
図版29 ブロック3出土石器（7）	図版60 ブロック6出土石器（21）	図版91 包含層ほか出土石器（30）
図版30 ブロック3出土石器（8）	図版61 ブロック6出土石器（22）	図版92 包含層ほか出土石器（31）
図版31 ブロック3出土石器（9）	図版62 包含層ほか出土石器（1）	図版93 包含層ほか出土石器（32）
図版32 ブロック3出土石器（10）	図版63 包含層ほか出土石器（2）	図版94 ブロック3～6出土石器
図版33 ブロック3出土石器（11）	図版64 包含層ほか出土石器（3）	図版95 ブロック1・3・6・包含層ほか 出土石器
図版34 ブロック3出土石器（12）	図版65 包含層ほか出土石器（4）	図版96 出土繩紋土器（1）
図版35 ブロック3出土石器（13）	図版66 包含層ほか出土石器（5）	図版97 出土繩紋土器（2）
図版36 ブロック3出土石器（14）	図版67 包含層ほか出土石器（6）	図版98 出土繩紋土器（3）
図版37 ブロック3出土石器（15）	図版68 包含層ほか出土石器（7）	図版99 出土繩紋土器（4）
図版38 ブロック4出土石器	図版69 包含層ほか出土石器（8）	図版100 出土繩紋土器（5）
図版39 ブロック5出土石器	図版70 包含層ほか出土石器（9）	図版101 八尾南遺跡第6地点出土石器（1）
図版40 ブロック6出土石器（1）	図版71 包含層ほか出土石器（10）	図版102 八尾南遺跡第6地点出土石器（2）
図版41 ブロック6出土石器（2）	図版72 包含層ほか出土石器（11）	図版103 八尾南遺跡第6地点出土石器（3）
図版42 ブロック6出土石器（3）	図版73 包含層ほか出土石器（12）	図版104 国文試掘（S21地点）出土石器（1）
図版43 ブロック6出土石器（4）	図版74 包含層ほか出土石器（13）	図版105 国文試掘（S21地点）出土石器（2）
図版44 ブロック6出土石器（5）	図版75 包含層ほか出土石器（14）	図版106 田中代遺跡採集石器（1）
図版45 ブロック6出土石器（6）	図版76 包含層ほか出土石器（15）	図版107 田中代遺跡採集石器（2）
図版46 ブロック6出土石器（7）	図版77 包含層ほか出土石器（16）	図版108 田中代遺跡採集石器（3）
図版47 ブロック6出土石器（8）	図版78 包含層ほか出土石器（17）	図版109 田中代遺跡採集石器（4）
図版48 ブロック6出土石器（9）	図版79 包含層ほか出土石器（18）	図版110 田中代遺跡採集石器（5）
図版49 ブロック6出土石器（10）	図版80 包含層ほか出土石器（19）	図版111 田中代遺跡採集石器（6）
図版50 ブロック6出土石器（11）	図版81 包含層ほか出土石器（20）	図版112 神田平遺跡採集石器
図版51 ブロック6出土石器（12）	図版82 包含層ほか出土石器（21）	図版113 堂ノ前遺跡採集石器（1）
図版52 ブロック6出土石器（13）	図版83 包含層ほか出土石器（22）	図版114 堂ノ前遺跡採集石器（2）
図版53 ブロック6出土石器（14）	図版84 包含層ほか出土石器（23）	庄ノ本遺跡ほか採集石器
図版54 ブロック6出土石器（15）	図版85 包含層ほか出土石器（24）	図版115 国文試掘（S31地点）・大中遺跡・ 堂ノ前遺跡出土土器
図版55 ブロック6出土石器（16）	図版86 包含層ほか出土石器（25）	図版116 田中代遺跡採集土器
図版56 ブロック6出土石器（17）	図版87 包含層ほか出土石器（26）	
図版57 ブロック6出土石器（18）	図版88 包含層ほか出土石器（27）	
図版58 ブロック6出土石器（19）	図版89 包含層ほか出土石器（28）	

付表目次

- 付表1 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(1)
付表2 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(2)
付表3 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(3)
付表4 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(4)
付表5 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(5)
付表6 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(6)
付表7 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(7)
付表8 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(8)
付表9 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(9)
付表10 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(10)
付表11 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(11)
付表12 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(12)
付表13 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(13)
付表14 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(14)
付表15 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(15)
付表16 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(16)
付表17 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(17)
付表18 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(18)
付表19 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(19)
付表20 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(20)
付表21 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(21)
付表22 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(22)
付表23 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(23)
付表24 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(24)
付表25 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(25)
付表26 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(26)
付表27 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(27)
付表28 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(28)
付表29 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(29)
付表30 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(30)
付表31 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(31)
付表32 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(32)
付表33 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(33)
付表34 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(34)
付表35 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(35)
付表36 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(36)
付表37 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(37)
付表38 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(38)
付表39 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(39)
付表40 粟生間谷遺跡出土石器觀察表(40)
付表41 ブロック1出土ナイフ形石器觀察表
付表42 ブロック3出土ナイフ形石器觀察表
付表43 ブロック6出土ナイフ形石器觀察表
付表44 包含層出土ナイフ形石器觀察表
付表45 有舌尖頭器・尖頭器觀察表
付表46 石鏃觀察表
付表47 石匙・削器・異形部分磨製石器・石錐觀察表
付表48 両面加工石器觀察表
付表49 刺片觀察表
付表50 石核觀察表
付表51 雕器觀察表
付表52 雕觀察表(1)
付表53 雕觀察表(2)
付表54 雕觀察表(3)
付表55 雕觀察表(4)
付表56 雕觀察表(5)
付表57 雕觀察表(6)
付表58 雕觀察表(7)
付表59 雕觀察表(8)
付表60 雕觀察表(9)
付表61 雕觀察表(10)
付表62 雕觀察表(11)
付表63 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(1)
付表64 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(2)
付表65 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(3)
付表66 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(4)
付表67 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(5)
付表68 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(6)
付表69 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(7)
付表70 粟生間谷遺跡出土繩紋土器觀察表(8)

付表71 粟生間谷遺跡出土繩紋土器観察表（9）	付表85 粟生間谷遺跡ブロック3出土石器 座標・標高一覧表（1）
付表72 國際文化公園都市地区内試掘資料（石器）観察表	付表86 粟生間谷遺跡ブロック3出土石器 座標・標高一覧表（2）
付表73 免山氏表探資料（石器）観察表（1）	付表87 粟生間谷遺跡ブロック3出土石器 座標・標高一覧表（3）
付表74 免山氏表探資料（石器）観察表（2）	付表88 粟生間谷遺跡ブロック3出土石器 座標・標高一覧表（4）
付表75 國際文化公園都市地区内試掘資料（繩紋土器）観察表	付表89 粟生間谷遺跡ブロック3出土石器 座標・標高一覧表（5）
付表76 免山氏表探資料（繩紋土器）観察表（1）	付表90 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（1）
付表77 免山氏表探資料（繩紋土器）観察表（2）	付表91 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（2）
付表78 免山氏表探資料（繩紋土器）観察表（3）	付表92 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（3）
付表79 免山氏表探資料（繩紋土器）観察表（4）	付表93 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（4）
付表80 粟生間谷遺跡ブロック1出土石器 座標・標高一覧表（1）	付表94 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（5）
付表81 粟生間谷遺跡ブロック1出土石器 座標・標高一覧表（2）	付表95 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（6）
付表82 粟生間谷遺跡ブロック1出土石器 座標・標高一覧表（3）	付表96 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（7）
付表83 粟生間谷遺跡ブロック1出土石器 座標・標高一覧表（4）	付表97 粟生間谷遺跡ブロック6出土石器 座標・標高一覧表（8）
付表84 粟生間谷遺跡ブロック1出土石器 座標・標高一覧表（5）	



第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査の経過

栗生間谷遺跡の発掘調査は住宅・都市整備公団（現：都市基盤整備公団）による『国際文化公園都市特定土地区画整理事業』に伴う発掘調査事業である。

国際文化公園都市は、箕面市及び茨木市にまたがる北部の丘陵地帯に所在し、総面積が742.2haを数える広大な地域である。計画地域は茨木川以東の東部地区、府道1号線及び茨木川間の中部地区、府道1号線以西の西部地区に大きく区分されている。

これらの事業地内では、遺跡の分布がほとんど確認されていなかったため、1993年度に3度に亘る分布調査が（財）大阪府埋蔵文化財協会（以下、協会と称す）・大阪府教育委員会によって行われた。その後、作成された分布図を基に試掘調査を1994年度に協会が、1995年度からは（財）大阪府文化財調査研究センター（以下、センターと称す）が数年度に亘って行った。その結果、中部地区においては遺物が僅かに確認されたものの遺構は検出されず、西部地区では栗生間谷遺跡・徳大寺遺跡・宿久庄北遺跡・栗生岩阪遺跡・栗生岩阪北遺跡、東部地区では佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群・福井北古墳群・佐保遺跡・椿山北石切場跡の各遺跡が確認された。

新たに発見された遺跡は本調査が必要であると判断され、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、

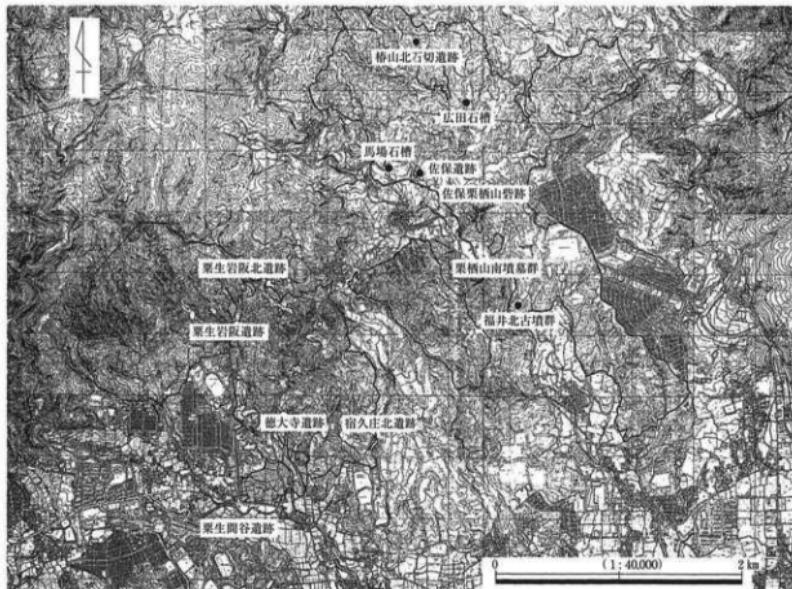


図1 国際文化公園都市全体図

協会による栗生間谷遺跡(1994年度)の調査を皮切りに、センターによって栗生岩阪・栗生岩阪北・徳大寺・佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群・宿久庄北の各遺跡が順次調査された。中でも、栗生間谷遺跡の調査は7次に亘る大規模なものとなり、約11万m²を調査することとなった。なお、栗生岩阪遺跡・徳大寺遺跡・佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群に関しては、既に報告書が刊行されている。

栗生間谷遺跡は西部地区の箕面市栗生間谷東3丁目地内に所在し、分布調査によってその存在が確認された。遺跡は丘陵や河岸段丘、扇状地といった変化に富む地形に位置しており、その規模は約11万m²を数える。遺跡の東側は徳大寺遺跡に接している。試掘調査では古代末から中世、近世の遺構や遺物が確認され、大規模な中世集落の存在が予想された。

当遺跡の調査は、協会によって1994年度に試掘調査と第1次の本調査が行われた。その後、1年の期間をおき、1996~1999年度にセンターにより第2~7次調査が実施された。各調査では、その対象面積が1万m²を超える広大な範囲であったため、調査区域をそれぞれ3~12分割して調査を行った。その結果、旧石器時代の石器製作址、縄文時代の土坑、古代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物群や墓などの多種多様な遺構・遺物が検出された。

この間、調査成果の早期公開を目的として、1995年1月28日に現地説明会を行い、1999年6月6日~29日に発掘速報展『発掘!! あおまだに』を茨木・箕面の両市で開催した。

調査終了後、当センター北部調査事務所において2000年2月から遺物整理事業が開始され、2002年2月まで行われた。本報告書印刷に関しては、2002年度に実施した。

なお、栗生間谷遺跡で検出された遺構・遺物は大きく捉えて、旧石器・縄文時代と古代・中世の時期差の著しい2段階に分けることが出来る。それぞれに内容豊かで、かつ、遺跡の性格が両者では異なつたものと考えられるため、それぞれを別冊として刊行することとなった。

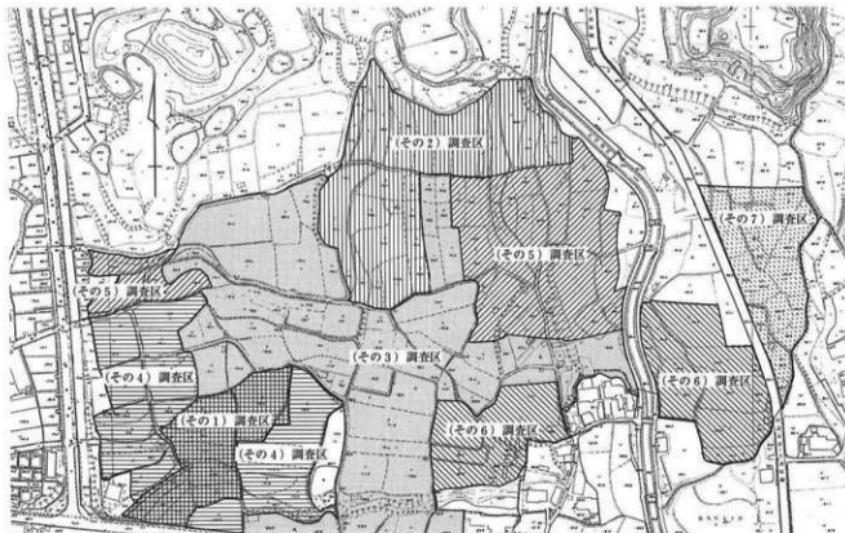


図2 栗生間谷遺跡調査区配置図

第2節 発掘調査の方法

旧石器・縄文時代の遺構の検出は当初から予想されていたものではなかった。というのも、当該期の遺物(石器)が中世包含層や現代の耕作土から数多く出土する状況であり、さらに土層確認のためトレンチ調査を行なって地山と認識していた黄色シルトを掘削しても、遺物の出土が確認出来なかつたため、既に遺構面が削平されたものと推定していた。その結果、(その3)調査時において初めて旧石器時代の石器製作址(以下、ブロックと称す)の存在を認識することとなった。

丘陵中央部で中世遺構面(黄色シルト)の精査中にサヌカイトやチャートがまとまって出土したこと(ブロック1の検出)が発見の契機となった。最初のブロックを検出して以降は、中世遺構面(黄色～黄褐色シルト部分)の精査を慎重に行ない、石器の有無に留意した。その結果、ブロック1～5を検出することとなった。また、ブロック4の検出後、その東側には黄色シルトが依然広がっている状況があったので、確認のためトレンチ調査を実施した。その結果、ブロック6・疊集中部・ブロック7を検出した。中世遺構面の調査終了後、こうして出土した遺物を手掛かりとして各ブロックの調査範囲を確定し、精査及び図化作業を行った。

調査範囲の地区割は上面までの調査と同様に第VI座標系に基づいた地区設定によって進めた。範囲内を1mのメッシュで区切り、手ガリ・移植ゴテなどの道具を用いて慎重に調査を進めた。区画内を市松紋様状に掘削し、石器が検出されると隣接した部分に対象範囲を広げていき、最終的には石器が出土しなくなるところまで拡張し、ブロックの全掘を目指した。石器出土地点には石材別に色分けした竹串を

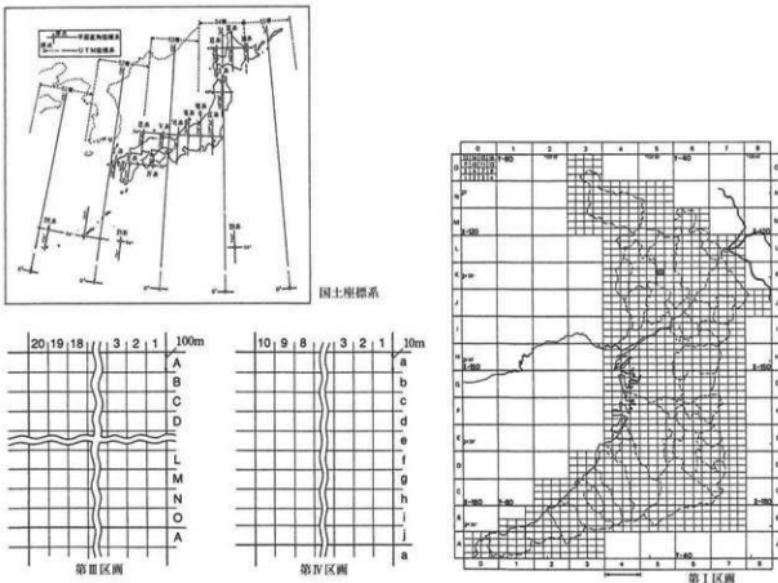


図3 國土座標系とそれによる地区割り

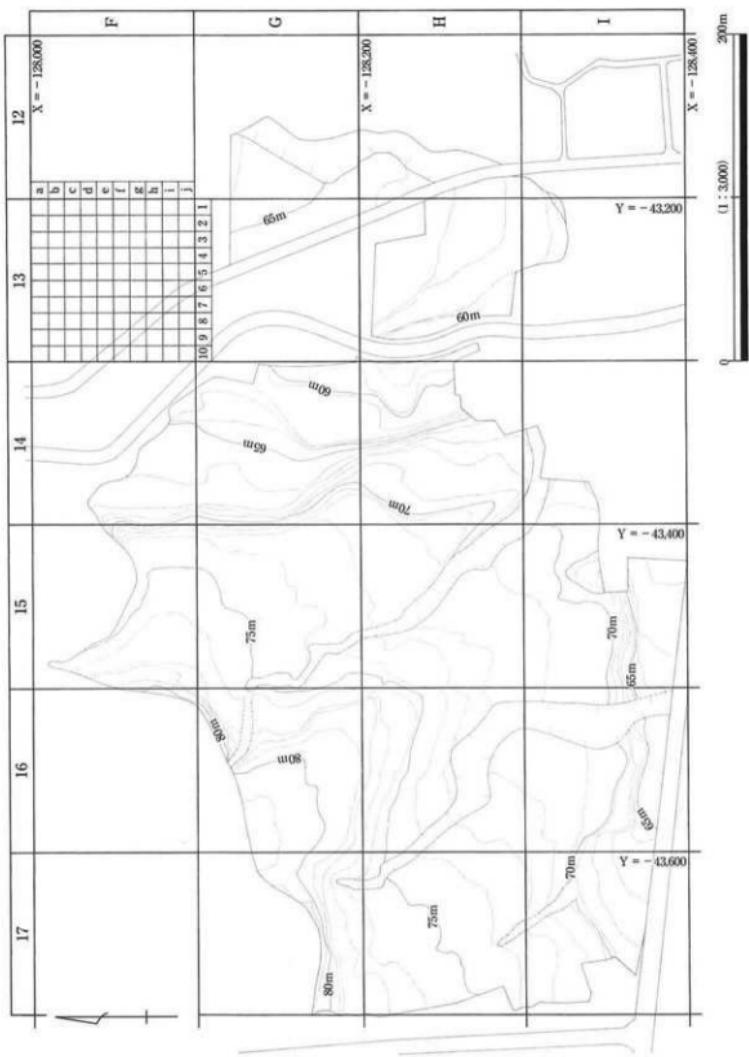


図4 粟生間谷遺跡地区割り

立てていき、石器が密集してそれ以上の掘削が出来なくなつた段階で、遺物の記録・取り上げを行ない、再度掘り進めといった作業工程を繰り返した。記録に関しては適宜石器出土状況の写真撮影を行ない、平面位置とレベルをおさえた。レベルについては石器がのついた地点の中央部1点で記録した。なお、傾斜して出土した石器の角度は計測していない。礫に関しては石器同様の作業を行なつたが、出土レベルについては上端・下端の各中央位置2点を記録した。以上の作業を繰り返し、最終的に各ブロックを全掘した。また、調査に伴う揚土は可能な限り回収し、水洗選別を行つて微細遺物の捕集に努めた。

なお、(その6)調査時に検出した縄紋時代の遺物集中地点1・2に関しては、旧石器ブロックの調査と同様の方法を採用した。

縄紋時代遺構面に関しては、調査地の東端にあたる(その6)・(その7)調査区の扇状地状地形において、土層観察用の深掘りトレンチ調査によって存在が認められた。そこで、中世遺構面の調査終了後に下層の調査を実施し、現地測量及び写真測量を行つた。

調査の区割については国土座標を基準線とした地区割りを利用し、遺物の取り上げや遺構図作成の基準ラインとした。これは、国土座標軸の第VI座標系を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で絶対的な遺構の位置、遺物の出土地点を示すことが出来るものである。地区割りは図3のように第I区画から第IV区画の単位がある。第I区画は1万分の1地形図の地区割りを使用し、東西8km×南北6kmの範囲を示す。第II区画は2,500分の1地形図を使用し、東西2.0km×南北1.5kmの範囲を示す。第III区画は第II区画を東西に20分割、南北に15分割し、100m四方の範囲とする。第IV区画は第III区画を東西、南北共に10分割し、10m四方の範囲としたものである。

粟生間谷遺跡の調査範囲は第I区画がK-5、第II区画がI1、第III区画がF14~16・G12~17・H12~17・I12~17である。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

粟生間谷遺跡は、大阪府北部の箕面市粟生間谷東3丁目地内に所在する。当遺跡は箕面市域北部に広がる北摂山地から南東に向けて派生する丘陵の先端に位置する。遺跡の南側には勝尾寺川が北西から南東に流れ、東側に勝尾寺川の支流である川合裏川が北から南に向けて流れている。

勝尾寺川は当遺跡が築かれた丘陵の先で川合裏川と合流し、蛇行しながら東に流れ、茨木川に注ぐ。その後、南下して安威川と合流することとなる。これらの河川は、豊かな沖積平野である三島平野を形成する。勝尾寺川の源流を持つ北摂山地は、東を京都盆地の西端に、西で六甲山地に、南を大阪平野に接し、北で亀岡盆地の南縁部に至る、東西に長い広大な範囲を占める山地の総称である。

北摂山地を地質学的に見ると、丹波帯と呼ばれる古生代末から中生代前半に堆積した砂岩・泥岩・チャートなどから構成される部分と、中生代白亜紀頃の花崗岩類（茨木複合花崗岩帯）から構成される部分からなる。北摂山地の南縁には、粟生間谷遺跡が形成された丘陵のように、八手状に多数の丘陵が派生している。これらの丘陵の先端部付近には低位・中位段丘堆積層が見られ、丘陵基部側には大阪層群が現れる。

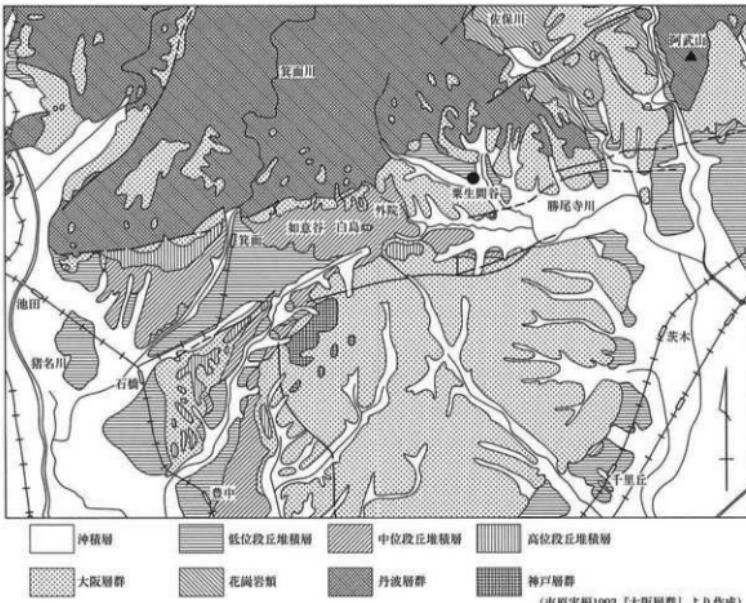


図5 周辺地質図 (縮尺 1:80,000)

粟生間谷遺跡は、勝尾寺川と川合裏川に挟まれた丘陵先端の低位段丘上と勝尾寺川や川合裏川の形成する河岸段丘上、さらに川合裏川の東に広がる扇状地に位置している。丘陵上は緩斜面となっており、丘陵の東斜面と南斜面が急な段丘崖を形成する。

勝尾寺川を挟んだ南側にも、やはり北摂山地から派生する大きな丘陵が存在する。その丘陵裾周りの低位段丘上には、古代から中世の集落が営まれる庄田遺跡や宿久庄西遺跡が位置している。この丘陵と粟生間谷遺跡が乗る丘陵によって東西に長く、幅の狭い谷が形成される。このため、当遺跡からの眺望はあまり優れず、南東及び北西にしか開けていない。

当遺跡の周辺は、近世以降大半が棚田として利用されており、地形がかなり改変を受けている。また、近年の大規模な圃場整備や宅地整備によって大幅に地形改変が進んでいる地域もみられる。勝尾寺川流域の低位段丘地帯では、現在でも開析谷を堰き止めた溜池が多く見られ、水田や畑地が広がっている。さらには、勝尾寺川沿いの丘陵裾周りの河岸段丘や低位段丘上には中村・山ノ口・川合・上川原などの集落が形成されている。

第2節 歴史的環境

本節では北摂地域（粟生間谷遺跡周辺）の旧石器～繩文時代の状況について概観しておきたい。

1 旧石器時代

これまで旧石器時代の遺跡は、発掘調査の進んだ高槻市域、あるいは地元で精力的に分布調査が行われて来た茨木市北西部地域や箕面市西部地域でその様相が明らかになってきた。なかでも、高槻市域の資料は発掘調査で得られた一括性の高い良好な資料が多く、西日本の旧石器研究に大きく寄与してきた。
【高槻市域】

芥川右岸の富田台地は北摂山地から南に向け舌状に張り出している。この台地は低位段丘であり、今城塚古墳や嶋上郡衙跡など数多くの遺跡が形成される。同様に、多くの旧石器時代の遺跡がこの台地上に集中して営まれ、大阪府南東部の羽曳野丘陵周辺と並んで遺跡密集地帯の様相を呈している。富田台地は早くから市街地化が進み、発掘調査が進展したこともあり、郡家今城遺跡を代表とする良好な状態の石器製作址が多数検出されている。石器石材は二上山産のサヌカイトが主体をなし、チャートや鉄石英などの石材が若干入る。また、北陸～東北産と推定される硬質頁岩製搔器が數点見つかっている。

富田台地以外では市城北側の丘陵上でナイフ形石器などが表面採集される遺跡が点在している。

【茨木市～箕面市域】

これまで地元の研究者によって盛んに分布調査が繰り返され、北摂山地南縁の低位段丘上に多くの遺跡が点在していることを明らかにしてきた。近年では、茨木市の山間部を流れる河川流域に開けた低位段丘からも遺物散布地が確認され、新たな様相がみられるようになった。石器製作址などの造構の検出は粟生間谷遺跡のみであり、今後の調査に期待がもたれる地域である。この地域の石器石材は二上山産のサヌカイトが主体をなし、チャートが一定量組成されるようである。また、北陸～東北産と推定される頁岩製石器が粟生間谷遺跡や山間部に位置する堂ノ前地点で出土しており注目される。

【農中市域】

近年、阪急電鉄宝塚線螢池駅周辺の度重なる発掘調査によって旧石器時代資料が蓄積されつつある。この地域には待兼山西側や千里川左岸に低位段丘が発達しており、多くの遺跡が営まれていた可能性が

高い。現状では石器製作址などの遺構が確認された遺跡はないが、サスカイト製盤状剝片や盤状剝片石核の出土例があることから、遺構の検出は今後の調査に期待される。

[吹田市域]

古くから地元の研究者による分布調査によって、低位段丘上に位置する垂水遺跡や吉志部遺跡周辺で旧石器の存在が確認されていた。近年、吉志部遺跡や吉志部瓦窯跡の調査によって礫群や遺物集中地点が確認されている。石器石材は二上山産のサスカイトを主体とするが、チャートを一定量使用している点で注目される。また、平野部に立地する複数の遺跡において、遊離資料であるがナイフ形石器・角錐状石器・翼状剝片などが確認されている。これらは大阪市の長原遺跡群のように、沖積平野の下位に埋没する低位段丘上に営まれた遺跡である可能性が高い。

2 縄紋時代

前時代と同様に北摂山地南縁の低位段丘や丘陵上で遺跡が点在することが確認されている。遺構の検出例は少なく、実態が判然としない。今後に成果を委ねる部分が大きい。

草創期に関しては、土器の出土例は現在まで知られていない。しかし、高槻市芥川西岸地域、箕面市粟生間谷遺跡周辺、吹田市吉志部遺跡周辺で有舌尖頭器がまとまって出土しており大阪府下でも有数の遺跡集中地点といえる。

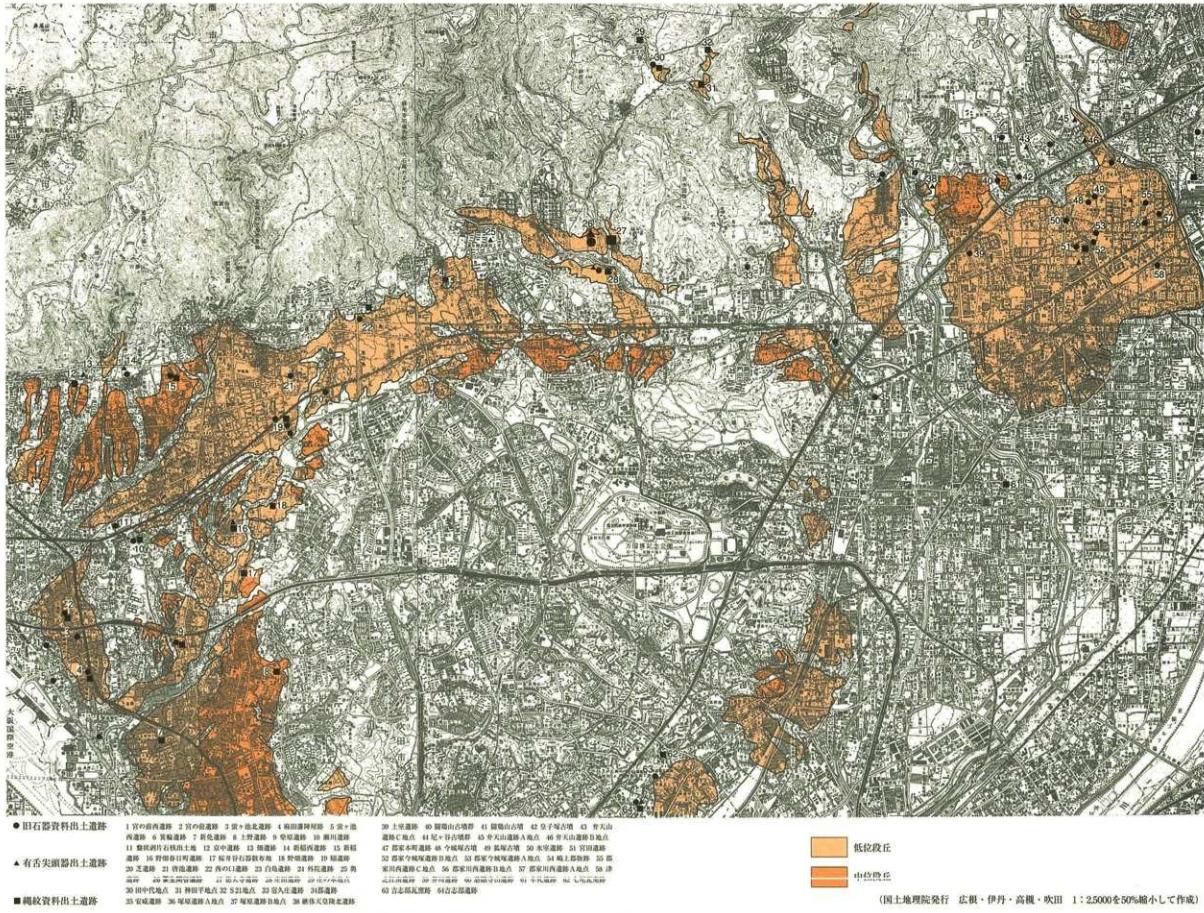
早期の遺跡は少なく、從前は豊中市新免遺跡・箕面市粟生間谷遺跡・新稻遺跡で異形部分磨製石器（トロトロ石器）が確認されているのみであった（能勢町を除く）。しかし近年、茨木市田中代地点で高山寺式・穂谷式、同堂の前地点で神宮寺式・穂谷式、同大中地点で高山寺式・穂谷式の押型文土器が採集されている。これら3遺跡は標高130～300mを測る山間部に位置し、当該期の遺跡立地を考える上で貴重な資料である。

前期の遺跡も引き続き少ない。著名な遺跡として箕面市瀬川遺跡がある。瀬川遺跡は晩期まで継続する大規模な集落と考えられる。ほかに茨木市東奈良遺跡や高槻市柱本遺跡で遺物の出土が知られるが実態は明らかでない。

中期は前段階よりも遺跡数が増加する傾向にある。しかし、実際に増加するのは中期末のようであり、北白川C式土器が検出される例（豊中市野畑遺跡・粟生間谷遺跡・茨木市田中代地点など）が多い。豊中市野畑春日遺跡では船元式土器と土墳墓と推定される遺構が検出されている。

後期は中期末から連続して営まれる遺跡が大半である。新たに後期から出現するのは、箕面市白島遺跡、豊中市柴原遺跡がある。

晩期は著しい遺跡数の増加が認められない。遺跡の形成された時期は大半が後半段階（突帯文期）である。この段階では、茨木市牟礼遺跡で井堰、同耳原遺跡で土器棺墓16基が、箕面市徳大寺遺跡で竪穴住居が検出され次第に様相が明らかになってきた。また、東奈良遺跡では大洞A式の浮線紋土器が出土しており注目される。



第6図 北摺（豊中～高槻）地域の主要旧石器・縄文時代遺跡分布図

表1 旧石器・縄文時代遺跡地名表

遺跡名	所在地	旧石器	有舌尖頭器	早期	前期	中期	後期	晚期	備考
1 宮の前西	池田市空港1丁目								
2 宮の前	池田市石橋4丁目	○							
3 蛭池北	豊中市蛭池北町	○							
4 麻田藩陣屋跡	豊中市麻田中町	○							石器・石棒
5 蛭池西	豊中市蛭池西町	○							
6 瓢輪	豊中市箕輪2丁目								
7 新免	豊中市新井町・末広町1丁目		○						異形部分磨製石器
8 上野	豊中市								
9 榎原	箕面市柴原2丁目・刀根山2丁目	○				○	○		
10 潤川	箕面市潤川4丁目			○	○	○			北白川下層・C・上層他
11 鰐状剥片核出土地	箕面市潤川3丁目	○							
12 京中	池田市京中3丁目								石器・石器
13 煙	池田市煙4丁目		○						
14 新福西	箕面市新福6丁目	○							縄文石器
15 新福	箕面市新福4丁目	○		○					異形部分磨製石器・石器
16 野畠春日町	豊中市春日町3・4丁目	○			○				
17 桜井谷石器散布地	豊中市小路2丁目・向丘町1丁目								
18 野畠	豊中市西野丘3丁目			○	○	○			中期末・後期初頭
19 稲	箕面市稻3丁目	○		○	○	○			前・中期
20 芝	箕面市芝3丁目	○							縄文石器
21 唐池	箕面市唐島1丁目	○							
22 西の口(Sc出土土地点)	箕面市坊島5丁目	○							
23 白鳥	箕面市白鳥				○	○			中津・福田k2・突帯紋他
24 外院	箕面市外院2丁目	○							縄文石器
25 奥	箕面市奥		○						
26 番生間谷	箕面市番生間谷東3丁目他	○	○	○?	○	○	○	○	北白川C・上層・突帯紋他
27 繁大寺	箕面市繁大寺谷東3丁目他								○突帯紋
28 庄田	箕面市庄田谷坂2丁目他	○	○						石器
29 庄ノ本	茨木市庄ノ本								石器
30 田中代	茨木市佐保田中代	○		○	○	○			徳谷・北白川C・上層他
31 神田平	茨木市佐保神田平	○							石器
32 S21	茨木市佐保	○							石器
33 宿久庄	茨木市宿久庄	○							石器
34 那	茨木市那田町	○							
35 安威	茨木市安威	○	○						
36 墓原A地点	高槻市塚原3丁目	○							
37 墓原B地点	高槻市塚原3丁目	○	○						
38 縄体天皇陵北	茨木市太田	○							
39 土室	高槻市土室2丁目	○							
40 圓龜山古墳群	高槻市土室2丁目	○							
41 圓龜山古墳	高槻市永室6丁目								
42 皇子塚	高槻市永室5丁目		○						
43 弁天山C地点	高槻市南平台	○							
44 尼ヶ谷古墳群	高槻市南平台		○						
45 弁天山A地点	高槻市南平台		○						
46 弁天山B地点	高槻市南平台	○							
47 那家本町	高槻市那家本町	○							
48 今塚	高槻市那家新町	○							
49 鳳塚	高槻市那家新町	○							
50 水室	高槻市水室2丁目	○							
51 宮田	高槻市宮田3丁目	○		○					
52 那家今城塚B	高槻市今城町	○							
53 那家今城塚A	高槻市今城町	○							
54 碓上郡衛跡	高槻市那家新町	○	○						
55 那家川西C地点	高槻市川西町	○							
56 那家川西B地点	高槻市川西町	○							
57 那家川西A地点	高槻市川西町	○							
58 津之江南	高槻市津之江北町	○							
59 芹川	高槻市殿町・紫雲ほか								
60 慶應寺山	高槻市月見町	○							
61 牟礼	茨木市中津町						○		突帯紋
62 七尾瓦窯跡	吹田市岸辺北5丁目		○						草創期の尖頭器か
63 吉志瓦窯跡	吹田市岸辺北4丁目	○							
64 吉志部	吹田市岸辺北1丁目	○	○						

※番号は遺跡分布図の番号に対応。

参考・引用文献

- 田代克己 1959 「箕面市半町縄文遺跡の遺物」『先史学研究』 同志社大学先史学研究会
- 四手井晴子・田代克己・西谷 正 1964 「大阪府高槻市塚原発見の石器について」『古代学研究』39 古代学研究会
- 茨木市史編纂委員会 1969 「茨木市史」
- 辻本充彦 1977 「三島地方採集の石器」『大阪文化誌』通巻第10号 (財)大阪文化財センター
- 高槻市教育委員会 1976 「高槻市文化財調査報告書第8冊 津之江南遺跡発掘調査報告書－三島地方の旧石器時代について－」
- 高槻市史編纂委員会 1977 「高槻市史」第1巻本編 I
- 高槻市教育委員会 1978 「高槻市文化財調査報告書第11冊 郡家今城遺跡発掘調査報告書－旧石器時代遺構の調査－」
- 高槻市教育委員会 1978 「高槻市文化財調査概要 島上郡跡発掘調査概要－2－高槻市郡家本町・郡家新町・清福寺町・川西町所在－」
- 辻尾榮市 1982 「大阪府箕面市奥採集の有舌尖頭器」『郵政考古紀要』 大阪郵政考古学会
- 飯島正明 1988 「大阪府箕面市の旧石器」『旧石器考古学』36 旧石器文化談話会
- 飯島正明 1989 「大阪府箕面市の旧石器(2)」『旧石器考古学』38 旧石器文化談話会
- 飯島正明 1989 「大阪府箕面市宮ノ原遺跡採集の角錐状石器」『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会
- 大阪府史編集専門委員会編 1991 「大阪府史 別巻」第1巻(古代編 I) 补遺・年表・索引
- 高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター 1992 「高槻市文化財調査概要 XVII 島上遺跡群16」
- 高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター 1993 「高槻市文化財調査概要 XVIII 島上遺跡群17」
- (財)大阪文化財センター 1994 「宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡1992・1993年度報告書－大阪モノレール螢池東・西線建設に伴う発掘調査－」
- 高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター 1995 「高槻市文化財調査概要 XXI 島上遺跡群19」
- 池田市史編纂委員会 1997 「新修 池田市史」第1巻
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1997 「宮の前遺跡・螢池東遺跡・麻田藩陣屋跡・螢池遺跡・螢池南地区・螢池西遺跡 1993-1996年度報告書－大阪モノレール螢池東・西線建設に伴う発掘調査－」
- 螢池西遺跡調査団 1998 「大阪府豊中市 螢池西遺跡－阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1999 「大阪府茨木市・箕面市所在 彩都(国際文化公園都市)周辺の歴史・文化総合調査報告書」
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1999 「箕面市粟生間谷東・茨木市宿久庄所在 德大寺遺跡 国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1999 「庄田遺跡 都市計画道路茨木箕面丘陵線建設に伴う発掘調査報告書」
- 大阪府教育委員会 2001 「大阪府文化財分布図」
- 大阪府教育委員会 2001 「大阪府文化財地名表」
- 吹田市教育委員会 2001 「吹田の石器時代～旧石器時代～縄文時代草創期を中心に－」

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

広範な調査地の中で石器遺物の検出を目的に調査を実施したのは(その3)・(その6)調査区の2箇所で、前者が7地点、後者が2地点であった。各調査地点は北摂山系から派生した丘陵の頂部に位置し、南～南東向きの緩斜面にあたる。標高は70～75mを測り、現状では棚田状の耕作地が広がっている。調査により耕地化は近世以前に遡り、現代に至るまで著しい土地改変を繰り返し行っている事が解った。

栗生間谷遺跡では古代から中世の集落を確認し、多数の掘立柱建物や土壙墓・火葬墓、自然河川などを検出した。こうした遺構は、従来地山として理解していた黄色～黄褐色シルト層の上面で検出された。また、出土遺物は中世遺構や遺物包含層から瓦器・土師器・輸入陶磁器等の土器類をはじめとし、石鍋・砥石といった石製品、釘・火打金・刀子といった金属製品、金属器生産関連遺物等が出土した。

旧石器に関しては、ナイフ形石器が中世包含層や近世～現代の耕作土中から出土することが確認され、その存在を強く窺わせていた。しかし、遊離資料が大半を占めていたことや土地改変が繰り返されていてこと等から当該期の遺構面や包含層は既に削平を受けたものと推定された。ところが(その3)調査時において、地山と理解していた中世遺構面の黄色～黄褐色シルト層を精査中に、サヌカイトやチャートの集中地点5箇所を、後に確認のためトレーンチ調査を行ない2箇所検出した。結果として計7箇所の石器集中部分を確認し、調査することとなった。石器集中部は検出順にブロック1～7の名称を与えた。

各ブロックは丘陵上を流れる2本の自然河川の近傍に営まれている。2本の河川は中世後期段階には埋没することを確認できたが、初源については明確にし得なかった。

ブロック1は自然河川1の右岸に位置する。サヌカイト集中部とチャート集中部が一部重複するよう形成され、さらに、やや離れて南側に小規模な集中部が営まれている。他のブロックとは異なり、小形の石器を主体とする石器群である。

ブロック2は自然河川1の左岸に営まれた集中部である。石器は散漫な分布状況である。

ブロック3は自然河川2の左岸に位置する。北西から南東に帯状に形成されている。石材の大半がサヌカイトである。他のブロックではみられない背部整形剝片がまとまって出土している。また、搔・削器類が多いことも特徴的な石器群である。

ブロック4は自然河川2右岸に位置する。明瞭な集中部は形成されず、石器は散漫な分布状況を示す。

ブロック5は自然河川2右岸に位置する小規模な集中部である。南側を後世の棚田造成で削平されている。他のブロックとは異なり、水晶・石英の碎片が多く出土している。

ブロック6はブロック4のすぐ東側に位置している。栗生間谷遺跡の中では最大規模で、豊富な石器組成を示している。石材はサヌカイトとチャートを主体とする。近畿地方では稀少な頁岩製の剝片が出土している。また、ブロックと一部重複するように疊集中部が形成されている。疊集中部は疊632点(総重量426.9kg)で構成される類例のない遺構である。

ブロック7はブロック6の南に位置する小規模な集中部である。南側を後世の棚田造成の際に削平されている。出土した石器は非常に少ない。配石状の疊を伴っている。

(その3)調査区の東側に隣接する(その6)調査時においても、サヌカイトやチャートの集中地点が2

箇所見つかり、調査を行った。この2箇所の集中部は、当初旧石器時代の所産と考えて調査を進めたが、石鎚やボロボロになった土器片が出土したことと明確な旧石器資料の出土が見られなかったことから、縄紋時代の所産であると判断した¹⁾。なお、旧石器時代のものと区別するため遺物集中部1・2と称している。これらブロックや遺物集中部は散在して検出されたため、相互に層位の対応関係は確認できなかった。

ブロックや遺物集中部の調査においては国土座標にのった調査範囲を設定し、その内部に1mメッシュの小区画を組んだ。主として手ガリや移植ゴテなどの小さな発掘道具を用いて遺物の検出に努めた。また、この1m区画に応じて微細遺物を捕集するため掲土の回収に努めたが、全ての掲土を回収するには至らなかった。結果として、全ての掲土を回収したのはブロック1のみであった²⁾。ブロック3・4・5は土層確認用の先行トレンチ部分の掲土回収にとどまった³⁾。なお、ブロック2・6・7に関しては回収を行わなかった。縄紋遺物集中部1・2でも掲土を回収して微細遺物の捕集に努めたが、目的とする遺物は確認出来なかった。

回収した掲土は後に1mmもしくは2mmメッシュの籠を用いて水洗選別を行ない、微細遺物を捕集した。掲土からは碎片を中心とした多くの微細遺物を検出し、十分な結果とは言えないまでも、一定の成果を得ることが出来た。

調査は先述した区画内を市松紋様状に掘削し、石器が検出されると隣接した部分に対象範囲を広げていった。また、各ブロックには土層観察用の畔を南北・東西方向に設定し、石器出土層位の確認に努めた。さらにはこの畔を利用し、ブロック1・3・4・6で火山灰分析用のサンプルを採取した。調査においては石器や礫の存在を追求するあまり、面的な精査を行なう意識が欠如し、人為的な掘り込み等の遺構の有無を確認しなかったことが悔やまれる。なお、ブロック2に関しては中世遺構面の精査中に数点の石器を確認したにとどまる。

第2節 層序と火山灰

栗生間谷遺跡の基本層序は、現耕作土層→近世耕作土層・整地土層→中世遺物包含層→黄色～黄褐色シルト層（中世遺構面・旧石器～縄紋時代包含層）→褐色・黄色疊混シルト～粘土となる。場所により層厚は変化するが、概して現耕作土は0.2m、近世耕作土・整地土層は0.1～0.25m、中世包含層は0.1～0.4mを測る。また、土地改変の状況によっては、中世遺物包含層や黄色～黄褐色シルト層が削平を受け消失した部分も確認された。旧石器や縄紋時代の遺物は先にも述べたように、中世以降の堆積層からも多く出土をみたが、本来的には中世遺構面下の黄色～黄褐色シルト層が包含層となっている。この黄色～黄褐色シルト層の分布範囲は明確には把握出来ていないが、遺跡の乗る丘陵先端部付近で確認されている。この範囲を地形分類図に照合すると低位段丘に相当する。従って、黄色～黄褐色シルト層は低位段丘構成層の最上部に位置するものと捉えられる。

黄色～黄褐色シルト層からは旧石器のブロックや縄紋時代の遺物集中部が検出されたが、これらの幾つかの地点で石器群の出土層順を確定し、石器年代解明の手掛りを得るために火山灰分析を実施した。詳細は後の第10章第4節に譲るが簡単に触れておく。

ブロック1が確認された位置は、近世耕作土や中世遺物包含層が既に削平を受けており、現耕作土直下でブロックを検出することになった。従って、堆積環境やブロックの遺存状況は一番劣悪なものと判

断される。これを反映してか火山灰分析の結果は芳しくなく、火山ガラスが微量しか検出されず、降灰層順の特定には至らなかった。確認された火山ガラスは扁平型ガラスで屈折率が1.497～1.501(1.499)であり、平安神宮火山灰に比定される。

ブロック3が検出された部分では近世整地層や耕作土層、中近世耕作土層が比較的厚く遺存しており、これらの下層から確認されたこともあり、ブロック1よりも堆積環境などが良好と思われる。火山灰分析では石器包含層及び直下から若干の火山ガラスが検出でき、一応のピークが石器包含層の直下に認められた。確認された火山ガラスは扁平型ガラスで屈折率が1.497～1.501(1.500)であり、平安神宮火火山灰に比定される。

ブロック4が検出された場所では薄い中世包含層が遺存しており、その下層に石器包含層である浅黄色シルト～極細砂層が広がる。但し、南側には黄褐色シルト層が1枚かんでいる。火山灰分析では石器包含層及び直下から火山ガラスが検出でき、ピークが石器包含層よりも下位に認められた。確認された火山ガラスは扁平型ガラスで屈折率が1.497～1.501(1.498)であり、平安神宮火山灰に比定される。

ブロック6が検出された部分には薄い中世包含層が遺存しており、その下位に石器包含層である灰黄色粘土～シルト層が広がる。中世包含層と石器包含層の間には2枚の黄褐色シルト層が存在し、堆積環境やブロックの遺存状況は一番良好な状態である。火山灰分析では石器包含層及びその上下層から火山ガラスが検出でき、ピークは石器包含層中に認められた。確認された火山ガラスは扁平型ガラスで屈折率が1.497～1.500(1.500)であり、平安神宮火山灰に比定される。

この他、遺物集中部2及びその下層について火山灰分析を行った。その結果、明確なピークを持たず微量の火山ガラスが検出できた。上層部分から屈折率が1.499前後と1.510前後を示す2種類のガラスが混在した状況で検出された。一方、下層部分からは1.499前後のガラスのみである。1.499前後を示すものは平安神宮火山灰に比定され、1.510前後を示すものは有色ガラスが存在することから横大路火山灰に比定される。

註

- 1) 遺物整理作業中にナイフ形石器1点を確認したが、他の出土遺物の状況から混入品と判断される。
- 2) ブロック1が小形の石器群であるため、調査時の見落としが大きい可能性を想定したことによっている。
- 3) 行先トレント部分の揚土を回収したのは、トレントを入れた目的が土層堆積状況の確認であったため、十分に石器の有無を調査出来なかつたためである。

第4章 出土石器の整理方法

第1節 接合資料と母岩別資料

接合資料は、接合状況を基準に剥離面接合と折損面接合に区分し、接合資料の各項目を表2に記した。接合状況は、表2の遺物管理番号の項において、剥離面接合を「」、折損面接合を「・」で表現し、各接合資料の接合状況を明確にした。表2では、出土地点・接合資料を構成する点数・接合状況・石材・接合資料における器種組成を明記しているが、接合資料の詳細については、第5章を参照していただきたい。

母岩別資料は、チャート、碧玉を対象に母岩別分類を実施し、各石材の母岩分類の基準となった項目を表3に記した。チャートにおける母岩別分類の方法としては、色調を基準に黒色・赤色・緑色に大別し、接合資料を中心に、剥離面の色調・透明度・自然面および節理面・斑点の有無・光沢・不純物の特徴などから、母岩別資料を区分した。黒色は母岩1~35、赤色は母岩36~45、47~51、緑色は母岩53~76で構成され、母岩46は碧玉製である。なお、色調の記載は、標準土色帖を利用した。

表2 粟生間谷遺跡における接合資料一覧表

番号	出土地点	点数	種類	石材	器種						遺物管理番号	備考	
					Kn	No	Rf	Uf	Ff	Cp	Co		
BL 1-1	BL1-溝込8	2	剥離面	Ch 55					1	1	1731-291		
BL 1-2	BL1-Pr570	2	剥離面	Sa					1	1	224-458		
BL 1-3	BL 1	4	剥離面	Ch 54					2	2	289-7-(105・130)		
BL 1-4	BL 1	4	剥離面	Ch 54					1	1	1 (340・384)-292-305		
BL 1-5	BL 1	3	剥離面	Ch 55					3		217・221-415		
BL 1-6	BL 1	2	剥離面	Ch 5					1	1	15-225		
BL 1-7	BL 1	3	折損面	Ch 54					3		114・285・310		
BL 1-8	BL 1	2	折損面	Ch 4					2		65・303		
BL 1-9	BL 1	2	折損面	Ch 3					2		102・173		
BL 1-10	BL 1	2	折損面	Ch 58					2		319・424		
BL 1-11	BL 1	2	折損面	Ch 9					2		59・60		
BL 1-12	BL 1	2	折損面	Ch 3					1	1	159・160		
BL 2-1	BL 2	2	折損面	Ch 17					2		484・485		
BL 3-1	BL 3	2	剥離面	Sa					1	1	529-607		
BL 3-2	BL 3	2	剥離面	Sa					1	1	875・877		
BL 6-1	BL 6	4	剥離面	Sa					1	3	(1360・1525)-1275-1357		
BL 6-2	BL 6	2	剥離面	Sa					1	1	1309-1524		
BL 6-3	BL 6	2	剥離面	Sa					1	1	1450-1446		
BL 6-4	BL 6	3	剥離面	Sa					3		1535-1537-1334		
BL 6-5	BL 6	2	剥離面	Sa					1	1	1123-1124		
BL 6-6	BL 6	2	剥離面	Sa					2		1121-1115		
BL 6-7	BL 6	2	剥離面	Sa					2		1161-1167		
BL 6-8	BL 6	3	剥離面	Ch 71					3		1205-1512-1290		
BL 6-9	BL 6	7	剥離面	Ch 70					1	5	1 1579-1266-1351-1318-1219 1580-1219, 1405-1209		1351と1318は同時割れの可能性有
BL 6-10	BL 6	2	剥離面	Ch 40	1	1			1		1581-(1166・1225)		
BL 6-11	BL 6	6	剥離面	Ch 39					3		3 (1522・1551)・(1526・1548)-1563-1372		
BL 6-12	BL 6	3	剥離面	Ch 42					1	2	1323-(1302・1528)		
BL 6-13	BL 6	2	折損面	Ch 70					2		1237・1523		
BL 6-14	BL 6	2	折損面	Ch 41					2		1363・1510		
BL 6-15	BL 6	2	折損面	Ch 34					2		1549・1556		
BL 6-16	BL 6	2	折損面	Ch 28					2		1088・1592		
BL 6-17	BL 6	2	折損面	Ch 35					2		1242・1557		
BL 6-18	BL 6	2	折損面	Ch 49					2		1315・1337		石核の破片
BL 6-19	BL 6	2	折損面	Ch 50					2		1393・1394		
BL 6-20	BL 6	2	折損面	Ch 45					2		1151・1173		
BL 6-21	BL 6	2	折損面	Ch 74					2		1240・1241		
BL 6-22	BL 6	2	折損面	Ch 42					2		1324・1589		
BL 6-23	BL 6	2	折損面	Sa							1184・1321		
BL 6-24	BL 6	2	折損面	Sa		1			1		1075・1101		
BL 6-25	BL 6	2	折損面	Sa					1	1	1230・1234		
BL 6-26	BL 6	2	折損面	Sa					2		1485・1520		
BL 6-27	BL 6	2	折損面	Sa					1	1	1265・1325		
BL 6-28	BL 6	2	折損面	Sa					1	1	1437・1488		

表3 粒生間谷遺跡における母岩別資料一覧表

母岩番号	地点	点数	色調	制御面 色調	透明度	結晶面	自然面	特徴
1	BL 1	12	黒	N2/2 黒色	不透明	少	有	径1mm以下の黒色の斑点を少量含む。自然面の一部が赤褐色を呈する
2	BL 1	10	黒	7.5Y2/1 黒色	半透明	極少	有	幅1mm以下の黒色のスジ有
3	BL 1	17	黒	N4/0 灰色	半透明	多	有	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
4	BL 1	21	黒	N4/0 灰色	半透明	少	無	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む。母岩4との区別は漸移的
5	BL 1	4	黒	N15/0 黒色	不透明	極少	無	
6	BL 1	1	黒	5PB4/1 品青灰色	不透明	極少	無	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
7	BL 1	1	黒	7.5R2/1 赤褐色	不透明	無	無	幅1~1.5mmの明黄褐色のスジ有
8	BL 1	4	黒	N3/0 暗灰色	半透明	少	無	幅1mm以下の透明のスジ有
9	BL 1	4	黒	N3/0 暗灰色	不透明	極少	有	径1mm以下の黒色の斑点を多量に含む
10	BL 1	1	黒	N4/0 灰色	半透明	極少	有	径1mm以下の黒色の斑点を多量に含む
11	BL 1	1	黒	N2/0 黒色	不透明	少	無	比岩12と類似するがやや混沢がある
12	BL 1	3	黒	N2/0 黒色	不透明	極少	無	
13	BL 1	1	黒	N3/0 暗灰色	不透明	多	有	幅1~3mmの黒色のスジによる斑模様有
14	BL 1	1	黒	N4/0 色	不透明	極少	無	幅1mm以下の暗褐色、透明のスジ有
15	BL 1	1	黒	10YR3/1 品赤色	不透明	極少	有	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
16	BL 1	1	黒	N4/0 色	不透明	少	無	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
17	BL 2	3	黒	N4/0 色	不透明	無	無	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
18	BL 2	1	黒	7.5Y3/1 オリーブ黑色	不透明	極少	有	径1mm以下の黒色の斑点を多量に含む
19	BL 2	1	黒	N3/0 暗灰色	不透明	少	有	幅1mm以下の灰白色のスジ有
20	BL 2	3	黒	N2/0 黒色	不透明	多	有	幅1mm以下の灰白色のスジ有
21	BL 3	1	黒	N4/0 色	不透明	無	無	径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
22	BL 4	3	黒	N4/0 色	半透明	少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
23	BL 4	2	黒	N3/0 暗灰色	不透明	極多	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む。自然面が黄褐色を呈する
24	BL 4	2	黒	N3/0 暗灰色	不透明	多	有	幅1mm以下の黒色のスジ有
25	BL 4	2	黒	N4/0 色	不透明	極多	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
26	BL 5	2	黒	N2/0 黒色	不透明	極少	無	幅1mm以下の黒色のスジ有
27	BL 6	3	黒	N3/0 暗灰色	不透明	多	有	幅1mm以下の黒色のスジ有、径1mm以下の黒色の斑点を少量含む
28	BL 6	2	黒	N3/0 暗灰色	不透明	極多	有	自然面が淡褐色を呈する
29	BL 6	1	黒	N3/0 暗灰色	不透明	少	無	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
30	BL 6	1	黒	N2/0 黒色	不透明	多	有	白色的不純物を含む
31	BL 6	1	黒	25YR3/1 品赤色	不透明	多	有	幅1mm以下の黒色のスジ有
32	BL 6	1	黒	N2/0 黒色	不透明	無	有	自然面が灰白色および暗赤褐色を呈する
33	BL 6	1	黒	N3/0 暗灰色	不透明	多	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
34	BL 6	3	黒	N4/0 色	半透明	少	有	幅1mm以下の黒色のスジ有、径1mm以下の黒色の斑点を微量含む
35	BL 6	1	黒	N4/0 色	不透明	少	無	幅1mm以下の白色の黒色の斑点を微量含む
36	BL 1	2	赤	10R3/3 暗赤褐色	不透明	多	有	53%1 青灰色が部分的に混ざる
37	BL 1	2	赤	10R3/3 暗赤褐色	半透明	多	有	幅1mm以下の黒色のスジ有
38	BL 4	1	赤	10R3/3 暗赤褐色	半透明	極少	有	10BG5/1 青灰色が部分的に混ざる、幅1mm以下の黒色の斑点微量含む
39	BL 6	18	赤	25YR3/3 暗赤褐色	不透明	少	有	部分的に幅1mm以下の透明のスジ有
40	BL 6	15	赤	10R3/3 暗赤褐色	不透明	多	有	58G6/1 青灰色が部分的に混ざる
41	BL 6	16	赤	25YR3/2 暗赤褐色	不透明	少	有	58G6/1 青灰色が部分的に混ざる
42	BL 6	8	赤	25YR3/2 暗赤褐色	不透明	極多	有	58G6/1 青灰色が部分的に混ざる
43	BL 6	7	赤	10R3/2 暗赤褐色	不透明	極多	有	
44	BL 6	2	赤	25YR3/2 暗赤褐色	不透明	多	有	幅1mmの明黄褐色のスジ有
45	BL 6	3	赤	25YR3/2 暗赤褐色	不透明	極多	有	58G7/1 青灰色が部分的に混ざる、碧玉の可能性有
46	BL 6	4	赤	7.5YR4/6 色	不透明	少	有	幅1mm以下の白色のスジ有、幅1mm以下の黒色・白色の斑点を多量に含む
47	BL 6	2	赤	5YR2/4 暗赤褐色	不透明	少	有	幅1mm以下の白色のスジ有、幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
48	BL 6	1	赤	5YR2/3 暗赤褐色	不透明	極少	無	幅1mm以下の黒色の斑点を少量含む
49	BL 6	2	赤	5YR2/3 暗赤褐色	不透明	極多	有	幅2mmの黒色で半透明のスジ有
50	BL 6	2	赤	5YR2/3 暗赤褐色	不透明	少	有	5G5/1 綠灰色が部分的に混ざる
51	BL 6	1	赤	10R2/6 暗赤褐色	不透明	少	無	5G6/6 オリーブ色が部分的に混ざる
53	BL 1	14	緑	5G5/1 オリーブ灰色	不透明	多	有	10YR4/4 暗赤褐色のスジ有
54	BL 1	21	緑	7.5G5/1 緑灰色	不透明	少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
55	BL 1	15	緑	5G4/1 暗オリーブ灰色	不透明	少	有	幅1/2mmの黒色部分に混ざる、幅1mm以下の黒色の斑点を少量含む
56	BL 1	4	緑	5G5/1 オリーブ灰色	半透明	極少	無	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
57	BL 1	2	緑	7.5Y4/1 暗赤褐色	不透明	少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
58	BL 1	2	緑	7.5Y4/1 暗赤褐色	不透明	少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
59	BL 1	2	緑	5G5/1 緑灰色	不透明	極少	無	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
60	BL 3	3	緑	25GY4/1 暗オリーブ灰色	不透明	多	無	幅2~3mmの黒色および1mm以下の浅黄色のスジ有
61	BL 3	1	緑	10Y4/2 オリーブ灰色	不透明	多	無	10GY5/1 緑灰色およびL1.5/1 黒色が部分的に混ざる
62	BL 3	1	緑	10Y4/1 灰色	不透明	少	無	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
63	BL 3	1	緑	25GY5/1 オリーブ灰色	不透明	少	有	自然面の暗オリーブ色を呈する
64	BL 3	1	緑	5GY4/1 暗オリーブ灰色	不透明	少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
65	BL 3	1	緑	7.5GY4/1 暗赤褐色	不透明	極少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
66	BL 3	1	緑	5BG4/1 暗青灰色	不透明	極多	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
67	BL 4	2	緑	5G5/1 緑灰色	不透明	多	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
68	BL 4	1	緑	10GY4/1 暗緑灰色	不透明	少	無	N2/0 黒色が部分的に混ざる
69	BL 4	1	緑	7.5GY4/1 暗緑灰色	不透明	多	無	幅1mm以下の黒色のスジ有、幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
70	BL 6	1	緑	10GY4/1 暗緑灰色	不透明	少	有	5YR2/3 暗赤褐色がごく部分的に混ざる
71	BL 6	9	緑	10GY4/1 暗緑灰色	不透明	少	有	25YR2/3 暗赤褐色が部分的に混ざる
72	BL 6	3	緑	7.5GY4/1 暗緑灰色	不透明	極少	無	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む
73	BL 6	2	緑	10GY3/1 暗緑灰色	不透明	少	有	幅1mm以下の黒色のスジ有
74	BL 6	2	緑	5GY4/1 暗オリーブ灰色	不透明	極少	有	幅1mm以下の黒色の斑点を少量含む
75	BL 6	1	緑	10GY4/1 暗緑灰色	不透明	少	有	
76	BL 6	1	緑	5GY4/1 暗オリーブ灰色	不透明	極多	有	幅1mm以下の黒色の斑点を微量含む

第2節 石器記載と旧石器時代の造構に関する用語法

栗生間谷遺跡出土の石器や旧石器時代の造構を記載するため(第5～7章)の用語法について述べておく。

剥片：無加工の剝離物で、石核から剝離した石片を指す。このうち、「翼状剥片」、「盤状剥片」などのように、その技術的特徴から狭義の石器に準じる扱いを受けるものもあるが、本書ではそれらも一括して剥片と呼ぶ。必要に応じ、記載中で「翼状剥片」という用語を用いる場合もあるが、これは従来的な記載との対応を考慮したものである。また、横削ぎナイフ形石器の素材として多用される剥片が多く出土しており、それらは背面末端側に石核時の大剝離面(ポジティブ面か、広く平坦なネガティブ面)をもち、末端部が直線状～やや弧状の鋭利な縁辺となっている。「有底(横長)剥片」がこれにあたると思われるが、厳密には石核時の大剝離面(=底面)こそが作業面である場合も認められる。こうした状況を考慮し、やや煩瑣ではあるが個別記載中で(刃面となりうる)平坦な剝離面の有無について触れることとする。したがって、用語「有底(横長)剥片」は原則として用いない。また、用語「石刃」の無原則な使用は石器群の様相に関して無用な誤解を与えるおそれがあるので、あえて使用しない。同様に、用語「盤状剥片」も用いないが、それが石核素材に適したものかは記載中で述べる。なお、剥片の表裏は石核時の構成面を「背面」、ポジティブ面側を「腹面」と呼ぶ。

背部整形剥片：小打面をもち、腹面が強く屈曲した幅広～横長の剥片・碎片。プランティング・チップとも呼ばれる。ナイフ形石器の背部整形時に生じるもので、それを組成中に含む場合はナイフ形石器の製作がおこなわれていたことを示す。表裏の呼称は剥片のそれに同じ。

石核：剥片を剝離した最後に残る石塊(残核)。自然礫素材と剥片素材とがあり、後者は「翼状剥片石核」あるいは「有底剥片の石核」を含む。剥片の記載と同様に「翼状剥片石核」を器種名としては用いないが、必要に応じ記載中に併記することもある。剥片素材石核の場合、実測図の左側を「表面」、右側を「裏面」と呼ぶ。ただし、「素材のポジティブ面」というように素材剥片における構成面の呼称法も併用する場合は、表面・裏面の限られた範囲を指す。また、例外的な石核としては縄紋時代の金山産サスカイトを用いた例があるが、これは「板状石材」と呼ぶ。自然礫素材の石核の場合は、その形状からa～e面にわけて記載することもある。

ツール：本書に掲載する狭義の石器で、おもに剥片素材の2次加工品と礫石器を指す。旧石器時代の定型石器としてはナイフ形石器・角錐状石器・(円形)搔器などがあり、縄紋時代のそれらには有舌尖頭器・尖頭器・石鎌・石匙などがある。また、礫石器には敲石・磨石・凹石などがある。このうち、ナイフ形石器・角錐状石器・搔器など旧石器時代の定型石器については、便宜的に素材剥片の背面を「表面」、素材剥片の腹面を「裏面」と呼ぶ。縄紋時代以降の石器で素材面をもたないか、大きく損なっているものの(尖頭器・石鎌など)はその表裏を任意に決めてある。ただし、左図を表面とするのは旧石器と同じ。

このほか、本書では用語「2次加工ある剥片」、「微細剝離痕ある剥片」も併用する。前者は定型石器ではないものの2次加工痕を縁辺にもつ剥片で、定型石器の製作途上品(いわゆる未製品)を含む可能性がある。後者は縁辺に連続する微細剝離痕をもつ剥片であるが、それが使用によるものか、剝離時の偶発剝離かは判然としない。ともに石器の製作過程で生じる剝離物というよりは、むしろ狭義の石器に近い。ただし、各面の呼称は剥片のそれに準じる。

これらツールのうちで「微細剝離痕ある剥片」を除く石器の場合、器形を整える意図で施した剝離を

「調整剝離」、あるいは単に「調整」と呼ぶ。言い換えれば、定型石器をかたちづくる加工は「調整剝離」である。この用語に関しては、剝離の様態や認められる部位によってさらに細別が可能と考えられるが、本書ではこれをおこなわない。対して「2次加工」の場合は、ただ縁辺に並ぶ剝離痕としての意味合いが強い。むろん、「2次加工ある剝片」の場合は原則として後者（「2次加工」）のみを用いる。

打製石器と礫石器との間で混同を避ける必要があるのは、「打撃痕」と「敲打痕」である。前者は剝片の剝離時に衝撃痕として生じたもので、おもに剝片や石核の打面に残る。打撃クラックともいう。一方後者は敲石・凹石の表面に残る使用痕跡で、前者とは意味が異なる。本書ではこの2種を区別して用いる。

記述用語としてとくに統一が必要なのは石器の器種名のほか、上記した用語についてであろう。個々の石器について述べる際には、これらの用語にかかる修飾語句によって具体化を図ることにしたい。その他の統一字句に関してはあえて触れない。

旧石器時代の遺構に関しては検出例が極めて少ない。そうした中にあって「ブロック」と称されるとの多い遺物集中部は、旧石器時代の遺跡研究にあっては欠くことの出来ない要素となっている。ここでその概念を整理しておく。なお、本書で用いる「ブロック」とは調査時に視覚的に認識した石器のまとまり（分布上の単位）としての呼称であり、その中に性格等の意義付けを持ったものではないことを明らかにしておく。

ブロック：石器集中部（遺物集中、集中地点）、ユニット、クラスターなどともいう。石器遺物が一定の範囲にまとまって出土する状態。それ自体は、単なる遺物の分布状況、出土状態に過ぎないが、遺構がほとんど検出されない後期旧石器時代の遺跡の検討にあたっては、住居址などに相当される場合もある。

ブロックの呼称の初出は、『概報・月見野遺跡群』（『大和市史7 資料編 考古』に再録されている。）であり、そこではあくまで、分布上の単位としての定義であった。その後、1970年代にはブロック＝住居址とする「集團論」が提起された。一方、ブロックごとの組成などの差を「場の機能」差とする考え方（セトルメントパターン論）もあり、ブロックの評価は一定していない。その中で、複数の性格の異なるブロックを石器の接合関係により結び付け、全体を単位集団の生活の場と捉える方法（世帯ユニット論）は、石器使用痕研究とも結び付けられ、遺跡研究のひとつの到達点を示している。

ブロックの平均的な姿は、径2～8m（4m前後がもっとも多いとされる）ほどの不整な円形とされるが、より大規模なもの（径10mを超える場合もある）、分布密度が非常に高いもの、微細資料が集中するものなど、一様ではない。また、輪郭、範囲を明確に区分できないため、累積や重複を識別することも難しい。個別事例ごとに、直截的に機能や性格を議論することは避けるべきである。ブロックには、住居の中、住居に隣接した作業場、単なるゴミ捨て場など、様々な状況で形成されたものが含まれており、状態、内容、形成過程を検討することでその性格が明らかにされるのである。

第5章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 ブロックの設定

ブロックは7地点を確認した。これらは地形分類図によれば低位段丘面上に位置する。いずれのブロックも中世後半段階には埋没する自然河川(開析谷)1・2(両者とも旧石器時代に存在していたかは明らかにできなかった。自然河川2は縄文時代後期には存在していた可能性を窺わせる。)を望む場所に点在している。ブロックは大きくみて2つの分布域を示す。すなわち、ブロック1及び2は調査区域の丘陵中央～東側部分に、ブロック3～7が同丘陵西側部分に占地している。両地区は直線距離で約200m離れている。また、両地区内の各ブロック間はそれぞれ直線距離で10数m～30mを測り、一見すると各ブロックが単独で形成されているように見える。

調査はこれまでにも述べたように、1mメッシュの区画を調査範囲内に設け、市松文様状に掘り下げ、石器が出土すると順次隣接する区画を掘削する方法をとった。そして、石器や礫の平面分布や垂直分布が「視覚的に捉えて」集中していると判断したものを「ブロック」もしくは「礫集中部」と称して遺物の取り上げを行い、遺物整理を進めた。従って、本書の粟生間谷遺跡に関わる部分での「ブロック」という用語は、これまで後期旧石器時代研究が深化させてきた集合体研究における用語使用法とは異なり、あくまで単純に遺構名称としての使用であることをお断りしておく。

「ブロック」や遺物集中部の認定において、「多くの場合に「ブロック」の設定基準が明記されることは少ない。」「「ブロック」の設定は、分析者の内的な基準に基づいており、第三者がその設定理由を細部にわたって再検討することは多くの場合に困難である。」との指摘があり、分析者以外の誰が行っても同じ結果が得られる分析条件の設定を行なう必要性を説かれている(五十嵐1992)。

そこで今回の遺物整理にあたっては、遺構名称としての「ブロック」・「礫集中部」は調査時に付したものと踏襲し、「ブロック」の分析に関する部分では五十嵐 彰氏の分析基準¹⁾を参考にして、新たに集中部分の把握を行った。但し、これに関しては多くの石器の出土が認められたブロック1・3・6について実施した。なお、3つのブロックはその形成過程や性格が一律とは考えられないため、ブロック毎に各石器間の有機的関連距離を導き、それを基にして円を描き集中部を押さえる方法を採用した。集中部の認定方法は円が石器間の有機的関連距離によって描かれるため、円内に中心となる1点以外にもう1点(すなわち、同一円内に2点以上の石器)が存在すれば集中部として認識することとした。単純に一律半径1mの円を描き集中部を確定するよりも、各「ブロック」の状況に応じた求め方の方が分析手法として有効と考えられる。この分析法に関しては第8章第2節で詳述している。

註

1)「遺物の出土位置を円の中心として半径1mの円を描いていく方法」を用い、「円内に中心とする1点以外に2点以上の遺物が含まれれば、遺物集中部として認定」とした(五十嵐1992)。

引用・参考文献

五十嵐 彰 1992 「第Ⅴ章 第V文化層」『湘南藤沢キャンパス内遺跡 岩宿時代・縄文時代I部』第2巻 慶應義塾大学

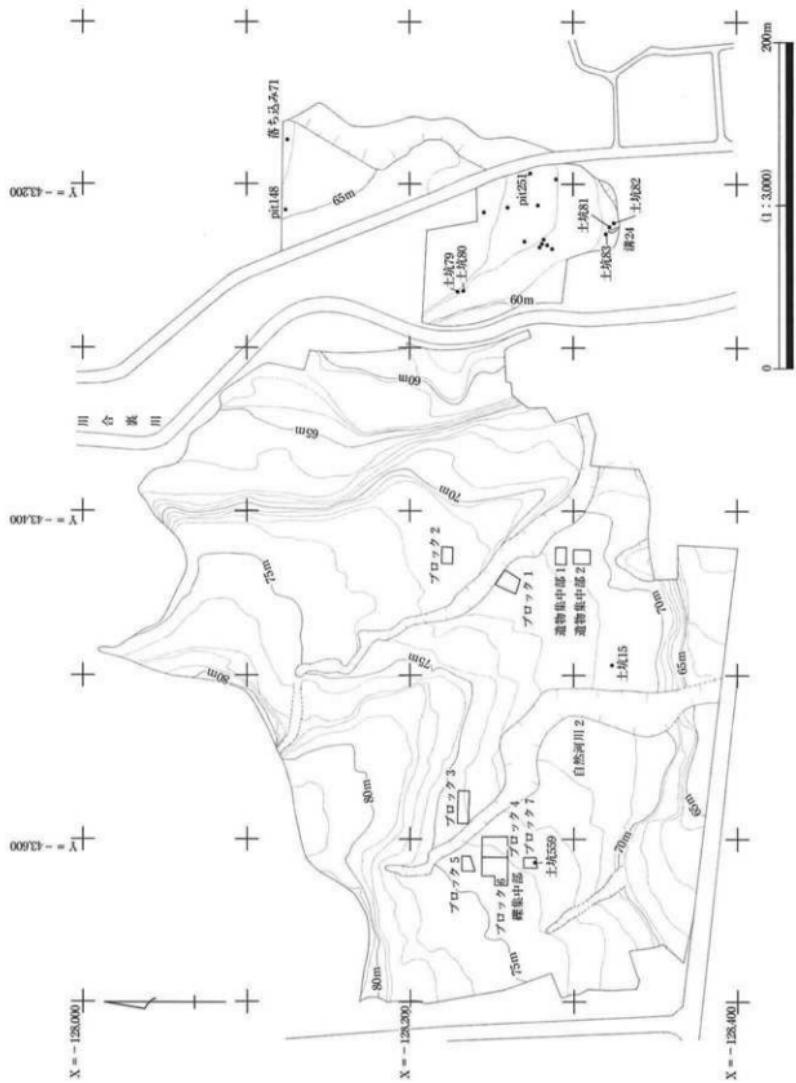


図7 粟生間谷遺跡旧石器時代ブロック・縄文時代遺構分布図

表 4 粟生間谷遺跡ブロック別石器組成

器種	ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4	ブロック5	ブロック6	ブロック7	合計
ナイフ形石器	14	20			38	72		
角状石器					1	1		
円錐形石器					1	1		
刮削器		2				2		
削器		7				7		
ノッチ	2			1	2			
石鏃		1	1			5		
研磨形石器					2	2		
二次加工ある削片	19		24	5	3	49	1	101
焼削形ある削片	10	1	12	3	12	38		
石核	11	2	17	1	38	1	70	
刮削		111	246	30	11	299	2	716
骨質彫刻片			29			29		
鉢形	420		166	15	49	109	1	1
敲石								1806
合計	360	15	524	55	63	551	5	1806

表 5 粟生間谷遺跡ブロック別器種別重量 (g)

器種	ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4	ブロック5	ブロック6	ブロック7	合計
ナイフ形石器	57	309			963	1539		
角状石器					93.3	93.3		
円錐形石器					234	234		
刮削器			22.9			22.9		
削器	12	4.8	4.2	5.5	9	15.7		
ノッチ						9		
石鏃						560.5		
研磨形石器					31	31		
二次加工ある削片	62.6	14.7	38.4	95.7	223.3	1.6		550.5
焼削形ある削片	25.7	1.1	97.7	16.4		222.2		
石核	118.8	61.1	345.3	94.6	382.4	71	1125.3	
削器	215.7	66.5	692.2	128.7	108.8	90.4	45	2111.1
骨質彫刻片								1712
鉢形	251.1		215.2	26	8.2	21.6	61	871
敲石						279		
合計	475.8	134.1	1530.4	221.2	1466.7	2222.8	135.5	4626.5

表 6 粟生間谷遺跡ブロック別石材組成

石材	ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4	ブロック5	ブロック6	ブロック7	合計
Sa	180	10	481	31	15	407	2	1129
Ch	401	5	22	23	2	129	1	603
Qe	1					46	1	48
As	1.6							
Jb	2							
Qe	1							
Sh								
ST						1		
MH								
不明								
合計	363	15	534	63	63	561	5	1896

石材	ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4	ブロック5	ブロック6	ブロック7	合計
Sa	124.9	1434.1	1624	147.2	1317.7	72	3316.8	
Ch	332.2	9.2	90.2	69.2		35	600.6	28
Qe	0					16	17.8	1122.7
As	0.1			47				
Jb	0.5							
Qe								
Sh								
ST						26		
MH								
不明								
合計	475.8	134.1	1530.4	221.2	1466.7	2222.8	135.5	4767.5

表 8 粟生間谷遺跡集中部礫種組成

礫種	個数	重量 (g)
粗質ホーンブリッキス	331	225.200
チャートホーンブリッキス	101	50.680
粗質ホーンブリッキス	89	92.650
灰色岩ホーンブリッキス	51	18.690
粗質ホーンブリッキス	2222	
粗質ホーンブリッキス	71	1125.3
灰色岩ホーンブリッキス	45	2455.0
石英斑岩	17	126.0
フェルナイト	3	810
ナヤー石	1	690
合計	632	4767.5

第2節 ブロック1

1 石器分布

調査地の東側、自然河川1と呼ぶ開析谷の南肩に位置する。形成された場所は西から東、北から南へ緩やかに傾斜する南東向きの緩斜面である。標高は71.6~71.8mを測る。石器は、現耕作土直下に広がり、中世の遺構面である黄色シルト~粘土層から検出された。このような状況下で検出されたため、ブロックの上部は削平を受けている可能性が高い。

石器は東西7.2m×南北6mの範囲に集中して分布する。平面分布をみるとサスカイトの集中部が東側に、チャートの集中部が西側に形成され、僅かな空白域を介在して南側に小規模な集中部が存在する。サスカイト集中部は直径4m、チャート集中部は東西3.2m×南北4.4mの規模を持つ。なお、南に位置する小規模な集中部は、南側を後世の棚田造成の際にカットされており、本来の規模が不明である。現状では東西3.2m×南北1.6mを測る。これらの集中部における石器の垂直分布をみると、標高71.7~71.8mに集中し、上下幅10cm前後の範囲に収まる。

石器は3つの集中部で593点（出土位置を記録した資料は324点、土壤水洗資料が120点、ほか149点）を確認しており、主体となるものにサスカイトとチャートがある。サスカイトは180点(136g)、チャートは401点(324.2g)を数え、近畿地方では珍しくチャートの占める割合が極めて高い。代表的な定型石器にはナイフ形石器14点、ノッチ2点、2次加工ある剝片19点、石核11点などがみられる。この石器群は微小なものが主体となすことを特徴とする。

チャート製の器種別の分布をみると、2次加工ある剝片や微細剝離痕ある剝片が集中部の中心に存在し、ナイフ形石器や石核は中心から外れるものが多い。一方、サスカイト製ではナイフ形石器や石核が中心に入る例が多くみられる。

接合資料はサスカイト1例(2点)、チャート11例(28点)の計12例(30点)である。接合率はチャートで6.9%、サスカイトで1.1%、トータルが5.1%である。中には集中部内に掘削された中世の遺構(pit570・落ち込み8)出土資料との接合例も存在する。接合距離は概して短く、2m前後である。

個体別にみると黒色チャート(15個体)が多く、次いで緑色チャート(7個体)、赤色チャート(2個体)の順になる。平面分布では緑・赤色チャートがチャート集中部の中心にかたまり、その周囲を取り巻くように黒色チャートが分布する。特に、集中部の東寄りの位置に黒色チャートの中心がある。

重量別の分布では、当ブロック最大級の10~20gの資料が、集中部から若干離れた位置に存在する。集中部では10g以下のものが大半を占めている状況である。

礫は14点を確認した。これらは、集中部を形成せず散漫に分布するが、比較的南の石器集中部の周辺に多くみられる。礫には被熱痕跡やタールの付着などの変化が認められない。石材は多い順に砂質ホルンフェルス、砂岩、泥質ホルンフェルスである。こうした石材は遺跡の南側を流れる勝尾寺川で採取されるため、川原石を持ち込んだものと判断される。平均的な法量は長さ7.3cm・幅4.6cm・厚さ3cm・重量200gである。なお、接合関係は存在しない。

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

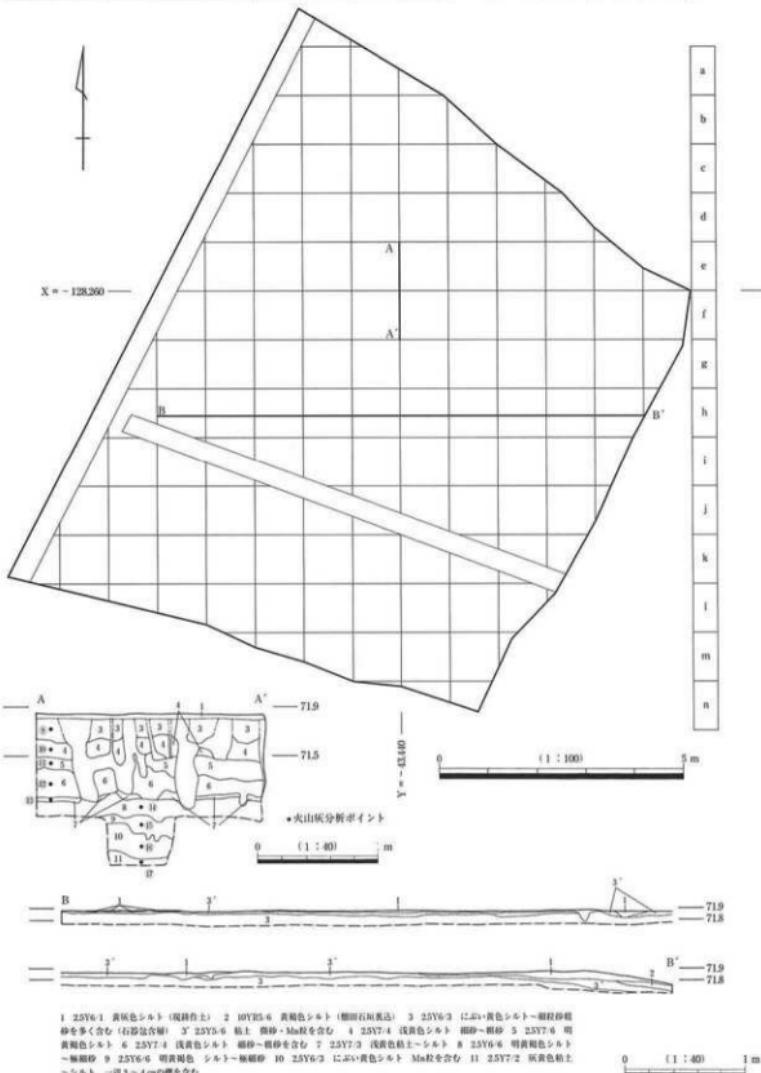


図8 ブロック1 平面・断面図

2 石器組成と石材組成

ブロック1では593点の石器が出土し、ナイフ形石器14点・ノッチ2点・2次加工ある剝片19点・微細剝離痕ある剝片10点・剝片117点・碎片420点・石核11点で構成される。定型石器はナイフ形石器・ノッチのみであり、単純な組成を示している。

石材別における石器組成は表9のとおりである。チャートはナイフ形石器10点・ノッチ2点・2次加工ある剝片16点・微細剝離痕ある剝片10点・剝片55点・碎片300点・石核8点で構成され、剝片・碎片の割合が高く、石器製作の痕跡が顕著である。サスカイトはナイフ形石器4点・2次加工ある剝片2点・剝片61点・碎片110点・石核3点で構成され、ノッチ及び微細剝離痕ある剝片が欠落する以外、チ

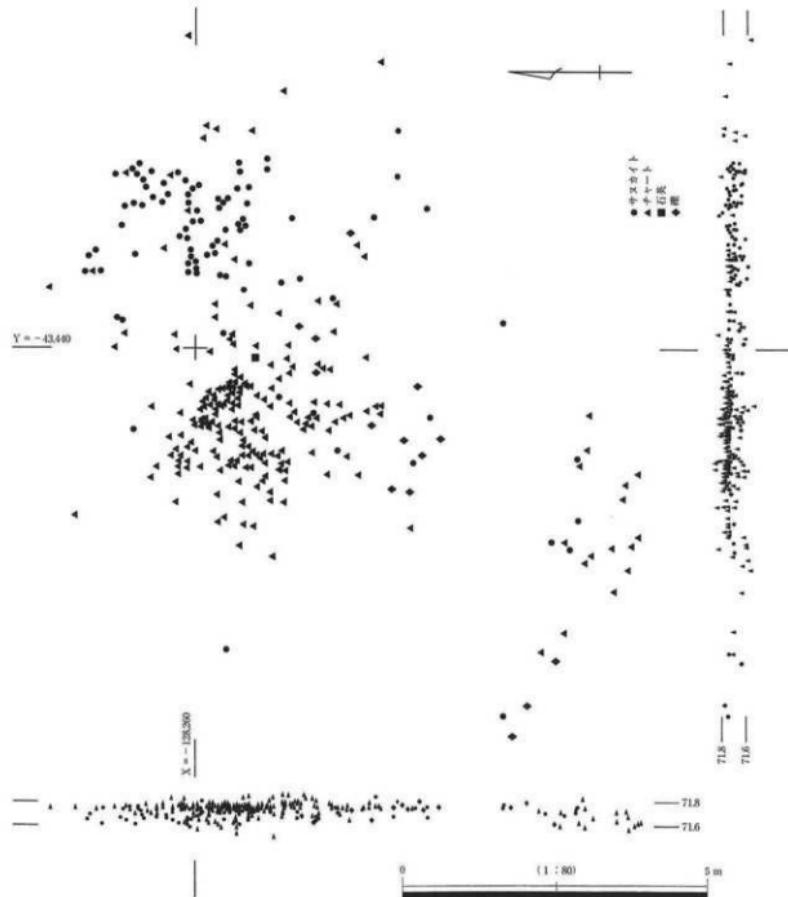


図9 ブロック1 石器平面・垂直分布図

チャートにおける石器組成と類似する。石英・碧玉・泥質ホルンフェルスはそれぞれ1点のみの出土であり、2次加工ある剝片・碎片・剝片で構成される。

石材組成はチャート401点・サヌカイト180点・安山岩5点・石英1点・碧玉1点・泥質ホルンフェルス1点であり、チャートを主要石材とし、サヌカイトも一定量認められる。チャートは色調別にみてみると、黒色203点・緑色83点・赤色8点・色調不明25点であり、黒色が主体を占める。

母岩分類はチャートのみで実施し、401点のうち145点を母岩1～16、母岩36・37、母岩53～59に区分し、点数がそれぞれ81点、4点、60点である。母岩1～16は黒色チャート、母岩36・37は赤色チャート、母岩53～59は緑色チャートである。母岩別における石器組成は表10のとおりである。

表9 ブロック1 石材別石器組成

石材	器種	ナイフ形石器	背部整形剝片	角錐状石器	円形器	搔器	削器	石錐	楔形石器	ノッチ	敲石	2次加工ある剝片	微細削離痕ある剝片	刮片	碎片	石核	合計
チャート	10							2		16		10	55	300	8	401	
サヌカイト	4									2			61	110	3	180	
安山岩														5		5	
石英										1						1	
泥質ホルンフェルス													1			1	
碧玉														4		4	
不明										2	19	10	117	420	11	593	
合計		14															

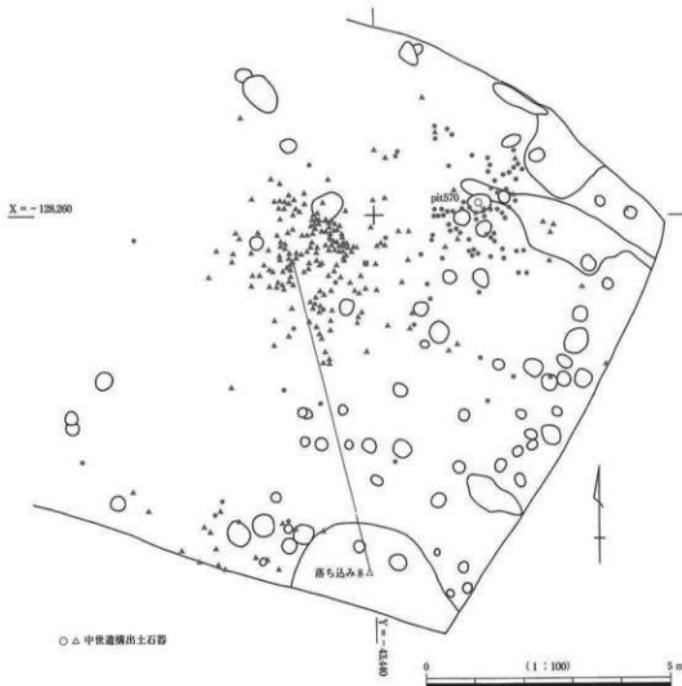


図10 ブロック1 石器平面分布図（中世遺構との関係）

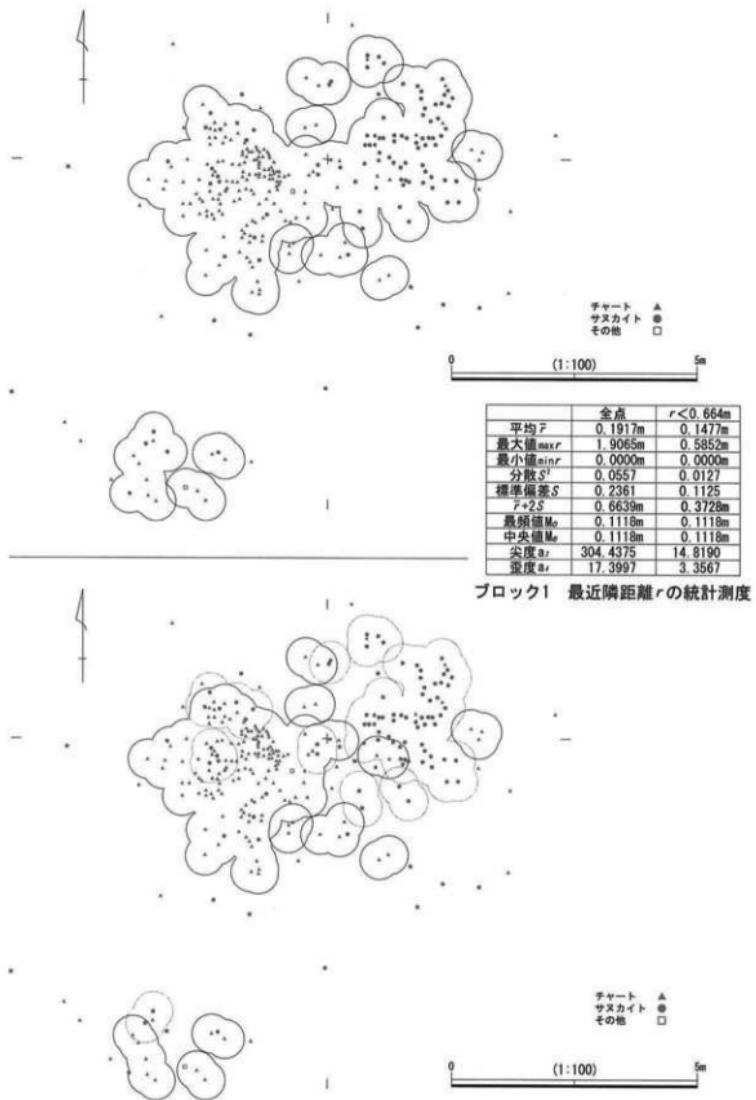
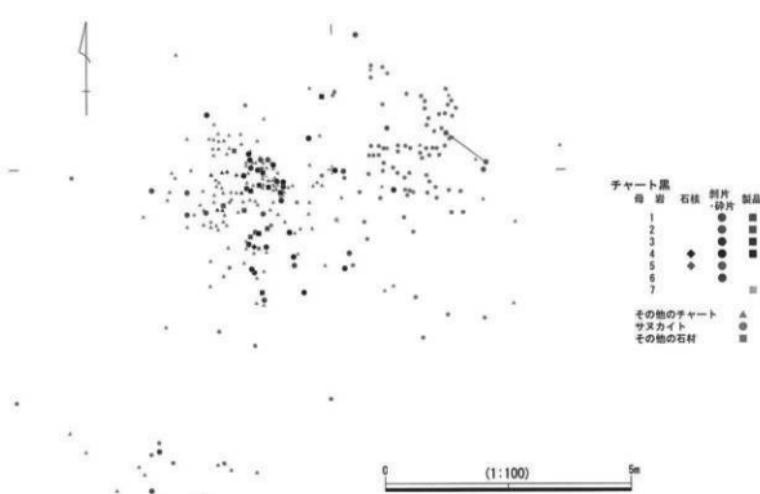
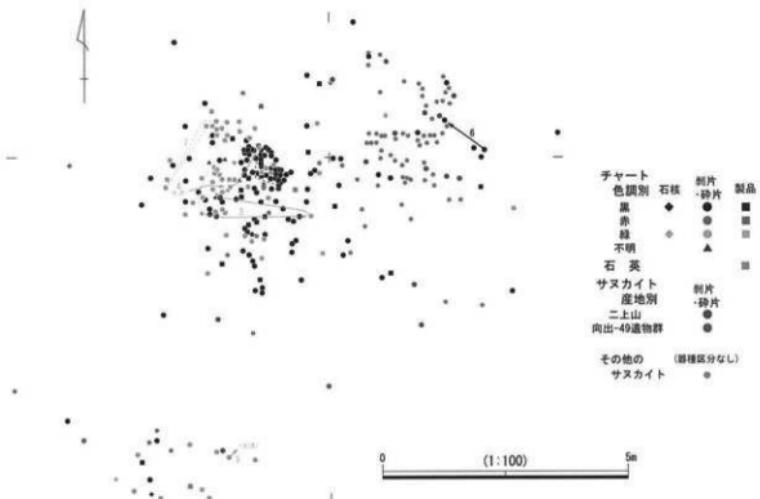


図11 ブロック1 等距離円図 ($r = 40\text{cm}$ 、上：全点・下：石材別)



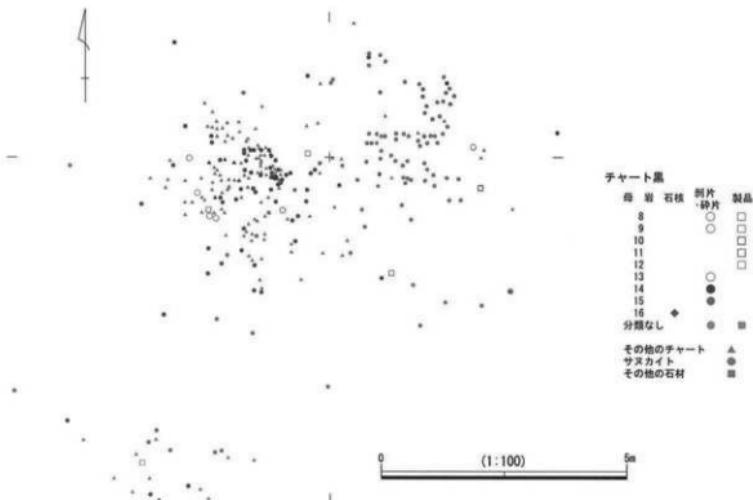


図14 ブロック1 チャート母岩別平面分布図（2）黒色（その2）

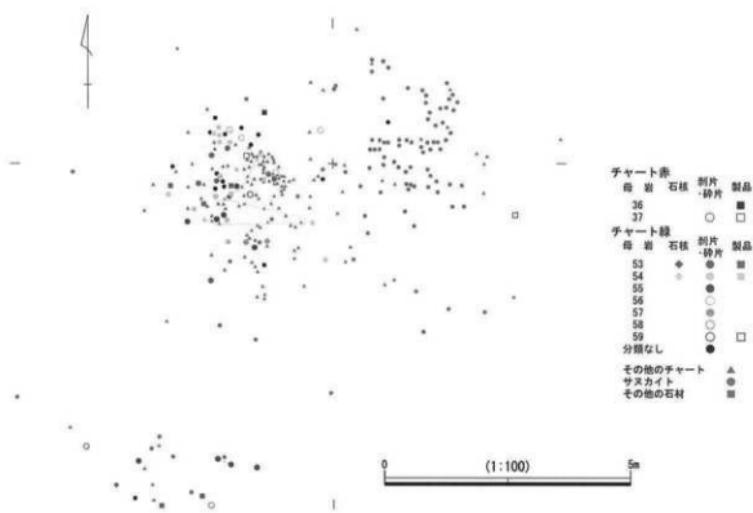


図15 ブロック1 チャート母岩別平面分布図（3）赤・緑色

全点

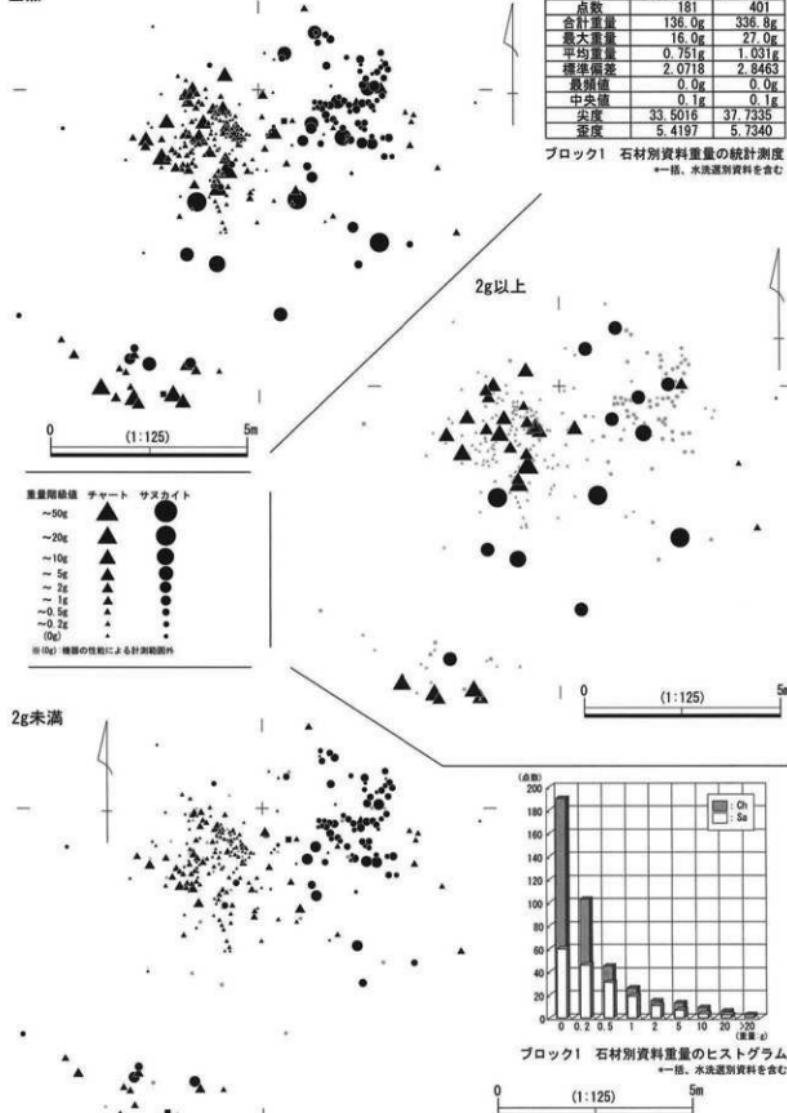


図16 ブロック1 重量別平面分布図

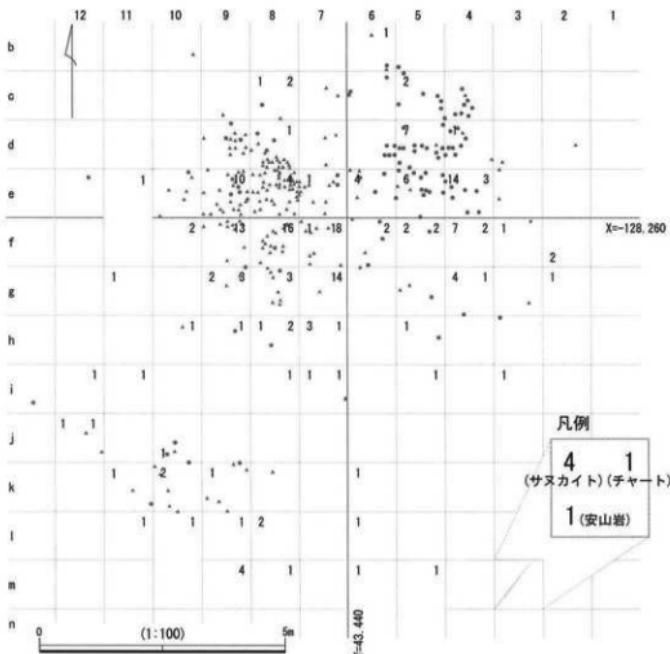


図17 ブロック1 水洗選別資料回収点数（石材別）

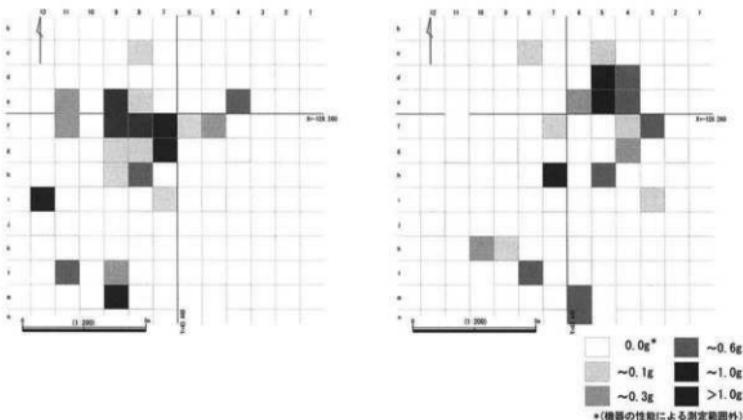


図18 ブロック1 水洗選別資料回収重量（左：チャート・右：サスカイト）

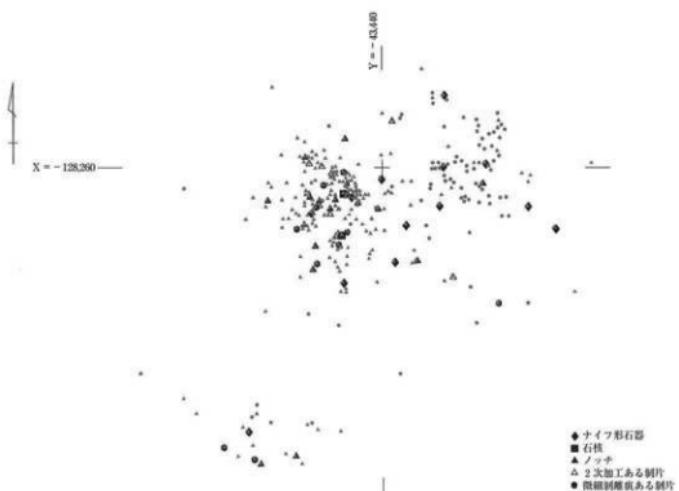


図19 ブロック1 器種別平面分布図

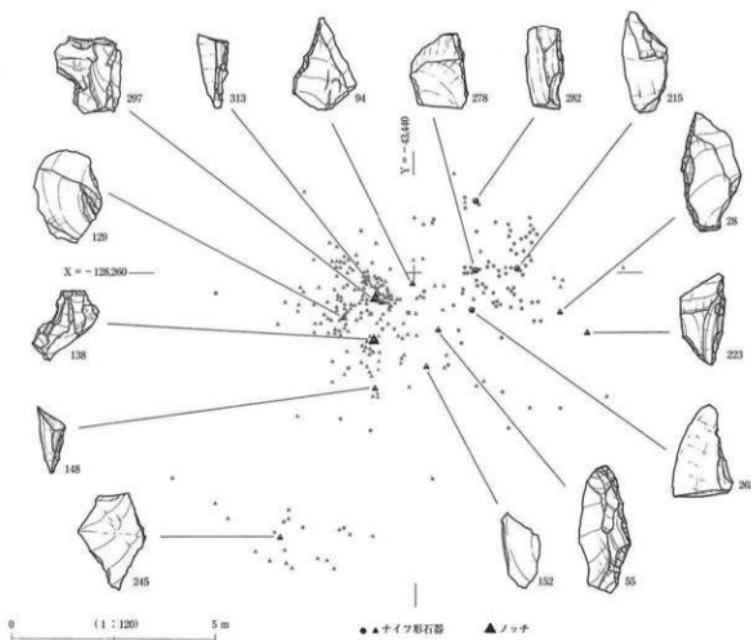


図20 ブロック1 ナイフ形石器・ノッチ平面分布図

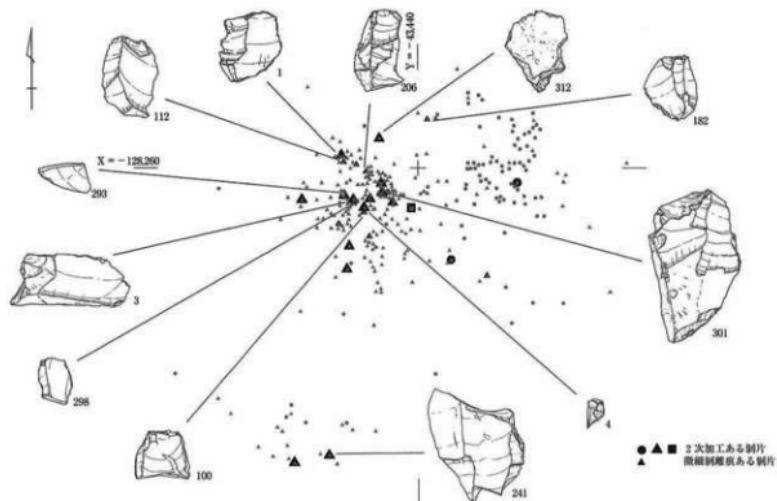


図21 ブロック1 2次加工ある剥片・微細剥離痕ある剥片平面分布図

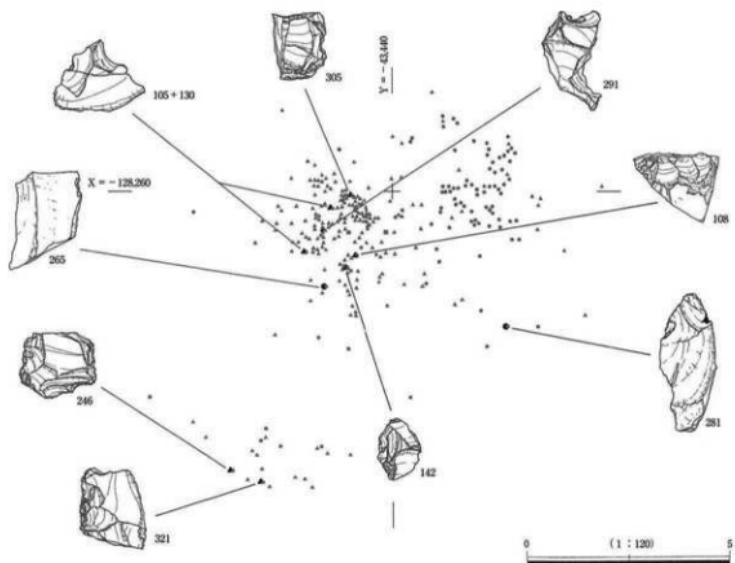


図22 ブロック1 石核平面分布図

表10 ブロック1 母岩別石器組成

母岩	図版	写真	点数	器種								遺物番号
				Kn	Sc	Dr	No	RIF	UF	Fl	Cp	
1	第1・3・4図	図版16・17・20・21	12						2	5	5	5・21・54・98・108・124・140・165・175・212・304・399
2	第1図		10	1					1	6	2	128・129・137・151・203・219・259・307・322・412
3	第1図	図版16・17	17	1			1			3	12	66・67・70・102・116・146・147・148・153 159・160・173・205・450・230・297・315
4	第1・2・5図	図版16・17・18・20	21	1			1	3	1	6	8	1 53・61・65・69・100・104・138・142・145・150・154 177・182・206・207・280・303・313・391・394・398
5	第4図		4							1	3	15・202・225・397
6	第3図	図版21	1							1		246
7	第1図	図版16	1	1								55
8			4						1	2	1	127・131・132・288
9			4						1	1	2	14・19・59・60
10	第1図	図版16	1	1								245
11	第1図	図版16	1	1								26
12	第1図	図版16	1	1								94
13			1							1		309
14			1							1		118
15			1							1		18
16	第4図	図版17	1								1	321
36	第2図	図版20	2					1		1		312・354
37	第2図	図版20	2						1	1		204・244
53	第2・3・4・5図	図版18・20・21	14				5	1	5	2	1	3・125・136・226・241・243・287 293・301・309・316・320・324・411
54	第1・2・3・6図	図版19・20・21	21	1			2	3	7	5	3	1・7・105・107・112・114・130・134・152・253・285 286・289・292・298・305・308・310・340・384・385
55	第1・5・15図	図版18・34	15						10	4	1	126・133・176・181・216・217・221・246 254・291・415・425・429・456・1731
56			4						2	2		52・71・91・311
57			2							1	1	143・158
58			2						2			319・424
59	第1図	図版16	2	1						1		99・223

3 出土石器

(1) ナイフ形石器〔第1図・図版16~17〕

ナイフ形石器は14点出土し、チャート10点、サスカイト4点である。完形品が6点で、94・245には打面が残存する。素材は全て剥片素材であり、そのうち平坦面を有する剥片は4点認められる(262・215・282・278)。素材の用い方は横位に利用する例が顕著であるが、正位(28・94・313)、逆位(55)、斜位(245・215)など多様である(図23)¹¹⁾。刃部の設定位置は素材剥片の末端縁に設定するもの3点、側縁に設定するもの6点、末端縁及び側縁に設定するもの3点、不明2点である。加工は1側縁加工11点、2側縁加工3点であり、裏面から表面に調整剝離を施すものを主体とするが、内向調整剝離(245・129・152・262)、対向調整剝離(215・278)も認められる。大きさは、最大長が1.6cm~2.7cmに分布し、大半が2cm以下で極めて小形である。

28・94・55・313はチャート製で、素材剥片を縱位(正位・逆位)に利用し側縁に刃部を設定する。28は刃部側の下半部と反対側の縁近全体に調整剝離を施す2側縁加工で、背面が素材剥片の剝離方向と一致する先行剝離面で構成される。94は打面残置の1側縁加工で、調整剝離が素材剥片を斜めに切りとるように施されている。55は素材の打面部を石器先端側に用いる例であり、1側縁加工で先端部に衝撃剝離痕が認められる。

223・245・129・152はチャート製で、素材剥片を横位ないし斜位に利用する。223は末端側が折損した剥片を素材とし、折損面を切って調整剝離が施されている。245は打面が残存し、末端側に調整剝離を施す。129は素材剥片の打面側と刃部側の下半部に調整剝離を施す2側縁加工で、打点が残存する。

262・215・282・278はサスカイト製で、素材剥片の末端縁に刃部を設定し平坦面を有する剥片を素材とする。素材の用い方は横位ないし斜位である。215・278は対向調整剝離、262が内向調整剝離、282は

裏面から表面に急角度の調整剝離を施し、全て1側縁加工である。対向調整剝離はサスカイトのみで認められる。

(2) ノッチ [第1図・図版16~17]

ノッチは2点出土し、全て黒色チャートである。138は末端側が節理により折損した単剝離面打面の剝片を素材とし、側縁側に裏面からの1~2回の剝離により抉りを作出している。297は打面・末端側が折損した剝片を素材とし、裏面からの1~2回の剝離により末端側に抉りを作出する。

(3) 2次加工ある剝片 [第2図・図版20]

2次加工のある剝片は19点出土し、チャート16点・サスカイト2点、石英1点である。19点のうち第2図において8点図示した(293・4・361・3・182・312・241・1)。

293は緑色チャート製で背面右側縁にやや急角度の2次加工を背面から腹面に施す。打面側は2次加工を切って折損しており、節理による折損である可能性が高い。母岩53。

4は黒色チャート製で背面左側縁には腹面から背面にやや急角度の2次加工が認められる。2次加工の部位以外は全て折損しており、折損後に2次加工を施している。

361は黒色チャート製で腹面から背面にやや急角度の2次加工を施し、背面右側縁がやや内彎する。打面側及び背面左側縁には折損面が認められる。

3は緑色チャート製で素材剝片の打面側が折損しており、腹面からの急角度の2次加工により、折損面の一部を除去している。母岩53。

182は黒色チャート製で背面が素材剝片の剝離方向と一致する先行剝離面のみで構成される単剝離面打面の剝片を素材とする。背面左側縁には腹面から背面に2次加工を施す。母岩4。

312は赤色チャート製で大半が自然面で構成され節理が著しい剝片を素材とする。腹面左側縁には部分的に背面からの2次加工が認められる。母岩3。

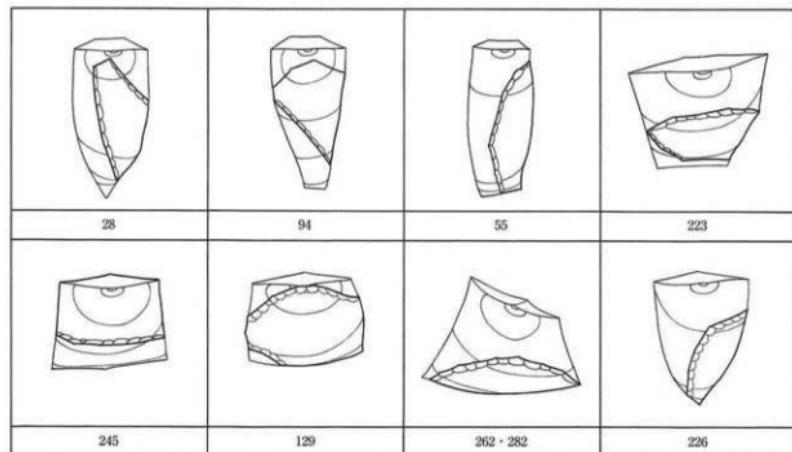


図23 ナイフ形石器模式図

241は緑色チャート製で背面右側縁に急角度の2次加工を腹面から背面に施す。素材剥片の打面側が折損しているが、2次加工と折損面の新旧関係は不詳である。母岩53。

1は緑色チャート製で素材剥片の剥離方向と一致する複数の先行剥離面で構成され先端が先細りになる剥片を素材とする。急角度の2次加工を背面から腹面に施し、素材剥片の打面部を除去している。母岩54。

(4) 微細剝離痕ある剥片〔第2～3図・図版20〕

微細剝離痕ある剥片は10点出土した。全てチャート製である。10点のうち第2・3図において4点図示した(204・112・301・98)。母岩53の2次加工ある剥片及び微細剝離痕ある剥片は、他資料に比べ大形の剥片を素材とする。

204は赤色チャート製で背面が素材剥片の剥離方向と一致する先行剝離面のみで構成され両側縁が並行する單剝離面打面の剥片を素材とする。背面左側縁の両面に微細剝離痕が認められる。背面右側縁は折損している。母岩37。

112は緑色チャート製で背面が素材剥片の剥離方向と一致する先行剝離面のみで構成される單剝離面打面の剥片を素材とする。腹面右側縁には部分的に微細剝離痕が認められる。母岩54。

301は緑色チャート製で背面の約半分が自然面で構成される單剝離面打面の剥片を素材とする。微細剝離痕が背面右側縁の両面にみられ、背面には右側縁下半部に、腹面には縁辺全体にかけて部分的に微細剝離痕が認められる。母岩53。

98は黒色チャート製で末端側が折損している單剝離面打面の剥片を素材とする。背面左側縁に微細剝離痕が連続的に認められる。母岩1。

(5) 剥片〔第3～4図・図版21〕

117点出土している。石材別の内訳を見ると、チャート55点(47.0%)、サスカイト61点(52.1%)、泥質ホルンフェルス1点(0.9%)となる。チャートは黒色・緑色の母岩が多用されており、前者の剥片・碎片が最も多い。明らかに剥片を剝離した痕跡が残っているが、明確な接合関係は未確認である。一方、緑色チャートの剥片・碎片は黒色チャートに比しやや少ないものの、剥片・石核相互の接合関係が認められた。従って、後者では石核の放棄に至るまで剝離が進められたことが明確である。サスカイトの剥片は全般的に小形で、石核素材に適する大形の剥片が皆無である。

263・269・35・37はサスカイトの剥片である。263は背面末端部に、269は背面左側縁にポジティブ面を取り込んでいる。269に付着したポジティブ面の打撃点は先行剝離で損なわれているが、ツイン・バルブの痕跡をよくとどめている。石理にやや逆らって剝離したためか、腹面側はアンデュレーションを起こしている。35は垂直割れで片側縁を失った剥片で、背面構成には剝離軸とは異方向の先行剝離面も認められる。37は山形をなす打面調整を施して剝離した横形の剥片で、ポジティブ面の取り込みには失敗している。背面には先行するネガティブ面を1面だけ残している。

5・324・310+285+114・248・316・175・212はチャートの剥片である。5は節理面と先行剝離面とが接しあう直線状の稜線を取り込んだ継ぎ面を呈する。324の背面末端側には平坦な剝離面が残っているが、ポジティブ面かは判然としない。末端部を折損している。310+285+114は剝離時に垂直割れを起こし、3片以上に折れている。248は剝離直前に調整を施して打面上に山形の稜線を作りだしている。316は末端部に横位からの先行剝離面をとどめた幅広の剥片。175の背面は自然面ではなく覆われ、最大厚も約1.8cmを測る。212も打面調整を施してから剝離したもので、両側縁がほぼ平行な継長状を呈している。

(6) 石核〔第4～5図・図版17～18〕

11点を数える。石材別に内訳をみると、サスカイト3点、チャート8点(接合後7点)となる。緑色チャートは5点、黒色チャートは3点を占める。サスカイト・緑色チャートの石核素材はいずれも剥片とみられ、黒色チャートは自然礫を用いた例を含む。また、緑色チャートの石核には鋸歯状の調整も見られ、それ自体が搔器であった可能性もある。ここでは接合資料に含まれない石核について述べる。

321は剥片素材の石核。背面左側縁の折損面に打面を設定し、裏面(ポジティヴ面)側を作業面としている。ポジティヴ面は裏面左側縁の上端部に残存し、表面の剝離面を切っている。裏面での剝離終了後、先の最終剝離面を打面とする急斜度調整を、表面下端部に施す。一種の石核転用搔器とも考えられる。108は自然礫を用いた石核。d面で少なくとも3枚の剥片を得たのち、この面を打面に転じてb面での剝離に移行している。d面での剝離は対向方向を示すが、打点部は現存しない。下底側は折損しており、これが剝離終了を招いている。

252・281はサスカイト製の剥片を素材とした石核で、打面調整で打面を山形に整形していたようである。前者は素材のポジティヴ面を帯状に付着させつつ剥片を剝離しているが、その際に打点から半折している。後者も山形をなす稜線上に打撃点を定めて剥片を得たもので、これにより裏面側のポジティヴ面はほぼ消失している。表面側にも剝離痕が残っており、同様の打面状況を示している。142は表面右側縁に調整を施して打面を作出し、裏面側を作業面とする剝離作業を行なっている。243は剝離の進行が著しく、裏面では素材面が消失している。剝離順序は裏面→表面へと移行しており、剝離可能な余地はほぼ皆無である。特に表面に対する剝離は急斜度かつ細密であり、同面の両側縁を刃部に見立て、搔器の類例とみなすこともできる。

(7) 接合資料〔第5～6図・図版18～19〕

明確な剝離面を介して接合関係にある資料は僅か4例を数えるのみである。しかしながら、4例とも剥片素材石核と剥片の接合資料であること、石材消費の最終段階の様相を示していることなど、いくつかの特徴を共有している。石核は剝離の進行に伴い縮小化が著しいか、素材自体が薄手・小形であるために生産性に乏しい。また、石核の変形過程を搔器の製作過程に擬すこともでき、実数は少ないながらもブロック1での石器製作を如実に物語っている。

接合資料No.1 [1731+291]

剥片1731が剥片素材石核291に接合している。剝離経過を見ると、まず石核の表面(ポジティヴ面)上端から剥片を剝離したのち、打面・作業面を交替して裏面から1731を得ている。続いて打撃点を横向方向へ移動し、さらに小形の剥片を剝離しているが、対応する剥片は未接合である。裏面(石核素材の背面)下方からの剝離面はポジティヴ面との切り合いが不明確であるため、石核素材の構成面かは判然としない。石核は継位に折損しているが、この折損面は少なくとも1731の剝離後に形成されたものである。

接合資料No.2 [224+458]

剥片224が薄手の剥片素材石核458に接合している。224の背面末端部には平坦なネガティヴ面が付着しており、背面中央部を横走する稜線とともに剥片を横長にしている。接合状況から剝離経過を追うと、まず石核の表面(ネガティヴ面)側から剥片を得たのち、打面が山形となるように調整を施して224を剝離。その後、224の剝離痕を打面に転じ、石核の裏面(ポジティヴ面)側から最少2枚の剥片を得ているが、石核は折損している。最後の2打は明確な打面調整を施さずに剥片を剝離している。なお、既述したナイフ形石器262もこの接合資料に帰属する可能性が高いが、接合関係は確認できない。

接合資料No 3 [7 + 289 + (105 + 130)]

小形の剥片289・7が石核105+130に接合している。石核素材は薄手の剥片で、まず裏面(ポジティヴ面)を切る折損面を打面として表面側に微細な調整を施したのち、裏面側から7を剥離。次いで剥片7の剥離痕を打面とし、表面から長さ0.8cm・幅1.0cm程度の剥片を得ている。石核の折損により、これが最終剥離となる。手数でいえば僅か3打分で作業が終了している。

接合資料No 4 [292 + (340 + 384) + 305]

小形の剥片292・340+384が剥片素材石核305に接合する。剥片の剥離経過は石核消費の最終段階を示すもので、まず表面右側縁に急斜度の調整を加えたのち、その裏面(ポジティヴ面)側から292ほか1枚の剥片を得ている。292の剥離に際しては、先の調整で生じた稜線上に打撃点を定めている。次いで292とその後続打のネガティヴ面を打面とし、再び表面右側縁へ下端部に急斜度調整を施したのち、表面上端部から340+384を剥離している。石核は340+384の剥離時に継位折損しているが、表面下端部～右側縁にかけての急斜度調整が弧状をなす鋸歯状の刃部を作りだしていることから、石核を転用した搔器ともみなせる接合資料である。石核として記載した321・243の類品として注目できる。

(8) 石器製作技術

ブロック1の剥片・石核を通観していえるのは、いずれも石材消費の最終段階の様相を表していることである。まずサスカイトについて述べるが、石核は僅か3点に限られている。うち1点は接合資料No 2に含まれており、多少なりとも剥離経過の一端を示している。前述のように、No 2では作業面での剥離に先立つ打面調整の介在が明らかであり、石核の素材となった剥片の構成面（この場合は平滑なネガティヴ面）の取り込みが配慮されている。残余の2点は接合資料ではないが、やはり剥片を素材とした石核であって、ともにポジティヴ面での剥離を実施している。特に石核251は打面調整の痕跡をとどめ、折損してはいるが幅3.8cm以上、長さ1.4cm程度の作業面を残している。こうした石核に対応し得る剥片としては263・37・269などが挙げられよう。ただ、石核素材剥片に比されるやや大形・厚手の剥片が皆無であり、その生産は地点外でおこなわれたと考えるほかない。サスカイトのナイフ形石器は4点とも背面末端側に石核素材面を付着させた剥片を用いており、先に述べた石核の特徴とともに整合的である。

チャートを用いた剥離作業においても、剥片を石核素材に用いている。接合資料No 1、No 3、No 4はその好例であろう。とはいえる用意される剥片は小形であり、十分な厚みをもたない場合もある。その一方で、石核素材の裏面(ポジティヴ面)から薄手の剥片を剥離し、次いでそのネガティヴ面を打面に転じて急斜度の調整を施すという特徴をもつ。石核の裏面から最初に得た剥片は7(接合資料No 3)のように、背面側のほぼ全面がポジティヴ面からなる。また、ポジティヴ面での剥離に先んじて表面に急斜度の調整を施した例(接合資料No 4)もあり、そのような場合には打面が多剥離面からなる小形の剥片が得られている(剥片292)。接合資料ではないが、剥片248もこれに類するものと考えられる。一方、接合資料No 1に帰属する剥片1731は表面での急斜度調整で剥離されており、接合状況からは打撃点を横位に細かく振幅させる一連の調整過程で生じたものといえる。

このように、裏面(ポジティヴ面)での剥離→表面での急斜度調整という剥離経過が認められ、両者が反復的な関係にあったと推論するならば、接合資料中には含まれないチャートの石核・剥片も一部でこれにかかるるものと考えられる。最終剥離面が裏面にあるかは単に残り方の問題であるらしく、表裏にわたる平坦状の剥離と急斜度調整とが固定的な位置関係にある点を評価したい。この点では先に石核として記載した321・142・243も同様の特徴を保持しており、接合資料中の石核と特に区別する必然性は

ない。

ただ問題なのは、このチャートに特有の変形過程が剝離技術の一端を示しているのか、それともツール(特に搔器)の製作過程なのかであろう。現状ではいずれとも決めかねるが、ポジティブ面から剝離される剝片が何らかのツールに供せられていた可能性はある。厳密にはポジティブ面からは判然としないものの、例えばナイフ形石器とされた152・223の背面にはほぼ平坦な剝離面が残存している。その一方で、残余のナイフ形石器の製作にはおそらく関与していない点にも言及しておかねばならない。それらナイフ形石器はいずれも母岩別分類で黒色チャートに属し、152・223(緑色チャート)とは明らかに母岩を異にしている。黒色チャート製のナイフ形石器に対応し得るのは、むしろ同様の石質・色調を示す石核108であろう。これと142を除く残余の石核はおもに青灰色~緑色の母岩を用いており、黒色チャートのナイフ形石器と結びつく要素が少ない。従って、現状では108以外の石核がツール素材の生産に関与する可能性を認めつつも、それ自体が例えば搔器などのツールでもあったと解釈しておきたい。ちなみに黒色チャート(母岩1)の微細剝離痕ある剝片・剝片には縦長状の剝片(98・5・212)があり、類似母岩の石核108に対応し得る。これはこれで緑色チャートとは異なる変形過程を示しているのであろう。

註

1) ナイフ形石器の素材の用い方は、野口 淳の方法に準拠した(野口 1997)。また、ナイフ形石器の左刃・右刃は、安蒜政雄の方法を参考に認定した(安蒜 1973)。

野口 淳 1997 「ナイフ形石器」 『石器文化研究』 5 石器文化研究会

安蒜政雄 1973 「関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相」 『駿台史学』 32 駿台史学会

第3節 ブロック2

1 石器分布

自然河川1と呼ぶ開析谷の北肩から約30m北側に位置する。形成された場所はごく僅かに北から南へと傾斜するがほぼ平坦な地形である。標高は73.6~73.8mを測る。ブロック1同様、現耕作土直下に広がり、中世の遺構面である黄色シルト~粘土層から検出された。ブロックの上部は削平を受けている可能性が高い。中世遺構面の精査中に僅かに15点を確認したにとどまる。石器は東西10.8m×南北12mの範囲から散漫に出土した。使用石材にはサスカイトとチャートがみられる。出土位置が記録されていない8点はX=-128.220以南で、Y=-43.420~430の範囲から出土している。接合資料はチャート1例(2点)が確認できた。接合率は13%である。

2 出土石器〔第7図・図版22〕

ブロック2では15点の石器が出土し、石錐1点・微細剥離痕ある剝片1点・石核2点・剝片11点で構成される。石材組成はサスカイト10点・チャート5点である。チャートは母岩17~19に区分し、母岩17は剝片3点、母岩18は微細剥離痕ある剝片1点、母岩19は石錐1点で構成される。

481はやや急角度の調整剥離を先端部の棱線上に施し錐部を作出する。486は剝片素材石核で、打面と作業面を固定し山形に打面調整を施しつつ剥離作業を実施している。475は剝片素材石核で、腹面側に作業面を設定し打面調整を施さずに剝片を剥離しており、背面末端側には部分的に2次加工が認められる。

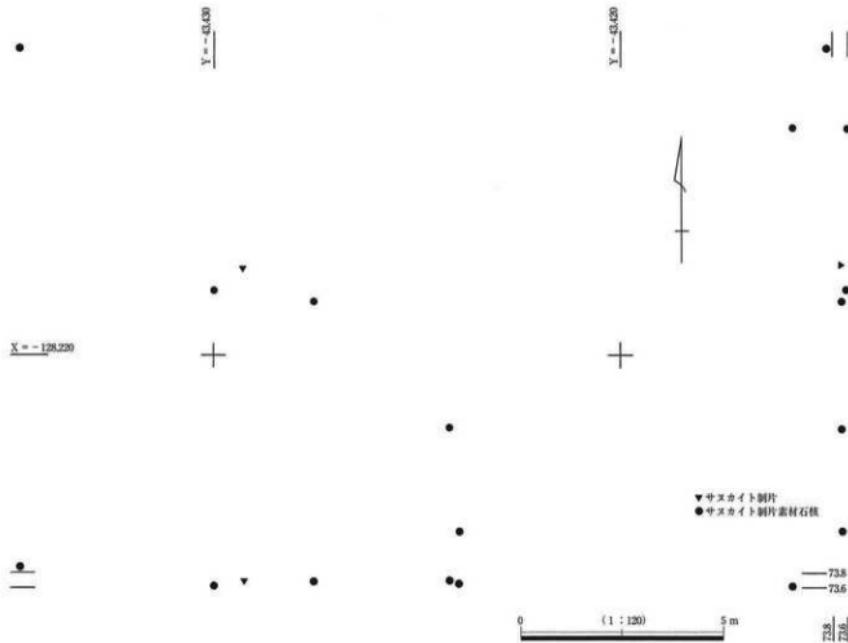


図24 ブロック2 石器平面・垂直分布図

第4節 ブロック3

1 石器分布

調査地の西側、自然河川2と呼ぶ開析谷の東肩に広がる。形成された場所は北から南、東から西に緩やかに傾斜する南向きの緩斜面である。標高は73.6~74.3mを測る。中世包含層の下に広がり、中世の遺構面である黄色シルト~粘土層から検出された。このような状況下で検出されたため、ブロックの上部は削平を受けている可能性がある。

平面的には東西約19.4m×南北約14.6mの範囲に、北西から南東にかけて帯状に分布している。

なお、平面分布の中央北側に空白域がみられるが、これは平成6年度に行われた試掘調査によるもので、本来はここにも石材が存在していたものと考えられる。垂直分布は地形の傾斜に沿った形で投影されるが、石器の出土状況は上下幅が少なく、幅15cm前後に収まっている。

石器は524点(出土位置を記録した資料は305点、土壤水洗資料が214点、ほか5点)出土した。使用された主要な石材はサスカイトとチャートで、サスカイト484点(1434.4g)、チャート32点(90.2g)を確認した。出土した代表的な定型石器にはナイフ形石器20点、搔器2点、削器7点、石錐1点などがある。搔・削器類の出土点数が多いことや背部整形剝片の存在が特徴的である。

器種別の分布をみると、ナイフ形石器は大きくみて、ブロックの中でも北西部分と南東部分の2つまとまりに分布している。搔・削器は南東部分のナイフ形石器分布域を取り巻くように分布する。石核は外縁部分に多くみられる。

接合資料はサスカイト2例(4点)がある。接合率は0.8%である。

重量別分布では、南東部分(下手)に重量物が比較的集中し、軽量物は北西側(上手)に多くみられる。調査時には地形傾斜に沿った帯状の分布状況を示すことから、二次的な移動の可能性も推定していたが、軽量物が上手に位置する重量別分布の状況を考慮すれば、ほぼ原位置を保ったものとみなすことが可能である。

石器以外に、このブロックからは礫38点が出土している。これらは散漫な分布を示し、礫群のような集中部を調査時には捉えることができなかった。しかし、平面分布を検討すると、南西部には比較的まとまった箇所がみられる。

ブロックの東端から出土した礫1点(花崗岩)のみに被熱痕跡が認められたが、残りのものには変化がみられない。なお、接合関係は確認できなかった。石材は多い順に砂質ホルンフェルス(21点)、泥質ホルンフェルス(6点)、チャート質ホルンフェルス(3点)、石英斑岩(2点)、花崗岩(2点)、頁岩、砂岩、チャート、ホルンフェルス(各1点)となっている。このうち法量が確認できた36点の平均法量は長さ10.6cm・幅7.2cm・厚さ4.6cm・重量577.7gである。また、配石とみなせるような大形の礫5点(3kg以上2点、2kg以上1点、1kg以上2点)が存在する。これらの礫は遺跡の南側を流れる勝尾寺川の河床で採取される礫種と同じであるため、意図して搬入されたものと想定される。

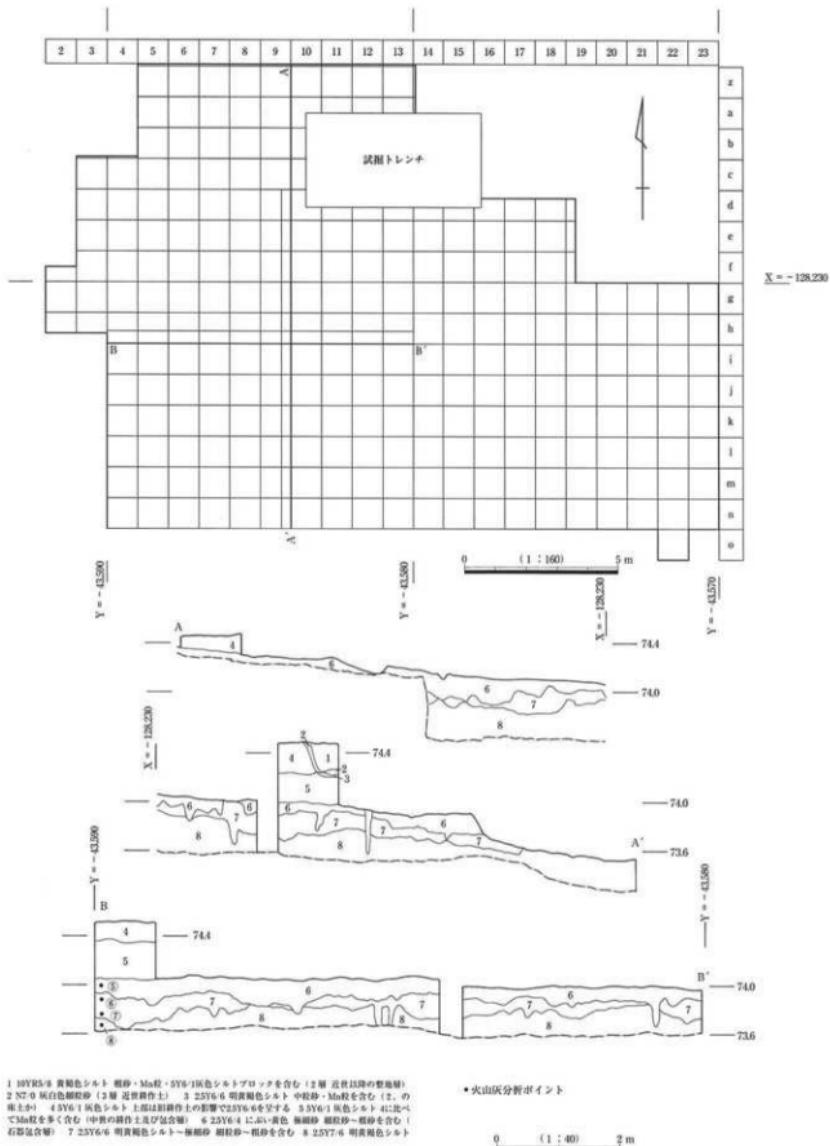


図25 ブロック3 平面・断面図

2 石器組成と石材組成

ブロック3では524点の石器が出土し、ナイフ形石器20点・搔器2点・削器7点・石錐1点・2次加工ある剝片24点・微細剝離痕ある剝片12点・剝片246点・背部整形剝片29点・碎片166点・石核17点で構成される。定型石器はナイフ形石器・搔器・削器・石錐で構成され、搔・削器が一定量組成するのが特徴である。

石材別における石器組成は表11のとおりである。サスカイトはナイフ形石器19点・背部整形剝片29点・搔器2点・削器6点・石錐1点・2次加工ある剝片22点・微細剝離痕ある剝片12点・剝片237点・碎片140点・石核16点であり、定型石器の大半はサスカイトで構成される。チャートは削器1点・2次加工ある剝片2点・剝片8点・碎片20点・石核1点であり、チャート製のナイフ形石器は皆無である。安山岩はナイフ形石器1点・剝片1点・碎片2点で構成される。

石材組成はサスカイト484点・チャート32点・安山岩4点・不明4点であり、サスカイトが大半を占める。チャートは色調別にみてみると、緑色12点・黒色8点・赤色3点・色調不明9点であり、大半が黒色・緑色で構成される。

母岩分類はチャートのみで実施し、32点のうち15点を母岩20・21、母岩60～66に区分し、点数はそれぞれ3点、12点である。母岩20・21は黒色チャート、母岩60～66は緑色チャートである。母岩別における石器組成は表12のとおりである。

表11 ブロック3 石材別石器組成

石材\器種	ナイフ形石器	背部整形剝片	角錐状石器	円形搔器	搔器	削器	石錐	櫛形石器	ノッチ敲石	2次加工ある剝片	微細剝離痕ある剝片	剝片	碎片	石核	合計
サスカイト	19	29			2	6	1			22	12	237	140	16	484
チャート					1					2		8	20	1	32
安山岩	1											1	2		4
不明												4			4
合計	20	29			2	7	1			24	12	246	166	17	524

表12 ブロック3 母岩別石器組成

母岩	図版	写真	点数	器種								遺物番号
				Kn	Sc	Dr	No	RF	UF	Fl	Cp	
20	第10図	図版25	2	1					1			566・578
21	第11図	図版26	1					1				551
60	第13・16図	図版31・35	3						2		1	699・706・740
61	第11図	図版28	1				1					503
62			1						1			880
63			1						1			748
64	第13図	図版29	1						1			786
65			1						1			571
66			1									762



図26 ブロック3 石器平面・垂直分布図



図27 ブロック3 等距離円図 ($r = 60cm$)

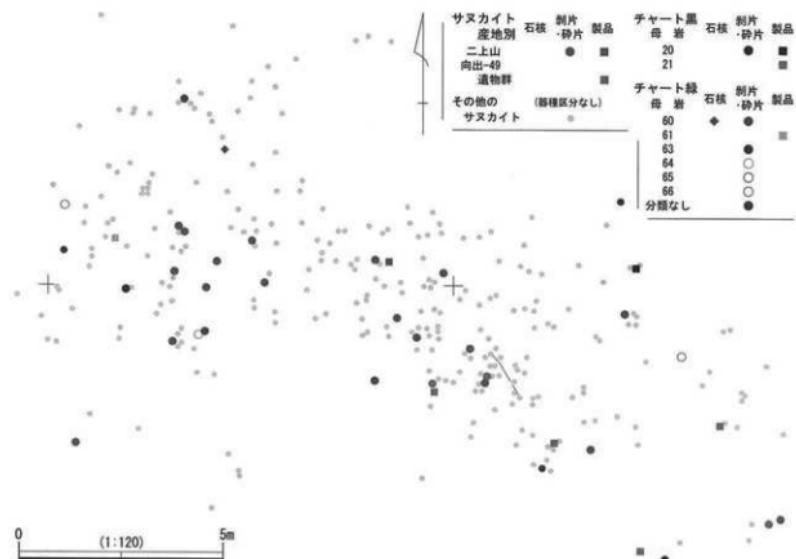


図28 ブロック3 チャート母岩別・サスカイト産地別平面分布図

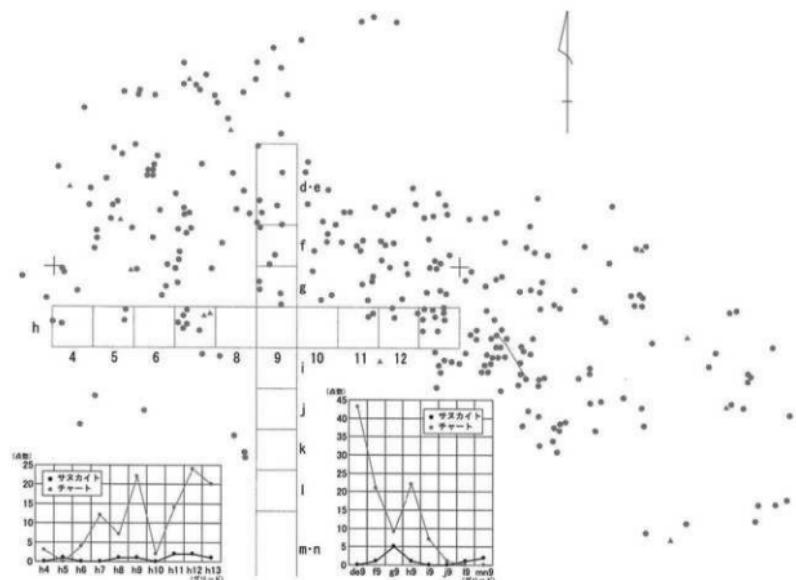


図29 ブロック3 水洗選別資料回収点数

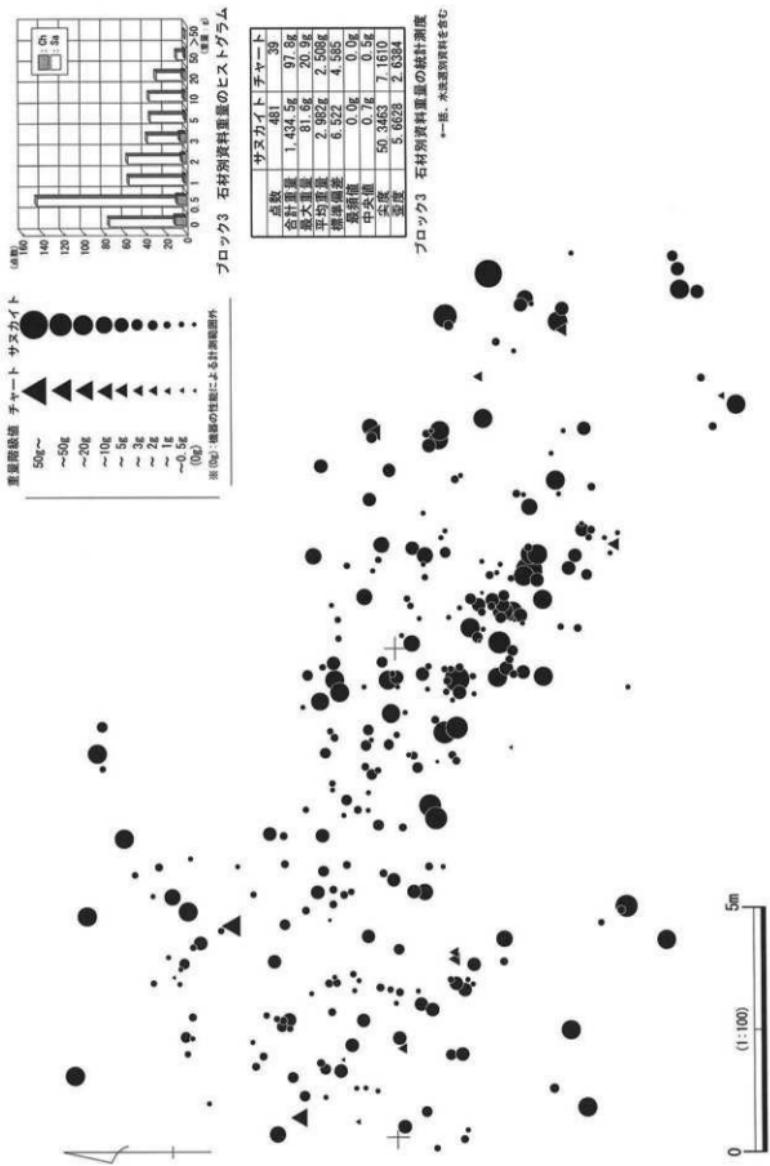
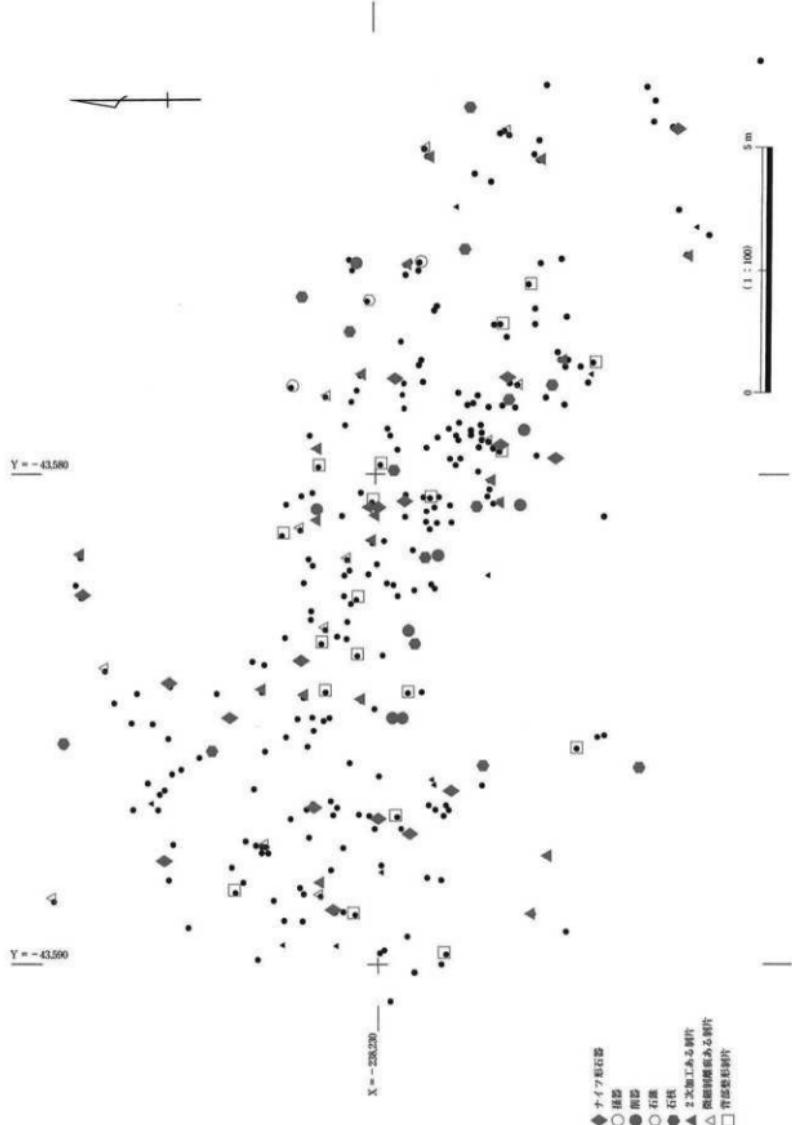


図30 ブロック3 重量別平面分布図



第31図 ブロック3 器種別平面分布図

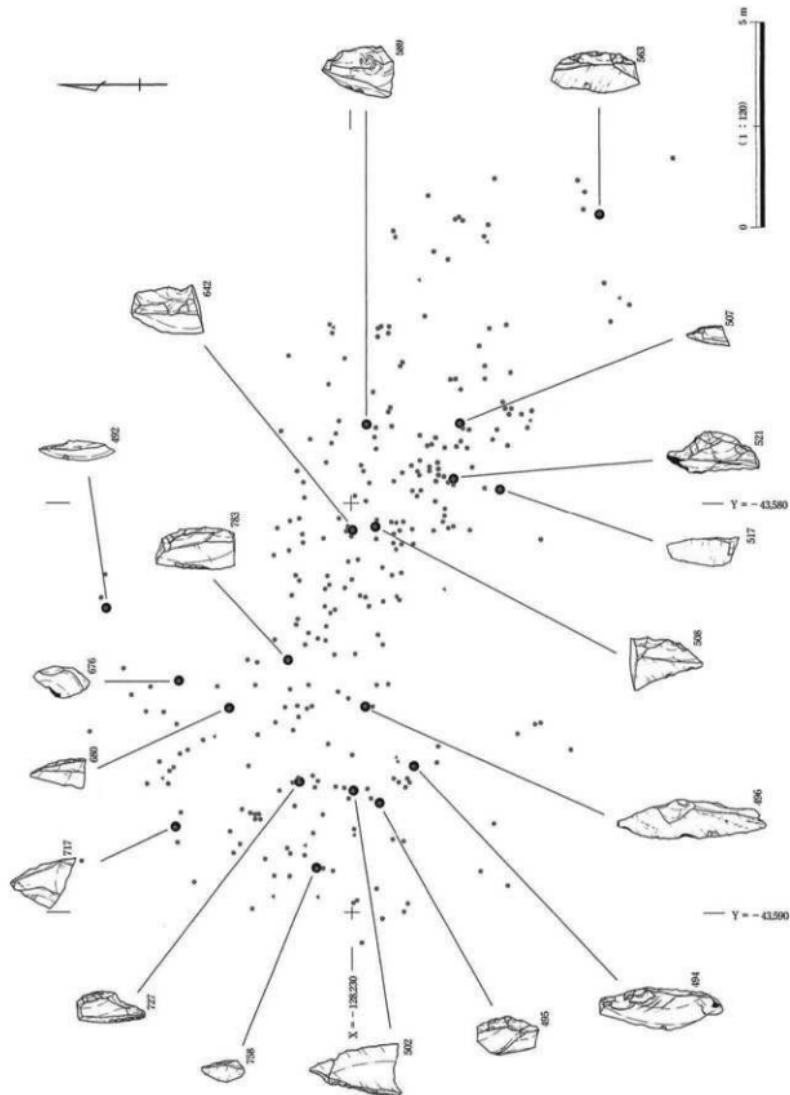


図32 ブロック3 ナイフ形石器平面分布図

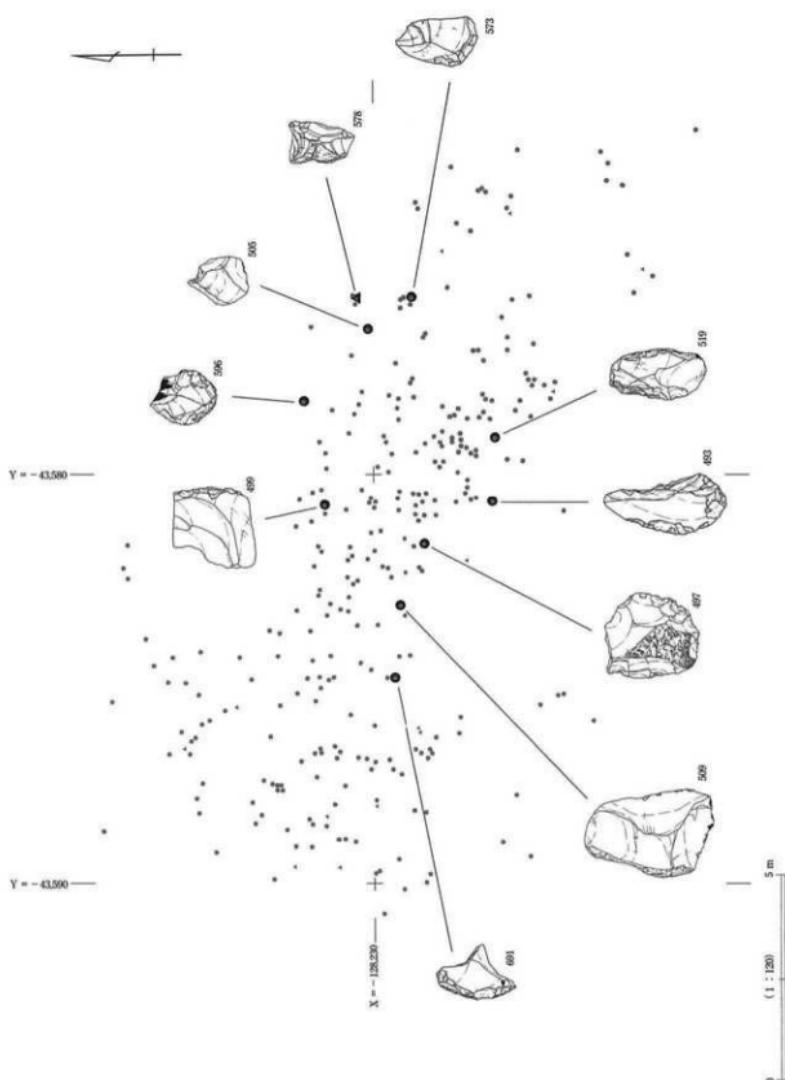


図33 ブロック3 削器・搔器・石錐平面分布図

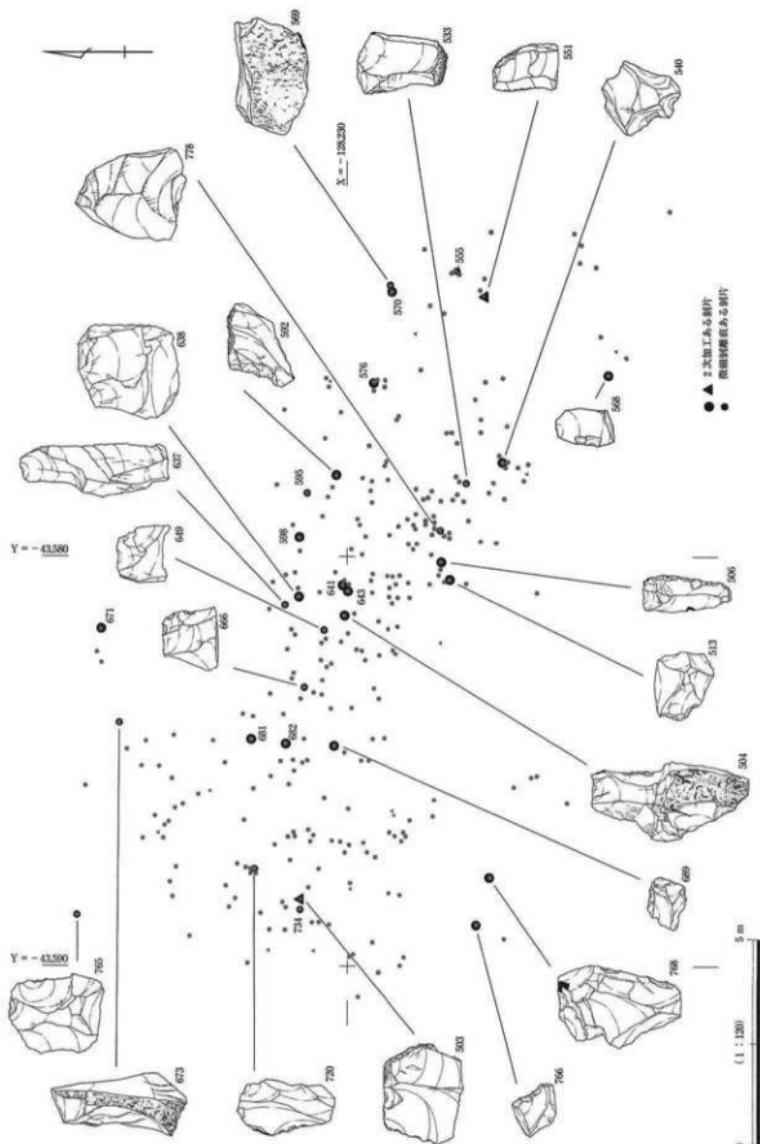


図34 ブロック3 2次加工ある剥片・微細制離痕ある剥片平面分布図

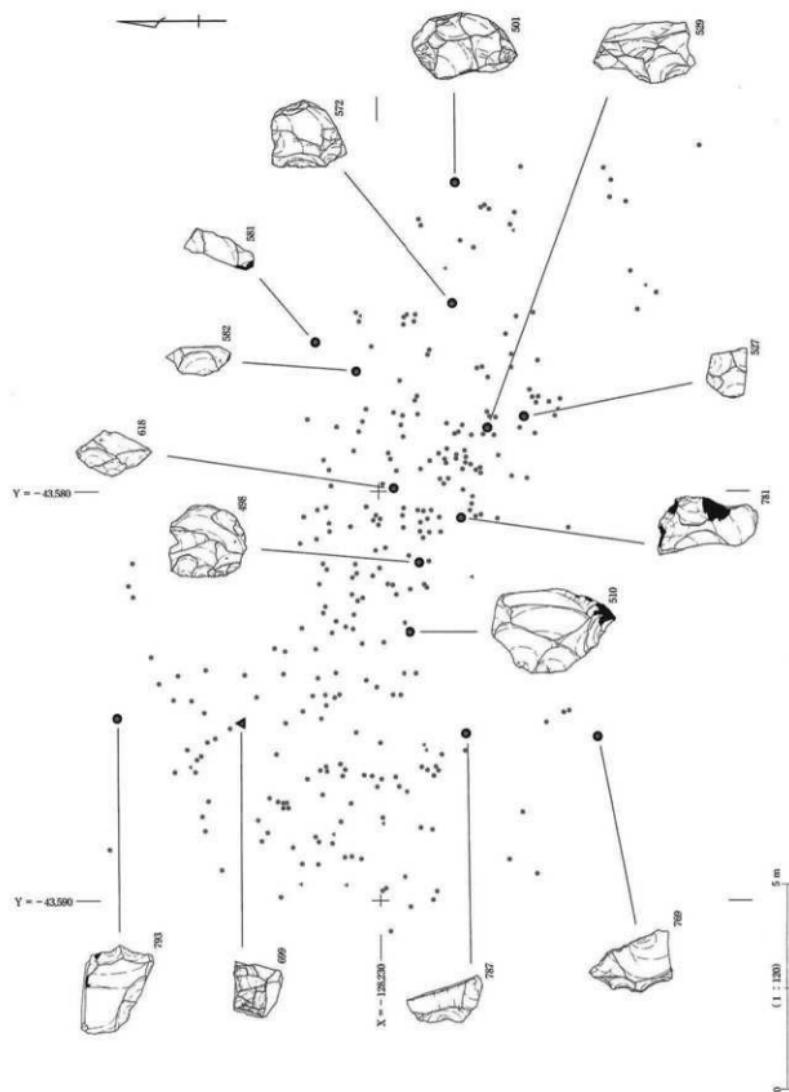


図35 ブロック3 石核平面分布図

3 出土石器

(1) ナイフ形石器〔第8図・図版23~24〕

ナイフ形石器は20点出土し、19点がサスカイト製である。完形品は1点のみで、915・642・508・521には素材剥片の打面の一部が残存する。素材は全て剥片素材であり、そのうち平坦面を有する剥片が17点認められる。素材の用い方は横位に利用する例が顕著であるが、正位(589・711)、逆位(517・680)、斜位(727・494・496)など多様である(図36)。刃部の設定位置は素材剥片の末端縁に設定するもの10点、側縁に設定するもの4点、不明6点である。加工は1側縁加工14点、2側縁加工6点であり、裏面から表面に調整剝離を施すものを主体とするが、内向調整剝離(676)、対向調整剝離(492・517・494)も認められる。大きさは、最大厚が0.14~1.01cmに分布し、小形で薄手のもの(492・915・507)と大形ないし厚手のもの(642・783・563・494・496)に区分できる。また、背部整形剥片の特徴から、大形で厚手の平坦面を有する剥片素材のナイフ形石器は、ブロック内で製作されていた可能性が高いと考えられる。

492・507・642・783・563・521は平坦面を有する剥片を横位に利用し末端縁に刃部を設定する。507・642・783・563は1側縁加工で、裏面から表面に調整剝離を施す。492は対向調整剝離により背部整形を施し、刃部側の下半部にも裏面からの調整剝離が認められる。783・521では刃部側にも裏面から表面に調整剝離を部分的に施す。642・783は背面が素材剥片の剝離方向とほぼ一致する複数枚の先行剝離面とポジティブ面で構成される。915は打面側の上半部が表面から裏面に、下半部が裏面から表面に調整剝離を施す。

727・494・496は平坦面を有する剥片を斜位に利用し末端縁に刃部を設定する。727は刃部側の下半部にも裏面側からの調整剝離が認められる。494・496は裏面から表面に背部を整形した後に、背部を打面として表面に面的な剝離による調整剝離を施す。刃部側にある剝離痕は偶発的に形成された可能性が高い。496は石材の風化が顕著であり、サスカイトの産地が不明確である。

517は平坦面を有する剥片を逆位に利用し、素材を斜めに切りとるように対向調整剝離を施す。680は素材剥片を逆位に利用し側縁に刃部を設定する。背面は素材剥片の剝離方向と一致する2枚の先行剝離面で構成され、素材を斜めに切りとるよう調整剝離を施す。589・711は素材剥片を正位に利用し、側縁に刃部を設定する。調整剝離は裏面から表面にかけて部分的に施す。589は石核素材剥片の剝離に伴う打撃痕が認められ、背面末端側が板状剥片の側縁側ないし末端側からの先行剝離面で構成される。

676は素材剥片を横位に利用し側縁に刃部を設定する。他に比べ器厚が極端に薄い。2側縁加工で、表面から裏面に調整剝離を施す。

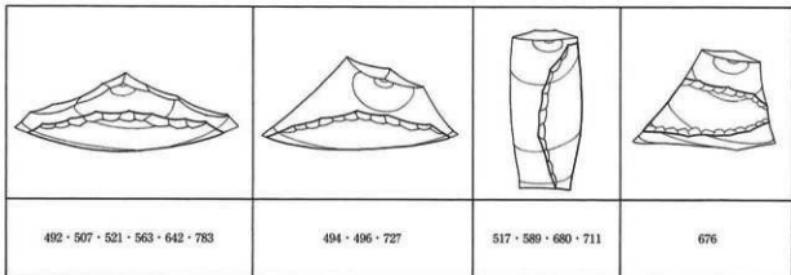


図36 ナイフ形石器模式図

(2) 石錐〔第9図・図版24〕

石錐は1点出土し、サヌカイトである。505は剥片を素材とし、素材剥片の側縁と末端縁の交差する部位に錐部を設定する。錐部は素材剥片の末端縁におけるノッチ状の加工のみで作出する。

(3) 挖器〔第9図・図版24~25〕

挖器は2点出土し、全てサヌカイトである。596・573は剥片を素材とし、素材剥片の末端側に刃部を作出する。2次加工は全て裏面から表面に施し、刃部作出を意図したものと想定される。596は打面が残存しており、単剝離面打面で打面形状はやや彎曲しつつも平坦である。573は腹面左側縁側が折損しており、折損面が2次加工を切っていると考えられる。刃角は596が67度、573が73度である。

(4) 削器〔第9図・図版25~26〕

削器は7点出土した。サヌカイト製が6点、チャート製が1点である。519を除いて全て剥片を素材とする。519は剥片素材石核を転用し、裏面から表面に急角度の調整剝離を施すことにより刃部を作出する。493は背面にポジティブ面を大きく取り込んだ剥片を素材とし、裏面から表面への急角度の調整剝離により素材剥片の打面部を除去している。素材剥片の末端側・側縁側にも両面に平坦な調整剝離が認められ、刃部位置の断定は困難である。499・691は裏面から表面にやや急角度の調整剝離を施し、素材剥片の側縁側に弧状の刃部を作出する。509は素材剥片の側縁側及び末端側に直線状の刃部を設定し、裏面側には面的な調整剝離が認められる。

(5) 2次加工ある剥片〔第10~11図・図版27~28〕

2次加工ある剥片は24点出土した。サヌカイト製が22点、チャート製は2点である。24点のうち第10・11図において17点を図示した(497・578・796・513・568・689・592・540・504・638・840・506・766・768・864・551・503)。

497は裏面側に面的な剝離痕が認められ、素材剥片の剝離に伴うものである可能性が高く、石核転用品とも考えられる。背面右側縁では腹面から背面に2次加工を連続的に施し、弧状の縁辺を形成する。背面左側縁における2次加工は部分的であり、腹面から背面に急角度の2次加工を施し、打面を除去している。

578は素材剥片の背面左側縁に腹面側から急角度の2次加工を連続的に施す。チャート製。

796は素材剥片の打面側に位置する折損面に腹面側からの2次加工が認められる。

504は単剝離面打面の剥片を素材とし、両側縁には背面から腹面に2次加工を部分的に施し、背面右側縁では背面側にも2次加工が部分的に認められる。

506は単剝離面打面の剥片を素材とし、背面右側縁には裏面から表面に2次加工を連続的に施す。

551は背面が素材剥片の剝離方向と一致する複数の先行剝離面で構成され、腹面から背面にやや急角度の2次加工を連続的に施し、打面を除去している。チャート製。

503は自然面打面の剥片を素材とし、背面右側縁には腹面側からの2次加工が認められる。

(6) 微細剝離痕ある剥片〔第11図・図版28~29〕

微細剝離痕ある剥片は12点出土した。全てサヌカイト製である。12点のうち第11図において8点を図示した(533・666・649・720・765・673・637・778)。

666は単剝離面打面の剥片を素材とし、背面側右側縁に微細剝離痕が部分的に認められる。

765・637は自然面打面で側面に自然面が付着する剥片を素材とする。微細剝離痕は背面右側縁において部分的に認められる。

(7) 刺片 [第12~14図・図版30~33]

246点を数える。サヌカイトが237点、安山岩が1点、チャートが8点となり、サヌカイトが主要石材である。ナイフ形石器の素材となりうる刺片としては大形・厚手の刺片から剥離した横長~幅広の刺片があり、翼状刺片も2点含まれている。これらはサヌカイトを用いた横刺ぎナイフ形石器の製作に伴い生じたものとみられ、背部整形刺片(後述)の存在からも当該器種の活発な製作を裏付けている。

792~916(第12~13図)は、石核素材面を背面側に取り込んだ刺片。715・723・742・530・698・841・489・543・779は山形をなす多刺離面打面をもち、このうち841・489は翼状刺片と呼びうる。792・721・842・661・704は調整打面とはいい難いが、2刺離面からなる打面の稜線上か、それに近接する平坦面上に打撃点を定めている。他方、平坦な刺離面・自然面を打面とし、石核素材面(ポジティブ面か、それに類する大刺離面)には沿わせて剥離した貝殻状の刺片も認められる(785・556・552・556)。なお、785・552はポジティブ面を背面側末端部にとどめている。

786・740はチャートの刺片。786は剥離時に垂直割れを起こしており、末端側も折損している。740は背面末端部にポジティブ面を付着させており、これを切る先行刺離面も残る。

569・780・562・679はブロック3で出土したサヌカイト刺片のなかでも大形で、特に780は打面幅・厚ともに大きい。569は垂直割れで半折した刺片の打面部で、爪形のクラックをとどめた自然面を打面としている。836・632は板状の石核素材の小口側から剥離した縦長の刺片で、836は両設打面を持つ。632は背面右側縁にポジティブ面をとどめている。797・672・749は円磨した自然面を背面側にとり込んでおり、自然面には細かい弧状クラックが顕著である。

(8) 背部整形刺片 [図37・図版37]

29点を数える。全てサヌカイト製である。一般に「プランティング・チップ」と呼ばれている刺片で、単刺離面打面や点状打面をもち、末端部に石器の素材面とみられる平坦な刺離面を帯状に取り込んだ幅広~横長状の小型刺片である。腹面側は打面~末端部にかけて強く屈曲した例が多い。石器組成の内容からみても、これらの刺片がナイフ形石器の製作残滓であるのはほぼ疑いない。最大長の計測値はナイフ形石器の厚さと一致するか、それをやや上回っている。

883はナイフ形石器の先端部を取り込んだもの。残余の背部整形刺片の打面を見ると、打面縁の形状がナイフ形石器の鋸歯状背部と一致するもの(750・660・738・621・640)や、僅かに残った打面が飛び石状に並んでいるもの(536・832・854・738・865)、点状あるいはそれに類するもの(927・667・912・634)などがある。また、772は素材の表面に走る稜線をとり込んでいるため、末端部の縁辺が「く」の字形に屈曲している。

(9) 石核 [第15~16図・図版33~36]

17点を数える。チャート製の1例(699)を除けば全てサヌカイト製で、刺片剥離時の折損例は5例認められる。ブロック3の石核は、剥離が可能な容積の著しい縮小化によって特徴づけられている。サヌカイトの石核は基本的に刺片素材であったようで、おもにポジティブ面を取り込むように刺片を剥離しているが、その残存範囲は狭い。典型的な翼状刺片石核は皆無である。なお、用いた素材が薄く、「作業面」の範囲が狭い例(781など)は石核とは認め難い感も受けるが、本稿では残余の石核と一括して記載している。

781は剥離時に垂直割れを起こした刺片を用いた石核。裏面(ポジティブ面)にはツイン・バルブと明晰なバルバースカーが残り、同面から背面がポジティブ面からなる刺片を1枚だけ剥離している。

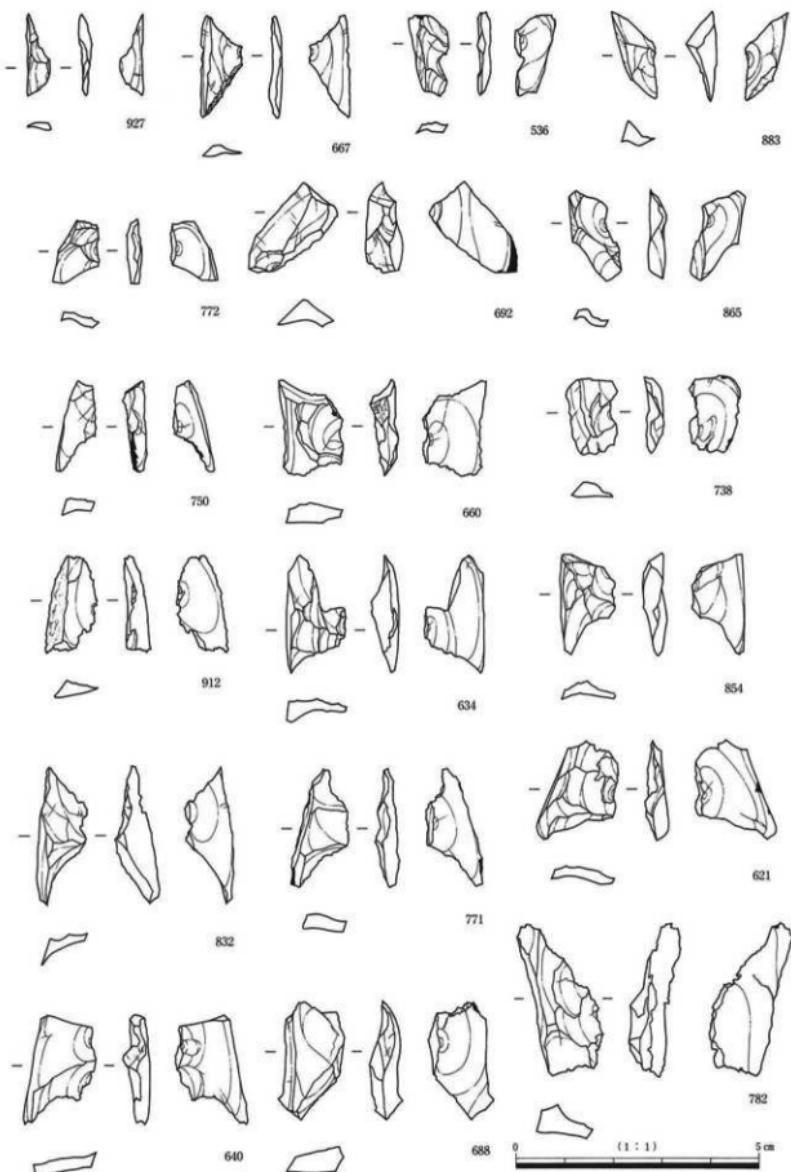


図37 ブロック3 出土背部整形剥片

818は素材のポジティブ面を作業面とし、打面調整を施さずに剥片を剥離している。裏面右側縁に調整剝離を施して搔器に転用している。830は背面側に自然面を取り込んだ剥片を素材とし、裏面に主要な作業面を設けている。剥離の進行に伴い、素材のポジティブ面は消失している可能性が高い。769は素材の両面で剥片剝離をおこなっているが、切り合い上は裏面側の剝離面が新しい。側面図に示した剝離面が最も新しく、裏面右側縁からの剝離面を切っている。裏面側のポジティブ面(底面)は既に失われたものとみられる。1端を折損している。

793は素材の打面側に作業面を設け、表面→裏面(ポジティブ面)側という順序で小形の剥片を剥離している。素材の側縁～末端部にも剝離痕が残る。1端を折損している。787は背面に平滑な剝離面をとどめた素材を用い、両面から剥片を剥離している。581は石核の破片。裏面側にはポジティブ面(底面)を切る剝離面が残っており、本来の作業面であった可能性が高い。背面側左側縁にも剝離痕が認められる。510は背面に先行剝離面を広くとどめた素材を用い、裏面(ポジティブ面)側をおもな作業面とする。表面右側縁の剝離痕は裏面の剝離痕に切られており、打面調整とみられる。572は作業面を素材の背面側に設けた石核。表面にポジティブ面を残しているが、素材自体は垂直割れを起こしていた可能性が高い。表面右側縁に打面調整を施したのち、裏面側から剥片を剥離している。

498は素材の腹面(裏面)側に平坦な剝離痕をとどめ、表面下端部にも急斜度調整を施している。後者は弧状の凸刃をなし、円形搔器の刃部を思わせる。刃角は約95度を測る。上端部を折損している。

618はおもに表面右側縁から剥片を剥離したのち、裏面左側縁から小形の剥片を3枚程度剥離している。裏面には平滑な剝離面も残るが、ポジティブ面かは判然としない。上端側を折損している。582は剥片素材石核の破損例。裏面右側縁に底面(ポジティブ面)を残している。

699は剝離の進行に伴い「サイコロ状」に変形している。b・d面のいずれかが最古の剝離面で、打面として機能している。打撃点をとどめた剝離痕はおもにa・c面に残っており、打面転位以前の剝離面を切っている。自然面は認められない。チャート製。

501はa面→d面へと作業面を順次転位している。剝離作業は自然面を除去した程度であり、f面とa面下端部には激しい敲打痕が残る。e面(自然面)にも弧状クラックをとどめ、敲石への転用例とみられる。527は裏面(ポジティブ面)から小形の剥片を3枚剝離している。表面下端には折損面を残しているが、素材剝離時のものは明らかでない。

(10) 接合資料〔第16図・図版36〕

接合資料No.1 [529+607]

剝離面を介した接合資料は僅か1例にとどまる。剥片素材石核529と剥片607からなる接合資料No.1がそれである。表面から剥片607ほかを剝離したのち、打面と作業面を入れ替えて裏面側から剥片を連続剝離している。607の剝離は打面調整を意図したものと考えられ、続く裏面での剝離によって少なくとも2枚の剥片を得ている。その後本来の石核側面(上端・下端部)に打面を転じ、との打面・作業面間の稜線を狙った縱方向の剥片剝離に移行している。

4 石器製作技術

ブロック3での石器製作の特徴は、特徴的な製作残滓(背部整形剥片)に代表されるナイフ形石器の製作である。可能性あるものを含めての点数は29点と、剥片・碎片数(412点)の7%に過ぎないが、これらは純粹に認定上の問題を反映した結果であって、実際の点数は倍加するものと考えるべきである。さて、背部整形剥片の最大長・最大幅の代表値をとると、前者は平均値0.85cm、最大値1.50cm、最小値0.50

cm、後者はそれぞれ1.99cm、3.90cm、1.40cmとなった。このときに重要なのは長さの最大値であろう。ブロック3出土のナイフ形石器のうち、最も厚いのは959(1.01cm)である。背部整形剝片29点のうち、最大長が1.00cmを超えるのは10例を数えるが、これに匹敵する厚みをもったナイフ形石器の不在は、それらの地点外への搬出を思わせる。ブロック内に残ったナイフ形石器の多くが折損品であることを考えれば、こうした推測もある程度なら首肯できる。ただし、それらが製作途上品であるのか、使用停止による廃棄品かは判然としない。また、ナイフ形石器は大形・小形の2種類に分類できるが、先の背部整形剝片は大きく、厚手の方によく対応している。一方、小形のナイフ形石器758は、調整時のポジティブ面をとどめていることから背部整形剝片とも見なし得る。その厚さは僅か0.4cmにすぎず、ナイフ形石器492・507の類例から生じた可能性がある。小形のナイフ形石器から生じた背部整形剝片の認定には困難が伴うが、この1例は大小とり混ぜたナイフ形石器をブロック内で製作していた事実を示しているのであろう。

石核素材となり得る剝片には780・562などがあるが、これらを遺跡内で生産したかは明らかでない。一方、ナイフ形石器の素材を剝離する過程(第2工程相当)の資料には剝片素材石核とそれらから剝離した剝片とが挙げられる。典型例としては翼状剝片があるが、これは2例を数えるのみであり、残余は剝片素材石核から並列的に剝離した剝片からなる。また、637・673(微細剝離痕ある剝片)や836などに見られたように、板状の石核素材の小口側から綫長の剝片を剝離する場合もある。但し、これらの剝片に対応する石核はなく、僅かに接合資料No.1の石核529にその可能性を認めるのみである。切り合い関係の検討によれば、石核529では石核素材の平滑面を底面とする剝離作業をおこなっていたが、その後はもとの打面・作業面との間にある稜線を取り込むような綫方向の剝離に移行している。石核側に残った剝離痕は明確な綫長状を呈していないが、石核残量の消費形態がはっきりと変化しているのは事実である。つまり、石核の消費形態は必ずしも固定的ではないといえるが、剝片が横長・幅広となるような剝離状況を選ぶ場合が圧倒的に多い。まれに綫長となりやすい状況を選択することもあるが、そうした状況を連鎖させて結果的に綫長剝片石核を残すほど組織的ではなかったものと考えられる。

チャートを用いた石器製作の内容は剝片・石核の出土数が少ないとても、不明確な部分が多い。資料はサイコロ状の石核699と、8点の剝片に限られる。石核699は打面転位を繰り返して剝片を剝離したもので、少なくともサスカイトを用いた剝片生産とは同一視できない。

まとめると、ブロック3の石器製作はサスカイトを主要石材としたナイフ形石器の素材生産と、背部整形剝片の存在から知られるナイフ形石器の仕上げ作業を主目的としている。ナイフ形石器の調整によって生じる素材の減損を考慮するならば、ブロック3に遭された剝片の多くは小形のナイフ形石器によく対応する。一方、背部整形剝片はおもに大形のナイフ形石器の器厚に一致しており、その調整過程で生じたものといえる。また、大形のナイフ形石器の製作は翼状剝片やその類品など、ある程度の大きさを持つ剝片の搬入によって支えられていた可能性もあり、この点は分けて考える必要がある。

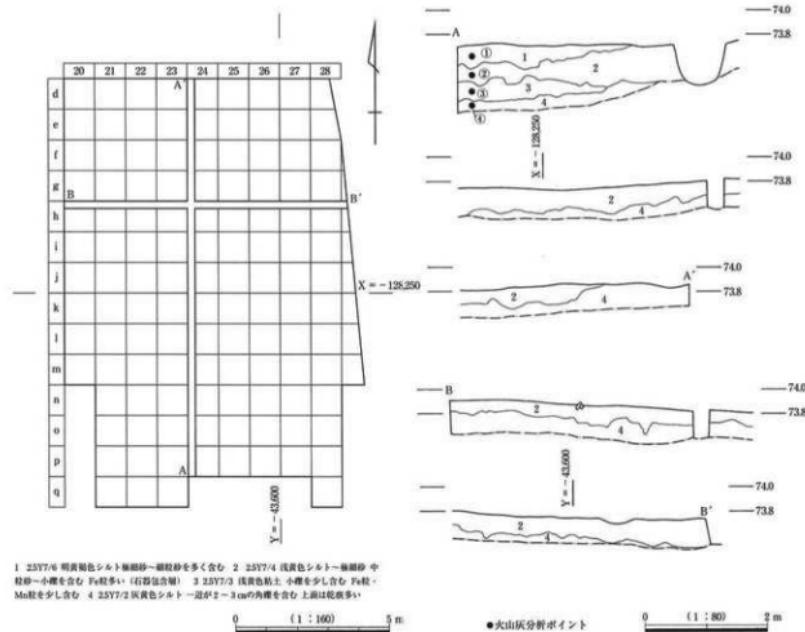
第5節 ブロック4・ブロック5

1 石器分布

ブロック4は自然河川2と呼ぶ開析谷の西肩に広がり、後述する石器ブロック6の東側に位置する。形成された場所は北から南・西から東に緩やかに傾斜する南向きの緩斜面である。標高は73.4~73.8mである。石器は中世の遺構面となる黄色シルト~極細砂層から検出された。平面的には東西約6m×南北約12mの範囲に散漫に分布している。垂直分布は地形の傾斜に沿った形で投影されるが、石器の出土状況は上下幅が少なく、幅15cm前後に収まっている。石器は55点を確認した。主要な石材はサヌカイトとチャートの2種で、サヌカイト31点(144.4g)、チャート23点(69.2g)である。他に稀少石材である頁岩が1点出土している。代表的な定型石器として、ノッチ1点、2次加工ある剝片5点が出土している。

なお、このブロックは平面分布が散漫で、出土層位が隣接する石器ブロック6よりも上位にあることから、調査時にはブロック6から流出したものと認識していた。しかし、整理段階で両者の接合関係が確認されなかつたため、別集中部として報告を行う。

ブロック5は調査地の西側、自然河川2と呼ぶ開析谷の西肩に広がり、石器ブロック6の中心集中部から北側約13mに位置する。形成された場所は北から南・西から東へと緩やかに傾斜する南向きの緩斜面である。標高は74.3~74.5mを測る。石器は現耕作土の下に広がり、中世の遺構面である黄色シルト~極細砂層から検出された。ブロックの南側は後世の棚田造成の際に大きく削られており、その規模は



第38図 ブロック4平面・断面図

明瞭ではない。現状では東西約2m×南北約1.3mの範囲にサスカイトやチャート、石英・水晶がまとまってみられ、やや離れた部分にもサスカイトが点在する。土壤水洗分を含め石器は63点(出土位置を記録した資料16点、土壤水洗資料が47点)出土した。垂直分布は地形の傾斜に沿った形で投影されるが、石器の出土状況は上下幅が少なく、幅10cm前後に取まっている。土壤水洗では他のブロックとは異なり、石英・水晶の碎片が多く確認できた。これらは特にW18～X18の区画で多くみられる。

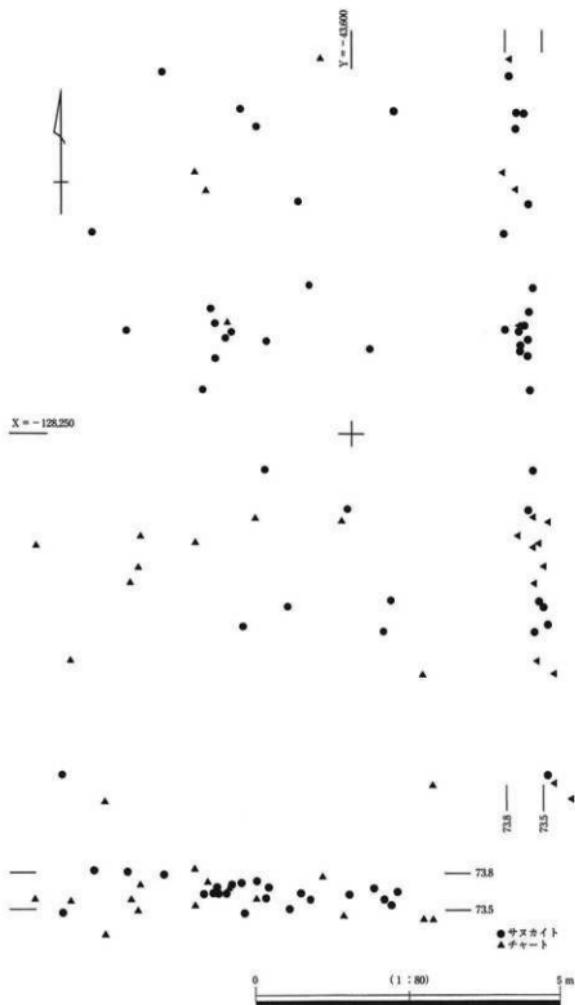


図39 ブロック4 石器平面・垂直分布図

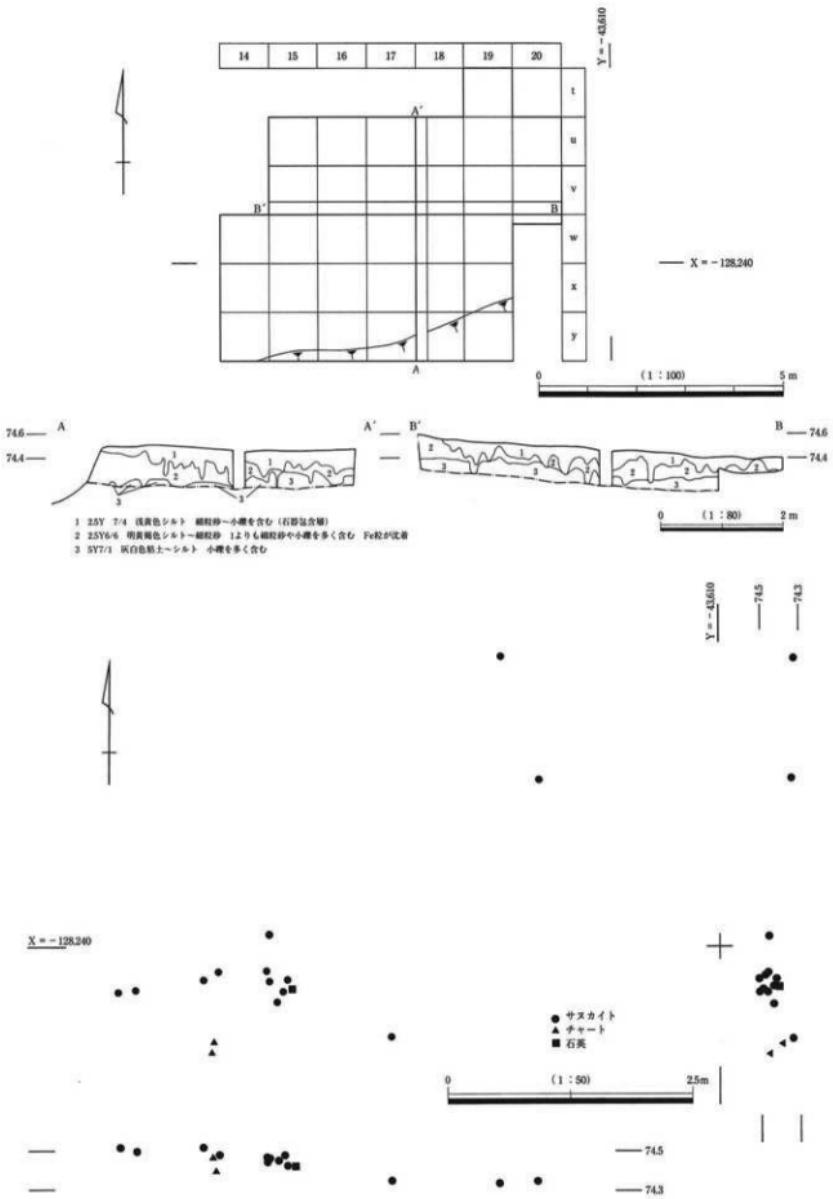


図40 ブロック5 平面・断面図(上)、石器平面・垂直分布図(下)

17mの範囲に分布し、特に西側の直径5mの範囲にその中心を持つ。また、この中心集中部のすぐ南側に632点(426.9kg)で構成される礫集中部が東西約6.4m×南北約7.6mの範囲に形成されている。礫集中部と石器集中地点は完全に重複して形成されているのではなく、一部に重複が認められる状況であった。石器や礫の垂直分布は地形の傾斜に沿った形で投影されるが、出土状況は上下幅が少なく、幅15cm前後に収まっている。

石器や礫は現耕作土直下の黄色シルト～極細砂層（中世・縄文後期遺構面及び石器ブロック4検出層位）に若干含まれ、主体となる出土層位はその下約0.4mのところにある灰黄色シルト～粘土層である。

石器は551点を確認した。使用石材はサスカイトとチャートが主体となっており、その内訳はサスカイト407点(1317.7g)、チャート139点(608.6g)である。また、珪質頁岩が1点出土しており注目される。

出土した代表的な定型石器にはナイフ形石器38点、円形搔器1点、角錐状石器1点、敲石1点、2次加工ある剝片50点、石核38点などがある。ナイフ形石器は所謂「2側縁加工の切り出し形ナイフ形石器」が大半を占め、この集中地点を特徴付ける石器として位置づけられる。

ナイフ形石器、2次加工ある剝片、微細剝離痕ある剝片は石材集中部に位置する一群と散漫な部分に位置するものがある。その中でもチャート製品が集中部により多く存在する傾向が窺える。石核は石材による差がより顕著に現れ、サスカイト製が散漫な部分に、チャート製が集中部分にまとまる。

接合資料はサスカイト14例、チャート14例の計28例を確認した。接合点数はサスカイトが32点、チャートが38点の計70点を数える。接合率はサスカイトが5.8%、チャートが6.9%あり、トータルで12.7%である。

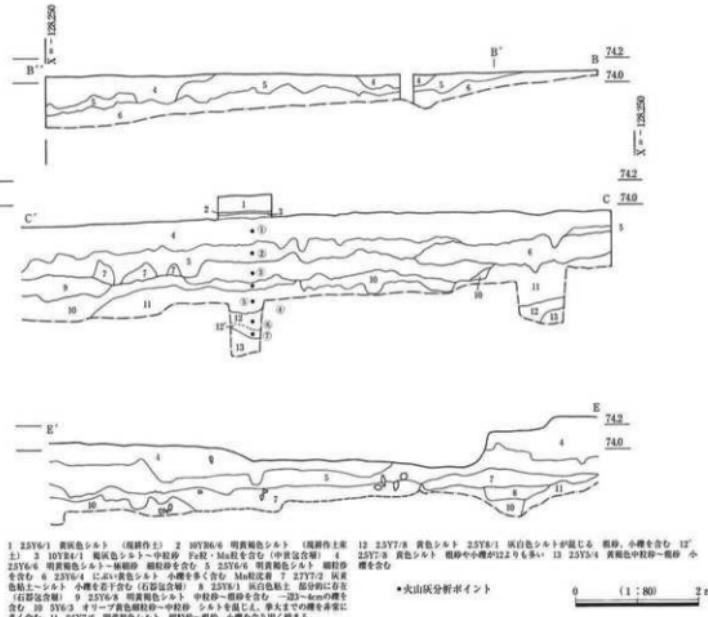


図43 ブロック6 断面図

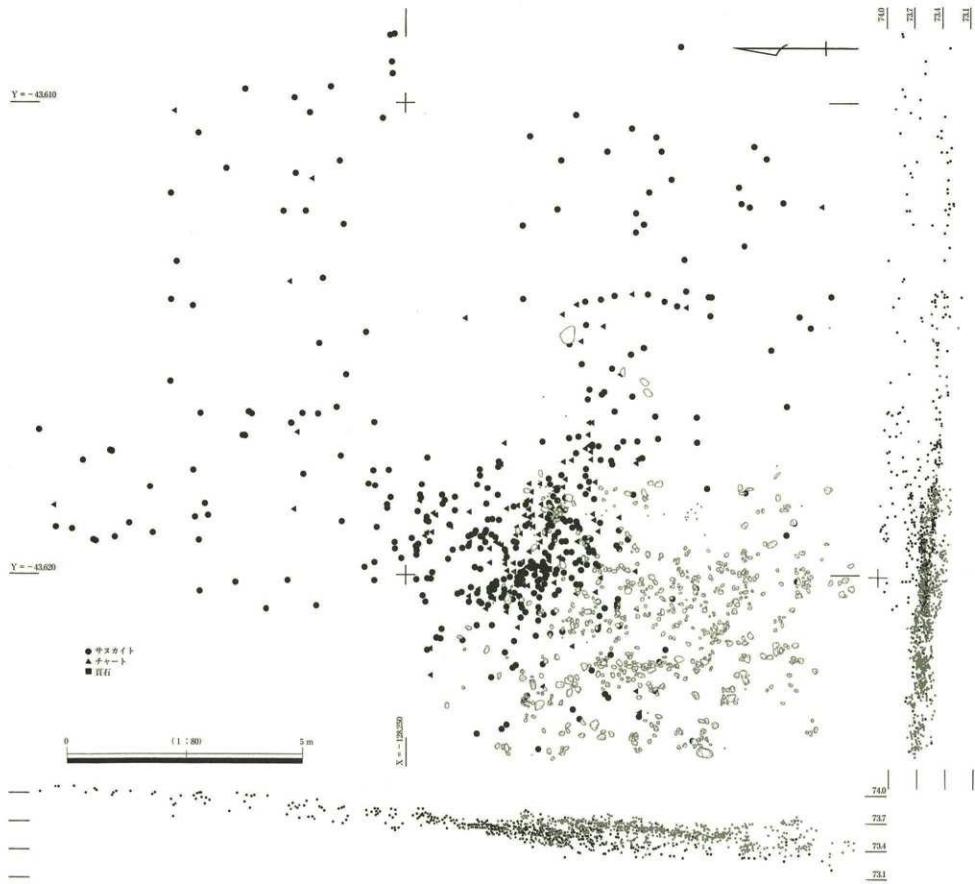


図44 ブロック6 石器及び礫集中部平面・垂直分布図

ある。多くのものが2m前後の近接した接合距離であるが、中には約10mの接合距離を持つ資料が存在する。

	全点	$r < 0.855m$
平均 \bar{r}	0.2308m	0.2078m
最大値 $\max r$	3.1780m	2.6401m
最小値 $\min r$	0.0000m	0.0000m
分散 S^2	0.0974	0.0370
標準偏差 S	0.3121	0.1923
$\bar{r}+2S$	0.8549m	0.5725m
最頻値 M_0	0.1118m	0.1118m
中央値 M_m	0.1118m	0.1118m
尖度 a_3	25.5296	2.4972
歪度 a_4	4.0273	1.7267

ブロック6 最近隣距離 r の統計測度

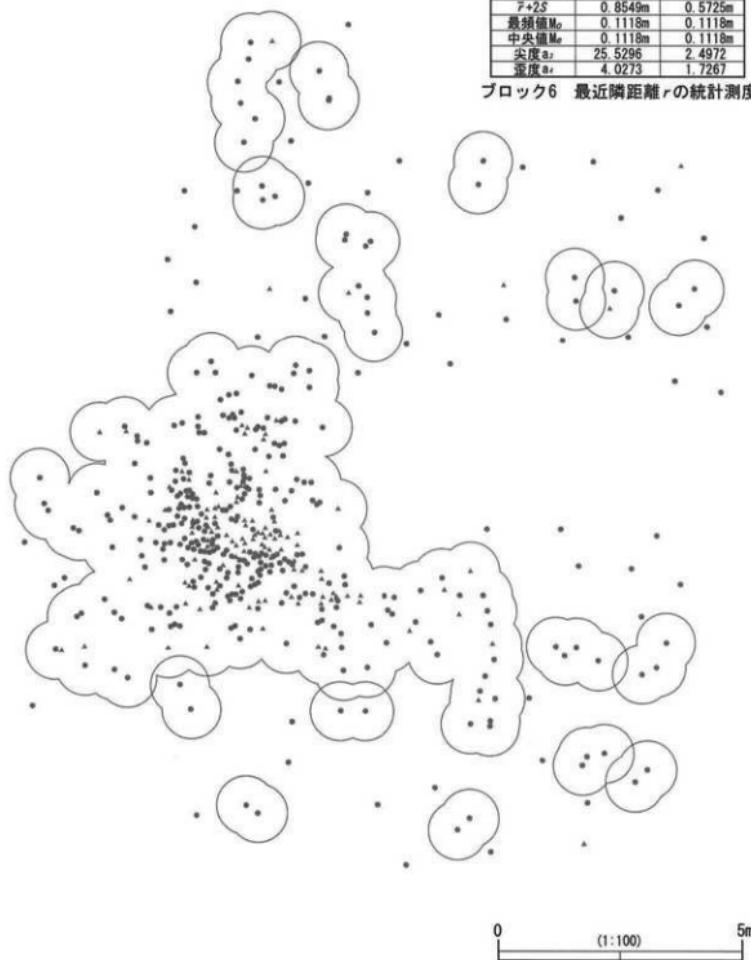


図45 ブロック6 等距離円図 ($r = 60\text{cm}$)

個体別にみてみると赤色チャート(14個体)が多く、次いで黒色チャート(9個体)、緑色チャート(7個体)の順になる。これらの平面分布は緑・赤色チャートがチャート集中部の中心にかたまり、その周囲を取り巻くように黒色チャートが分布する。サスカイトは集中部を形成する部分と散漫に分布する箇所が存在する。石材別分布はブロック1のように明瞭に分かれずチャートとサスカイトが混在している。重量別分布では、重量物が比較的外縁部分に集中し、軽量物は集中部の中心に多くみられる傾向が窺える。

2 碓集中部

碓集中部は632点(426.9kg)の川原石を持ち込んで形成されている。石材は砂質ホルンフェルス、泥質ホルンフェルス、珪質ホルンフェルスなどがあり、特定の石材を選択的に搬入したとは考えられない。なお、石材の搬入元は遺跡の南側を流れる勝尾寺川と考えられる(第8章第1節参照)。

出土した碓の平均法量は長さ10.6cm・幅7.7cm・厚さ5.2cm・重量676.56gを測り、所謂「碓群」を構成する碓と比較すると、その大きさが非常に大きいものとなっている。配石とみなされるような大形の碓が極めて多いことが特徴的である。また、碓には赤化した痕跡(被熱痕跡)やタールの付着は認められず、周囲から炭化物は全く確認されなかった。

平面分布の特徴は円形を呈し、碓の相互関係距離からみると、二重の円を描くことが判る。石材別分布においては特定石材の偏在がなく、重量別においては外周の円弧に重量物が多く分布し、内円部に軽量物が集中している。

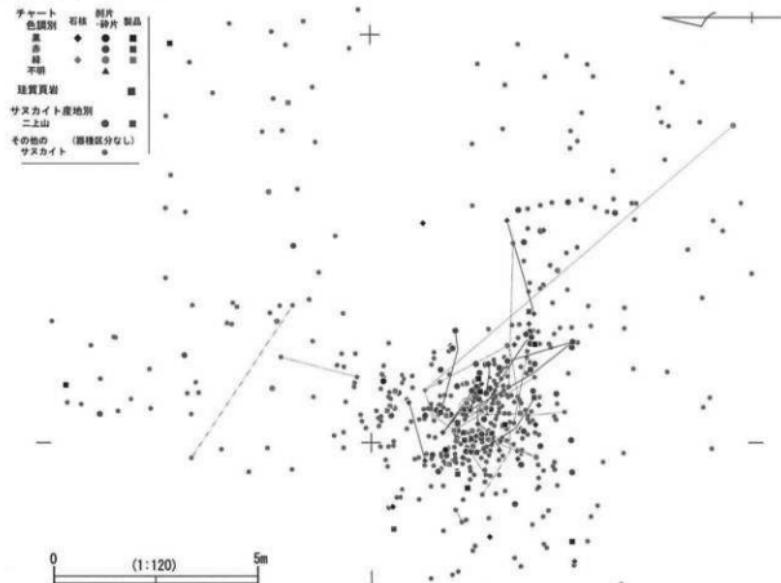


図46 ブロック6 チャート色調別・サスカイト産地別平面分布図

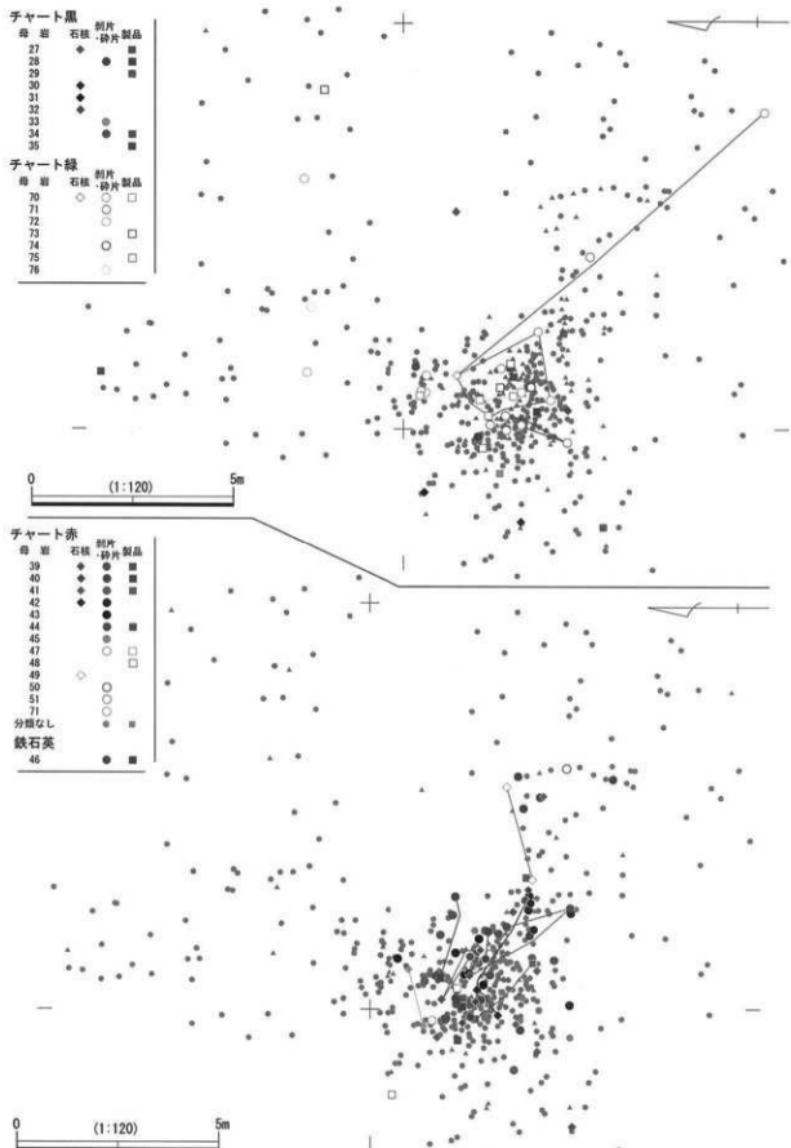


図47 ブロック6 チャート母岩別平面分布図

接合例は22例(45点)が確認できた。接合率は7.1%である。接合は近距離のものが多く、礫集中部から逸脱して接合が確認されることはない。

出土した礫の中に1点だけ敲打痕を有するものが確認された(図58)。長さ1.5cm・幅0.5cm・深さ0.2cmの溝状の敲打痕が礫の平坦面ほぼ全面にみられる。敲打痕は垂直方向の痕跡ではなく、やや斜めに穿たれたように見える。両極打法の台石のように思えるが、石器の面から考えるとそうした技法の痕跡が認められず、現状では性格不明の礫である。



	サヌカイト	チャート
点数	406	139
合計重量	1,317.7g	608.6g
最大重量	39.0g	27.0g
平均重量	3.246g	4.378g
標準偏差	5.629	5.247
最頻値	0.0g	0.4g
中央値	1.1g	2.3g
寸度	12.255	3.686
密度	3.234	1.898

ブロック6 石材別資料重量の統計測度

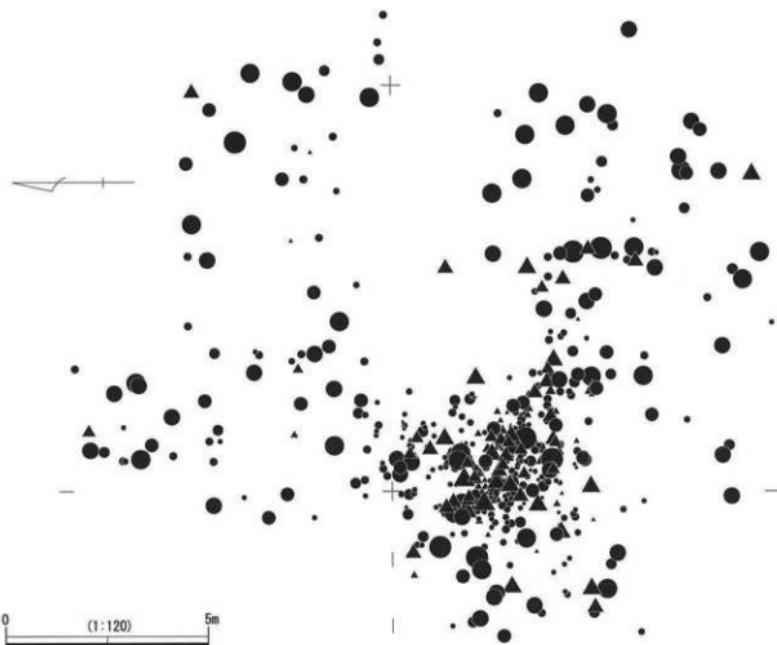
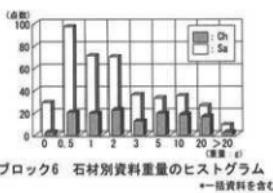


図48 ブロック6 重量別平面分布図（1）

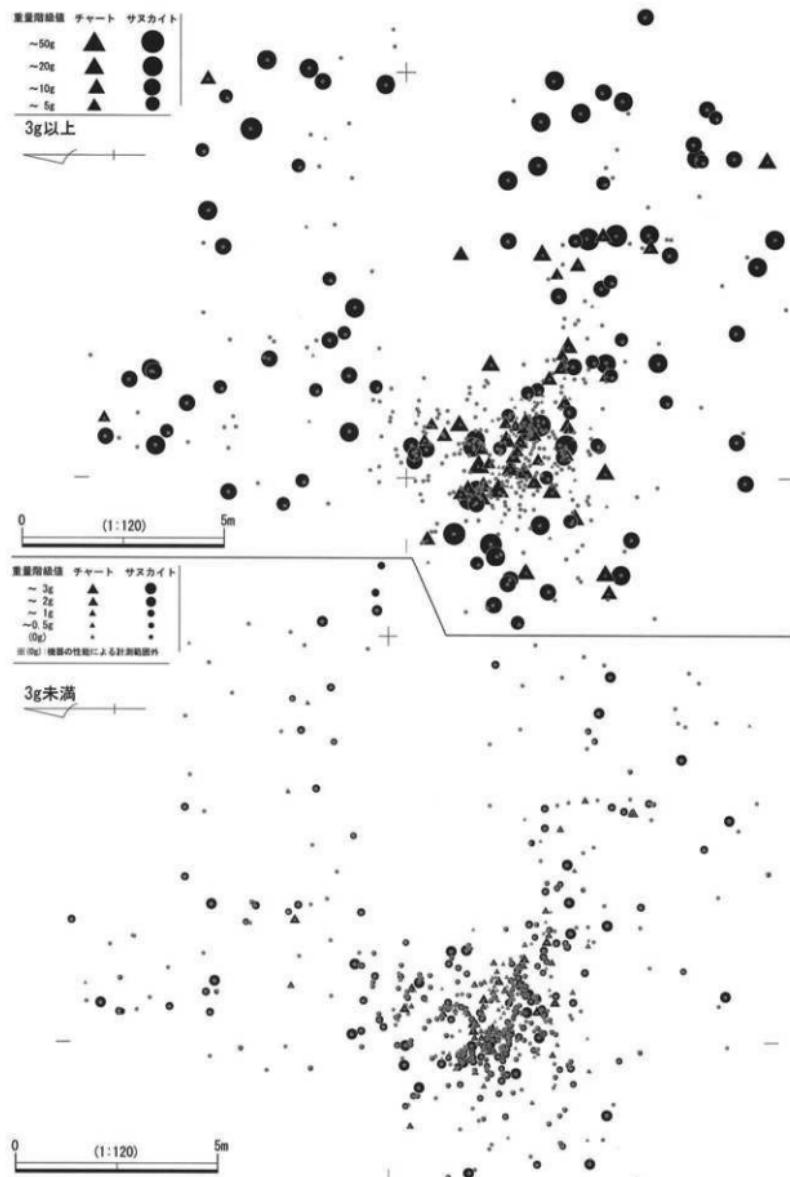


図49 ブロック6 重量別平面分布図(2)



図50 ブロック6 器種別平面分布図

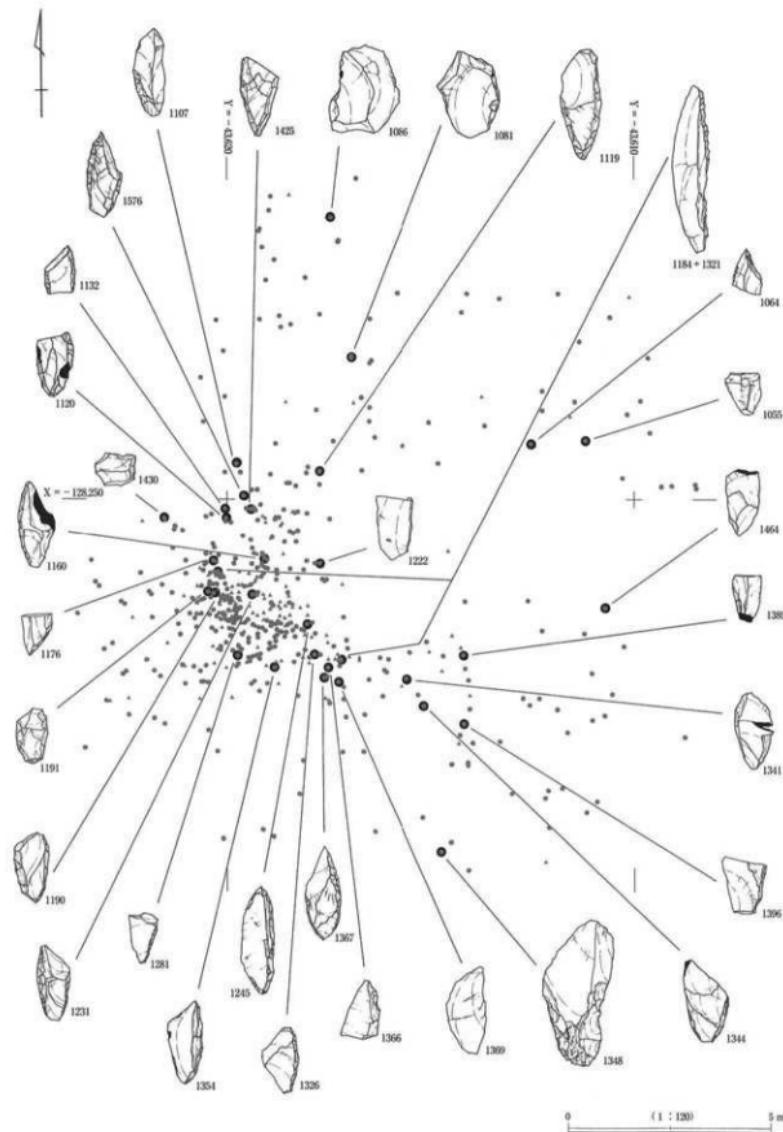


図51 ブロック6 サヌカイト製ナイフ形石器平面分布図

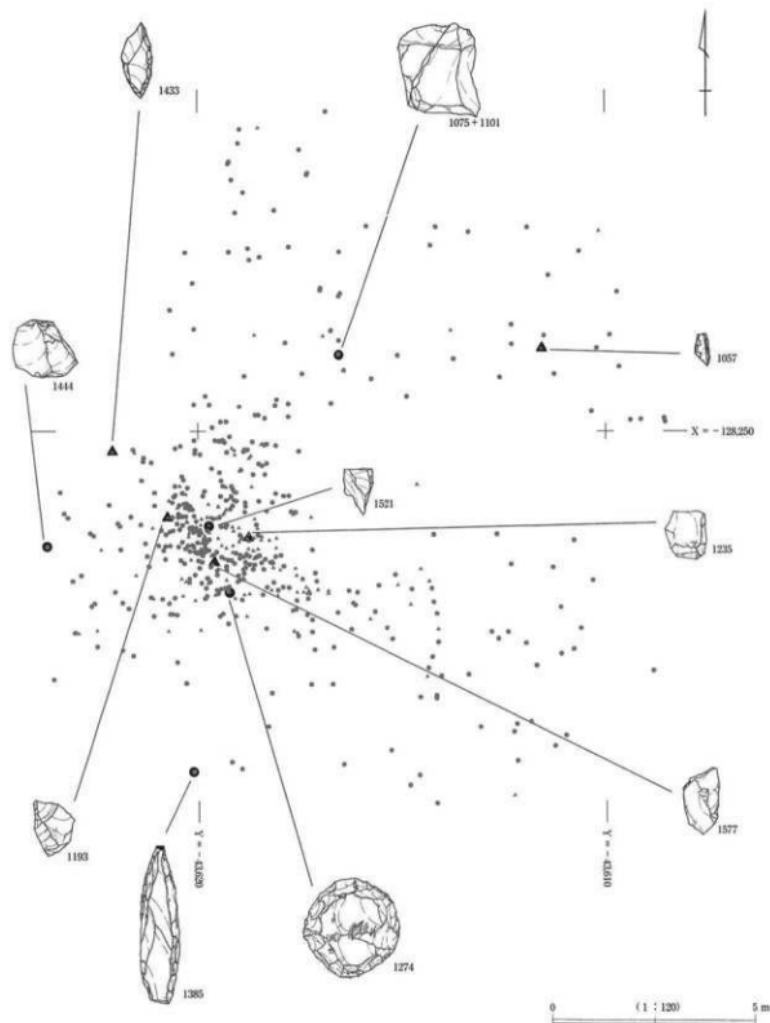


図52 ブロック6 チャート製ナイフ形石器ほか平面分布図

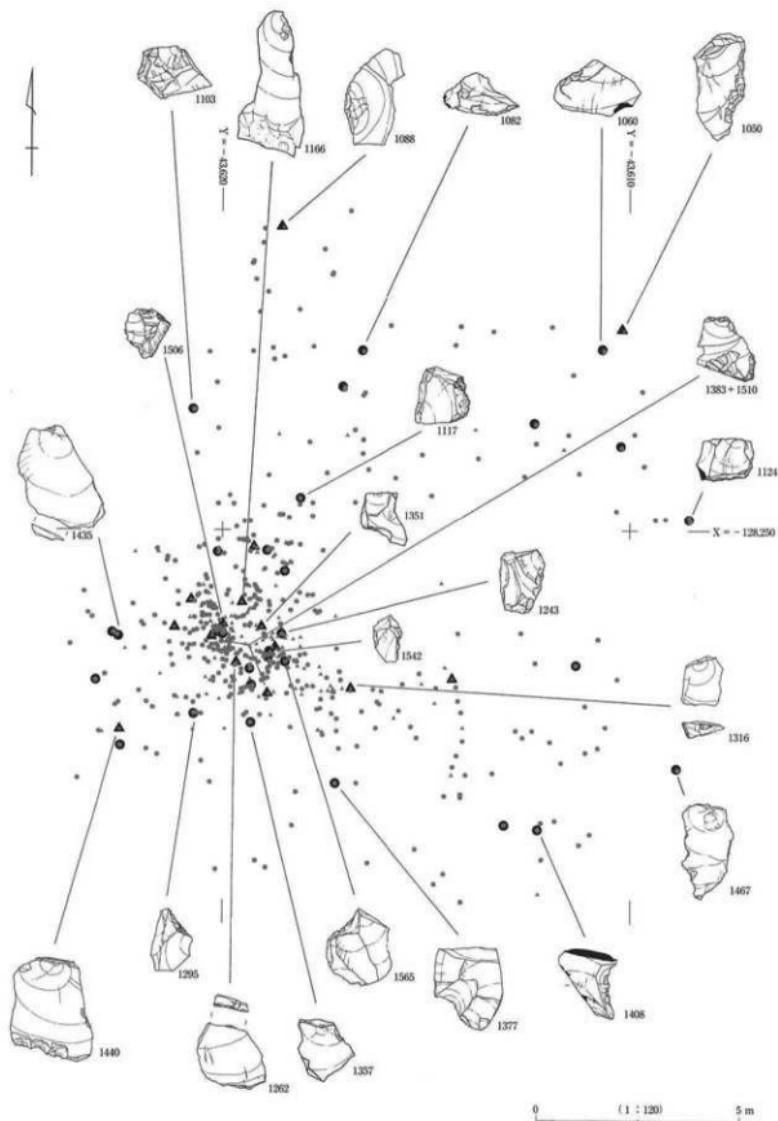


図53 ブロック6 2次加工ある剥片平面分布図

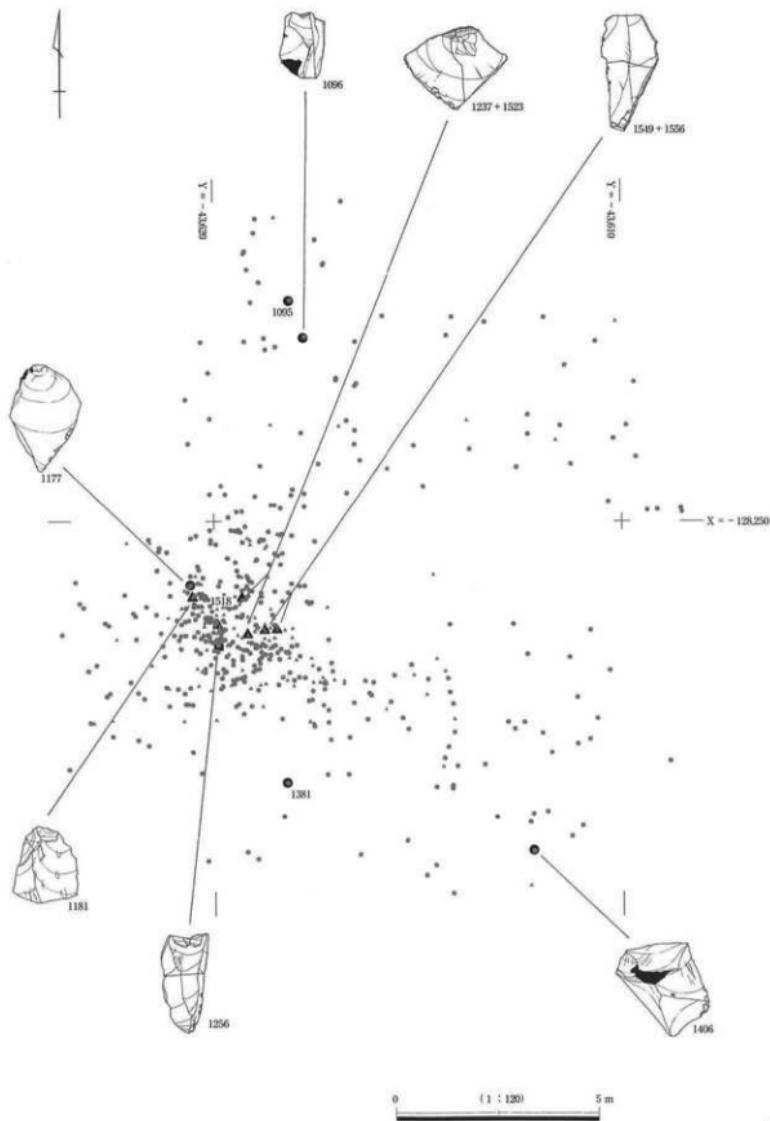


図54 ブロック6 微細剝離痕ある剥片平面分布図

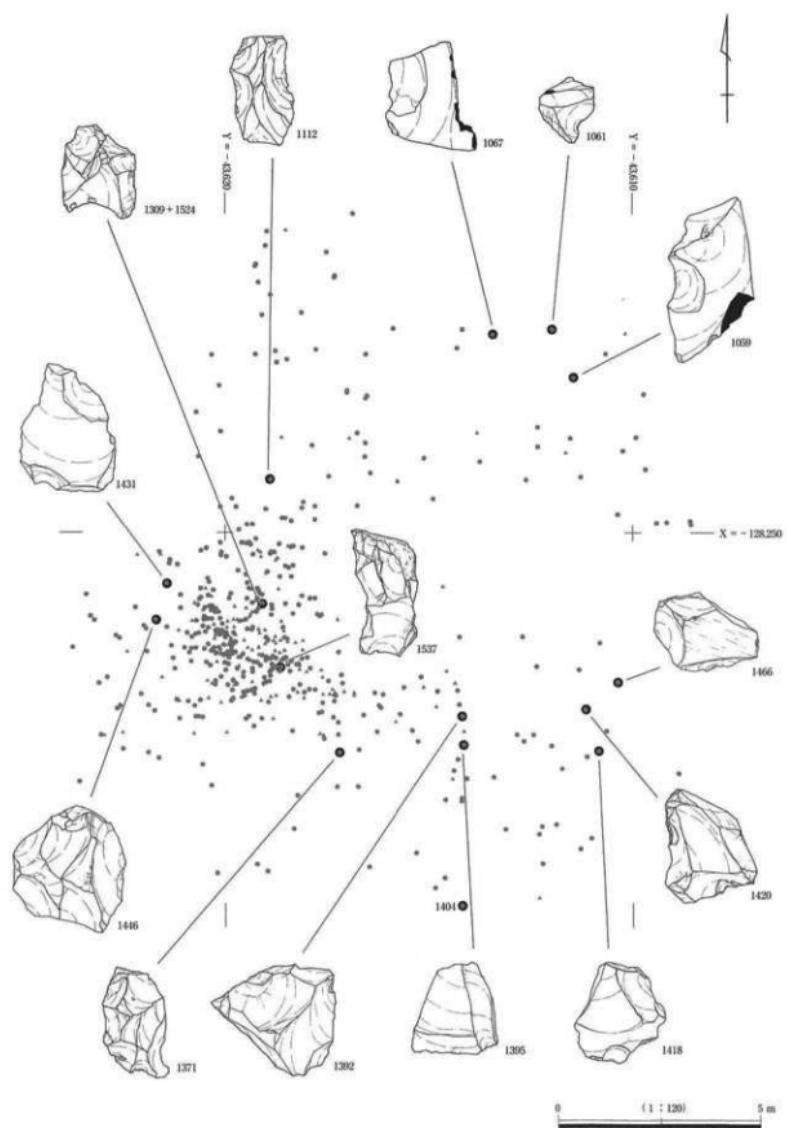


図55 ブロック6 サヌカイト製石核平面分布図

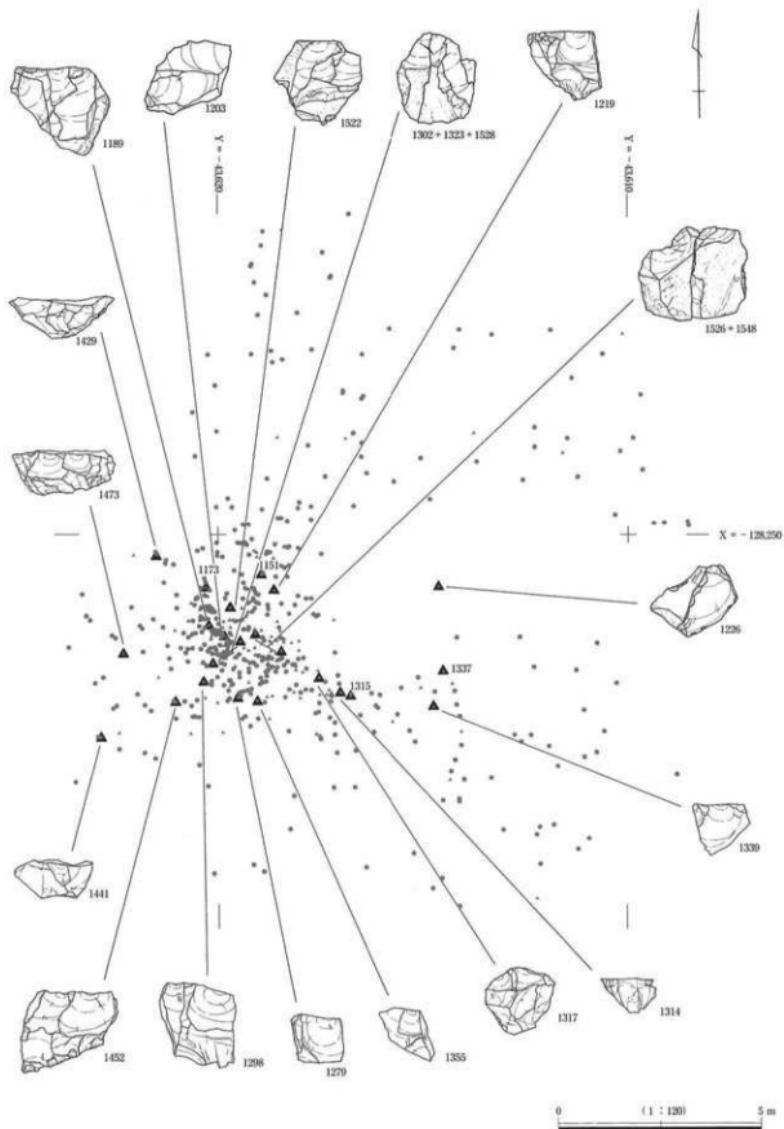


図56 ブロック6チャート製石核平面分布図

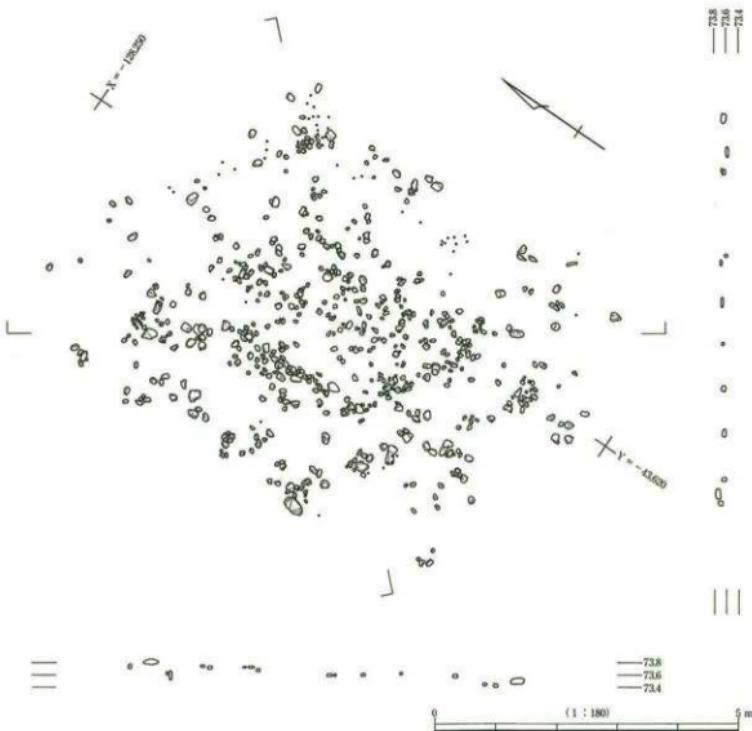


図57 碾集中部平面・復元断面図

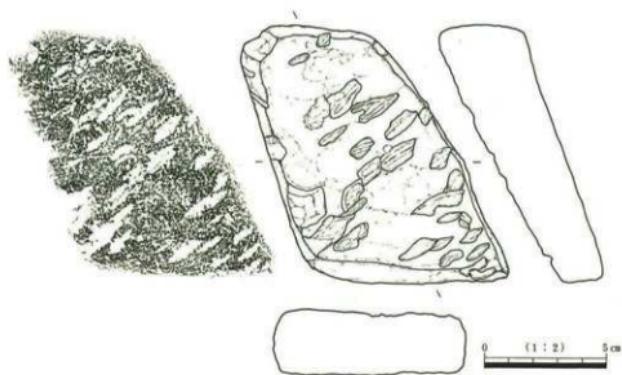


図58 碾集中部出土 敲打痕有碾

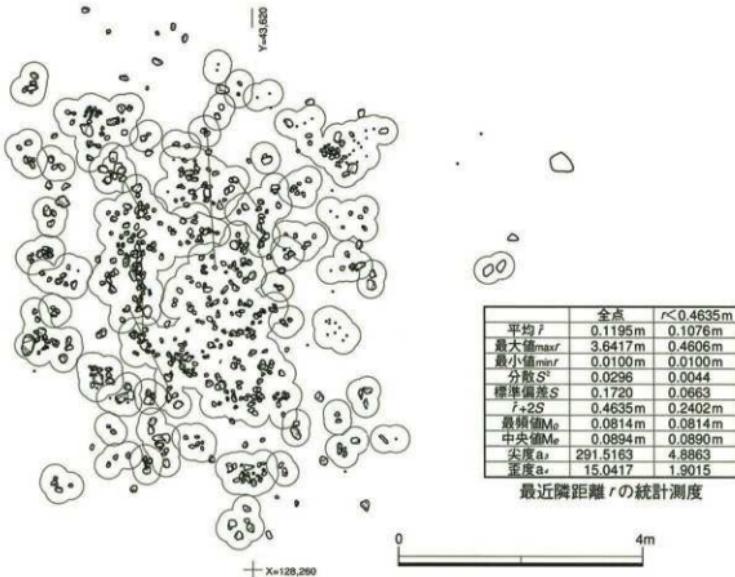


図59 碓集中部等距離円図 ($\phi 45\text{cm}$)

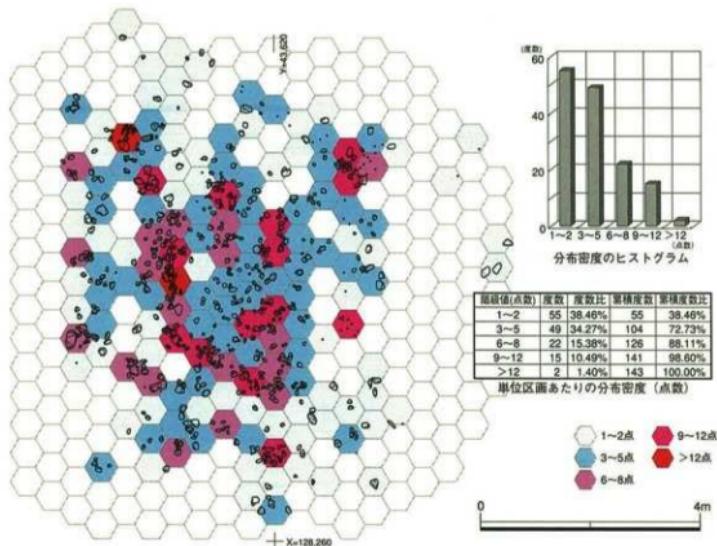


図60 碓集中部石分布密度(点数)

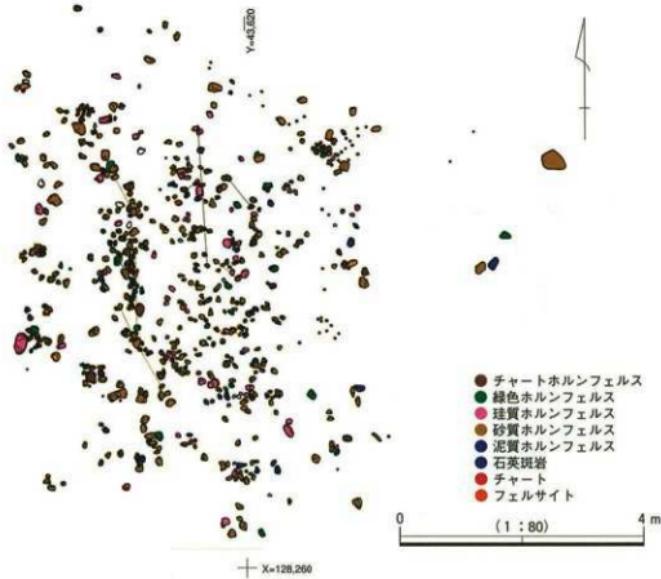


図61 碎集中部石材別平面分布図

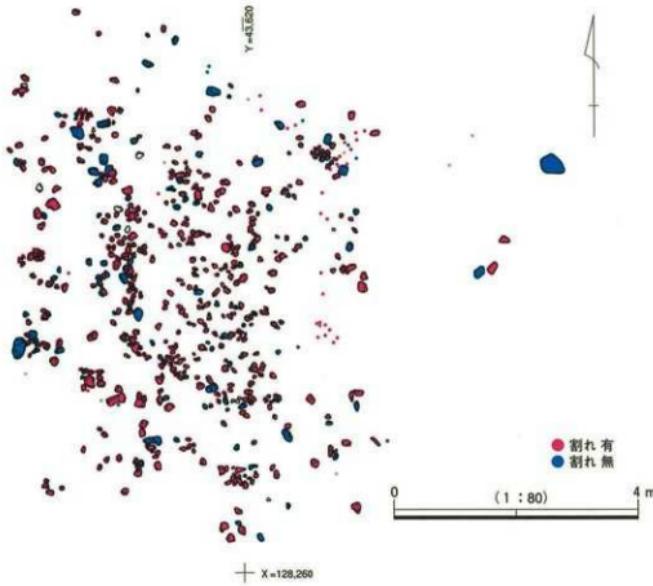


図62 碎集中部破損別状況平面分布図

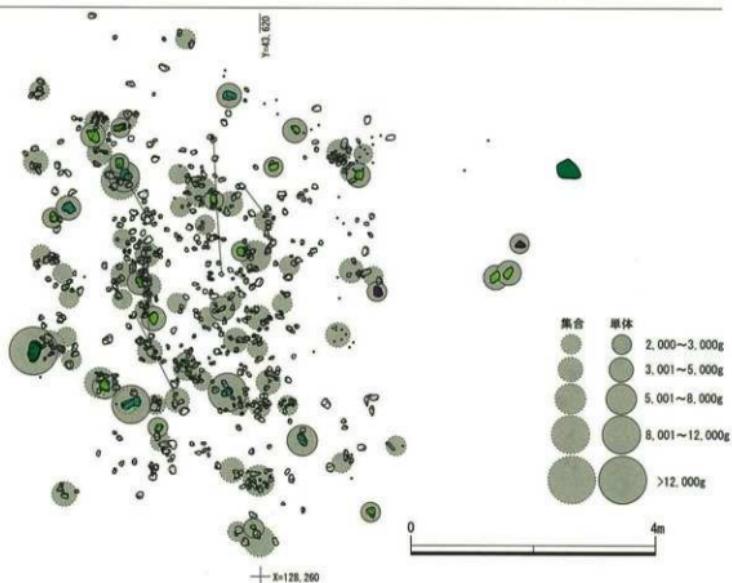
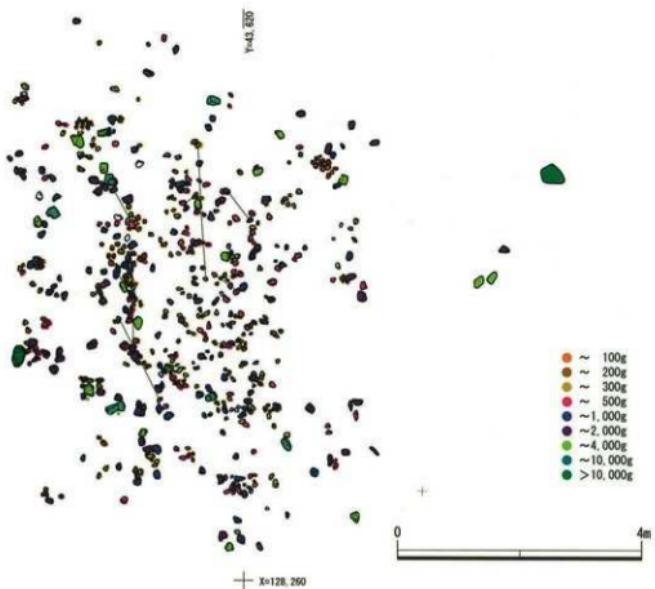


図63 碎集中部重量別平面分布図

3 石器組成と石材組成

ブロック6では551点の石器が出土し、ナイフ形石器38点(サスカイト2点が接合したので実数は37点)・角錐状石器1点・円形搔器1点・ノッチ2点・楔形石器1点・蔽石1点・2次加工ある剝片49点・微細剝離痕ある剝片12点・剝片299点・碎片109点・石核38点で構成される。定型石器はナイフ形石器・角錐状石器・円形搔器・ノッチ・楔形石器・蔽石であり、多様な組成を示している。

石材別における石器組成は表14のとおりである。サスカイトはナイフ形石器32点・角錐状石器1点・円形搔器1点・楔形石器1点・ノッチ1点・2次加工ある剝片33点・微細剝離痕ある剝片5点・剝片225点・碎片93点・石核15点であり、定型石器の大半はサスカイトで構成される。

チャートはナイフ形石器6点・ノッチ1点・2次加工ある剝片16点・微細剝離痕ある剝片6点・剝片71点・碎片16点・石核23点であり、ナイフ形石器が一定量認められ、石核の点数はサスカイトよりも多い。碧玉は剝片3点で構成される。頁岩・珪岩はそれぞれ1点のみであり、微細剝離痕ある剝片・蔽石で構成される。

石材組成はサスカイト407点・チャート139点・碧玉3点・頁岩1点・珪岩1点であり、サスカイトを主要石材とし、チャートも一定量認められる。チャートは色調別にみてみると、赤色92点・緑色33点・黒色14点であり、赤色が大半を占める。

表14 ブロック6 石材別石器組成

石材	ナイフ形石器	背郭整形剝片	角錐状石器	円形搔器	搔器	削器	石錐	楔形石器	ノッチ	蔽石	2次加工ある剝片	微細剝離痕ある剝片	剝片	碎片	石核	合計
サスカイト	32	1	1					1	1		33	5	225	93	15	407
チャート	6								1		16	6	71	16	23	139
碧玉												1				1
珪岩												1				1
碧玉													3			3
合計	38		1	1				1	2	1	49	12	299	109	38	551

表15 ブロック6 母岩別石器組成

母岩	図版	写真	点数	器種								遺物番号			
				Kn	Sc	Dr	No	Rf	UF	Fl	Cp	1	2	3	4
27	図23・28	図版44・53	3							2	1	1068-1226-1592			
28	図版23	図版46	2						1	1		1262-1503			
29	図版23	図版46	1						1			1440			
30	図版28	図版53	1									1473			
31	図版28	図版53	1									1429			
32	図版28	図版53	1									1279			
33			1							1		1476			
34	図版23	図版46	3						2	1		1549-1556-1575			
35	図版22	図版46	1						1			1050			
36	図版27・32	図版50・52・60	18							13	5	1164-1207-1233-1236-1238-1317-1353-1372-1441			
40	図19・21・27・32	図版43・51・52・61	15	1					1	10	3	1522-1526-1548-1551-1560-1563-1567-1573-1461			
41	図19・21・23・27	図版41・44・46・52・53	16	1				1	4	6	4	1166-1189-1203-1209-1225-1242-1314-1336			
42	図版32	図版61	8							6	2	1296-1302-1320-1323-1324-1365-1373-1528			
43			7							7		1150-1229-1586-1527-1529-1552-1555			
44	図版19	図版43	2	1						1		1193-1501			
45			3							3		1151-1173-1587			
46	図版22		4						1	3		1398-1399-1400			
47			2						1	1		1175-1211			
48	図版21	図版41	1	1								1433			
49			2								2	1315-1337			
50			2							2		1393-1394			
51			1							1		1547			
70	図版23・31	図版46・59	1					1	2	10	1	1	1135-1136-1149-1219-1228-1237		
71	図版27・31		9							9			1266-1318-1351-1405-1462		
72			3							1	2		1199-1205-1244-1290-1304-1468-1504-1512-1532		
73	図版21	図版43	2	1				1					1066-1122-1530		
74			2							2			1057-1569		
75	図版23	図版46	1						1				1240-1241		
76			1							1			1181		
													1078		

母岩分類はチャート及び碧玉において実施し、139点のうち138点を母岩27～35、母岩39～45及び母岩47～51、母岩70～76、母岩46に区分し、点数はそれぞれ14点、78点、19点、4点である。母岩27～35は黒色チャート、母岩39～45及び47～51は赤色チャート、母岩70～76は緑色チャート、母岩46は碧玉である。母岩別における石器組成は表15のとおりである。

4 出土石器

(1) ナイフ形石器〔第19～21図・図版40～43〕

ナイフ形石器は37点出土し、チャート6点、サヌカイト31点である。完形品は21点で、1190・1464・1191・1425は基部側に打面を残存する。素材は1点を除き剥片素材であり、1348が剥片素材石核の転用品である。平坦面を有する剥片は13点であり、ポジティヴ面6点、ポジティヴ面かネガティヴ面の判別が不詳な面7点で構成される。刃部の設定位置は素材剥片の末端縁に設定するもの8点、側縁に設定するもの18点、末端縁及び側縁に設定するもの3点、不明7点である(図64)。加工は1側縁加工17点、2側縁加工17点、部分加工2点、基部加工1点であり、裏面から表面に調整剝離を施すものを主体とするが、内向調整剝離(1160・1464・1369・1086・1389・1055・1129・1107・1281)、対向調整剝離(1081)も認められる。1160・1389・1055・1107は錯向剝離で、表面から裏面には面的な調整剝離を施している。大きさは、最大長が1.9cm～6.7cm、最大厚が0.41～1.04cmに分布し、大きさの変異が顕著である。

1231・1190・1344・1576・1160・1464は素材剥片を横位に利用し側縁に刃部を設定する2側縁加工のナイフ形石器で、平面形において切出状を呈する。左刃4点(1231・1344・1576・1160)、右刃2点(1190・1464)である。1160・1464は背面にポジティヴ面が付着している。調整剝離は裏面から表面に施すものを主体とするが、1160・1464には内向調整剝離が認められる。

1191・1425は末端縁に刃部を設定する2側縁加工のナイフ形石器で、平面形において切出状を呈する。右刃。素材の用い方は1191が横位、1425が正位であり、裏面から表面に調整剝離を施す。

1119・1581は素材剥片を斜位に利用し打面部を石器先端側に用いる2側縁加工のナイフ形石器で、平面形において切出状を呈する。右刃で側縁に刃部を設定する。調整剝離は裏面から表面に施す。1119は背面の基部側にポジティヴ面ないしネガティヴ面の判別が不詳な平坦面が認められる。1581はチャート製で縦長剥片と接合することから、縦長ないし幅広剥片素材ではある。

1235は素材剥片を横位に利用し両側縁に刃部を設定するチャート製のナイフ形石器で、平面形において台形状を呈する。打面及び打点を残し素材剥片の末端側に調整剝離を施す。

1193は素材剥片を横位に利用し側縁に刃部を設定するチャート製のナイフ形石器で、平面形において切出状を呈する。左刃。素材剥片の打面を部分的に除去するように調整剝離を施す。

1341は素材剥片を横位に利用し側縁に刃部を設定する1側縁加工のナイフ形石器である。調整剝離は裏面から表面に施し、打面が一部残存する。

1348は石核素材剥片の打面部に作業面を設定し、背面にポジティヴ面を取り込む剥片を製作する剥片素材石核を素材とする。基部側に面的な調整剝離を裏面から表面に施す。

1184+1321・1369・1366・1081は素材剥片を横位に利用し末端縁に刃部を設定する。平坦面を有する剥片を素材とし、1184+1321・1366は1側縁加工で裏面から表面に調整剝離を施し、1184+1321は背面が素材剥片の剝離方向と一致する2枚の先行剝離面とポジティヴ面で構成される。1369は内向調整剝離により背部を整形し、刃部側の下半部にも裏面から表面に微細な調整剝離を施す。背面はポジティヴ面のみで構成される。1081は1側縁加工で対向調整剝離により背部を整形する。

1354・1222・1086は素材剥片を斜位に利用し末端縁に刃部を設定する。平坦面を有する剥片を素材とし、1側縁加工である。1354は素材剥片の剥離方向と一致する複数枚の先行剥離面が認められる。1222は背面がポジティヴ面のみで構成される。1086は内向調整剥離により背部を整形する。背面は素材剥片の剥離方向と一致する2枚の先行剥離面とポジティヴ面で構成される。

1245・1396は素材剥片を正位に利用し側縁に刃部を設定する。1245は平坦面を有する剥片を素材とし、2側縁加工で刃部側には面的な調整剥離を表面から裏面に施す。1396は打面残置の1側縁加工のナイフ形石器で、多刺離面打面の剥片を素材とする。

1577は素材剥片を横位に利用し末端縁に刃部を設定するチャート製のナイフ形石器である。打面が残存し、背面の大半がポジティヴ面で構成される。部分加工で素材剥片の側縁側に位置する折損面に調整剥離を表面から裏面に施す。

1132・1367は素材剥片を逆位に利用し側縁に刃部を設定する2側縁加工のナイフ形石器である。1367は刃部側の下半部と反対側の縁辺全体に調整剥離を施す。背面は素材剥片の剥離方向とほぼ一致する先

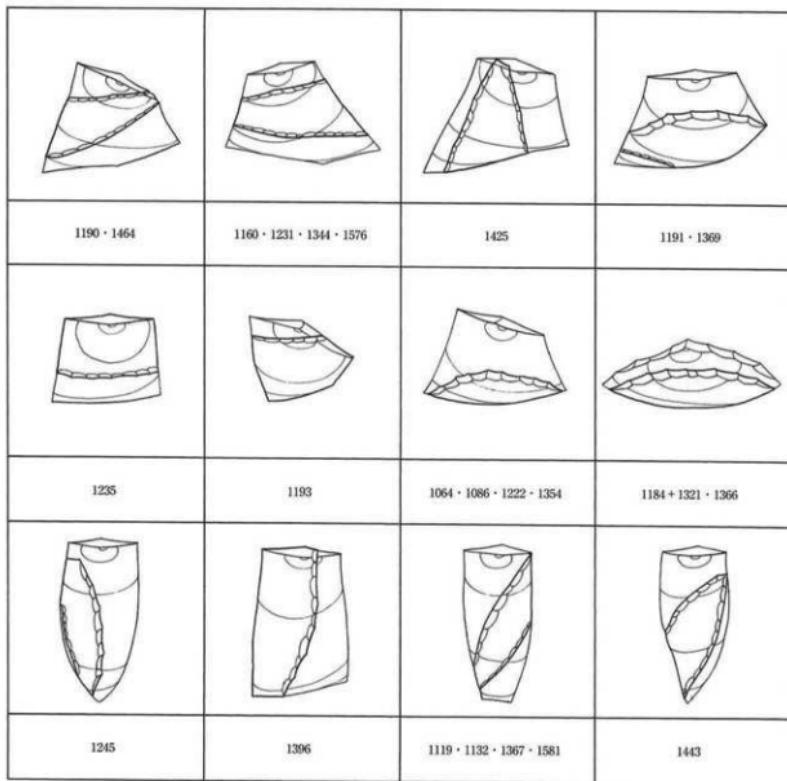


図64 ナイフ形石器模式図

行剝離面と約180度異なる先行剝離面で構成される。

1433・1107は素材剥片を正位に利用し側縁に刃部を設定する。1433は刃部側の下半部と反対側の縁辺全体に調整剝離を施す。背面は素材剥片の剝離方向とほぼ一致する2枚の先行剝離面で構成される。1107は素材剥片の側縁側に石核の素材面が付着する。調整は鋸向剝離による基部加工である。

(2) 角錐状石器〔第21図・図版44〕

角錐状石器は1点出土した。サスカイト製。1385は素材剥片を横位に利用し、横断面形が台形を呈する周縁加工の角錐状石器である。薄手の剥片を素材とし、素材剥片の打面側及び末端側にやや急角度の調整加工を施す。基部側には自然面が残存し、素材剥片の裏面は未加工で後上調整も認められない。

(3) 円形搔器〔第21図・図版44〕

円形搔器は1点出土した。幅広で厚手の剥片を素材とし、素材剥片の全周にやや急角度の調整剝離を施している。サスカイト製。

(4) ノッチ〔第21図・図版43~44〕

ノッチは2点出土した。1521はチャート製で剥片を素材とし、急角度の調整剝離により素材の変形が著しい。表面からの数回の剝離により側縁側に抉りを作出している。1075+1101はサスカイト製で垂直削れが認められる剥片を素材とし、表面からの数回の剝離により側縁側に抉りを作出している。

(5) 楕形石器〔第21図・図版44〕

楕形石器は1点出土した。サスカイト製である。1444は表面の上端と裏面の上下端に両極打法による微細な剝離痕が認められる。

(6) 2次加工ある剥片〔第22~23図・図版45~46〕

2次加工ある剥片は49点出土した。サスカイト製33点・チャート製16点である。49点のうち第22・23図において20点図示した(1295・1542・1243・1117・1408・1377・1082・1103・1060・1565・1506・1467・1435・1050・1316・1383+1510・1088+1589・1440・1262・1406)。

1295・1542・1565はサスカイト製で腹面から背面に急角度の2次加工を施し、打面を除去している。1467は背面が素材剥片の剝離方向と一致する複数の先行剝離面で構成される単剝離面打面の剥片を素材とし、腹面左側縁には背面側からの2次加工が認められる。サスカイト製。1435は多剝離面打面で打面形状が山形である剥片を素材とし、背面右側縁には腹面から背面に2次加工を施す。サスカイト製。

1050は背面が素材剥片の剝離方向と一致する複数の先行剝離面で構成され、腹面右側縁には背面側からの2次加工が認められる。チャート製。1088+1589は背面から腹面への急角度の2次加工により打面を除去し、素材剥片の末端側にも腹面から背面に急角度の2次加工を連続的に施している。チャート製。1440は多剝離面打面の剥片を素材とし、素材剥片の末端側には背面から腹面に2次加工を連続的に施す。チャート製。1262は腹面から背面に急角度の2次加工を施し、打面を除去している。チャート製。

(7) 微細剝離痕ある剥片〔第23図・図版45~46〕

1177は多剝離面打面で打面形状が山形である剥片を素材とし、腹面右側縁に微細剝離痕が認められる。サスカイト製。

1237+1523は緑色チャート製で末端側が折損している単剝離面打面の剥片を素材とする。素材剥片の末端側に微細剝離痕が部分的に認められる。母岩70。

1549+1556は黒色チャート製で素材剥片の剝離方向と一致する先行剝離面で構成され先端が先細りになる剥片を素材とし、背面左側縁の両面に微細剝離痕が認められる。母岩34。

1256は頁岩製で素材剥片の剥離方向と一致する先行剥離面で構成され両側縁が並行する剥片を素材とし、背面右側縁に微細剝離痕が認められる。頁岩は黄褐色の良質な石材であり、近畿地方以外から搬入された可能性が高いと考えられる。

(8) 剥片〔第24~27図・図版47~51〕

299点を数える。石材別内訳を見ると、サヌカイト225点、チャート71点、碧玉3点となる。いずれも切出形を呈するナイフ形石器の製作に関係するものとみられ、サヌカイトの剥片はおもに剥片素材石核から、チャートの剥片は自然縫ないしは分割縫から剥離している。入念かつ細密な打面調整を施した剥片もあり、目的剝離に際して打撃位置をある程度定めていたことが知られる。サヌカイトは幅広の剥片が多いが、明確な翼状剥片は皆無である。また、チャートでは角縫・分割縫の稜線をガイドとした継位方向の剝離も実施しており、サヌカイトとはやや異なる。

まず、サヌカイトの剥片について記載する。1376~1089は背面末端部にポジティヴ面、あるいは平滑な剝離面を取り込んだ幅広~横長の剥片。明確なポジティヴ面が付着しているのは1376・1182・1092・1104の4例で、残余の剥片はネガティヴ面か、判別の困難な剝離面を帯状にとどめている。1180・1120・1069・1097・1172は打面が多剝離面からなり、打撃点はその稜上、山形にやや突出した部位に定めている。打面を構成する剝離面に打撃点をとどめる例(1180・1120・1069)とそうでない例(1097・1172)とが認められる。1454・1188・1370は打面調整を施したもので、打面がやはり山形を呈し、打撃点も調整で生じた稜線上か、それに接した位置にある。但し、剥片の形態は不定形で、多方向からの剝離面が切り合う作業面状況を反映している。

1133・1074・1423・1456・1402・1455、1500・1417・1141・1387・1411は単剝離面打面をもつ剥片で、継長の例(1456・1141)や残余の横長・幅広の例が認められる。1588・1054~1421はブロック6では大形の剥片で、1588・1421が正面打面をもち、1544は背面のほぼ全面を正面面が占める。

チャートの剥片は3点を図示したに過ぎないが、このほかにも微細剝離痕ある剥片や、接合資料に含まれる剥片がある。1304は角縫の稜線に沿い剝離した剥片。1567は打面調整を施しており、サヌカイトの剥片にも類例が認められる。1242+1557は中央部で折損しているが、本来は背面に稜線をひとつ配した継長の剥片である。

(9) 石核〔第27~29図・図版52~56〕

38点を数える。使用石材はチャートが23点、サヌカイトが15点とほぼ2分される。石材差は剝離経過にも反映されており、結果として石核の変形過程も異なっている。チャートの場合は石核素材(角縫など)の形状にしたがい、打面・作業面を転位させつつ剝離作業を進めているので、石核は多面体状、サイコロ状を呈している。打面は節理面や古い剝離面からなり、打面・作業面が反復的に交替する例が少ない。一方、サヌカイトの場合は多くが剥片を素材としているため、チャートの石核に比すれば表裏の別がはっきりしている。石核の破片を除くとすれば、総じてポジティヴ面での剥片剝離を実施しているのが特徴である。薄手の剥片を素材とした石核では、ポジティヴ面側に僅か1~2枚の剝離痕をとどめる程度であるが、厚手の石核になると剝離が両面におよび、素材面をほぼ消失している。このように石材ごと、あるいは素材の大きさやかたちによって最終形態が異なるとはいえ、いずれもナイフ形石器の素材候補を得るために石核であろう。

1314~1279はチャートの石核。後述の接合資料を除けば、特に用いているのは赤色の母岩(母岩39~41)であるが、黒色(母岩27・30・31)の例も認められる。

1314・1355は石核の破片。1339はc面(先行剝離面)を打面とし、b面に作業面を設けた石核。a面はb面での剝離に伴う折損面とみられる。1441はc面(節理面)を打面とし、b面を作業面としているが、石核下端側を折損している(a面)。1203はやや膨隆した分割面(e面)を打面とし、d面から剝片を剝離している。b面にも古い剝離痕が残るが、a面での剝離によって打撃点を欠く。節理に沿う割れで石核下端側を失っている。1317は表面の上端で剝離作業を実施したのち、裏面から1枚だけ剝片を剝離した石核。裏面右側の素材面がポジティブ面かは明らかでない。

1189はd面で剝片を剝離したのち、その面を打面に転じてc面から最終剝離をおこなっている。a面にも下端側からの剝離痕が残るが、大半は節理面からなる。1298は裏面を作業面とし、剝片剝離を進めている。側面に示した帯状の剝離面は、ポジティブ面の蝶番状末端部であった可能性もある。1452は相対する節理面を打面とし、裏面で対向方向の剝片剝離を実施している。得られた剝片は最大でも長さ約1.5cm、幅約2.0cm程度にすぎない。

1226は表面左側縁に残る剝離面がもっとも古く、同面上端側の剝離痕がそれを切る。次いで作業面を裏面に移し、最終剝離で古い作業面を一掃している。1429は円盤状を呈する石核の一部であろうか。a面右端にはポジティブ面を僅かに残しており、b面にはa面側を打面とした剝離痕が見られる。1473はc面で対向方向の剝離作業を実施しているが、むしろ石器の整形を意図している可能性もある。1279は節理面を打面とし、裏面から1～2枚程度の剝片を剝離したのみである。下端部を折損している。

1371～1466はサスカイトの石核。前述したように多くは剝片を素材としているよう、厚手の石核では剝離が両面におよぶ。反面、薄手の場合は剝離回数が1～2回と少ない。こうした較差は石核として利用できる残量(容積)に起因しているのであろう。なお、典型的な翼状剝片石核は皆無である。

1371は裏面(ポジティブ面)側から小形の剝片を剝離しているが、打面縁に連なる剝離痕は総じて小さい。表面には古い剝離面を2面残している。1595は上下端を折損している。裏面(ポジティブ面)側に浅い剝離を施し、それにより山形となった打面の稜線上を打撃して小形の剝片を剝離している。1431は裏面打面側に浅い剝離痕を見るが、ポジティブ面も広く残っている。表面の剝離痕が素材面であるかは判然としない。1395は厚手の剝片を素材とした石核で、ポジティブ面には沿うかたちで剝片を剝離する際に折損している。打面状況は新しい欠損のため不明である。

1418は周縁に鋸歯状の2次加工を施しているが、ポジティブ面中央部から薄手の剝片を剝離している点を評価して石核とみなしている。1059は素材の形状をよくとどめており、ポジティブ面側から貝殻状の小形剝片を1枚得たのみである。

1420は素材の腹面打面側(表面)と背面(裏面)から小形の剝片を交互に剝離した石核。表面の剝離痕は裏面での剝離に備えた打面調整であろうか。1067は薄手の剝片を素材とし、ポジティブ面側から貝殻状の剝片を1枚剝離している。その後表面側に鋸歯状の急斜度調整を施しているが、1端を折損している。1061は石核の破片である。

1392は下端側を折損しているものの、折損面をも打面としてほぼ全周から剝片を剝離している。剝離は両面に及び、山形をなす斜面上に打撃を加えて剝片を剝離した部分もある。表面下端側に残る剝離面はポジティブ面とみられる。1112は背面に自然面をとどめた素材を用い、ポジティブ面側に主要な作業面を設けている。ポジティブ面は裏面下端部に残っており、周囲の剝離痕がそれを切る。表面右側縁の剝離痕は打面調整であるらしく、裏面の剝離痕に切断されている。1466はやや厚手の素材を用い、ポジティブ面側を作業面としている。上下端を折損しており、上端の折損面は剝片剝離に伴うものと考えてよ

い。表面の剥離痕のうち、打面縁に接しているものは打面調整であった可能性もある。

(10)接合資料〔第29~32図・図版57~61〕

合計28例を数え、栗生間谷遺跡の各ブロックでは最も豊富である。接合資料の構成及び接合総数などは表2(第4章第1節)の記載にゆずるとして、以下では剥離状況のわかる接合資料について述べる。剥離面を介しての接合資料はチャートで5例、サスカイトで7例認められ、このうち石核と剥片との接合資料がそれぞれ3例、2例を占めている。後者はいずれも石核を放棄する直前の剥離状況を示すものからなる。また、チャートの接合資料にはナイフ形石器が含まれており、その製作を明確に示すものとして注目される。一方、サスカイトについては剥片・石核とナイフ形石器との接合作業を試みたが、接合関係を確認できなかった。とはいっても接合資料の総合的な観察からはブロック内における剥片生産→ナイフ形石器の調整・仕上げ過程までが一貫しておこなわれていたものと推測できる。

接合資料No.1 [(1360+1525)+(6008+1275+6005)+1357]

3点の剥片からなる。いずれも同一のネガティヴ面を打面とし、大きな空白部を介さずにほぼ密着接合している。まず、1360+1525を剥離するが、これは垂直割れにより折損している。続いて剥片6008+1275+6005と1357を連続剥離。剥片の背面には自然面を取り込んでいる。以後の剥離状況は石核側を欠くため不明である。

接合資料No.2 [1524+1309]

剥片1524と石核1309が接合している。1309は一回り大きい剥片を素材とした石核で、裏面下端側に素材のポジティヴ面をとどめている。既に剥離が手詰まりとなっており、素材の打面(裏面右側縁)を再び打面として得たのが剥片1524である。1524は表面に接合しているが、おもな作業面は裏面側であるらしく、同面上端～左側縁には潰れ気味の剥離痕が並んでいる。接合状況からは、最終剥離は先の潰れ痕を伴う剥離痕である。

接合資料No.3 [(1450+6011)+1446]

剥片1450+6011と石核1446が接合関係にある。1446は周縁から求心状剥離をおこなった円盤状の石核で、剥離が両面におよんでいる。1450+6011は1446の表面に接合し、同面中央部にそのネガティヴ面を残している。剥離作業はその後も続けられ、1450+6011のネガティヴ面を取り込むように小形の剥片を1枚得たのち、作業面を裏面に転じて上端側から矩形の剥片を剥離している。1450+6011の打面や1446に残る剥離痕を見ると、山形をなす稜線上に打撃点を定めている。なお、全ての剥離面がネガティヴ面からなるため、石核の素材が剥片であったかは定かでない。

接合資料No.4 [1334+1535+1537]

剥片1334・1535と石核1537が接合関係にある。1334の背面には互いに直交する剥離痕が見られ、腹面を介して1537の作業面(a面)に接合している。また、小形の剥片1535も1537の側面に接合する。1537は折損した石核で、b面は折損面からなるが、自然面の巡り具合や石核自体の厚みからして自然礫を用いていた可能性がある。もとより、明確なポジティヴ面は認められない。

接合資料No.5 [1123+1124]

剥片1123と2次加工ある剥片1124とが接合関係にある。1123は1124の背面側に接合する薄手の剥片で、その剥離に際しては入念な打面調整で打撃点をあらかじめ設定している。続く1124は改めて打面調整を施さず、先の打撃点をそのまま後退させて剥離している。後者は末端部に急斜度調整を施しており、ナイフ形石器の未製品とも考えられる。

接合資料No.6 [1121+1115]

剥片1121と1115が接合している。1121は自然面と先行剝離面の間に生じた稜線に沿い剝離したもので、僅かな空白部を介し、1115の背面に接合する。1115は背面側に縱走する稜線をひとつ配している。

接合資料No.7 [1161+1167]

同時剝離した剥片1161と1167とが接合関係にある。背面側は円磨した自然面で覆われ、径の小さな弧状クラックもある。

接合資料No.8 [1205+1512+1290]

剥片1205・1512・1290を順次剝離した状況を見せており。全て打面部を折損しており、1205・1290は背面末端部に自然面を残している。

接合資料No.9 [1405+1579+1266+1351+1318+1580+1219]

緑色チャートの角礫(母岩70)を石核素材とし、その小口側から縱長の剥片1405を剝離。1405は断面形がほぼ四角形となる角柱状の形態をなし、背面には先行剝離痕が残る。このときの打面は、石核1219の上面(節理面)とみられる。1405の剝離後、内在する節理に沿う割れが生じ、この後石核の変形が著しく進行する。まず、石核1219の下底面(節理面)を打面とし、最少3枚の剥片を剝離。1579は第3打目で得られているが、打面側を折損で失っており、僅かに末端部のみからなる。続いて石核の上面(節理面)に打面を移し、1266・1351・1318を連続剝離。1266の剝離に際しては入念な打面調整を施しているが、剝離時に石核もろとも折損(垂直割れ)している。1351と1318は同時剝離で、石核側に階段状剝離の痕跡を残した。最後に石核下面の右端から1580を剝離して作業を終えている。石核は著しく縮小している。

接合資料No.10 [1581+(1166+1225)]

赤色チャートの角礫(母岩40)から縱長の剥片を2枚剝離し、一方をナイフ形石器に仕上げている。まず、複数の剥片を得たのち、続けて1581を剝離。これは素材を斜断するかたちでナイフ形石器となる。次いで、1581の剝離痕と節理面を取り込むようにして1166+1225を剝離。1166+1225は長幅指指数が200を超える縱長の剥片で、2次加工を施す過程で折損している。石核側を欠くため以後の作業内容は明らかでないが、ナイフ形石器の製作に関わる接合資料として注目される。なお、この接合資料で用いている母岩と色調・石質が酷似する剥片類も認められるが、接合関係は確認できない。

接合資料No.11 [|1563+1372+(1526+1548)|+(1551+1522)]

石核1526+1548・1522に剥片1563・1372・1551が接合している。まず、a面(節理面)を打面としてb面から最少2枚の剥片を剝離。2枚目の剥片1563の剝離は節理による割れを引き起こし、石核が1526+1548と1522の側とに2分される。前者ではa面を打面とする剝離によって剥片1372が得られるが、続く打撃によって石核自体も半折している。もう一方の石核片1551+1522には、おもにe面を打面とする剝離痕が残っており、部分的には対向方向からの剝離痕も認められる。剥片1551は1563の剝離時に現れた節理面を打面としており、その打撃に伴い石核が破砕している。

接合資料No.12 [1323+(1302+1528)]

赤色チャート(母岩42)の接合資料。剥片1323が石核1302+1528に接合している。1302+1528の表面には節理面と古いネガティヴ面とが残り、裏面での剝離時に打面として用いられる。接合状況は石核の放置直前の状態を示すもので、裏面左側縁から1323を剝離したのち、さらにもう1枚の剥片を得た時点で石核が折損している。同面右側縁にも剝離痕が並ぶが、1323との前後関係は定かでない。

5 石器製作技術

ブロック 6 は栗生間谷遺跡のなかで最も出土量が多く、豊富な接合資料に恵まれている。ここでは剥片・石核・ツール（おもにナイフ形石器）の相互関係を推測し、石器製作の様相を概観する。

まず、サスカイトの石核は剥片のポジティヴ面側から 1～2 枚の剥片を剥離したものと、厚手の石核素材の両面からより多くの剥片を剥離したものとが認められる。前者の石核には、背面にポジティヴ面を取り込んだ薄手・貝殻状の剥片が対応すると考えられるが、作業面に残る剥離痕が小さく、ナイフ形石器とは必ずしも対応しない。一方、後者の代表例としては 1392 や接合資料 No. 3 の石核 1446 が挙げられる。接合資料 No. 3 を構成する石核 1446 の最終剥離痕を見ると、山形をなす稜線上を狙って剥片を剥離しており、結果として側縁～末端縁が直線状となる幅広の剥片を得ている。この石核に接合する剥片 1540 + 6011 の打面を見ても、角のついた稜線に接して打撃点が残っているので、このことは剥離経路においても同様であったらしい。また、接合資料 No. 5 (1123 + 1124) は石核の形態が判然としないが、入念な打面調整を施して剥片を連続剥離しており、1124 には 2 次加工も施している。これをナイフ形石器の未製品とみなすこともできよう。

このほか、接合資料 No. 4 (1334 + 1535 + 1537) は自然縫から直接的に剥片を剥離している可能性があり、作業面に求心的な剥離痕をとどめている。いずれも剥片の形態をあらかじめコントロールするような意图は認められず、部分的にはあれ鋭利な縁刃を備えた剥片を得るのが目的であったと考えられる。

統いてチャートを用いた石器製作について述べる。緑色・赤色チャートの角縛を母型とする石核は多面体状、サイコロ状を呈しており、節理面や古い剥離面を打面とする。打面・作業面の関係は打面が狭くなるか、作業面の状況が悪化するまで固定的で、両者をひんぱんに交替させるパターンは少ない。つまり、好都合な状況を任意的に探す場合が多いようで、結果として打面・作業面は交替するのではなく、むしろ不可逆的に転位しているようにみえる。また、接合資料 No. 9・同 10 などを見ると打面調整を施したうえで縦方向に長い剥片の剥離を試行している。特に後者の接合資料は、角縛の小口側から縦長の剥片 (1581・1166+1225) を 2 枚連続剥離し、一方をナイフ形石器に仕上げている。但し、総合的にはチャート製のナイフ形石器は 6 点と少なく、節理に富む石質から作業上の制約を受けているものと考えられる。

まとめると次のようになる。サスカイトの場合は剥片を石核素材とし、それが薄手のときはおもにポジティヴ面から貝殻状の剥片を 1～2 枚剥離する。また、石核素材が厚手になると剥離が両面におよび、打面形状が山形の剥片を特徴的に得ている。その結果、円盤状石核が残ることもある。石核はその多くが剥片を素材としているが、一部では自然縫を石核の母型としたものも見られる。チャートの場合は角縛を石核素材とするようで、縦長の剥片を狙ってはいるが失敗も多い。打面・作業面を転位させつつ剥片を剥離するパターンも見受けられるが、ひとたび打面・作業面の位置が決まると両者の関係は固定的となる。このように石材によって剥離技術が異なるとはいって、接合状況、あるいは剥片・石核との関係からは、いずれもナイフ形石器の製作に関与しているものと推論できる。但し、ナイフ形石器 1184 や角錐状石器 1385 は明確な背部整形剥片の不在から、ブロック内で製作された可能性が低く、搬入品とみなすのが妥当である。従って、ブロック 6 での石器製作は専ら切出形をなすナイフ形石器の量産を目的としたものといえよう。

第7節 ブロック7

調査地の西側、自然河川2と呼ぶ開析谷の西肩に広がり、石器ブロック6の南側約15mに位置する。形成された場所は北から南に・西から東に緩やかに傾斜する南向きの緩斜面である。ブロックの南側は後世の棚田造成の際に大きく削られており、その規模は明瞭ではない。現状では直径2mの範囲にサスカイト2点、安山岩1点、石英1点、配石2点が散漫に分布する。調査時はブロック6から流出したものと捉えていたが、整理段階で両者間の接合関係が確認されなかったため、別集中部として報告を行う。

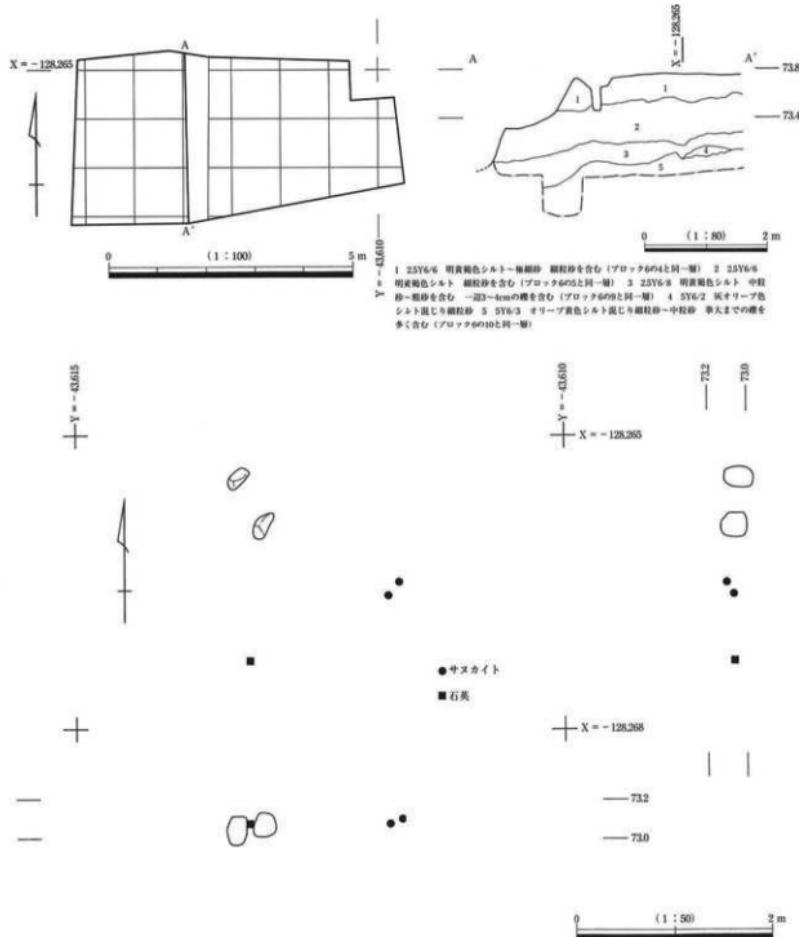


図65 ブロック7 平面・断面図(上)、石器平面・垂直分布図(下)

第6章 繩紋時代の遺構と遺物

第1節 繩紋時代の遺構

繩紋時代の遺構は約20基が確認された。これらは丘陵上や川合裏川の東に位置する扇状地状地形に分布しているが、その存在は極めて希薄である。繩紋時代の遺構面及び包含層を確認できたのは、川合裏川東側の扇状地状地形を調査した(その6)及び(その7)調査時においてである。(その6)調査区においては中世遺構面下に土石流堆積が厚く(約0.4~0.8m)みられる。それが繩紋時代後期中葉~晩期中葉の遺構面を著しく開析しており、遺存状況は良好でなかった。(その7)調査区では中世遺構面下約0.1~0.2mで繩紋時代晩期後葉の遺構面を、さらに0.55m下で繩紋時代晩期中葉の遺構面を確認した。両調査区ともに土石流堆積物が複雑に堆積しており、遺構面の認識は非常に困難を極めた。また、繩紋時代の包含層からは(その6)調査区で後期中葉~晩期中葉の土器が、(その7)調査区では晩期後葉の土器が出土している。一方、丘陵部では中世遺構面の精査中に散発的に繩紋時代の遺構が検出されるといった状況で、該期の遺構面は既に削平を受けて消失したものと判断された。これは、丘陵上の繩紋時代の遺物が中世包含層や現代の耕作土中から多く出土することや中世遺構面の精査中に旧石器製作址が検出されたことからも推測される。

以下に順を追って主要な遺構について報告する。

土坑559〔図68〕

丘陵西部において中世遺構面の精査中に検出された。南に開く緩斜面に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.45m、深さ0.4mを測る。南側を後世の棚田造成の際に削平されており、本来の規模は明確ではない。内部は明黄褐色シルトが堆積しており、中世遺構面ベース層との差がほとんどみられず、検出には困難を極めた。土坑内からは、口縁部を南側に向て横倒し状態の繩紋時代後期中葉の深鉢(第55図11~14)が底面から浮いた状況で出土した。土器は風化が著しく、遺存状況は極めて劣悪である。先述の深鉢以外に数個体の繩紋土器(第55図15~21)を確認したが、いずれも破片であり遺存状況は悪い。

自然河川2

丘陵西部を北西から南東に蛇行しながら開析し、中世後半段階には埋没する自然河川である。検出長は約240m、最大幅は約20m、深さ0.9mを測る。(その1)調査時において検出された中流域の最下層(青灰色砂礫層)から繩紋時代後期中葉の粗製深鉢(第54図2~10)が3個体以上出土した。土器は完形に復元されるものではなく、全体的に磨滅しているため近傍から流出したものと推定される。先述の土坑559はこの繩紋土器出土地点から西に約75m離れた場所に存在しており、一体に該期の生活空間が存在していたことを示唆している。なお、この河川の上・下流部分でも調査を行ったが、繩紋土器は出土しなかった。

土坑15〔図68〕

丘陵東部において確認された。南に伸びる丘陵先端部の平坦面に位置する。近世以降の大型土坑の底面で検出したため、上部は削平を受けていた。平面形は不整円形を呈し、直径0.8m、深さ0.18mを測る。埋土は3層に分かれ、黄色シルトや黄褐色細粒砂が堆積する。上層には炭化物を多く含んでいる。壁や

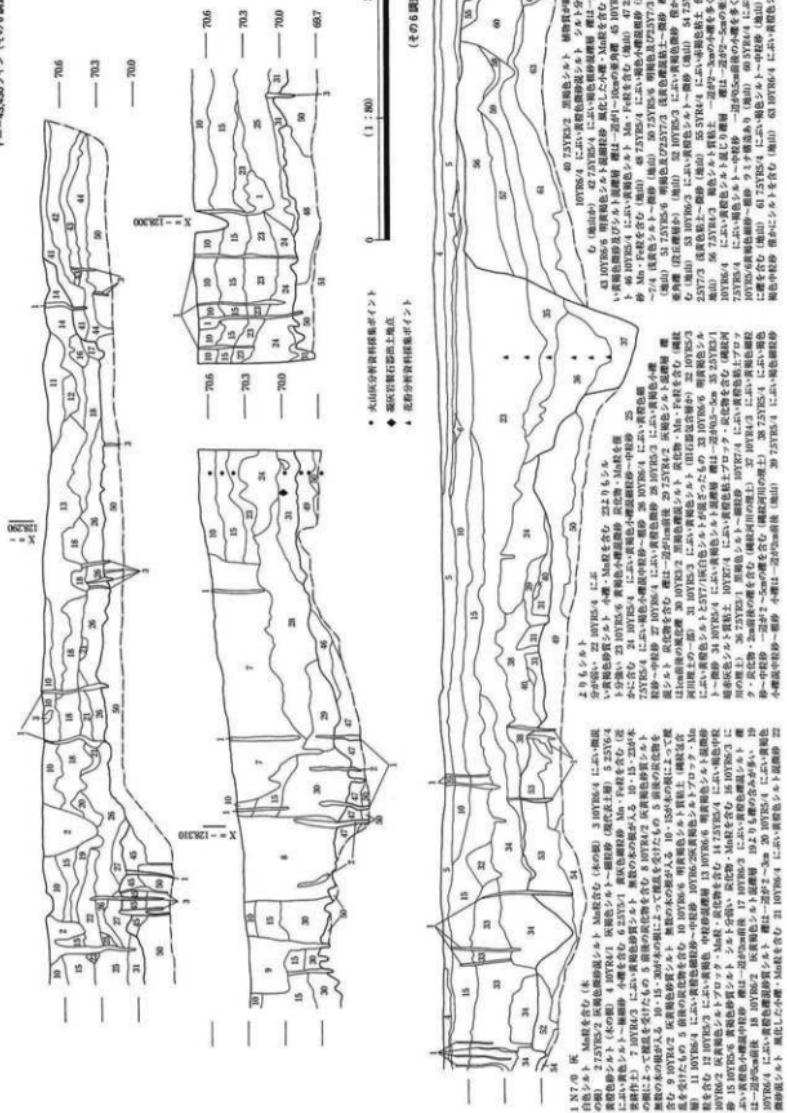


図66 丘陵部断面図

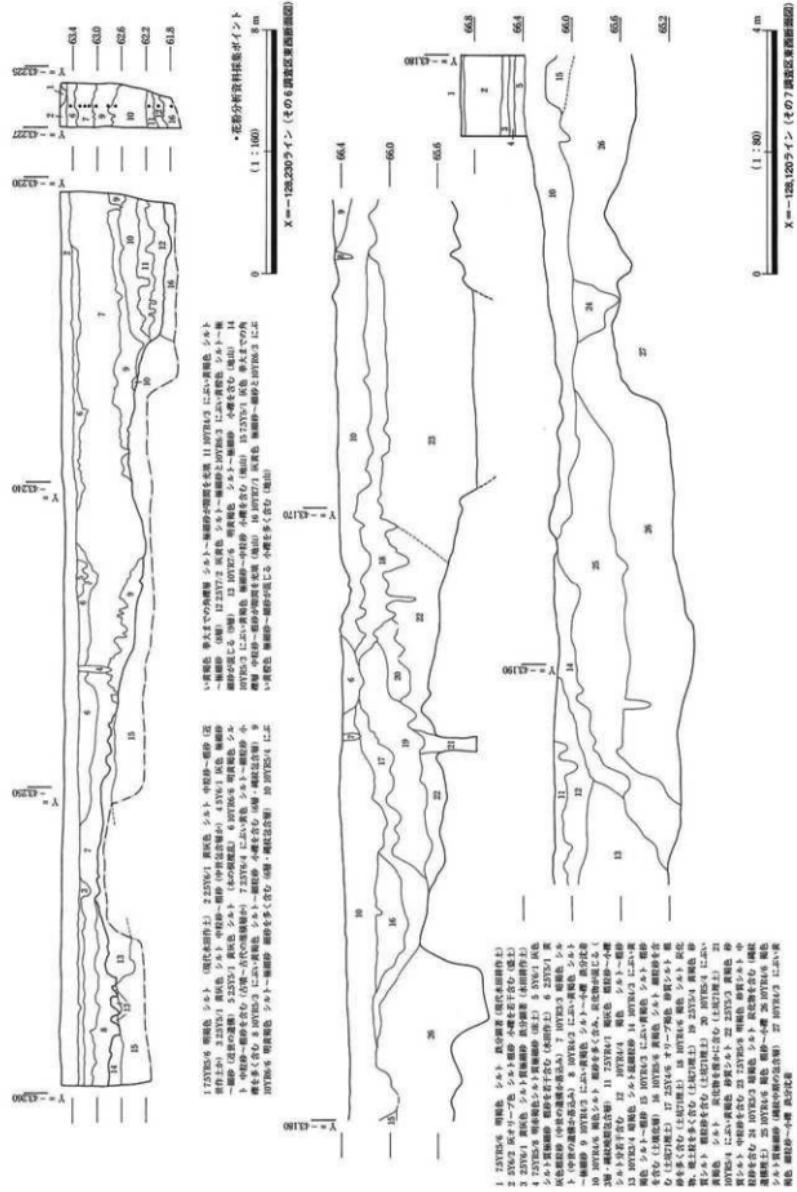


図67 川合裏東扇状地状地形断面図

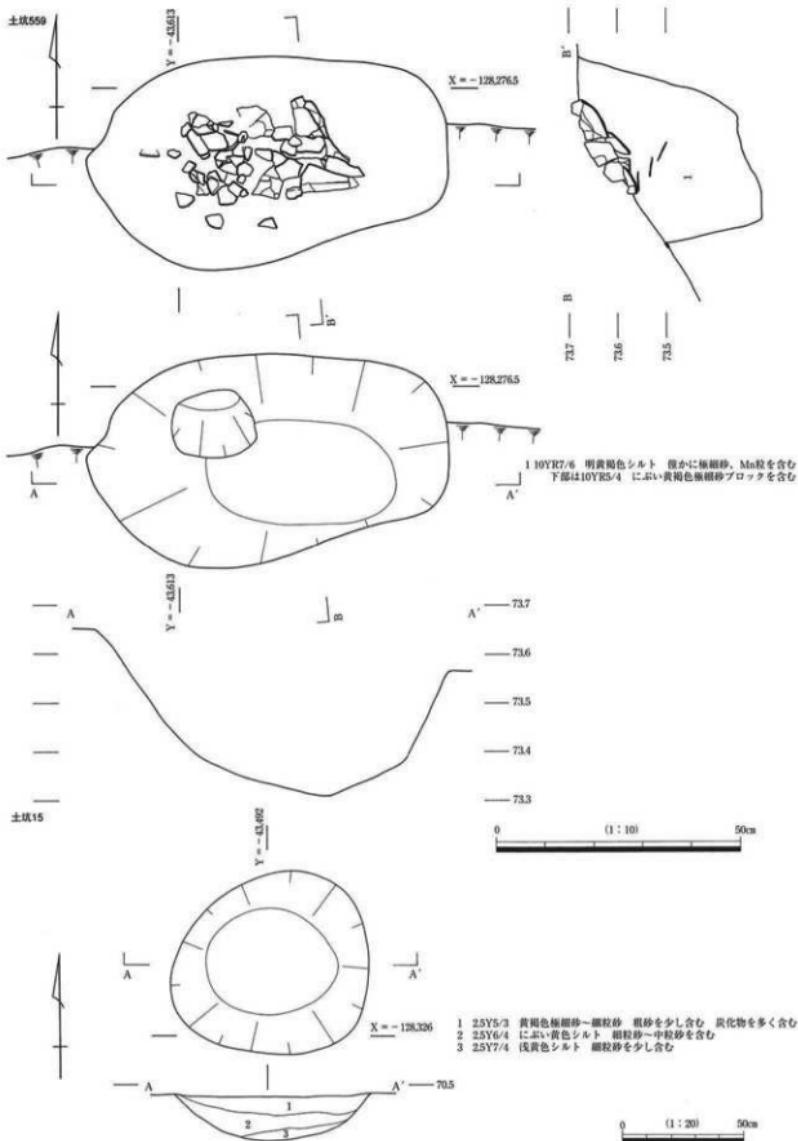


図68 土坑559(上)・土坑15(下)平面図・断面図

床面の被熱痕跡は弱く、高温での使用は想定できない。床面近くから縄紋時代中期前葉の深鉢(第55図23)の破片が1点出土した。

遺物集中地点1・2〔図69〕

丘陵東部において検出した。中世遺構面を精査中にサスカイト碎片や石錐がまとまって出土したため、その範囲を調査して確認した。調査時は石器が多く出土することから、縄紋時代の石器製作址と認識していた。しかし、整理作業において接合関係が全くみられなかったことやナイフ形石器の存在が判明したことから遺物集中地点として報告する。

遺物集中地点1では南北7m、東西9.5mの範囲から、サスカイト13点(うちナイフ形石器1点、被熱痕跡があるもの1点)、土器片5点、多量の炭化物がまとまって出土した。この範囲内には不定形土坑3基が確認されている。土器が土坑71に、サスカイトは土坑70に集中してみられる。土器は風化が進み時期を特定するには困難であるが、胎土から推定すると縄紋土器とみられる。土坑70(図70)は不定形土坑で、長軸2m・短軸0.8m・深さ0.2mを測る。2箇所を中世の遺構に切っていた。土坑内は黄褐色シルト質粘土が堆積し、炭化物粒を多量に含んでいた。この炭化物の¹⁴C年代測定の結果、 4160 ± 40 ・ 3870 ± 40 yB.P(補正年代)が導き出されている(第10章第3節参照)。

遺物集中地点2は集中地点1の南側約2.5mに位置する。北東から南西に向かって溝状に窪む。これは、後述する縄紋河川埋没後の痕跡である。遺物は南北12.5m、東西7mの範囲に分布し、サスカイト製石錐3点、チャート製異形部分磨製石器1点、サスカイト片33点、土器片、炭化物粒などが出土した。土器は集中地点1と同様に風化が進み、時期を特定するには困難であるが、胎土から推定すると縄紋土器と思われる。なお、両集中地点ともに遺物の垂直分布の上下幅は15cm程度で、まとまりは良い。

縄紋河川〔図71〕

集中地点2の下層で確認された。検出長は10m、幅4m、深さ0.8mを測り、谷頭にあたる。埋土は3層に分かれ、黒褐色粘土～中粒砂や砂礫が堆積する。堆積状況から一気に埋まったものと考えられる。花粉分析を行ったが遺存状況が悪く、古環境の復元にはいたらなかった。中～上層では縄紋時代後期中葉の鉢(第55図26)やサスカイト片がみられ、下層からはサスカイト製削器(第48図2023)や炭化物が出土した。河底近くから出土した炭化物のC14年代は 8320 ± 40 yB.P(補正年代)が与えられた(第10章第3節参照)。なお、この河川は旧石器時代の包含層を削っている可能性があり、河川右岸から凝灰岩製の削器1点(第36図2067)や被熱痕跡のある砾が出土している。

土坑79〔図73〕

川合裏川東側の扇状地状地形で検出した。(その6)調査区を南北に貫流する谷状地形の右岸に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺1.05m、短辺0.6m、深さ0.15mを測る。黄褐色シルト～極細砂が堆積しており、サスカイト剥片や縄紋時代晩期中葉の深鉢口縁部(第56図33)が出土した。この南東にはほぼ同規模、同形態の土坑80が存在する。いずれの遺構も性格は不明である。

Pit251〔図73〕

川合裏川東側の扇状地状地形で検出した。(その6)調査区を南北に貫流する谷状地形の左岸に位置する。平面形は不整円形を呈し、直径0.3m、深さ0.35mを測る。底面は2段掘りになっている。埋土は褐色シルトで炭化物や焼土粒を含んでいる。底面から浮いた状況で縄紋時代後期中葉の鉢(第56図32)が出土した。

溝24〔図74〕

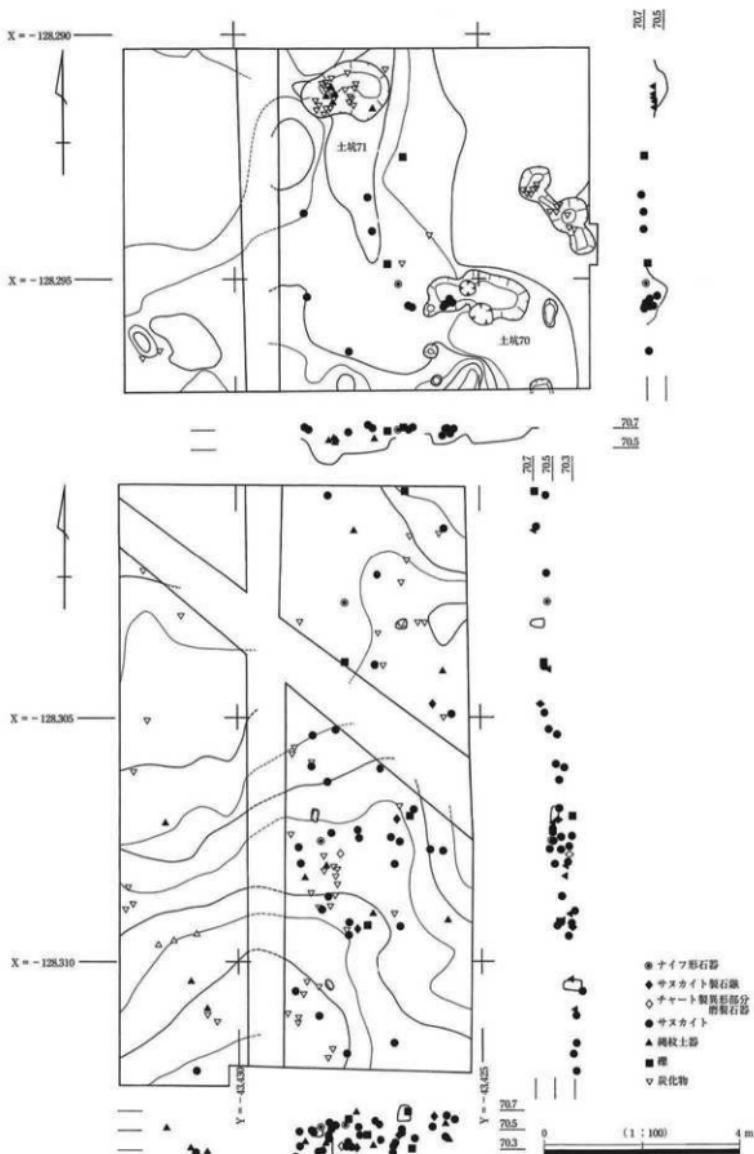


図69 繩紋時代遺物集中地点

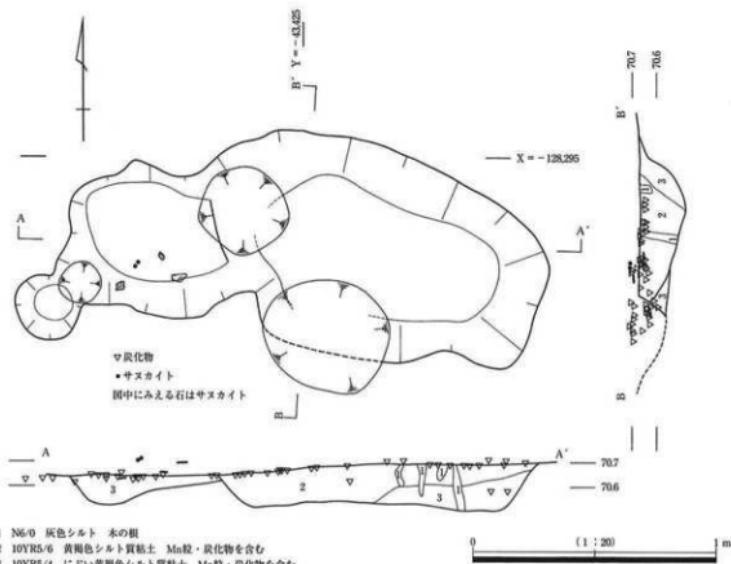


図70 土坑70平面・断面図

川合裏川東側の扇状地地形で検出した。(その6)調査区を南北に貫流する谷状地形の右岸に位置する。周辺には比較的多くの縄紋時代の遺構が集中する。溝24は北西から南東に流れ、検出長4.8m、最大幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色極細砂～細砂で、底面から浮いた状態で縄紋時代後期中葉の深鉢(第55図28・29)が出土した。なお、この溝は溝31と切り合っているが、新旧関係は確認できなかつた。

土坑81〔図75〕

溝24の北東約2.4mに位置する。平面形は円形を呈し、直径0.35m、深さ0.06mを測る。上部は削平されているが、サスカイトの板状石材2枚が重なるように置かれていた。サスカイト埋納遺構と考えられる。埋土は灰色シルトである。板状石材はそれぞれ長さ17cm、幅9cm、厚さ2cm、重量349g(第51図2022)・長さ19cm、幅16cm、厚さ2.5cm、重量919g(第51図2021)である。産地分析の結果、香川県金山東産と推定されている(第10章第2節参照)。

土坑82〔図74〕

溝24の北東約2.2mに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色シルト～極細砂である。遺構の性格は不明である。

土坑83〔図73〕

溝24の北約0.5mに位置する。平面形は卵型を呈し、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.15～0.2mを測る。埋土は黄色極細砂～細砂である。遺構の性格は不明である。

土坑81～83は土器が出土しなかったため、所産時期の決定は困難であるが、いずれも溝24に近接して築かれており、埋土が類似する点を考慮して縄紋時代後期中葉の遺構と捉えておきたい。

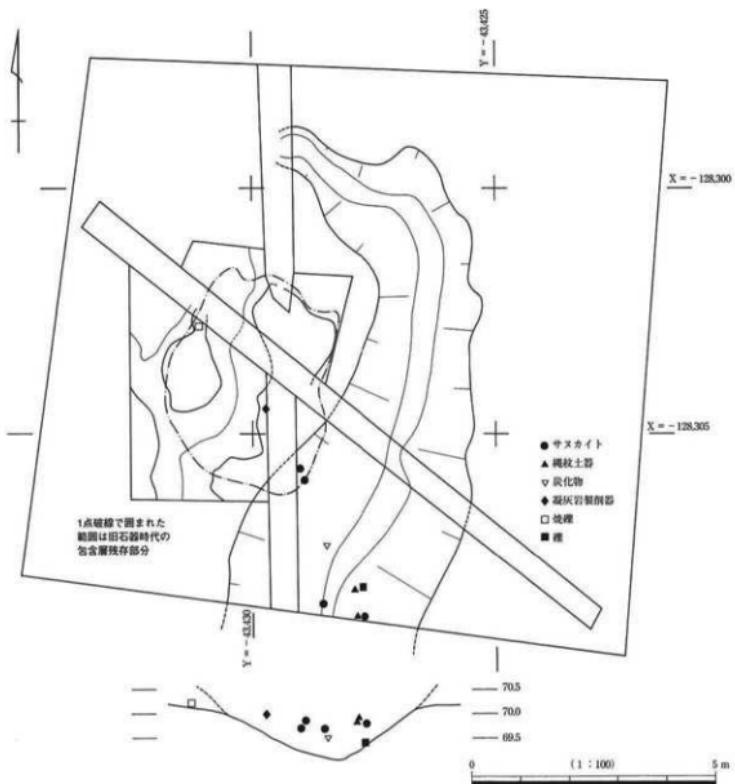


図71 縄文時代河川

落込み71〔図76〕

川合裏川東側の扇状地状地形で検出した。先述した溝や土坑などよりも約150m北東に位置し、比高差5mを測る。平面形は不定形でさらに底面は凹凸が激しい為、人為的に掘削されたものとはみなし難い。埋土の観察結果、北東から南西に向かって流れる緩やかな自然の落込みであると判断した。埋土は大きく3層に分かれ、炭化物を多量に含む部分で縄文時代晩期後葉の突帶紋深鉢(第59図78~95)がまとまって出土した。また、焼土塊やサスカイト剣片(第49図2103)も出土している。さらに周辺には円礫や大形の角礫がみられ、川合裏川から搬入されたものと推定される。土器は全体的に磨滅がみられる為、調査区域外の北側に活動領域を想定し、そこからの流れ出たものと考えたい。

Pit148〔図76〕

川合裏川東側の扇状地状地形で検出した。下層確認のためトレンチ調査を行い、落込み71が検出された造構面よりも0.55m下で確認された。トレンチの断面にかかったため、平面形は不明であるが、規模は長軸0.7m以上、短軸0.7m、深さ0.7mを測る。埋土は褐色シルトで、炭化物や粗砂を含んでいる。

底面から浮いた状態で縄紋時代晩期中葉の粗製深鉢(第61図128~130)が出土した。

丘陵上では、確認できた遺構は極めて少なく、縄紋時代の遺構面は後世の土地改変に伴って既に削平されたものと推定される。扇状地状地形では、西側の低い部分で晩期後葉の遺構が確認出来ず、土器の出土もみられないことから、既に該期の遺構面は削平されたものと考えられる。一方、東側の高い部分では突帯紋土器の出土が顕著で、遺構も存在することから晩期後葉の遺構面は部分的ではあるにせよ残存していることが明らかになった。また、東側下層では晩期中葉の遺構が確認されたことから、この遺構面は後期中葉~晩期中葉の遺構が検出された西側の遺構面と同時期である蓋然性が高く、さらに西側に向けた広がりを想定することが可能であろう。

第2節 縄紋時代の遺物

縄紋時代の遺物には土器と石器がみられる。出土した土器は磨滅や風化が進んでおり、全体的に遺存状況は良くない。また、大半が細片になっており、完形に復元されるものはなかった。所産時期は後期から晩期のものが主体を占め、僅かに中期に遡るもののが確認された。また、数点の弥生土器が出土したので併せて報告する。石器は石錫や有舌尖頭器などが存在する。多くのものは遺構に伴わず、中世以降の包含層や現代の耕作土から出土した。

1 出土土器 [第54~61図・図版96~100]

1~10は自然河川2最下層(青灰色砂礫)出土の土器である。1は弥生時代中期の壺口縁部。口縁端部を下方に垂下させる。口縁部内面と外面には直径2mmの円形刺突紋を施す。

2~10は粗製深鉢である。2は平縁口縁で、頸部から口縁部にかけてやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。磨滅が著しく調整不明。3~7は胴部片。3・5・6は内外面ともに条痕を施す。8は口縁部から胴部。口縁は平縁である。風化、磨滅が著しくかなり器壁が薄い。内外面に幅2.5~3cmの粘土紐の接合痕を残す。9・10は底部。9は上げ底になっている。これらは一乗寺K式段階の所産か。

11~22は土坑559出土土器である。11~14は波状口縁の深鉢。波頂部直下を肥厚させ、波頂部に円形の刺突を施す。風化、磨滅が著しくかなり器壁が薄い。一乗寺K式の新段階に比定できる。15~21は平縁口縁の深鉢。外面には条痕を施すものがみられるが、風化、磨滅が著しく調整は不明な点が多い。

23は土坑15出土。キャリバー形口縁部直下付近の破片。外面は撚り糸を地紋とし、円形の刺突紋を施す。船元II式であろう。

24・25・28は底部破片。24は弥生土器底部。25・28は縄紋土器の上げ底になった底部。24は近世耕作土、25は遺物集中部2、28は土坑28出土。

26は縄紋河川上層出土。鉢の口縁部から胴部片。口縁は平縁口縁で、端部をやや肥厚させ丸くおさめる。頸部と胴部の境に1条の沈線が遡る。胴部には縄紋を施す。風化が進み、かなり脆く、調整は判然としない。北白川上層式3期に比定される。

28・29は溝24出土。28・29は平縁口縁の深鉢。頸部から緩やかに外半して口縁部にいたる。28は外面に幅2.5cmの粘土紐接合痕を残す。両者とも風化が進み、調整は不明。北白川上層式3期~一乗寺K式の所産。

30・31はpit250出土。30・31ともに深鉢胴部片。30は外面に縄紋の後丁寧なナデを、内面は条痕の後

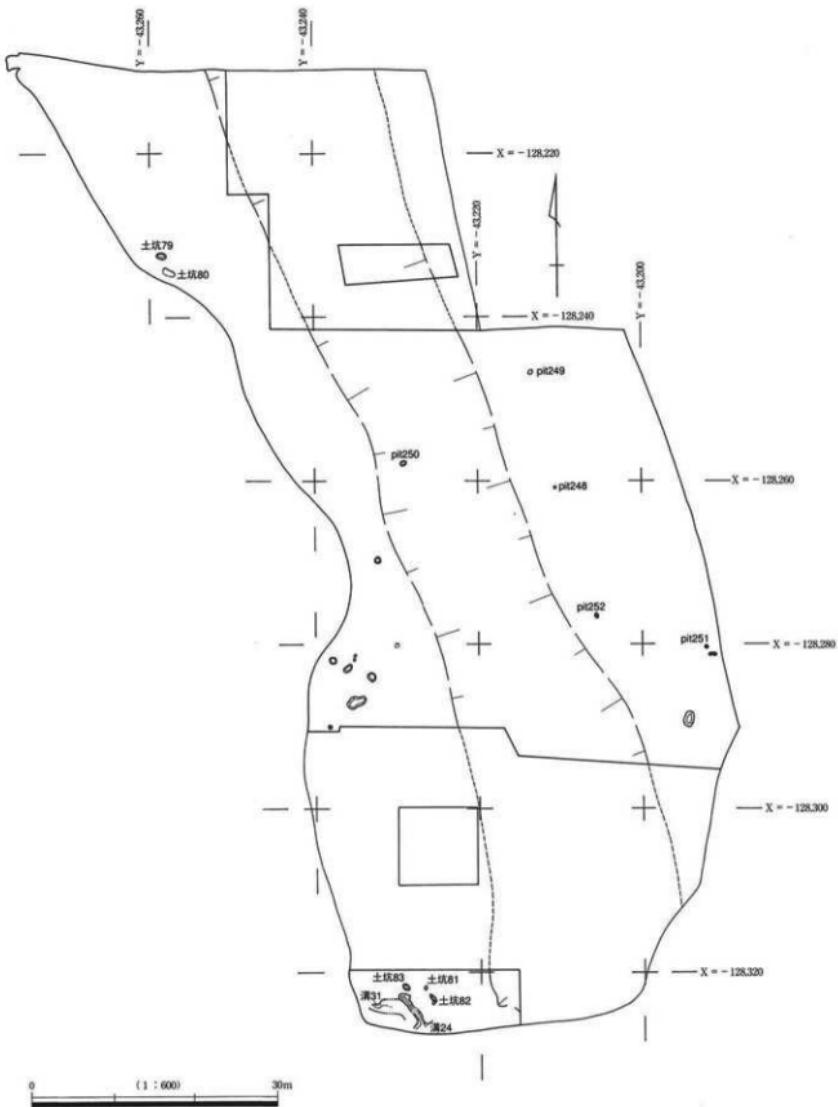


図72 川合裏川東扇状地遺構分布図（その6 調査区）

丁寧なナデを施す。31は外面にLRの縄紋を施す。

32はpit251出土。平縁口縁の深鉢である。頸部から口縁にむけて大きく外半する。口縁端部は丸くおさめる。頸部と胴部の境に1条の沈線が廻る。口縁から頸部にかけては横位のミガキを、胴部にはLRの縄紋を施す。内面には粘土紐の接合痕が残る。北白川上層式3期であろう。

33は土坑79出土。平縁口縁の深鉢。外面には条痕を施す。滋賀里Ⅲa式に比定できる。

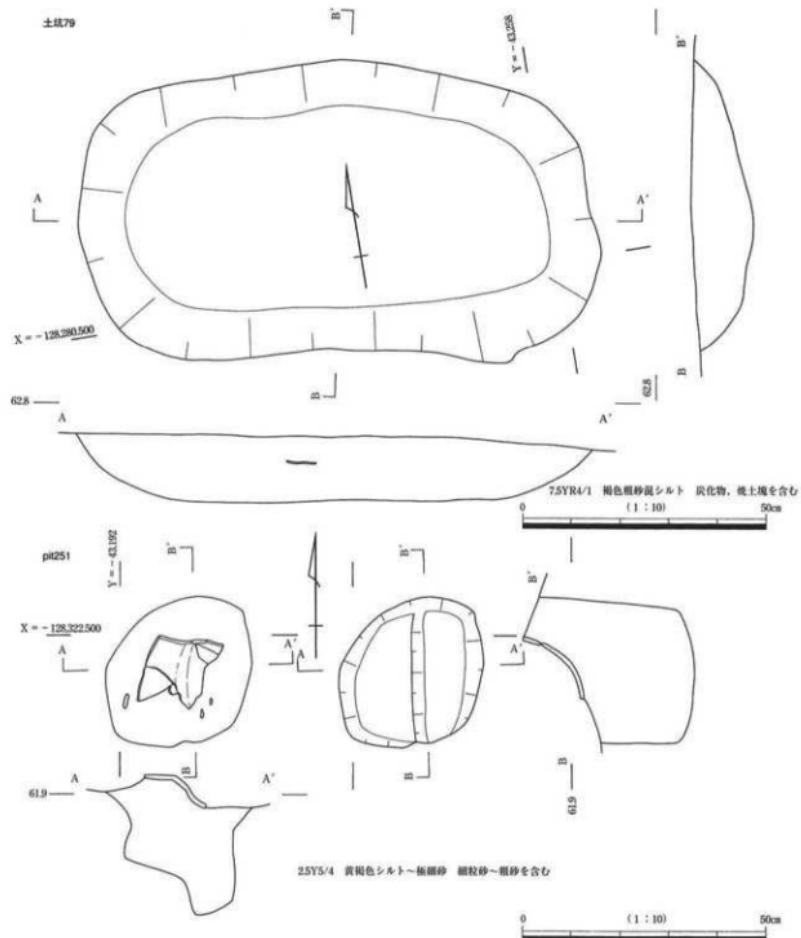


図73 pit251・土坑79 平面・断面図

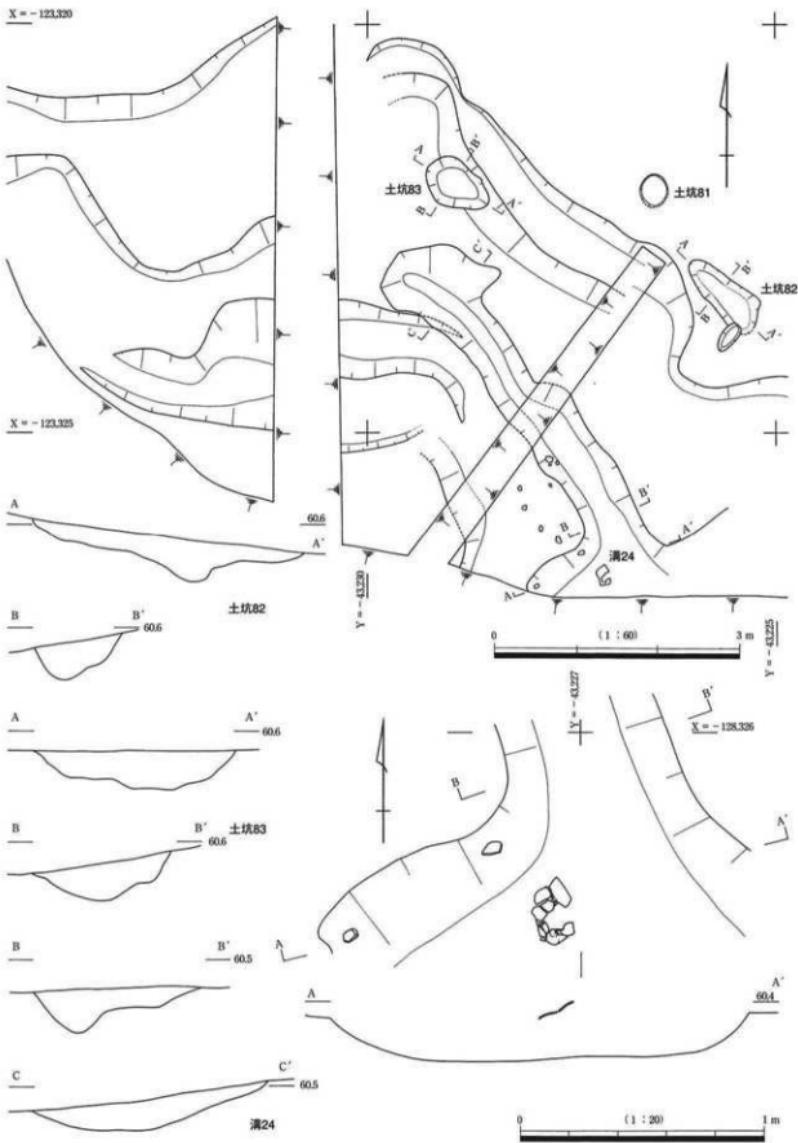


図74 溝24ほか平面・断面図

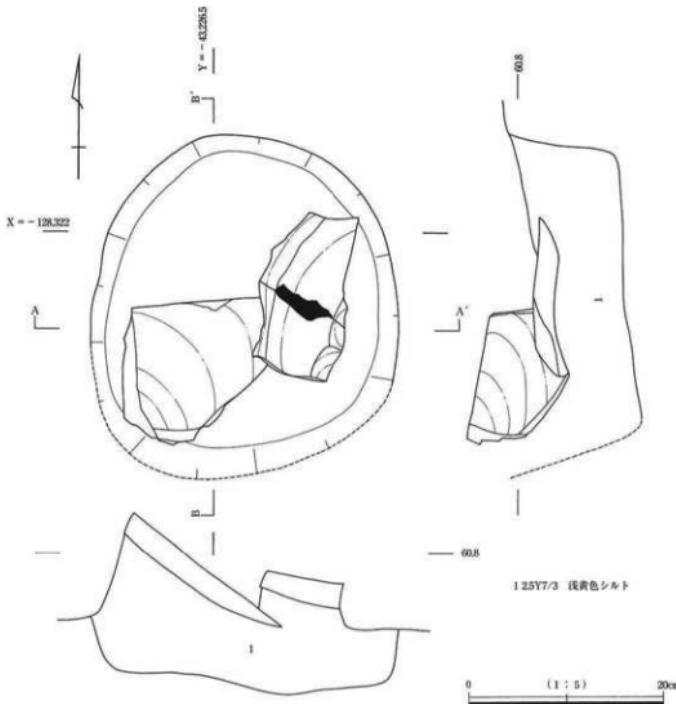


図75 土坑81平面・断面図

34は土坑80出土。胴部破片。外面には細密条痕を施す。内面は剥落が著しく不明。

35~77は縄紋時代の包含層出土。但し、38は崩落土出土で出土層位は不明。弥生前期の壺口縁部である。7条以上の多条沈線が廻る。

35は浅鉢である。頸部から口縁にむけ外半する。口縁端部直下に浅く細い1条の凹線を、頭部と胴部の境にしっかりと1条の凹線を廻らせる。

36は注口土器の注口部である。先端を欠損。基部側を肥厚させる。また、基部下端に直径1.3cm、厚さ0.5cmの円形浮紋を貼り付ける。宮窓式古段階か。

37は上げ底の底部である。底部外面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、高台を作る。外面見込み部には「ノ」の字状の粘土紐を貼り付ける。一乗寺K式であろうか。

39は平縁の口縁部。LRの縄紋を施し、口縁部直下に2条以上の沈線が廻る。北白川上層式3期に比定される。40はやや波状口縁気味の深鉢か。口縁端部を欠損する。口縁直下に沈線を廻らせ、沈線間にRLの磨り消し縄紋を施す。北白川上層式3期の所産であろうか。

41は底部付近の破片。かなりすばまた底部が想定できる。外面には細かな縄紋を施す。

42は胴部破片。1条の沈線が確認できる。沈線下には縄紋が施される。北白川上層式3期の所産か。

43は粗製深鉢胴部破片。頸部と胴部の境で緩やかに屈曲させ、頸部はやや薄く作られる。胴部は条痕を施す。滋賀里Ⅱ式に比定される。

44は深鉢口縁部破片。平縁口縁である。45は深鉢底部破片。やや上げ底状になる。

46は精製深鉢である。口縁部は波状口縁を呈する。口縁端部を欠損。波頂部下位に3条の沈線で横位の菱形の紋様を描き、その中央に波頂部から垂下するように蛇行沈線紋を施す。なお、菱形を描く沈線

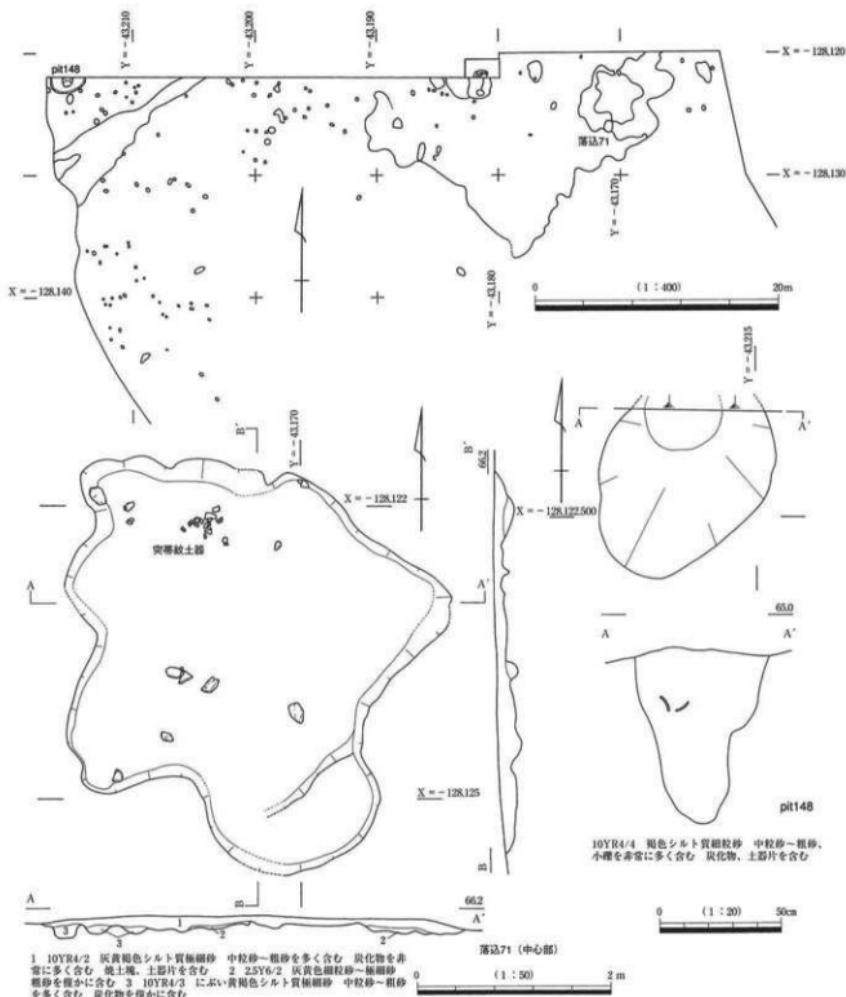


図76 川合裏川東扇状地（その7）遺構分布図(上)・落込71(中)・pit148(下)平面・断面図

間にはL Rの磨り消し繩紋を施す。北白川上層式3期に比定される。

47は平縁口縁である。端部を丸くおさめる。口縁直下に3条以上の沈線を廻らせる。下2条の沈線間は磨り消し繩紋を施す。北白川上層式3期であろうか。

48は平縁口縁である。端部は丸くおさめる。頸部から口縁に向内彎する。口縁に平行して1条の沈線が廻り、渦巻き紋に取り付く。渦巻き紋から右斜め方向に2条の沈線がはしる。この沈線間には磨り消し繩紋が施される。北白川上層式3期と考えられる。

49は平縁口縁である。外面ともにナデを施す。後期の所産である。50は胴部破片。外面には浅く短い沈線で蛇行紋を描く。風化が進み、詳細は不明。後期の所産。51は胴部破片。矩形の沈線がみられ、磨り消し繩紋を持つ。中津式であろう。

52は平縁口縁である。端部は四角くおさめる。頸部から口縁に向左外半し、口縁直下で垂直に立ち上がる。一乗寺K式と思われる。

53は胴部破片。1条の沈線が確認できる。沈線下にはR Lの繩紋が施される。北白川上層式3期か。

54は注口土器胴部破片である。屈曲部に細いR刻みを廻らせる。また、卷貝による押圧痕がみられる。宮滝式に比定される。55は注口土器の注口部である。先端を欠損。基部側を肥厚させる。また、基部下端に直径2cmのドーナツ状の円形浮紋を貼り付ける。宮滝式古段階か。

56~58は底部破片。56・58は上げ底、57は丸底である。56は底部から緩やかに立ち上がり、そこから外反する。58は底部から胴部に向け大きく開く形態を持つ。

59・60は深鉢頸部の破片。59は幅広の凹線を1条、60は幅の狭い凹線を2条廻らせる。宮滝式であろう。61は深鉢頸部から胴部にかけての破片。頸胴部の境に段を持つ。

62~64は平縁口縁深鉢の口縁部。64は胴部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部の境に段を持つ。口縁部が段より大きく外反する。口縁端部は四角くおさめる。口縁および胴部外面には二枚貝による横位の条痕が施される。63・64は口縁端部を丸くおさめる。いずれも滋賀里Ⅲa式に比定される。

65~77は深鉢胴部片。いずれも外面には条痕を施す。66は卷貝による条痕と思われ、他と比べて条痕が細かい。残りの条痕は原体が判然としないが、植物の茎などを束ねたものであろうか。滋賀里Ⅲa式と思われる。これらの土器は他の土器に比して、赤色くさり縞を多く含むことに特徴がある。

78~95は落ち込み71出土。78~84は深鉢口縁部。いずれも端部は尖り気味に仕上げる。78~81は頸部から口縁部にむけてやや内彎して立ち上がり、83・84は外反する。78~80は口縁端部に接して断面三角形の突帯を廻らせる。突帶上は78が無刻み、79・80が大振りなD字刻みを施す。81は口縁端部から僅かに下がった位置に断面三角形の突帯を廻らせる。突帶上に小振りなD字刻みを施す。82~84は口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を廻らせる。突帶上には小振りなD字刻みを施している。85は深鉢胴部。1条の突帯を廻らせる。風化が著しく、突帶上の刻みの有無は不明。生駒西麓産の胎土。86は深鉢の頸部から口縁部。頸部から口縁部にむけて緩やかに外反する。口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を廻らせる。突帶上には小振りなD字刻みを施す。生駒西麓産の胎土。

87・88は平縁口縁の壺もしくは鉢。87は頸胴部の境と口縁端部内面に1条の沈線を廻らせる。頸部から口縁部にむけ内彎しながら立ち上がり、口縁端部でやや外反させる。口縁端部は丸くおさめる。88は破片のため、器形は判然としない。頸部から口縁にむけて内傾しながら立ち上がり、口縁端部で垂直に立ち上がる。端部は四角く仕上げる。

89は鉢。頸部から口縁部にむけて外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げ、端部に接

するように断面三角形の突帯を廻らせる。突帯上は無刻み。

90・92～94は粗製深鉢胴部破片。90は頸部と胴部の境に段を持つ。外面下半には煤が付着する。92・93は外面に条痕を施す。94は外面に縄紋を施す。磨滅や剥落が著しく詳細不明。後期の土器と考えられ混入品とみられる。

91は浅鉢口縁部か。胴部から口縁部にむけ内彎しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。95は浅鉢の底部である。平底に作られる。

78～91・95は船橋～長原式であり、やや時間幅を持った資料と思われる。

96～126は包含層出土。96～110は深鉢口縁部。96～100・106は口縁端部からやや下がった位置に、101～105・107～109は口縁部に接して突帯を廻らせる。104・105・108の突帯は断面三角形、102・103は断面垂下した三角形、96～98・101・106は断面台形、99～100・107・109は断面蒲鉾状を呈する。突帯上には96～98・104～106が大振りなD字刻みを、99・109は小振りなO字刻みを、100・103・107は小振りなD字刻みを施す。102・108は無刻みである。110は口縁端部を欠損する。突帯は断面台形を呈し、小振りなD字刻みを施す。なお、107・109は壺口縁部の可能性も考えておきたい。

111・112は深鉢胴部破片。断面三角形もしくは蒲鉾状の突帯を廻らせる。突帯上は小振りなD字刻みを施している。

113・114は平縁口縁の壺もしくは浅鉢口縁部。113は端部を欠損。頸部から口縁部にむけて内彎しながら立ち上がる。口縁端部内面には1条の沈線を廻らせる。115は壺口縁部。口縁端部から下がった位置に断面三角形の突帯を廻らせる。突帯上は無刻み。

96～115は船橋～長原式であり、やや時間幅を持った資料である。

116～118は粗製深鉢胴部片。119は壺もしくは浅鉢の頸部片。1条の沈線が廻る。120・121は深鉢胴部片。外面にはLRの縄紋を施す。後期の所産であろう。122～126は底部。124は上げ底に作られ、他は上げ底気味に作られる。122～126は出土層位からみて突帯紋土器の底部と考えられる。

127～129は土坑148出土。127・129は粗製深鉢。底部から外反しながら立ち上がるバケツ状の器形。口縁端部は四角く仕上げる。128は底部片。いずれも滋賀里Ⅲa式併行か。

2 出土石器

(1) 有舌尖頭器〔第46図・図版84〕

1611・1930・1605・1968は全てサヌカイト製の有舌尖頭器である。1611・1930は先端を新しく欠損するが舌部を残存する資料である。ともに長さを復元しても10cmを超えることはなく中形品の有舌尖頭器である。

1611は剝離面が明瞭であるが斜並行剝離痕は観察できず、通常の剝離による整形である。舌部の調整は側縁部の調整以後に施す。1930は全体的に磨滅しており稜線が不明瞭で、ローリング作用を受けているが、それでも有舌尖頭器に特徴的な押圧剝離による細長い斜並行剝離痕が顕著である。1611と同様、舌部は側縁の調整以後に作出している。

1605・1968は新しく欠損しているため舌部は残存しないが、全体の形状が細身の尖頭器状に先端を作りだし、押圧剝離による細長い斜並行剝離痕が顕著に認められることなどから有舌尖頭器だと認定できる資料である。1605は押圧剝離による斜並行剝離痕が顕著に観察でき、中央の最も厚い部位を越えて反対側縁付近までの押圧剝離を施している。残存する基部側には斜並行剝離と異なる方向から、舌部の調整剝離と考えられる剝離痕が観察できることから、舌部に近いところまでが残存している可能性が高い。

舌部の形状は不明であるが、残存長で8cmを測り、復元長では10cmを超える大形品であったものと推定できる。また、側縁には押圧剥離以後に調整を加え、細かな鋸歯状の側縁に仕上げている。1968は全体的にローリング作用のため稜線が不明瞭となっているが、それでも押圧剥離による細長い斜並行剥離痕が顕著に認められることから有舌尖頭器だと認定できる。先端部には使用に伴う衝撃剥離痕も観察できる。また、欠損部以下については全く不明であるが、残存長で7.5cmを測る。

(2) 尖頭器〔第46図・図版85〕

1616・1959・1911・1933は全てサスカイト製の尖頭器である。1616・1959・1933はほぼ完形で全体の形状を知ることができ、1911は先端部のみの残存である。

1616は扁平な剝片の周辺から簡単な調整によって整形しており、両面に素材面を残している。また、側面形を観察するとやや彎曲している。1959は幅に対する厚さが大で、厚手の印象を受ける。厚さを減じるために側縁から調整を施しているのであろうが、側縁全体にわたって後が潰れてしまい、その調整のほとんどは階段状剥離を呈している。1911は尖頭器の先端部片であるが、剥離面が幅広く、その大部分が階段状剥離を起こしていることなどから、先述してきた有舌尖頭器及び尖頭器とは異なる調整加工が考えられ、弥生時代以降の尖頭器である可能性が高い。1933は折損面を基部側に用いながら製作されたものと考えられるもので、両面に素材面を残している。全体的に尖頭器とするには形状の点から問題があるかもしれないが、先端部を作りだしていることから尖頭器と考えた。基部には中茎状の小突起が見られるが、中心軸からはずれている。尖頭器を製作する過程でこのような小突起が形成されることなく、またこの小突起は2回の簡単な剥離から形成されており、両端からの調整によって偶発的に形成されたと考えた方がよい。

(3) 石鎚〔第47図・図版86・87〕

2031が平基無茎式、2085が円基式、2111が凸基式、1949は折損してしまっているが有茎式である他は、全て凹基無茎式の石鎚である。肉眼観察ではあるが、490が良質な赤色チャート、1931・2031が金山産サスカイト、2008が二上山産、金山産とも判断できないサスカイト(安山岩)である他は全て二上山産サスカイトである。平面形態としては抉りの浅いものや深いものなど様々な形態があるため、ここではその分類はおこなわず、特徴的なことについてのみ記載する。

自然面を残すものが1606・1924の2点あり、ともに片面の中央部のみに観察できる。素材面を残すものには、片面のみのものが1606・2053・1679・1841・1736・1993の6点あり、両面ともに残すものが1931・2008・2031・2085・2111の5点ある。注目すべきことは、肉眼で金山産サスカイトと同定した2点の資料が、ともに両面に素材面を残していることである。これは金山産サスカイト本来が有している、薄く扁平に剥離できるという石質を活かした製作方法をとっていることが窺える。

また、1659は一般的に鉄形鎌と呼ばれているものである。1993は側縁が鋸歯状を呈する石鎚である。2085・2111・1949はその形態的特徴や1枚の剥離面が幅広いことなどから弥生時代以降の石鎚の可能性が高い。これらの資料は他の石鎚と比して明らかに風化が進行していないことからも追認できる。

(4) 石匙〔第48図・図版88〕

1601・1791の2点が出土している。1601は肉眼観察では二上山産サスカイト製であり、背面に自然面を付着する剝片を素材としている。素材となつた剝片の打点付近につまみ部を製作するが、つまみは全体の中央ではなく、少しづれた位置から斜位方向に作りだされている。また、剝片の末端側の両面に平坦な剥離を施し、直線状の刃部を作りだしている。1791は肉眼観察による限り金山産サスカイト製であ

り、刃部調整は両面に認められ、その形状は側面観でジクザグ状に作りだされている。また、つまみ部は中央から刃部に対してほぼ垂直方向に設定されており、刃部よりもつまみ部のほうが大きく作られている。

(5) 削器〔第48図・図版88・89〕

2083・2023の2点が出土している。2083は肉眼では金山産サスカイト製であり、若干潰れているが、自然面を打面とする剝片を素材としている。一部を折損するが、素材剝片の形状に沿って、ほとんど角度を変えない調整を両面に施して刃部を作りだしている。また、風化の度合いや石質などから後述する板状石材2021と同一母岩であった可能性が極めて高いが、接合関係は認められなかった。

2023は肉眼観察で二上山産サスカイト製のものであり、剝片を素材とするが、その打面は調整により除去している。また、素材剝片の末端には極めて精巧な作りで、腹面側から背面側にかけての刃部調整が施されている。刃部調整は素材剝片の角度を大きく変形するものであり、最も角度の大きいところで63度を測る。この資料は同一層から検出した炭の¹⁴C年代測定法によって 8320 ± 40 y.B.P.という年代が出されており、その年代に近い時期に帰属する資料である。

(6) 異形部分磨製石器〔第48図・図版89〕

2006の1点のみの出土であるが、所謂トロトロ石器と呼ばれているものである。石材は半透明の白色チャート製であり若干灰色がかっている。全体的に研磨されており剝離面が不明瞭である。特に体部中央の最も厚い部位には両面とも明らかな研磨痕がある。また、片方の脚部は若干欠損しているため抉りが不明瞭であるが、もう一方の側縁下方付近には浅い抉りを施す。また、先端を丸くおさめていることなど、異形部分磨製石器の特徴を全てにおいて備えている資料である。

(7) 石錐〔第48図・図版89〕

2107・2045・1779・1642の4点が出土している。2107・2045は明瞭に錐部とつまみ部が区別できるもので、2107については蛍光X線分析により二上山産サスカイトと同定されている資料である。2107は自然面を打面とした剝片を素材としたもので、錐部が剝片の末端側に設定されるが折損のため残存していない。残存部から推測するに、錐部の調整はあまり施すことなく、簡単で粗い作りをしていると考えられる。2045はつまみ部を若干折損するが、大きく素材面を残している。比較的短めの錐部を両面からの調整により作りだしている。錐部は磨滅痕を観察できないが、断面形においてやや丸みを持っている。

1779・1642はともに錐部とつまみ部とが連続しているため、その区別が不明瞭なものである。1779は自然面を打面とする剝片を素材としており、素材剝片を斜位に用い、その側縁と末端縁の交差する部位に錐部を設定している。錐部先端には使用による磨滅痕と考えられる痕跡が認められる。1642は両面に素材面を残す。錐部先端の断面形がやや丸みを持つことから石錐と認定したが、石錐の可能性も否定できない。

(8) 両面加工石器〔第49図・図版90〕

ここでは器体を両面加工しているものの内、形態が不明なため器種の特定が不可能なものを一括して両面加工石器とした。これらはあくまでも器種不明な両面加工の石器であるが、その形態的特徴や製作技術などの視点から考え得る器種についても若干触れておきたい。全点で7点が出土している。

1998・1660・1600・2088はともに石錐の可能性が考えられるものである。1998は大きさや断面形が菱形を呈していることなどの点から石錐先端部である可能性が極めて高い。1660・1600はともに小形の両面加工石器であり、形状、大きさの点からみて石錐の可能性が高い。2088は石錐が縦方向に折損した

もの、あるいは磨滅痕が観察できないものの石錐の可能性も考慮する必要がある資料である。

1639は上記の石錐と推定される資料と比べると、比較的厚手であり、石錐の調整痕と比べて比較的幅広で大きな剥離痕であることなどから、尖頭器の先端部の可能性が高い。しかし、石匙の刃部片の可能性も考えられる資料である。

2049は連続的に調整が施されている1側縁が刃部と想定される。その調整加工は片面からのみ施す。また、その調整角度は比較的大きく石匙の刃部の調整角度に近いことから、石匙の刃部片の可能性が考えられるが詳細は不明である。

1915は両面に素材面を残し、側縁から大きな剥離で厚さを減じ、その後細かな整形を行なっている。また、その調整は幅広であることなどから弥生時代以降における槍先形尖頭器の体部片の可能性が高い。

(9) 板状石材〔第49・51図・図版91・巻頭カラー図版〕

2103は螢光X線分析によって二上山産サヌカイトと同定されている資料であり、板状石材を素材として用いた石核である。表裏両面には板状に剥離した際の平坦面を大きく残しており、表面では少なくとも2枚以上の剥片を生産している。作業面は表面1面のみに限定され、剥片が側縁の自然面を打面として生産されている。また、1側縁には自然面を残すが、その他の全ての側縁が剥片剥離以後に折損している。これら折損には、明瞭な分割した痕跡は観察できない。

2022・2021は螢光X線分析によって金山産サヌカイトと同定されている資料であり、ともに石材の石理方向に沿った状態で生産された板状石材である。両者ともに板状石材から剥片を生産しており、これらはともに石核としての役割を果たしている。2022は表裏両面に板状に剥離した際の平坦面を大きく残しており、表面では少なくとも2枚以上の剥片を剥離している。まず始めに板状石材を準備し、半裁したかのように折れた板状石材の折損面を打面として比較的小形の剥片を1枚生産し、その後打面を自然面側に転位して新たな剥片1枚を生産している。作業面は表面の片面に限定される。

2021は表裏両面とも板状石材を生産した際の平坦な剥離面を大きく残しているが、両面に作業面を設置して剥片を生産している。まず始めに表面から1枚の剥片を剥離した後、その後反転して側縁を移動しながら4枚以上の剥片を生産している。これら生産された大部分の剥片の末端は石核側の状況から、階段状剥離を呈すものと考えられる。先述したが、2083の削器と同一母岩である可能性が極めて高い資料である。

(10) 剥片類〔金山産サヌカイト〕〔第50図・図版95〕

ここでは全て螢光X線分析によって香川県産のサヌカイトと同定されている資料を集めて掲載した。その産地は2094が城山産、2017が法印谷産である他は全て金山東産のサヌカイトである。1602の背面上面は若干潰れ痕が観察できる。1814・1815の剥片の背面には先行する平坦面が大きく残存している。2090は打点付近から側縁にかけての一部に自然面を残している。これらの金山産サヌカイトは全体的に薄く、石理に沿って剥離されていることが窺え、剥片末端の多くが階段状剥離となり、全体的に折損する資料が極めて多い。

(11) 砥石〔第52図・図版92〕

1825はサヌカイトの原石のような石材を素材とする有溝砥石である。外観上、サヌカイトに似た石材をしているが、新しい欠損により露出している新鮮な面を観察する限りサヌカイトよりもやや軟質の石材のようにも観察されるが、詳細については不明である。この石材の長軸に沿って数条の溝が観察できることから砥石と認定しているが、自然作用により形成されたもの可能性も検討しなければならない。

この溝は大まかに見ると断面形はV字状を呈すが、表面の切れ込みの部分が鋭くなくやや丸みを帯びている。同様の溝を持つ資料としては福井県鳥浜貝塚から出土しており、これらの資料は骨製品を研ぐための砥石だと報告されている。鳥浜貝塚例は砂岩系の石材を用いており、本遺跡出土例とは石材が異なることから同様の機能を果たしたものかは疑問である。現状では、詳細不明といわざるを得ない資料である。

(12) 磨石・石皿類〔第52図・図版92〕

2102は斑レイ岩製の磨石である。球形を呈しており、全体にわたって磨滅している。1904は細粒角閃石花崗岩製の石皿である。片面の中央部が凹んでおり、磨面を形成している。また、細く浅い傷状の溝が4箇所に見られる。この痕跡は石皿としての使用痕跡でなく、後世の何らかの原因によるものだと想定されるが、それが何なのかは不明である。

(13) 敵石・凹石類〔第53図・図版93〕

1876・2100・1905は敵石である。1876は微粒花崗岩製であり、長軸上の両端に深めの凹み部が観察できる。また、先述した石皿のような細かな浅い傷状の痕跡が認められる。同様に砂岩製の2100も長軸上の両端に凹み部が観察できるがやや浅いものである。1905はほぼ円形の全周にかけて敵打痕が認められ、表面中央にも凹部が観察できる。

2104・2098は凹石である。2104はピン岩製であり、折損してはいるが両面の中央部に深めの凹部が観察できる。2098は両面の中央部に深めの凹み部が認められる。さらに側縁全周にかけて研磨されている痕跡が観察できる。また、先の1876などと同様の細かな浅い傷状の痕跡も認められる。

第7章 包含層出土の石器

第1節 石器の分布

栗生間谷遺跡では、石器製作址以外から多くの石器が出土している。これらの大半は中世包含層や中世の遺構、近世～現代の耕作土から出土する。特に、縄紋時代の多くの資料がそうした傾向にある。縄紋時代の所産とみられる石器については前章で一括して扱ったため、本章第2節では石器製作址出土以外の旧石器時代資料を中心に記述をすすめる。なお、石核や剥片などの所属時期を明確にし得ない石器に関しては本章第2節で扱うこととする。

後世の包含層等出土の旧石器～縄紋時代資料については、調査における回収率の差や土地改変の状況に大きく影響されるため、確実な特徴や出土傾向を抽出することが困難である。しかし、愚考を承知であえて触れるのであれば、出土量の多寡は別として地形に左右されることなく、栗生間谷遺跡の調査範囲ほぼ全城から出土することを指摘できる。また、地形と出土傾向の関係をさらに指摘するならば、川合裏川の東側に位置する扇状地状地形からは旧石器時代資料は全く出土せず、縄紋時代資料のみの確認であったことを挙げられる。この縄紋資料には草創期や早期の所産と推定される石器群（有舌尖頭器、異形部分磨製石器、急角度の刃部を持つ削器・搔器類）が無く、後期や晚期といった新しい時期の資料が中心となっている。丘陵上で古い段階（旧石器～縄紋時代早期）の石器群が確認された状況とは大きく異なっている。

出土量に関して言えば、旧石器石器製作址や縄紋時代の遺物集中部が存在する丘陵上が圧倒的に多く、河岸段丘や扇状地からの出土は少ない。丘陵上でも出土傾向に差が見られ、標高71～75m付近から多くの石器が確認されている。こうした部分には石器製作址も点々と営まれており、良好な生活環境が存在していたと想定される。また、図77にあるように1942のナイフ形石器、1714・1887の石核などが出土した周辺は石器製作址が確認されなかったものの、包含層等からまとめて石器の出土があり、黄褐色シルト～極細砂（中世遺構面及び旧石器時代包含層相当か）に貼り付いて出土する例が認められた。本来は石器製作址が存在しており、後世の土地改変によって削平された可能性を否定できない。積極的な根拠を持ち合わせないが、こうした出土傾向は当該期の土地利用の在り方を、ある程度反映しているものと推定される。

第2節 出土石器

1 ナイフ形石器〔第33～35図・図版62～65〕

ナイフ形石器は32点出土し、1796を除き全てサスカイトである。完形品は11点で、1812・1796・2037・1744には打面が一部残存する。

素材は全て剥片素材であり、そのうち1695・1914・1870・1796以外は平坦面を有する剥片を素材とする。平坦面の内訳は、ポジティヴ面17点、ネガティヴ面1点、ポジティヴ面かネガティヴ面の判別が不詳な面10点である。1960は背面に打撃痕が認められ、所謂ファースト・フレイク素材である。1799・1942・1656・1890・1753・1984・1693・2037・1744は背面が素材剥片の剥離方向と一致する先行剥離面

4 楔形石器〔第37図・図版69~70〕

楔形石器は11点出土し、全てサスカイト製である。11点のうち第37図において9点を図示した。

1896・2057・1609・1965・1767は上下両端に両極打法によって形成された微細な階段状の剥離痕が認められ、1896の側面には截断面が確認できる。

2051は3辺に潰れ痕を有する楔形石器で、背面の大半が自然面で構成される。

1919は細かな階段状の剥離痕が4辺において認められ、背面左側面には自然面が残存する。上端では剥離面を切るかたちで潰れ痕が形成される。

1837・2054は潰れ痕が1辺にのみ顯著であり、2054は裏面左側縁にノッチ状の加工が認められ、表面からの1回の剥離により抉りを作出している。

5 2次加工ある剝片〔第38~39図・図版73~74〕

2次加工ある剝片は67点出土し、サスカイト49点、チャート16点、鉄石英1点、安山岩1点である。67点のうち第38・39図において12点を図示した。

1865はサスカイト製で多剥離面打面の剝片を素材とし、素材剝片の両側縁に2次加工を連続的に施す。

1805はサスカイト製で自然面打面の剝片を素材とし、素材剝片の末端側に腹面側から2次加工を施す。

1720・1703・1668は黒色チャート製で単剥離面打面の剝片を素材とする。1720は素材剝片の両側縁に背面側から2次加工を連続的に施す。1703は、素材剝片の側縁側及び末端側に2次加工が認められる。1668は大形で厚手の剝片を素材とするが節理が顯著である。

1782・1739は緑色チャート製で単剥離面打面の剝片を素材とする。1782は背面の大半が自然面で構成され、素材剝片の両側縁において角度の浅い2次加工が腹面側に認められる。

1772は赤褐色を呈するチャート製で自然面打面の剝片を素材とする。

1856・1780は黒色チャート製で節理面及び自然面打面の剝片を素材とする。1856は素材剝片の側縁側及び末端側に腹面側から2次加工を連続的に施す。

1674・1604は黒色チャート製で多剥離面打面の剝片を素材とし、1674は素材剝片の末端側に背面側から2次加工を部分的に施す。

6 微細剥離痕ある剝片〔第39図・図版75〕

微細剥離痕ある剝片は20点出土し、サスカイト7点、チャート12点、碧玉1点である。20点のうち第39図において7点を図示した。

1884は黒色チャート製で点状打面の剝片を素材とし、腹面右側縁に微細剥離痕が認められる。1687は緑色チャート製で自然面打面の剝片を素材とし、微細剥離痕は表裏両側縁において認められる。1839・1792は黒色チャート製で素材剝片の剥離方向と一致する先行剝離面で構成され両側縁が並行である剝片を素材とし、背面左側縁に微細剥離痕が連続的に認められる。1839は線状打面である。

1797はサスカイト製で単剥離面打面の剝片を素材とし、微細剥離痕は素材剝片の両側縁に認められる。

7 剥片〔第40~42図・図版70~72・76~77〕

214点出土している。器面が摩滅し、新しい欠損が目立つものもあるが、旧石器とみられる剝片も認められる。背面末端側にポジティヴ面を付着させた横長の剝片がこれに該当する。本来ブロックに帰属していた剝片で、遊離したものも含んでいるのであろう。また、器面がやや黒色を呈し、風化の進行が弱い例も散見され、縄紋時代以降の剝片も明らかに存在している。金山産サスカイトを用いた剝片（詳細は第6章第2節）はその好例であろうが、原産地が未同定の剝片にもその可能性があろう。

1789～1918は石核素材の平坦な剝離面（ポジティブ面か、それに類するネガティヴ面）を背面側に取り込んだサスカイトの剥片。打面は單剝離面からなるもの（1673・1929・1918）と、多剝離面から構成されるもの（1789・2038・1612・1678・1691）とが認められる。後者の場合は2剝離面の切り合いで生じた稜線上か、それに接した平坦面上に打撃点を残している。また、背面には1～数枚の先行剝離痕をとどめており、背面末端部に付着した平坦面を切りとっている。1751は明確なポジティブ面を付着させている。2038は背面の一部に石核素材剥片の打面を残しており、末端側に付着したポジティブ面に接する打撃クラックが顕著である。1612は打面縁に剝離痕が並び、一種の2次加工とも考えられる。

1972・1678・1691はいずれも複数の先行剝離痕をとどめ、末端側の平坦面（おもにネガティヴ面）を切りとっている。2032は背面末端部に平坦なネガティヴ面を残すが、打面側の剝離痕に切られている。1700は石核の平坦面（ポジティブ面）を側縁部に取り込んでおり、先行剝離痕とは剝離方向がほぼ直交している。1844は背面末端部にポジティブ面を取り込んでおり、打面は自然面からなる。

2039は黒色チャートの剥片で、背面が自然面からなる。1834は背面側に円螺面を付着させた鉄石英の剥片。1823は打面幅・厚ともにやや大きめの厚手の剥片で、背面には自然面を、腹面右側縁には石核時の先行剝離面を取り込んでいる。1939は長さ10.6cmを測る大形の剥片。打面は自然面からなり、背面にはほぼ直線状の棱線が縱走している。背面右側縁と腹面右側縁には新しい欠損が著しい。

8 石核〔第43～45図・図版78～83〕

26点出土している。包含層出土の剥片と同様に、摩滅・新たな欠損がやや目立つ。典型的な旧石器としては翼状剥片石核とその類例が挙げられるが、残余の石核は所属時期が不明確である。ただ、包含層出土の石鎚・削器・石匙などを見ると、繩紋時代以降の石核を含むのはほぼ間違いない。特定は困難であるが、例えば1800（後述）は風化の進行度からその可能性を考慮できる。また、旧石器については国分台産のサスカイトを用いた剥片素材の石核（1849）も認められ、注目に値する。

1838・1887・1840は打面調整によって打面を山形とし、その頂部に打撃点を定めて剥片を剝離している。作業面は例外なく石核素材のポジティブ面に接しておらず、打面・作業面の別は明瞭である。特に1887は厚手・甲高であり、典型的な翼状剥片石核とみなせる。打面調整で打面を山形に整形しているが、その後翼状剥片を剝離した形跡はない。また、折損してはいるが1715・1761・1763も、1887と同様の打面調整を施しており、翼状剥片石核の類品と考えてよい。ただし、作業面の長さが2.0cmを超えるのは1887のみであり、残余の類例とは大きさを異にしている。1879は素材のポジティブ面側に設けた作業面から剥片を得たのち、表面の下端部と裏面左側縁に2次加工を施している。下端部の2次加工は弧を描く刃部を作りだしており、搔器に転用されたとみられる。

1849は背面に平坦な先行剝離面をとどめた板状の剥片を素材とし、打面側に作業面を設定している。打面・作業面は適宜交替しており、表面側に少なくとも4面、裏面（ポジティブ面）側に3面の剝離痕を残している。石核素材の厚さは均一で、背面側も平坦な剝離面からなるため、両面での剝離作業が可能であったものと考えられる。国分台産のサスカイトを用いている。1714は石核素材の打面側に作業面を設け、ポジティブ面から剥片を剝離しているが、のちに背面側のほぼ全周に2次加工を施している。1934は打面調整で打面を山形とし、その頂部を加撃して剥片を得た石核。作業面はポジティブ面側に設定しているが、1端を折損している。1807は縱長状に剝離した剥片のポジティブ面側末端部から剥片を剝離したのみである。

2061・1891は両面でほぼ全周から剝離をおこなった石核。2061では素材面の残存範囲がごく狭く、側

面に示した折損面ものちに打面となる。1891でも素材面は両面中央部に残っている程度で、上端を折損している。2068・1776・1980は同一作業面から並列的に剥片を剝離している。2068・1776は石核素材の背面に自然面をとどめており、必然的にポジティブ面側に作業面を固定している。作業面の設定位置は石核素材剥片の打面側である。1980は打面・作業面の交替をおこなっており、表面での剝離が最終剝離となる。1719は裏面(ポジティブ面)側で剝離を実施した石核。表面には石核素材剥片の背面(ネガティブ面)が広く残存する。1620は表面で剥片を複数枚得たのち、裏面側で最終剝離をおこなっている。下端側を折損している。1676は両面に剝離がおよぶ点で2061・1891と似るが、b面中央部には平滑なネガティブ面も残っており、周囲の剝離痕に切られる。

1800は風化が新しく、側面を巡る自然面・折損面を打面として裏面で対向しあう剝離を実施している。自然面を打面とする剝離痕は打撃点付近がやや潰れた状況を見せる。1699・1800・2055は石核素材の両面で剝離作業を実施している。1699では2つの作業面がほぼ直角に交差しており、切り合いで側面観で示した作業面よりも下端部の方が新しい。ポジティブ面側をもっぱら作業面とし、背面(自然面)には浅い打面調整を施している。2055は表面(自然面)側に打面調整とみられる剝離面をとどめ、それを切る剝離面を裏面に残しているが、対向方向からの剝離によってポジティブ面が消失している。1855は折損面を打面とする小形の石核。下縁には部分的に自然面が残り、縦断面はV字形を呈する。

第8章 基礎分析

第1節 磁集中部の検討

1 はじめに

調査も佳境を迎え、最大の石器製作址（ブロック6）の調査に取り掛かったとき、そこには予期せぬ光景が広がった。石器石材としてのサスカイトやチャートが多量に出土するのみならず、普通であれば堆積層中に存在するはずもない礫が累々と足の踏み場も無いほど出土したのである。その状況は、乏しい知識の中から「礫群」といった用語を呼び起し、それらが集中して形成されたかのように思えた。しかしその後、調査が進展するに従い、検出した礫の集中部は諸々の点で従前から知られている「礫群」とは異なるものではないかと思うに至った。出土礫に被熱痕跡（赤化痕跡）やタールの付着が認められない、礫集中部の範囲内から炭化物が出土しない、出土礫の法量が「礫群」のそれと比べてあまりにも大きい、礫の平面分布範囲が広範にわたり巨大な円形を呈することなどがその最たる要因である。

本節ではこの奇妙な礫集中部が人為的に形成された貴重な旧石器時代の遺構であるとの観点に立ち、その性格について若干の検討を加えてみたい。

2 磁集中部について

礫集中部については第5章第6節に詳しいが、ここで簡単に触れておく。礫集中部はブロック6と一緒に重なるように形成され、東西約6.4m×南北約7.6mの円形を呈するように礫が分布する。また、視覚的に二重の円を呈するように見え、内円部分は東西約3.6m×南北約4mを数える。構成する礫は632点（426.9kg）を数え、平均法量は長さ10.6cm・幅7.7cm・厚さ5.2cm・重量約676.6gである。「配石」とみなされるような大型の礫が多量に持ち込まれているのも特徴的である。礫の分布状況は外周部に大型礫が多くみられ、内部に小型の礫が多く存在する。

3 磁は何處から運ばれたか

栗生間谷遺跡では旧石器時代の石器製作址を7箇所検出したが、礫集中部を伴ったのはブロック6の1箇所だけである。各石器製作址が形成された周辺や旧石器包含層には一辺が2~3cm程度の小礫が若干含まれるもの、この礫集中部を構成するような多量かつ大型の礫は存在していない。礫集中部やブロック6を包含する灰黄色粘土～シルトの下位には、拳大までの礫を含むオリーブ黄色シルト混細～中砂が存在するが、明らかに層質や礫の大きさが異なるため、下位層順からの礫の浮き上がり・褶曲運動などの影響を受けたものとは考え難い。また、土石流堆積を示すような土層堆積もないで自然堆積物であるとは思えない（仮に土石流堆積とすれば石器石材がブロック6のようにまとまって出土するのは不自然であろう。さらには窪地に堆積したのでなければ円形に礫が集中して検出されるのも不自然である。礫の垂直分布は地形の傾斜に沿った分布を示し窪地に堆積したものとは考え難い）。

果たして400kgを超過する多量の礫は何處から運ばれたのであろうか。礫には2kg以上の重量物が多くみられ、中には20kgを超えるものも存在した。こうした状況を考えるならば、遠隔地からの搬入は到底想定できず、遺跡近傍から持ち込まれたものと推定されよう。

そこで搬出地を考えるため、集中部構成礫と遺跡の南側を流れる勝尾寺川河床礫・遺跡北西1kmに位置する裏川河床礫・遺跡内段丘礫層の礫種組成の比較を試みた¹⁾。作業の方法は目についた礫を1箇所につき任意に100点以上収集して、鑑定を行ない、採集場所の礫種組成比率を出した(表16)²⁾。組成が完全に一致する場所は無かったが、勝尾寺川河床と礫集中部が類似した構成を示すことが明らかになった。この結果、礫の搬出地は簡単に採取でき、指呼の距離に位置する勝尾寺川の河床と考えるのが妥当であろう。

表16 磨種組成表

礫種	礫集中部		遺跡内段丘礫層		勝尾寺川河床		裏川河床	
	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
砂質ホルンフェルス	331	52.2	62	53	103	50	47	44.8
チャートホルンフェルス	101	16	0	0	11	5.3	0	0
珪質ホルンフェルス	89	14.1	8	6.8	13	6.3	11	10.5
泥質ホルンフェルス	51	8.1	30	25.6	59	28.6	1	0.95
緑色岩ホルンフェルス	39	6.2	10	8.5	10	4.9	4	3.8
石英斑岩	17	2.7	6	5.1	2	0.96	3	2.9
フェルサイト	3	0.5	1	0.9	3	1.44	3	2.9
チャート	1	0.2	0	0	0	0	4	3.8
砂岩	0	0	0	0	2	0.96	27	25.7
変質花崗岩	0	0	0	0	2	0.96	4	3.8
花崗岩	0	0	0	0	1	0.48	0	0
ヒン岩	0	0	0	0	0	0	1	0.95
計	632	100	117	99.9	206	99.9	105	100.1

*礫集中部のチャートは熱変成を受けていない良質な緑色チャートである。全面的に礫画を残し、一部に欠損がみられる石器石材として持ち込まれたものかも知れない。

4 磨は何のために持ち込まれたのか

磨は遺跡の南側を流れる勝尾寺川から運び込まれた蓋然性が強いことを指摘したが、何故・何のために搬入されたのであろうか。そこで、磨を使用する代表的な遺構である「礫群」との比較を行なってみたい。「礫群」は保坂康夫氏らによって全国的規模での研究が進められており、近畿・中国地方は「礫群」が多出する地域として上げられている(保坂 1986)。この地域の主要な「礫群」を表17にまとめた。

粟生間谷遺跡で検出した礫集中部と他の「礫群」とでは多くの属性面で隔差が大きい。ほとんどの「礫群」では100~200g程度の小磨が1~2m内外の範囲に數十個集まつた状況で検出され、赤化率が高いといった特徴がみられる。一方、粟生間谷遺跡で検出したものは赤化が認められず、多量の大きな磨が広範囲に分布する状況で、「礫群」とは異なった様相を呈していることが解る。

具体的に「礫群」と構造を比較してみよう。比較資料として東京都多聞寺前遺跡の4例を取り上げた。方法は、「礫群」及び粟生間谷遺跡礫集中部の中心点を求め、同心円を描き、その円内に含まれる磨の個数を調べた(図78、79)。その結果、多聞寺前遺跡の3例は中心点に近い位置に礫集中のピークが認められ、離れるほど個数が漸次減少していくことが明らかになった。一方、粟生間谷遺跡の礫集中部では中心点から離れた位置に礫集中のピークが複数箇所確認できた。このように、両者には磨の分布状況に大きな違いが認められる。

従来、「礫群」は磨の赤化やタールの付着、破碎したものが多い、といった観点から食物加熱調理の場としての機能或いはそれが廃棄されたものとして推定されてきた。属性面が大きく異なる粟生間谷遺跡例は同様な機能を保持していたとは考え難く、異なった性格を想定すべきである。

では、次に平面規模や平面形の面から他の遺構と比較を行ないたい。平面規模は東西約6.4m×南北約7.6mを測る大型の遺構である。この規模に対応する遺構としては住居状遺構とされるものが上げられる。

表17 近畿・中国地方の主要「砾群」の属性

遺跡名	砾群番号	規模 (cm)	構成種数	砾の法量 (cm)	平均重量 (g)	赤化率 (%)	破碎率 (%)
粟生間谷	砾集中部	760×640	632	10.6×7.7×5.2	676.6	0	79
吉志部7次	砾群	400×150	248	2~4	26	60	?
郡家今城	A	100	15	?	34.7	多い	多い
B	300×150	13	?	91.5	多い	多い	多い
C 1	200	25	?	397.8	多い	多い	多い
C 2	150	23	?	188.7	多い	多い	多い
C 3	270×250	21	?	124.3	多い	多い	多い
C 4	300×160	27	?	163.9	多い	多い	多い
D 1	180	31	?	240.5	多い	多い	多い
D 2	150	30	?	141.5	多い	多い	多い
D 3	280×260	35	?	416.4	多い	多い	多い
D 4	180×150	18	?	101.9	多い	多い	多い
E	550×700	49	?	237.8	多い	多い	多い
F 1	200×180	33	?	139.4	多い	多い	多い
F 2	110×200	14	?	82.9	多い	多い	多い
F 3	100	25	?	205.8	多い	多い	多い
F 4	110×140	10	?	53	多い	多い	多い
G	368×200	53	?	344.1	?	?	?
H 1	270×230	22	?	49.3	多い	多い	多い
H 2	100×75	7	?	23.6	多い	多い	多い
板井寺ヶ谷	SB 1	100×50	6	?	?	83.3	83.3
SB 2	200×100	9	?	?	?	?	?
SB 3	200×200	7	?	?	33.3	100	
SB 4	200×350	13	?	?	70	90	
SB 5	50×50	4	?	?	75	75	
SB 6	200×20	4	?	?	75	75	
SB 7	350×150	11	?	?	18.2	90.9	
SB 8	200×200	11	?	?	0	88.8	
SB 9	100×150	11	?	?	0	100	
SB10	150×200	9	?	?	11.1	33.3	
A 1	直径450	280	?	37.3	ほとんど	ほとんど	
A 2	直径150	56	?	31.4	ほとんど	ほとんど	
Bla	200×100	383	?	12.5	ほとんど	ほとんど	
B1b	直径150	138	?	20.2	ほとんど	ほとんど	
B 2	直径200	62	?	34.7	ほとんど	ほとんど	
C 1	直径400	300	?	24.5	ほとんど	ほとんど	
C 2	直径100	21	?	41.2	ほとんど	ほとんど	
C 3	直径200	95	?	40.1	ほとんど	ほとんど	
C 4	直径70	23	?	62	ほとんど	ほとんど	
C 5	直径150	9	?	118.1	ほとんど	ほとんど	
野原早風	III	338×212	24	10.7×8.1×5.3	824.2	78.2	82.7
	IV	192×172	17	7.7×5.3×3.3	223.8	84.6	53.8
	V	188×200	21	11.4×7.4×5.2	863.5	80	55
	V	372×133	18	14.2×10.1×6.8	1452.8	72.2	33.3
西ガガラ1	SS01	170×110	25	?	?	100	?
	SS02	90×80	23	?	?	100	?
恩原2	BH27	30×30	14	?	?	100	?
	BG29	140×47	62	7.2×5.1×3.1	184.3	93.5	48.2
	BK28	39×23	7	8.7×6.8×4.7	286.2	100	41.7
	BL22	36×21	6	?	?	100	?
	BL24	110×77	19	?	?	100	?
	BL26	26×23	10	?	?	30	?
	BM29	45×25	17	9.2×7.2×4.0	337.9	100	67.5
	BM31	54×41	17	7.7×5.7×3.2	210.2	94.1	37.5
	BN25	71×47	32	?	?	93.8	?
	BN26	98×69	37	?	?	70.3	?
	BO32	64×48	13	10.5×6.6×4.3	369.2	100	75.6
	BP34	78×48	23	7.4×5.2×3.2	115.6	95.7	31.8
	BQ31	75×74	31	7.4×5.7×3.2	135	100	83.8
	BQ35	35×27	8	7.8×5.8×3.2	100.3	100	64.3
	BY25	60×39	17	6.6×4.7×3.4	157.7	100	66.7
	CA25	47×33	11	7.7×5.9×2.8	313.9	100	45.8
	CF25	20×19	9	7.9×5.8×3.5	155.3	100	61.9
	CN26	25×15	14	?	?	100	?

(富権 1996 table25を一部改変・加筆)

これまで各地で数多くの旧石器時代の遺跡が調査されてきたが、住居状遺構の検出例は極めて少ない。また、検出されたものでも懐疑的な見解が支配的で、住居状遺構の存在については判断に苦しむ状況である。ここでは、一般的に知られている主要な住居状遺構を比較資料に用いて検討する(表18)⁴⁾。

各地で検出されたものは、4×3m前後の平面規模を持ち、円～椭円形を呈する場合が多い。構造的には浅い掘り込みを持つ竪穴状を呈するものと平地式の二者がみられ、いずれも柱穴が検出されている。

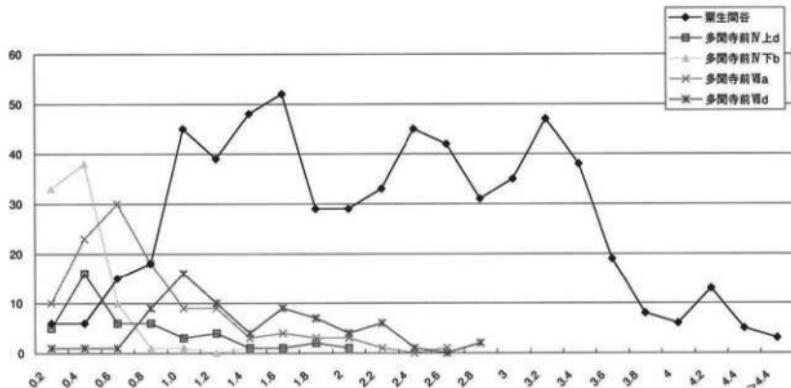


図78 離心距離別礫分布点数グラフ（実測値）

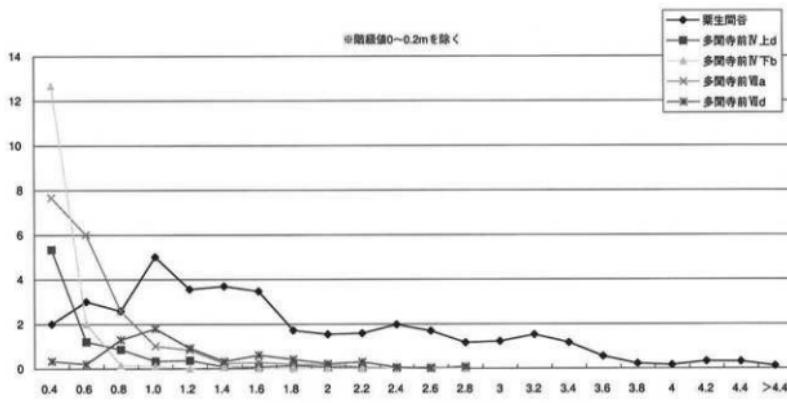


図79 離心距離点数グラフ（単位面積あたり点数）

表18 主要な旧石器時代住居状遺構

遺跡名	所在地	遺構名	平面規模 (m)	平面形	断面形	附属施設	備考
粟生間谷	大阪府 硬葉集中部		7.6×6.4 (4×3.6)	円形	平坦	?	多量の礫が二重円を描く
上場	鹿児島県 第1号住居 (径3.5)			円形	鉢状	柱穴	
	第2号住居	7.3×3.7		長辺円形	皿状		西北部に張り出し部 床面は礁床 西側に焼土 分布3箇所
水道	鹿児島県 1号住居	1.9×1.6		楕円形		柱穴	
	2号住居	2.3×1.0×2以上		不整圓丸方形		柱穴	
下城	熊本県 熊本県	3.2×2.2		楕円形	平坦	柱穴15	
椎木山	福岡県 1号住居	6.5×3.5		隅丸方形	造台形	地床炉	竪穴状住居
	2号住居	4×2.6		長方形	造台形		竪穴状住居 北壁外4mに焼土土坑
西ガガラ	広島県 SB01	3.3×2.9		楕円形	平坦	柱穴10	
	SB02	3.4×1.6以上		楕円形	平坦	柱穴5以上	
	SB03	4.0×3.2		楕円形	平坦	柱穴13	
	SB04	4.2×3.4		楕円形	平坦	柱穴11	付近に7箇所炭化物集中
	SB05	4.3×3.5		楕円形	平坦	柱穴10	
	SB06	4.5×3.5		楕円形	平坦	柱穴8	
はさみ山	大阪府 6.0×5.0 (復元)			円形	皿状	柱穴7以上	
田名向原No.4	神奈川県 径10			円形	平坦	柱穴12・炉2	外周部に多孔質安山岩円礫を配する
上和田山城	神奈川県 4×3.2			不整円形	皿状	柱穴	中央に2箇所焼け面
ナキノ台	千葉県 径3			不整圓形	造台形	柱穴	竪穴状住居
小谷東新山	群馬県 住居状遺構 径4			円形	皿状	柱穴7	
越中山A	山形県 径4			楕円形	平坦	柱穴5・土坑	土坑に燒土と炭化物

また、住居内やその近傍から炉もしくは炭化物集中部が検出される例を多くみる。粟生間谷遺跡の礫集中部は最大規模で見た場合、一般的な住居状遺構よりも大きいことが明らかである。しかし、内円部分で比較すると、その規模は住居状遺構のそれとほぼ一致する。附属施設に関しては調査時の意識が薄かったため確認し得なかった。ただ、先にも述べたように礫や重複して検出したブロック6石器石材の出土状況は垂直分布において、地形の傾斜に沿う様に直線的に並ぶ傾向をみせ、これらが掘り込みを伴って構築された状況にあったとは考え難い。

以上、規模や平面形の点では礫集中部は住居状遺構に類することが推定できる。では、住居として認識できる条件⁵¹⁾(細野 2000)に照らし合せてみると如何であろうか。その条件とは①掘り込みの有無に関係無く平面的に存在が確認できる。②柱穴を持つ。③炉跡を持つ。④遺物を包含(分布)する。の4点が挙げられている。①に関しては多量の礫が集中して円形を描くように配されていることから、十分に確認が可能である。②に関しては先にも述べたように十分な調査を行なわなかつたため、不明と言わざるを得ない。③については集中部内から炭化物の集中や被熱痕跡を持つ礫が確認されなかつたこともあり、内部には存在しなかつた可能性が高い。また、周辺部からも炭化物集中部は確認されなかつた。④についてはブロック6と一部重複して検出されたため、条件を満たしていよう。一部に要因の欠落がみられるが、礫集中部は住居としての蓋然性が高いと推定される。

このように礫集中部が住居であると考えた場合、現在のところ日本には類例が存在しない。

多量の礫を使用した旧石器時代の住居はドイツのゲナスドルフ遺跡⁵²⁾やロシアのストゥディノエ遺跡、サンヌイ・ムイス遺跡、マリタ遺跡などにみられる。図80はゲナスドルフ遺跡で検出された大型テント状遺構(直径6 m)であるが、大型の礫を環状に配しており、粟生間谷で検出した礫集中部の構造に類似している。ゲナスドルフの大型テントに用いられた大型礫はその機能として、テント裾周りや木組の基礎を押さえるものであったと推定され、同様な性格を持つものはマリタ遺跡でも確認されている(小野 1991)。

海外の資料と直接的に対比するのは問題が多いと思われるが、類例が国内に求められない現状では、粟生間谷遺跡の礫集中部も礫使用の住居もしくはテントの一例と捉えておきたい。

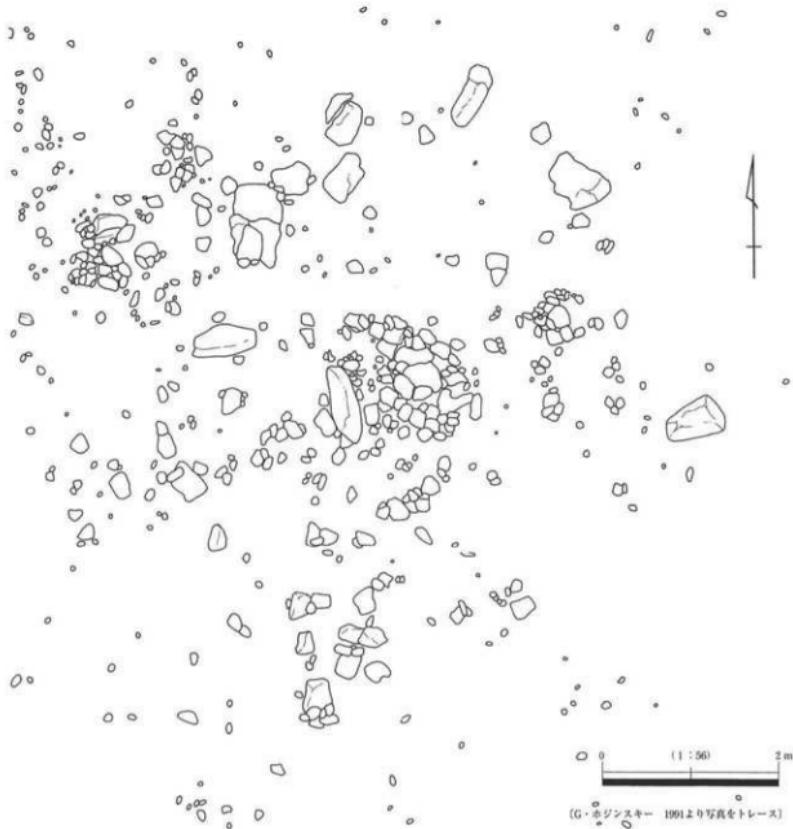


図80 ゲナスドルフ遺跡検出の大型テント状遺構

5 碓集中部の構造

碓集中部は国内に類例の無い特殊な構造を持った住居もしくはテント址である可能性を指摘したが、果たしてどのような構造になるのであろうか。

碓集中部は平面的に二重円を描くように碓が配されている。碓の配置状況は外周円に重量物(2kg以上)が、内周円の外周部分には1~2kgのものが、内部には1kg以下のものが多く存在する傾向が窺える。また、碓単体重量だけでなく、複数個の集合重量も同様な傾向を示し、外周部に集合重量碓がより多くみられる(第5章第6節図63)。

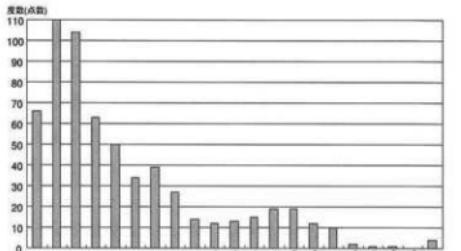
この、外周円に重量物が集中するのは、先のゲナスドルフやマリタ遺跡の例と同様に置石的な性格を示しているのであろう。また、内周部に1~2kgの中量物が配されているのも同様な機能が想定で

ブロック 6 配石造構構成確 重量の統計測度

	全点	重量(点数)
合計 : Σ	419,890.0g	371,690.0g
平均値 : \bar{x}	682.748g	606.346g
最高値 : M_d	210.0g	210.0g
中央値 : M_e	340.0g	340.0g
最大値 : M_{\max}	27,900.0g	8,200.0g
最小値 : M_{\min}	20.0g	20.0g
分散 : S^2	2,523,978.5490	690,149.1267
標準偏差 : S	1,588.7034	830.7521
実度 : a_3	178.6022	29.4373
変度 : a_4	11.8687	4.5167

ブロック 6 配石造構構成確の重量度数分布表

重量(g)	度数(点数)	相対度数	累積度数	累積相対度数
100	118	27.8%	118	27.8%
200	119	17.8%	175	29.6%
300	104	16.0%	279	45.5%
400	63	10.8%	343	55.7%
500	50	8.1%	393	63.9%
600	34	5.5%	427	69.4%
700	27	4.3%	454	73.7%
800	27	4.3%	493	80.1%
900	14	2.2%	507	82.4%
1,000	12	1.9%	519	84.3%
1,100	13	2.1%	532	86.5%
1,200	15	2.4%	547	89.4%
1,300	19	3.0%	566	92.0%
2,000	19	3.0%	585	95.1%
3,000	12	1.9%	597	97.0%
4,000	10	1.6%	607	98.7%
5,000	2	0.3%	609	99.0%
6,000	1	0.1%	610	99.1%
8,000	0	0.0%	611	99.3%
>8,000	4	0.6%	615	100.0%



ブロック 6 配石造構構成確の重量度数分布図

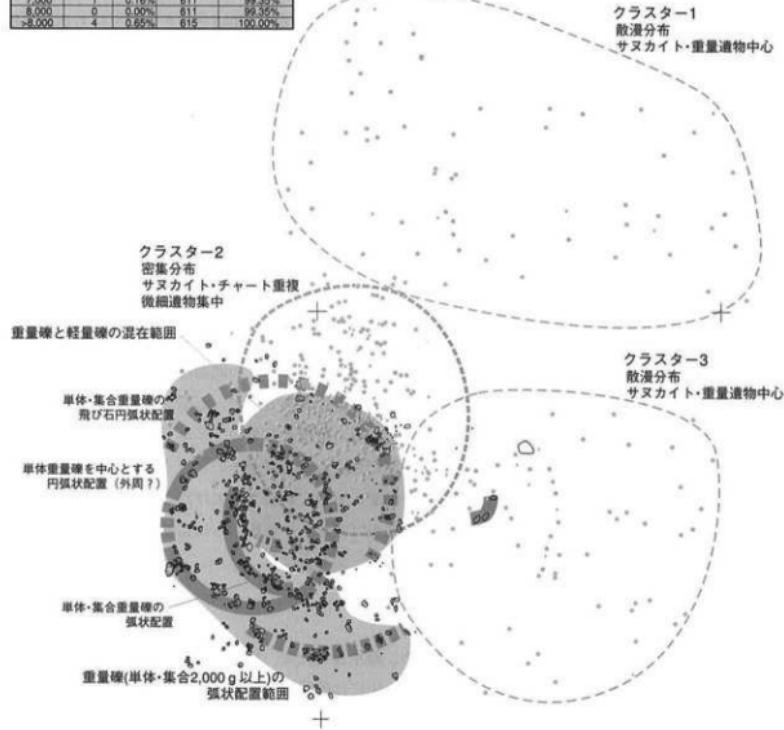


図81 ブロック 6・礫集中部関係図

きる。礫集中部の外周円に存在する大型礫はテント状構築物の上を覆うターフ状の覆いの裾を押さえる置石であり、内周円外周部の中量物はテント本体の裾や木組を押さえるためのものと考えられる。つまりは、風雨に曝される部分をしっかりと固定するため大型の礫を配し、内部に相当する部分にはそれよりもやや軽いものを使用したものと推定される。特に西側半分が強化されているのは、北摂地域は西寄りの風が出現頻度と強さの点で最も顕著とされる(前田 1997)といった当地域の自然環境を十分に意識したものと捉えられる。

テント状構築物であるならば、出入口が必要になってくる。平面でみると南東部分に大型礫の見られない箇所が存在する。この位置は小型の礫や石器石材の分布も希薄であり、出入りの妨げにはならない状態である。さらに、先述した風の影響も考慮するならば、この位置に設けている蓋然性が極めて高い。

礫集中部はブロック 6 と一部で重複する。重なるのは北東部分で、内周円と外周円との間である。石器石材の頻繁な接合関係が認められるのはこの位置であり、石器製作作業の場であったと推定される。石器石材は礫集中部の外周円を超えて広がっているため、石器製作作業を行なった際にはターフによって外部空間と遮蔽されていたとは考え難い。すなわち、作業の際にはターフは開けられ、明るい空間を準備したものと推察される。

それではこのテント・住居状遺構の使用期間は如何であったのか。400kgを超える礫を持ち込んで構築したこの「イエ」に投下した労働力は到底、短期間使用のためだけに充てられるものではない。しかし一方で、恒常的・回帰的に使用されたものであれば残された遺物(石器)が少ないよう見受けられる。使用期間について現段階では明確にし得ないが、構築に要したであろう多大な労力を推量すると、必然的に短期使用のためではないと思われる。

最後に簡単にまとめておくと、礫集中部はテントとターフからなる居住空間を支える下部構造である可能性が高い。その構造は当地域の自然環境を意識して西側部分を強化したものとなっている。上屋構造は明確にし得ないが、南東部分に出入り口を設け、北東部分で石器製作を行なっていたと推定される。

6 おわりに

旧石器時代でも数少ない遺構、しかも類例をみない礫集中部を扱うことになり結果として、推論に推論を重ねるだけになってしまった。現状の旧石器研究において「イエ」の問題は古くて新しい課題である。これまで石器ブロックが居住単位であるとする見方などもあったが、石器ブロックの詳細な分析が進むにつれてこうした見解も修正を余儀なくされている。遺構としての「イエ」を検出することも困難を極め、果たして検出したとしてもその認定には未だ否定的な見解が多い。そういう意味において栗生間谷遺跡の礫集中部も問題の多い遺構である。調査において精密さに欠けたことが大きなネックとなった。しかし、積極的に評価を与えることで当該期の「イエ」や遺構さらには遺跡構造についての研究に新たな展開をもたらすものと期待する。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、小野 昭先生をはじめ、鈴木忠司先生、藤野次史先生、保坂康夫氏、野口淳氏には大変有益なご教示を得た。また、井本伸廣先生には礫種鑑定作業、野口氏には礫集中部の分析に関わる作業の全面的な協力をいただき、お手を煩わせることになった。末筆ではあるが記して深謝いたします。

- 1) 遺跡東側にも川合裏川が存在するが河川改修が進んでおり、確認出来なかつたため今回は対象外とした。
- 2) 遺跡の北方に位置する北摺山地には花崗岩帯が存在する。○○ホルンフェルスとしたものは、基となる岩石がこの花崗岩帯の影響を受け、熱変成作用を被ったものである。
- 3) 多聞寺前遺跡の縄群に関しては、多聞寺前Ⅳ上・b・Ⅴa・Ⅵdが金山B型縄群、Ⅳ下bが金山A型縄群に分類される。金山A型縄群は廃棄した状況を示すもの、B型縄群は廃棄した状況を示すものと指摘されている(金山1984)。
- 4) これら全てが確実な住居状遺構として認知されている訳ではない。住居状遺構の是非を問う判断材料を持ち合わせないため、各報告に従うこととする。なお、住居状遺構についての検討は栗島義明氏が詳細に行なっている(栗島1989)。
- 5) 稲田孝司氏も旧石器時代の住居と判断するための条件を設定している(稲田 1988)。それは、
 - ①住居が一定の構造をもち、それが安定した状態にあること。
 - ②旧石器時代と年代判定可能な遺物を伴い、住居構造と遺物の分布に有機的な関連がみられること。
 - ③住居の上を無定した無遺物層がおおい、新しい年代の遺構・遺物との見分けが明瞭であること。

以上の3点である。栗生間谷遺跡の縄集中部はこの3つの条件に照らした場合、①に関しては柱穴等の遺構を確認してないため疑問の余地を残すが、「一定の構造と安定した状態」については問題ないものと思われる。②・③についてはクリアしている。
- 6) ゲナスドルフ遺跡はドイツ・ライン川中流域に所在する後期旧石器時代末(約12000年前)の集落址である。円形の基礎を持つ大型住居3軒とテント状遺構4棟が確認されている。これらの遺構の基礎にはスレート板が多量に使用されている。大型住居では柱穴が検出されていることから、木材を組み合わせ垂直に立ちあがる壁と屋根を持つと推定されている。また、遺跡からは多くの馬の骨が出土していることにより、住居は馬の毛皮で覆われていたものと考えられている。

引用・参考文献

- 相川幹子・鶴丸俊明他 1983 「多聞寺前遺跡」 II
 会田容弘 1992 「旧石器時代の住居遺構」『月刊 考古学ジャーナル』No. 351 ニューサイエンス社
 稲田孝司 1988 「旧石器集団の行動軌跡」『古代史復元 I 旧石器人の生活と集団』 講談社
 G・ホジンスキイ／小野 昭(訳) 1991 「ゲナスドルフ・氷河時代狩猟民の世界」 六興出版
 金山喜昭 1984 「武藏野・相模野台地における旧石器時代の縄群の研究」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会
 金山喜昭 1987 「先土器時代の縄群研究史」『古代文化』第39卷第7号 (財)古代学協会
 金山喜昭 1988 「縄群の機能と用途」『古代文化』第40卷第8号 (財)古代学協会
 栗島義明 1989 「旧石器時代住居と遺物分布に就いて(上)」『土曜考古』第14号
 相模原市教育委員会 1998 「田名向原」旧石器時代遺跡の調査
 让本崇夫 1987 「縄群の形成過程復原とその意味」『古代文化』第39卷第7号 (財)古代学協会
 富樫孝志 1996 「恩原2遺跡S文化層の縄について」『恩原2遺跡』 恩原遺跡発掘調査団
 東広島市教育委員会・(財)東広島市教育文化振興事業団 1999
 第6回 安芸のまほろばフォーラム「旧石器時代のムラを探る」資料集
 保坂康夫 1986 「先土器時代の縄群の分布とその背景」『山梨考古学論集I』 山梨県考古学協会
 保坂康夫 1987 「縄群使用の非日常性について」『古代文化』第39卷第7号 (財)古代学協会
 保坂康夫 1989 「縄群とブロックとの関わりについて」『山梨考古学論集II』 山梨県考古学協会
 保坂康夫 1992 「『縄群』は何を語るか」『月刊 考古学ジャーナル』No. 351 ニューサイエンス社
 保坂康夫 1994 「縄群活動と先土器時代の人間集団のありかた」『山梨考古学論集III』 山梨県考古学協会
 細野高伯 2000 「後期旧石器時代の居住」『月刊 考古学ジャーナル 10月臨時増刊号』No. 465 ニューサイエンス社
 細野高伯 2000 「住居状遺構 - 小暮東新山遺跡の事例から」『月刊 考古学ジャーナル 10月臨時増刊号』No. 465 ニューサイエンス社
 前田 昇 1997 「第1章 池田の自然史 第1節 自然環境のあらまし」 『新修 池田市史』 池田市史編纂委員会

第2節 ブロックの構成と遺跡形成過程の検討

1 はじめに ブロックをどのように理解するか

後期旧石器時代の遺跡を発掘すると、出土する遺物はほとんどの場合、石器のみである。焼けた礫、炭化物がともなう場合もある。遺物包含層が良好に残っている場合、出土石器の平面分布は1ないし数ヶ所に集中してまとまる。調査区全体に、広く散布した状態はほとんどみられない。このような石器の集中するまとまりは、ブロックと通称される。石器集中部、ユニットなどの呼称が用いられる場合もあるが、分布単位としての認識は、基本的に共通するものである。このほかに、焼礫の集中部(礫群)や、炭化物の分布集中がともなう場合もあるが、これが、後期旧石器時代遺跡の基本的な構成である。住居址をはじめとする、掘り込みや構築物をともなう遺構の検出例は限られており、一般的ではない¹⁾。

現在、基本的な遺跡構成に対する居住形態復元の、もっとも一般的なイメージ・ソースとなっているのは、埼玉県砂川遺跡A地点で検出されたブロックと、フランス・パンスヴァン遺跡で想定復元されたテント状の住居を対比したものである(戸沢 1979)。埼玉県砂川遺跡A地点では、隣接する3ヶ所のブロックと、中央のブロックに重複する礫群が検出され、石器製作の場や炉とそれを取り囲む活動の場であると想定された。その上で、全体が「最少単位の人間集団」の居住生活の場であるとされた(戸沢 1968)。一方、パンスヴァン遺跡では、隣接・重複して検出された石器や動物骨の集中部と炉址の分布状態などをもとに、屋内に炉を持つ、連接したテント状の上屋構造が復元された。隣接するブロックの状態などから、パンスヴァン遺跡での復元図がイメージとして砂川遺跡に重ね合わせられ、さらに日本列島における後期旧石器時代遺跡の一般像として敷衍してゆくことになったのである。

このようなイメージにもとづいて、ブロックという遺跡内における遺物分布の単位を、居住した人間集団を反映した単位として理解する枠組みは、概説書などでしばしば見受けられるものである。そこでは、ブロックの、まさにその上に上屋構造があったのか、それとも隣接する遺物分布の空白域に住居が構えられていたのかといった見解の相違はあるが²⁾、基本的に、住居址=居住の単位集団とする、縄文・弥生時代などの集落-集團論の枠組みに沿ったもの、あるいは近似したものといえるだろう。

しかし、いくつもの遺跡の事例を検討していくと、ひとくちにブロックといっても、決して一様ではないこと、むしろきわめて多様であることに気付かされる。出土石器の点数、その内容(器種組成や石材の構成、そのかたより具合など)、広がりと集中の度合い、礫群共伴の有無など、同じ遺跡内でも、多様なブロックの状況が認められることが少なくない。

個別の遺跡事例について分析が加えられている場合についても、分析の視点によりブロックの評価は異なる。石器製作作業のまとまり、単位として捉えた分析例では、石器製作者の識別からブロックの背後にあったであろう集団の復元を試みている(安藤1977、1990、1992、など)。一方、道具としての石器の組成など、内容の差を重視した分析例では、類型化したブロックの構成内容が、そこで行なわれた作業内容を示すものとされた(小林ほか1971、など)。そして両者は総合され、日常的な起居生活の営まれた集落として遺跡を捉える方向性が示されている(鈴木編1980、1982、山下編1985)。さらには、道具としての石器を用いての作業内容をより詳細に検討するために、実験使用痕研究の導入も試みられている(須藤編1991、など)³⁾。

その一方で、ブロックにみられる遺物分布が、「廃棄」の結果である可能性の指摘もなされている(岡村1979、など)。石器の製作にせよ、使用にせよ、主たる活動は別の場所で行なわれ、不要物が搔き

集められた後にまとめて捨てられた場所が、ブロックに相当するとの見方である。さらにいえば、一次的な行動結果がそのまま残されている「遺棄」の状態にせよ、「廃棄」の状態にせよ、一つのブロックとしてのまとまりが、単一の機会に形成された一回性のものであるのか、それとも何度かに分かれた行動の結果が累積、重複したものなのかという問題も残されている。個別のブロックについて、その内容構成から性格を検討するにあたっては、その形成過程にさかのぼって分析を行なう必要があるだろう。

そもそも、ブロックの認識、定義は、あくまで分布の集中する範囲をひとつのまとまりとして捉えるという、分析上の操作単位としてのものであった(月見野遺跡群調査団 1969)¹¹。こうした分布単位が、どのような性格のものであるかということまでは規定されていないのである。また、ブロックの広がり、範囲をどのように捉えるのかという分析手順についても、明確な規定がない。視覚的に、明瞭な空白部を問にはさんで点在する遺物の集中部はともかく、いくつかの集中する核をもちながら周辺部では隣接・重複する事例や、あるいは広い範囲に連続して分布する場合などをどのように分布単位としてのブロックを設定、区分するのか、はっきりとした基準や方法が確立されているわけではない。

ブロックが、旧石器時代遺跡の構成の中でどのような意味をもつ単位なのかを検討する以前に、そもそも、分析対象として相互に比較可能な均質性を有しているのかどうか、その時点からの検証をする場合が少くないのである。

本節では、粟生間谷遺跡で検出されたブロックについて、調査段階で設定された単位にもとづいて検討した後に、その構成と形成過程について考察を加えることとする。

2 粟生間谷遺跡の構成

(1) 遺跡の広がりと構成

粟生間谷遺跡では、広大な調査範囲の各所から旧石器時代遺物が出土している。なかでも、(その3)調査区では、計7ヶ所のブロックが検出された。このうち、ブロック4、5、6はやや隣接している。一方で、ブロック1、2、3と4~6は、相互に数十~百数十m離れており、立地上も、旧河川などにより区分されていた可能性が高い。また、一部チャートに類似した個体が認められるが、ブロック間にまたがる接合関係は確認できなかった(第4章第1節、第5章第1節参照)。

なお、ここでいう「ブロック」とは、調査段階において把握された石器分布のまとまりを指す。旧石器時代包含層の調査の際に、遺物が検出され、調査範囲の拡張が繰り返される。最終的に、一定の範囲で遺物分布の広がりが把握された時点で、このまとまりを「ブロック」としている。あくまで、調査段階で認識できた出土状況を、報告書記載の単位として設定したものであり、実際には、遺物分布の空白域をはさんで視覚的に2ヶ所の単位が区別できるもの(ブロック1)、集中する部分と散漫な部分とで2、3ヶ所の単位に区別できそうなもの(ブロック3、6)も含めて、1つのブロックとしている。区分の可能性も含めた各ブロックの構成、形成過程については、ここでの分析にもとづいて、後に検討する。

なお、個々のブロックは、立地上も独立して存在しており、それぞれ単独で「地点」¹²を構成しているとみなすこともできる。各「地点」間に実体的なつながりを認める積極的な根拠もないのに、本来的には、それぞれが単独の「地点遺跡」を構成していると捉えるべきであろうか。後期旧石器時代における粟生間谷遺跡の広がりは、こうした「地点遺跡」が、丘陵裾部と河岸段丘の接点という立地の上に、比較的近接して、いくつか形成された範囲ということになる。ただし、こうした範囲を越えて、今回調査範囲に広く、原位置を離れた旧石器時代遺物が分布していることから、本来的に単独、ないしは数

点の遺物分布だけからなる地点も含めて、さらに遺跡範囲は広がっている可能性もある。

(2) ブロックの空間的属性

各ブロックの詳細を、まずは空間的属性から記載して比較する。なお、各ブロックの検出状況に関する空間的属性（中心座標、範囲と面積、垂直分布幅と傾きなど）は、取り上げ位置座標記録のある石器（以下、座標資料）全点を対象として算出した。したがって、折損面の接合により、器種としては接合後1点とカウントされているものも、ここでは接合前の破片ごとに1点と取り扱っている。一方、一括、水洗資料など座標記録のないものは含まれない。

ブロックの位置と範囲 中心座標^⑤は、遺跡の広がりの中での各ブロックの位置を特定すると同時に、分布の広がる範囲、その中の遺物の密集度合やばらつきの度合などを計測するための基準となる。表19では国家座標軸上の数値として示し、図82では十字形で示した。

ブロックの範囲については、第5章各節で、座標資料の分布のひろがりと等距離線図から概要を把握しているが、ここではさらに、X、Y座標値にもとづく規格楕円^⑥として把握することを試みた。規格楕円による各ブロックの範囲については図82に、面積については表19に示した。結果として、各ブロックの規格楕円の形状は、真円に近いもの（ブロック1やブロック6）から、長楕円形を呈するもの（ブロック3、4）まで認められた。面積は、ブロック2の648.128m²を最大とし、ブロック3（327.467m²）、ブロック6（227.877m²）も100m²を越える。ブロック1、4、5は100m²以下である。

参考までに、千葉県内23遺跡220ブロックの集成結果（川島 1983）を掲げると、「ブロック」の平均的なサイズは直径8m以下のものが全体の95%を占める（平均は4.6m）。その形状を真円であると仮定すると、面積は、およそ20~50m²程度ということになる。単純な円形としてブロック範囲を捉えており、また地域が限られその後の膨大な調査事例も含まれていないなど、比較対象としては制約の大きいデータだが、概略の傾向を見るためには現在でも妥当な数値もある。これと比較して栗生間谷遺跡のブロックが「大きい」ように見える背景については、空間分析の項において再度言及する。

分布密度 分布密度については、座標資料のみと、ブロック範囲から回収された一括、水洗選別資料すべてを含めたものを示した（表19）。一見して、1点/m²以上と密度の高いブロック（1、6）が目立つ。出土点数の多いブロック3は、算定された面積が大きいこともあって、密度は低い。ブロック2は、他のブロックと比べて1ヶタ低い数値を示す。範囲の広さに対して、非常に散漫な分布状態であり、調査時の所見どおり、後世のかく乱も含めてブロックの全体像が把握されていない可能性も残る。

また、ほぼ全面で土壌サンプルを回収しているブロック1をみると、座標資料のみを対象とした場合と全資料を対象とした場合との間で、分布密度に倍近い差が認められる。ブロック間の比較にあたっては、遺物の回収状況や回収率の差の影響を考慮する必要がある。それでも、水洗選別の行なわれていないブロック6の分布密度は、ブロック3の1.5~2倍近く高く、ブロック1>ブロック6>ブロック3という傾向を見て取ることは可能である。

一方、出土重量を面積で割った重量分布密度は、微細な資料がほとんどを占める水洗選別や一括資料の影響があまり表れていない。ここでは、ブロック3はブロック1と比肩し得る数値を示しており、全面的に土壌サンプルが回収されていた場合には、点数密度の上でもブロック1と遜色のない数値になっていた可能性もある。ブロック6も含めた時には、本来の点数密度が重量密度に比例し、ブロック6が他に抜きん出て大きく、ブロック1、3がそれに次ぐ規模であった可能性も考えられるだろう。一方で、

ブロック6、3では、相対的により大きな資料が多く、ブロック1では小さな資料が多かった状況を、そのまま示している可能性もある。

平面分布の状態 上述の2項目は、ブロックの広がりやその中の分布の状態について、統計的に記述したものであり、全体の代表的なあり方を示している。しかし実際の出土資料は、統計上の中心座標に集中し、その周囲にばらついて分布しているわけではなく、ブロック範囲の中でもかたよりをもった粗密が認められる。その詳細については、後段で再度検討を加えるが、ここでは、視覚的に捉えられる平面分布の状態について触れておく。

出土石器の数量がまとまっているブロックのうち、ブロック1では密集する部分と、やや離れたもう一つの集中部が区別できそうである。また密集部については、東西2つの単位に区分できるようにもみえる。ブロック6では、密集する部分と、その周囲(とくに北~東)に散漫な分布域が認められる。ブロック3では、あまり密集しないまとまりがほぼ東西に広がっているが、微視的には2、ないし3単位に区分できるようにもみえる。

一方、出土石器の数量が少ないブロックのうち、ブロック2は広い範囲に散在している状態である。繰り返しになるが、本来の分布状態をとどめているとは言い切れない。ブロック4は、いずれも散漫な2つの単位に区分することができるようにもみえる。ブロック5は、少ない点数が比較的まとまっているようである。

垂直分布の幅 垂直分布については、絶対標高値(T.P.±で示される数値)をそのまま比較した場合、地形の傾斜が大きく影響することになる。たとえばブロック3では、おもに北から南へ下がる傾斜面の上にある。当然のことであるが、斜面上位側の座標資料の標高値はより大きくなる。より傾きの小さな面に位置するブロック6と比べた場合、ブロック3の方が垂直分布の幅が大きいということになるが、これは妥当な比較とは言えないだろう。遺跡の形成過程を検討するにあたっては、もちろん地形の傾斜に沿った2次の移動(流水、風、重力などによる)の可能性を配慮しなければならないが、ここでは、ブロック間でそうした影響には極端な差はないだろうと仮定し、各座標資料の座標値と標高値を地形傾斜にあわせて変換した数値を算出し、比較した³⁾。

図82には、ブロック1、3、6について、変換前後の垂直分布図を示してある。ブロック3を例にとると、南北の軸線上に投影された変換前の座標資料は、北側では標高値の高い側に、南側ではより低い側に分布する傾きが認められる。とはいっても、各点は直線上に並ぶのではなく、それぞれ標高値の高い側、低い側にばらつきをもっている。そこで、全体としての傾きがほぼ水平になるように、かつその中央(変換後の平均値)からのばらつきがもっとも小さくなるように、座標値と標高値を変換する。ブロック3では、変換後の垂直分布は明らかに水平に近づいているのがよく分かる。また、ブロック1、6でも、わずかな傾斜が変換されて水平になっている。その上で、変換後の標高値の平均値(変換後の垂直分布図の中央を通る)と、各点の変換後の標高値との差を垂直分布の幅として、そのばらつき具合(最大幅、平均幅とばらつき=標準偏差)を検討した(表19)。ブロック3では、変換後の垂直分布の最大幅(最大値と最小値の差で示される)は明らかに小さくなっている。ブロック1では、最大幅は若干大きくなっているが、平均値は若干小さくなっている。ブロック6でも、垂直分布の幅はわずかに小さくなっているので、垂直分布幅がもっともまとまる傾き(傾斜面)を見出していることが分かる。

先の千葉県での集成によると、ブロックの垂直分布幅は平均44cm、20~80cmの範囲に収まっており、栗生間谷遺跡の事例と数値上はほぼ一致する。長原遺跡、八尾南遺跡においてもおおむね同様の傾向を

指摘できるので、堆積条件などの違いはあっても、遺物の包含層中における上下への拡散移動の範囲に、極端な差はないといえる。なお事例の蓄積と、詳細な検討(中沢 2000)は必要であるが、近畿地方においても、極端な条件地を除けば、埋没過程および埋没後の作用に大きな差はなかったことを示していると考えられる。今後の発掘調査においても、一定の範囲で同時期性、一括性の高いまとまりを把握することは十分可能であると考えられる。

(3) 各ブロック石器群の構成

各ブロックから出土した石器群の内容については、すでに前章までに記載されているとおりである。ここでは、出土点数や重量、サイズといった量的属性と、石器群組成とその構成比について検討する。

出土点数と重量 出土点数は、座標資料だけをみるとブロック 6 が 530 点ともっと多く、300 点を越すブロック 1、3 が続く。ブロック 2、4、5 は、十数点～数十点と少ない。

ブロック 1 は、5 g 未満の資料が占める比率(点数比)が、ブロック 3、6 より高い。出土総重量を出土点数で除した平均重量は、座標資料だけに限ってみても、ブロック 1 とブロック 3、6 の間で約 3 倍の開きがある。より小さな資料の数量については取り上げ精度の差が反映している可能性もあるが、最大長の分布からみても、ブロック 1 = 小型・軽量、ブロック 3、6 = 大型・重量という、構成資料のサイズの差異は明瞭である。ただし、ここでいう大・小、重・軽は、あくまで栗生間谷遺跡の資料間の比較にもとづく相対的なものである。石器群全体を見渡した時に、一般的な意味での、大型・重量遺物はほとんど認められることに注意する必要がある。

石器群組成 点数比、重量比とともに、各ブロックはおおむね共通する傾向を示している。残滓が 80 ～90% 前後を占め、不定型石器 (Tool C : 二次加工ある剝片、微細剝離痕ある剝片) が続く。定型石器の組成はブロック間での差が大きい。主要定型石器 (Tool A : ナイフ形石器、角錐状石器) については、不定型石器に次ぐ数量を占めるブロック 1、3、6 と、主要定型石器が認められないブロック 2、4、5 がみられる。出土石器の数量がまとまっているブロックと、出土石器の数量が少ないブロックとの間で、主要定型石器の有無がはっきりと分かれていることになり、対照的である。その他の定型石器 (Tool B : 挿器、削器、石錐、ノッチなど) は各ブロックともに少ないが、ブロック 3 では挿器、削器がまとまっている。ブロック 5 には、定型石器は認められない。砾石器は、ブロック 6 からのみ出土している。当然のことではあるが、出土石器の数量がまとまっているブロックでは、器種のリストは豊富である。

残滓の多くは小型の剝片類と碎片であり、おもに石核調整や石器製作にともなう調整剝片類か、剝片剝離時や石器製作時に偶発的に生じた破砕片類などと考えられる。とくにブロック 1 では微細な資料が多く、またブロック 3 では、ナイフ形石器の製作にともなう背部整形剝片がまとまって出土している。ブロック 5 では、水晶、石英の微細な資料がまとまっている。全体として、かなり消費の進んだ石核からの剝片剝離、あるいは素材剝片への調整加工といった作業内容にともなって生じたものであり、とくに後者の比率が高いのではないかと思われる。

接合資料も、連続的な作業の結果を示す剝離面接合に乏しい。剝離された剝片が、石器に加工され、あるいは素材として、ブロック外や遺跡外へ持ち出されている可能性もあるが、それ以上に、連続的な剝片剝離作業自体があまり行なわれていなかつたことを示していると考えられる。

なお、数少ない剝離面接合の資料はブロック 1、6 にまとまっているが、そのほとんどがチャート製のものである。石核を含むものもあり、またブロック 1 の水洗選別資料におけるチャート製微細資料

(水洗選別資料を含む)の多さを考えると、チャートに対しては、一定程度の剥片剥離作業が行なわれていたことを示しているのかもしれない。

石材組成 石材組成は、ブロック1、3、6間で大きく異なる。いずれも主要石材はサスカイト、チャートだが、ブロック1では、両者の比率はおよそ3:7とチャートが多い。一方、ブロック6では7:3と逆転し、ブロック3では9:1とサスカイトが卓越する。ただし、重量の上では、ブロック6はブロック1よりも多量のチャートが出土している。チャートの使用量という点では、ブロック1、6とブロック3とが、対照的に区分される。

ブロック6では、稀少石材として頁岩製の剥片が認められ、また隕石器(ハンマーストーン)の石材として粘板岩も認められる。

その他のブロックでは、ブロック2でサスカイトが卓越、ブロック4ではサスカイト2:チャート1に頁岩1点が伴い、ブロック5ではサスカイトのほかに水晶、石英の碎片がまとまって出土している。

(4) 栗生間谷遺跡で検出されたブロックとは

以上、栗生間谷遺跡の各ブロックについて、空間的属性と構成内容を比較検討してきた。全体を通してみると、個々のブロックごとの差異が大きく、「栗生間谷遺跡におけるブロックとは～である」と、ひとくちには説明できない。

出土石器の数量をみると、座標資料で300点以上、一括や水洗選別資料を含めると500点以上がまとまっているブロック1、3、6と、合計でも100点未満のブロック2、4、5とに分けられる。しかし、分布の広がりの上では、ブロック3、4、6が200~300m前後、ブロック1、5が100m未満となる。図82の左上に図示したグラフが示すように、ブロックの広がりと出土石器数量に、とりたてて目立った相関は認められない。

このようにばらばらなブロックの状態は、個々の性格や形成過程がまったく異なっていることを示しているのだろうか。以下に、各ブロックの内部構成をもう少し掘り下げて検討することで、その実態に迫ってみたい。

3 空間分析手法によるブロック構成の検討：ブロック1、3、6

とくに出土点数のまとまっているブロック1、3、6について、その広がりの範囲が、一般的な「ブロック」と比べて大きいことは、すでに指摘したとおりである。各ブロックは、等距離線図、石材、母岩別分布図などからみて、さらにいくつかの構成単位に細分される可能性が指摘できる。ここではさらに、平面分布の統計学的測度の検討などを通して、ブロック構成の詳細を検討する。

(1) 視点と方法

平面分布の細分可能性については、まず等距離線図⁴を基準として大枠でのまとまりを把握、細分の可能性と細分単位の数を予測した。たとえばブロック1では、分布の中心的範囲を構成するまとまりとは別に、南南西に約5mの空白域を隔てて別の小さなまとまりがはっきりと確認できる。さらに中心的範囲についても、石材別に検討すると東西2つの単位に区分される可能性が認められる。また、ブロック3では、ブロック範囲の中央部付近にまとまった分布と、その北西側、および南東側にやや散漫なまとまりが区分され、ブロック6では、大きく集中する範囲と、北側、西側の散漫な分布範囲とが区分されるようにも見てとれる。石材別に見ると、大きく集中する範囲にはサスカイトとチャートが重なって

いるが、散漫な部分は、ほとんどサスカイトのみが分布している。

こうした状況に対して、たとえば石材が複数種類利用されている場合、あるいは母岩別分類が容易な場合には、石材別、母岩別の平面分布図にもとづいた区分が可能である。実際に、ブロック1ではそうした区分が容易に行なえる。一方で、ブロック3のように、大部分が単一石材(サスカイト)で構成され、かつ母岩分類が容易でない場合、あるいは母岩分類ができるも平面分布の上では重なり合い区分が困難な場合もあるだろう。このような場合に、平面分布上の構成を詳細に検討するために、ここではk-means法クラスター分析を採用した⁵。これは、あらかじめ区分される単位(クラスター)の数が予測される時に、もっとも有意な区分を導き出す分析方法である。

有効に区分されたクラスターの数は、ブロック1で2、ブロック3と6では3であった。その位置と範囲については、先に各ブロックについて検討したのと同様に、規格格円によって示した(図84~86)。ただし規格格円の大きさについて、ブロックの検討の際に広がりの範囲を把握するためにより大きく(X,Y座標ともに標準偏差の3倍)とったのに対し、クラスターについては、より集中する範囲を把握するために小さく(X,Y座標ともに標準偏差の2倍)した。それでも、各クラスターの境界付近では、規格格円は一部重複して描かれている。また、当然のことであるが、規格格円外に分布する点も少数ある。クラスター分析では、座標資料はすべて、いずれかのクラスターに帰属することになる。しかし、これはあくまで仮説的な区分であり、規格格円の重複部分では実際にどちらに帰属するのかを明確に判断することはできないし、規格格円外に広がる分布についても、どこまでが各クラスターに強い関連をもつのか、あるいは単独資料として分布しているのかを個別に判断することはできない。この点で、平面プランや土層断面の切り合いから、新旧関係や出土遺物の帰属を判断することが可能な遺構の重複とは異なることに注意しなければならない。

(2) ブロック1

等距離線図(第5章第2節 図11: $r = 40\text{cm}$)では、北側の大きな集中部と南西側の小さな集中部が分けられ、さらに大きな集中部は東西に分かれる可能性が認められる。北側の大きな集中部はクラスター1、南西側の小さな集中部はクラスター2として区分される。2つのクラスターは、2S、3Sいずれのサイズの規格格円でも重複せず、よく分離された分布状態を示している。

クラスター資料については、石材別の分布をみると区分可能性はさらに明確となる。ここでは、点数の多いサスカイト、チャート(黒)、同(緑)の3種の石材について、それぞれのまとまりを、クラスター1を構成する石材別分布単位として、さらに分析を加えた。

石材別分布単位は、3者ともに、規格格円の大きさ、形状は類似している。チャート色調別2者は中心が近くほど重なっているが、サスカイトは東側に3mほど離れており、石材単位で、かなり明瞭に区分される。しかし、チャート(黒)とサスカイトは、それぞれの中心的な分布域にも重なるように散在している資料が認められ、Hodderの関連指数A⁶は2.9595と、両者の有為な関係を示す。一方、チャート(緑)とサスカイトのHodderの関連指数Aは0.4133で、両者は別個に存在していることを示す。

これらのことから、ブロック1のクラスター1では、まず 1) サスカイトとチャートは一部分布を接しながらもほぼ東西に分かれて分布する傾向があり、さらに 2) チャートの分布域の中では、より西側にチャート(緑)の分布の中心域があり、少し西側にすれてチャート(黒)の分布の中心域が認められる。そして 3) チャート(緑)とサスカイトの分布はほとんど重ならないが、チャート(黒)とサスカイ

トの分布は、中心域は重ならないものの、外縁部の資料が他方の中心域に一部重複するかたちで分布していることがわかる。

(3) ブロック 3

ブロック全体では、北西から南東に向かって帯状に伸びる長楕円形の分布状況を示すが、等距離線図(第5章第4節 図27: $r = 60\text{cm}$)では、中央部に密集する範囲、その東と西にそれぞれやや散漫なまとまりが認められる。クラスターの構成要素を3としたk-means法により、この区分にはほぼ一致する3つのクラスターが区分される(図85)。

各クラスターの規格楕円は、 $3S$ のサイズでは大幅に重複するが、 $2S$ では、クラスター1と2は隣接、2と3は一部重複する。比較的、分離された状態といえるだろうか。遺物分布の状態は、クラスター2では比較的密集する傾向にあるのに対し、クラスター1、3では散漫である。よく密集するクラスター2を中心に、やや散漫なクラスターが隣接して、ブロック3を構成しているといえる。

なお、点数の少ないチャートは、クラスター2の範囲には1点しか認められず、遺物分布が散漫なクラスター1、3の方に多く分布している。

(4) ブロック 6

等距離線図(第5章第6節 図45: $r = 60\text{cm}$)では、西側に直径6m程の大きな集中部が認められる一方、北～北東側と、南東側に、それぞれ散漫な分布が認められる。北～北東側の分布は東西10m程の範囲に広がっており、2つの散漫な分布域に区分されるようにも見える。そこで、クラスター構成要素を3としてk-means法によるクラスター分析を行なったところ、まず、北～北東側のクラスター1、西側のクラスター2、南東側のクラスター3が区分された。さらに構成要素数を増やしても、クラスター2の内部が細分されるだけとなつたため、この3区分を採用した(図86)。

クラスター1、3はいずれも散漫な分布で、座標値の分散も大きい。一方、クラスター2は構成資料の点数も多く、よく密集した分布である。北および東側で一部クラスター1、3に接し、南側は配石遺構の「開口部」に重なっている(前篇 図81参照)。

また、図示していないが、ブロック全体について、サスカイトとチャートの石材別の平面分布を検討すると、チャートの規格楕円はクラスター2にほど重なるが、サスカイトは、クラスター2を中心としつつもさらに大きな広がりを示す。重量別分布と重ね合わせると、とくにクラスター1、3には、より重量の大きいサスカイト製の資料が分布している。これらのことから、ブロック6は、チャートとサスカイトが密集するクラスター2と、サスカイトの大型資料が散漫に分布するクラスター1、3から構成されていることがわかる。

(5) 各クラスターの比較とブロックの構成

以上、ブロック1、3、6について、その範囲を細分するかたちでの検討を加えてきた。各ブロックを構成するクラスターの空間的属性については表19、石器群の組成と、サイズ-出土石器数量の相関グラフについては表20に示したとおりである。ここでは、クラスター区分と規格楕円については図示しなかったが、同様に分析を行ない2つのクラスターに区分されたブロック3と、もともと小範囲にまとまっていたブロック5についても、比較対象として加えている。

クラスターのサイズと出土石器の数量の相間をみると、比較的狭い範囲（SX、SYともに1.5~1.8程度）に多くの点数(300点以上)が集中するブロック1-1、6-2クラスター、同じく比較的狭い範囲に少ない点数(100点未満)が分布するブロック1-2クラスター、ブロック5、やや広い範囲（SX、SYともに2.0~3.0程度）に少ない点数(100点未満)が分布するブロック3-1、4-1、4-2、6-1、6-3クラスターという類型化が可能である。さらに中間的なものとして、ブロック3-2、3-3クラスターがある。両者は、数量は近似しているものの、前者は比較的狭い範囲にやや密集しており、後者はやや広い範囲に分布している。

その構成内容をみると、比較的狭い範囲に多数の遺物が集中する2つのクラスターには、多くの微細資料を含む残滓類とともに、剥離面接合を含む接合資料が認められる。一定程度の剥片剥離作業が行なわれていたことを示していると考えられる。また、主要定形石器であるナイフ形石器（ブロック6-2クラスターでは角錐状石器を含む）が多数認められ、不定形石器も多く、その他の器種も認められる。まさに、ブロックの中核をなしているといえる内容である。ここでは、集中型クラスターと呼ぶことにする。

一方、遺物点数の少ないクラスターでは、道具としての石器が組成に占める比率が高くなっている点に特徴がある。組成の比率の上では、先に中間的としたブロック3-2、3-3クラスターも、この類型に含めるべきかもしれない。石核があり、また調整剝片や碎片なども認められることから、剥片剥離作業の痕跡がないとはいえない。しかし、ブロック6-2クラスターに分布がまとまる接合資料のうちの1点が、6-3クラスターに分布しているように、本来、別の場所で行なわれた作業の一部が持ち込まれている状況ともいえそうである。この「別の場所」が隣接している場合にはブロック6のような状態となり、一方、隣接せず、また遺跡範囲内でもない場合、ブロック5のようなかたちで、単独で存在することになるのだろうか。ここでは、散漫型クラスターと呼ぶことにする。なお、散漫型クラスターは、大きさ、構成内容などから、さらに細分が可能であると思われるが、とりあえず一括して取り扱っておくことにする。

4 ブロックの形成と遺跡化の過程

ここまで検討してきたブロックとクラスターの構成にもとづいて、以下に、各ブロックの形成と遺存、遺跡化の過程について予察を行ないたい。

まずははじめに、石器製作作業の内容にかかる側面を検討する。集中型のブロック1-1クラスターでは、サスカイト、チャート（黒）、同（緑）の3つの石材別単位が、隣接し、重複する構成がみられる。それぞれの単位には、石核や調整剝片類、若干の剥離面接合資料が認められるので、一定程度の剥片剥離作業が行なわれていたものと思われる。また、水洗選別資料もあわせて考えると、道具としての石器製作のための調整加工も含めた作業が行なわれていたのだろう。

ブロック6-2クラスターでも、チャート（赤）とサスカイトの分布が重複している。ブロック6のチャート資料は、おおむね6-2クラスターの範囲に分布しており、またサスカイト資料についても、6-2クラスターの範囲内には、より微細で軽量な資料が集中している。集中型のクラスターは、いくつかの石材に対する、剥片剥離と石器製作に関わる作業の結果が集まって形成されているということになるだろう。ただし、各石材別単位は、母岩のレベルではさらに細分されることから、個々の石器製作作業の内容は、質量ともに乏しいものであり、連続的、集約的とは言い難いものである。

一方、散漫型のクラスターについては、ブロック1-2クラスターではチャート、それ以外（ブロック3-1～3、6-1、6-3クラスター）ではサスカイトが中心となり、それ以外の石材は単独かそれに近い状況で認められる。中心となる石材にしても、点数が少ない上に接合資料はほとんど認められない。石核は含まれるが、しかし剥片剝離作業の痕跡はきわめて乏しい。また、重量別遺物分布をみると、集中型のクラスターに比べて、微細な資料が少ないことが指摘できる。石器製作によって生じるひとまとまりの残滓のセットではなく、そこから抜き出されたいくつかの資料と、道具としての石器からなる構成である。もちろん、剥片剝離作業がまったく行なわれていなかつたとは言い切れない。

なお、栗生間谷遺跡では、ブロック1-2クラスターを除いて、散漫型のクラスターはいずれもサスカイトを中心石材としている点は興味深い。チャートは、ある程度の剥片剝離作業に関わる場合が多いのに対して、サスカイトは、チャートをともなわない場合にはあまり積極的に剥片剝離作業に関わっていないようにも見受けられる。それでも、ナイフ形石器から搔器、削器にいたる定型石器の多くはサスカイト製である。

二上山北麓や四国・香川県に産地が限定されるサスカイトは、当然、入手の機会は限られたものにならざるを得ない。不足分を補うには、産地へ戻って直接入手するか、あるいは自家消費分を越えて他者に与えられる分だけの石材を持っている（そして与えてもよいという意思の）誰かに出会わなければならない。それまでは、産地から時間的、空間的に離れるにつれ、使用した分だけ先細りに消耗してゆくことになる。無駄遣いを手控えたり、手持ちの限られた材料を有効利用しようと試みたりすることになるだろう。栗生間谷遺跡にみられる、消耗しつくしたかのような小型の石核は、そのようなサスカイトの「欠乏」な状況下での「できる限り」行なった作業の結果を示しているのだろう。また、ブロック3にまとまって認められたナイフ形石器の背部整形剥片は、石器の再加工が行なわれたことを示しているのかもしれない。

そのような中で、代替品となる石材としてチャートを入手することができたら、それを材料に石器製作を行なうことができる。チャート製の定型石器が決して多くないことから、その利用はあくまで二次的、代替的、補充品の域を出なかったのかもしれない。それでも、チャートによる補充ができる、サスカイト製の石器を整理し、あるいは先行きの見通しを立てて、手持ちの残り少なくなったサスカイトの石核や素材を用いた石器製作を行なう契機になるだろう。ブロック1-1クラスターとブロック6-2クラスターの状況は、このような説明が可能であろう。栗生間谷遺跡の外に目を向けたときには、吹田市吉志部遺跡第5・7次調査区のブロックが類似した状況を示しているようである（賀納 2001）。

一方、チャートによる補充的な石器製作ができなければ、手持ちのサスカイトに対する、あまり活発でない石器製作、補充、補修、最低限の不要品の整理と廃棄などを行なうにとどめたのではないか。ブロック3-1、6-1、6-3クラスターなどは、そうした状況を示していると考えることができるだろう。出土石器の数量がやや多く、石器製作作業の痕跡もそれなりに認められるブロック3-2、3-3クラスターの場合は、まだ手持ちのサスカイトがそれほど「欠乏」ではなかったことを示すのだろうか。淀川中流左岸の枚方市藤阪宮山遺跡の状況は、栗生間谷遺跡のブロック3-2、または3-3クラスターに類似している（桑原・久保 1987）。散漫型クラスターが単独で存在している状態、つまりほかのクラスターと隣接したり重複したりすることなく、一つのブロックとして存在し、またブロック群を形成せずに単独で遺跡を構成している状態と考えられるのである。

さらに淀川を遡った長岡京市南栗ヶ塚遺跡の場合は、出土状況もあわせて、栗生間谷遺跡ブロック

3-1、6-1、6-3など散漫型の小規模なクラスターが単独で存在している状態と考えられるだろう（原 1999）。ナイフ形石器が出土していないため、他のブロックと同時期かどうかの判断は難しいが、栗生間谷遺跡のブロック4も、同じような単独クラスターー・ブロッカー遺跡の類型として捉えることができるかもしれない。

それでは、栗生間谷遺跡のブロック1、3、6などで、いくつかのクラスターが隣接、ないし重複してブロックを形成している状況はどのように理解できるのだろうか。ブロック1、6の場合、集中型クラスターでの石器の補充、補修を受けて、もうしばらく滞在期間を延長し、再度戻ってきたときには新たな補充石材もなく、より「欠乏的」な状況下で散漫型の小規模なクラスターだけを形成したと考えることもできるだろう。あるいは、遺跡の立地条件が、繰り返し立ち寄ることを要請したのかもしれない。この場合、ブロック6に併設されているような状態の配石遺構の存在も気になるところである。

各ブロックにおけるクラスターの隣接、重複だけでなく、広大な調査範囲内に、ブロックが点在している状況もまた、立地条件の良さを物語っているのかもしれない。それとも、あるいは、北摂や北河内の山麓、丘陵部が全面的に発掘調査されるようなことがあれば、同じようなブロックが、あるいは単独のクラスターだからなるより小規模なブロックが、そこかしこに点在しているのかもしれないが。

これに対して、大阪平野の中心部、瓜破台地から羽曳野丘陵にかけての段丘面には、まったく異なる類型のブロッカー遺跡が展開している。点数、重量ともに、摂津や北河内の遺跡とは比較にならない量のサスカイト製石器を有するブロックが、さらに隣接してブロック群を形成する八尾市八尾南遺跡第6地点の様相については、別項でその一端を検討している。隣接する大阪市平野区長原遺跡とあわせて、栗生間谷遺跡の形成過程を、より広大な景観の中で理解するために不可欠な検討対象である。

また、羽曳野市翠島園遺跡（高野ほか 2001）、藤井寺市国府遺跡、はさみ山遺跡、西大井遺跡（石神ほか 1990）には、瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器を主体とする石器群が分布している。二上山北麓のサスカイト原産地遺跡群をスタートとする、石材獲得、運搬と消費の技術的なあり方については、すでに秀逸なモデルが提示されている（山口 1983、1994）。翠島園遺跡の報告書が上梓された現在、このモデルについて、さらに遺跡-ブロック群-ブロックというレベルで分析を進化させてゆくことが可能である。

一方、摂津地域では、高槻市郡家今城遺跡（C地点）で瀬戸内技法-国府型ナイフ形石器群が検出されている（富成・大船 1978）。山口のモデルによれば、この石器群では、石核素材の生産を原産地とその周辺で集約的に行ない、不要な部分を省いて、運搬重量を軽減した状態で遠隔地に持ち出し、一方で定型的な石核調整に支えられた削片生産により、遠隔地でも同じような形態のナイフ形石器が製作される。郡家今城遺跡は現在のところ、このモデルに合致した遺跡として説明されている。これに対して、八尾南遺跡第6地点の検討からは、異なる石器製作技術にもとづく、また異なったかたちの石材利用のパターンがありそうだということが明らかになってきた。これらの比較検討は今後の課題である。

これまでのところ、栗生間谷遺跡に限定された分析にもとづき、また限られた事例との比較を通して、解釈的な説明をつなげてきた。今後は、提示した分析手法にさらに検討を加え、また分析事例を増やして、より詳細な類型化と説明モデルの提起を行ないたい。

そして最後に、繰り返して指摘しておきたいのは、ブロックという単位、用語を、それだけで何か意味があるものとして理解し、説明しようすることへの問題意識である。その構成内容についての検討が十分になされないまま、用語や概念だけが独り歩きする危険性について、我々は「前期旧石器捏造」

の一件で身に染みたはずである。

(野口 淳)

空間分析・統計処理方法の解説

- ①中心座標： \bar{x}, \bar{y} 座標資料全点の \bar{x}, \bar{y} 座標の平均値： x, y 。遺物分布の重心にある。
- ②規格梢円 先の中心座標： x, y を中心とし、 x, y 両座標のばらつきの度合いを示す標準偏差： Sx, Sy を長径、短径の基準値とし、 x, y 座標値の相間の度合いを示す相関係数： y で示される傾きをもった梢円。 x, y 座標の中心からのばらつきの大きさが描かれる円の大きさとなるが、その際、 x 座標のばらつきがより大きければ南北方向に、 y 座標のばらつきがより大きければ東西方向に引き伸ばされた梢円が描かれ、ばらつきの度合いがほど等しければ真円に近くなる。集中度合が高ければ、ばらつきは小さくなるので、当然、規格梢円も小さくなる。また、 x, y 両座標にある程度の相間が認められる場合、規格梢円は一定方向に傾いて描かれることになる。たとえばブロック3を例にとると、 x 座標の値はより西側の点($=y$ 座標が小さい)ほど大きく、より東側の点($=y$ 座標が大きい)ほど小さくなっている。 x 座標が大きくなると y 座標が小さくなる(またはその逆)傾向、つまり「負の相間」関係が認められる(その度合いは共分散 sxy 、相関係数 r として示される)。このため、ブロック3の規格梢円は、北西から南東方向に傾いて描かれている(図82)。なお、相間が強ければ規格梢円は傾きが大きくなると同時に引き伸ばされた長梢円形となり、相間がほとんどなければ、規格梢円は傾きが小さくなると同時に真円形に近くなる。
- なお、ブロック範囲の把握には、長径、短径を標準偏差の3倍($3SX, 3SY$)とした規格梢円を用い、その面積をブロックの広がりとして捉えた。梢円の面積は、 $S = \text{長半径} \times \text{短半径} \times \pi$ なので、 $S = 9SXSY\pi$ となる。ブロックごとの分布様態によっては、この規格梢円からはすでに分布する資料もある(中心座標からのばらつきが特に大きなもの)が、分布密度の算出にあたっては、こうした資料も含めている。
- 一方、ブロック内各クラスターを図示する際には、長径、短径を標準偏差の2倍($2SX, 2SY$)とした規格梢円を用いている。
- 規格梢円を用いた石器集中部の検討は、桜井(1991)によっても行なわれている。分布状況が一様ではないブロックの広がりを、相互に比較検討可能な客観データとするためには、このような数値化が不可欠であろう。
- ③標高値の座標変換 垂直分布の傾きは、平面座標と標高値の回帰直線ではなく、各点からその直線へ下ろす垂線の長さの2乗和が最小になるよう(最小2乗和法)求めたものであり、平面座標(ブロック1では傾斜軸に沿った x, y 座標の変換値($N - 45^\circ - E$)、ブロック3では y 座標：傾斜軸は東西方向、ブロック6では x 座標：傾斜軸は南北方向)と標高値を説明变量として主成分分析における第1主成分 z_1 に該当する。したがって、垂直分布の幅は、標高の絶対差の差ではなく、垂直分布の傾きからの垂直方向の差、つまり第2主成分の得点値として示されることになる。なお、この方法では、一定の傾きを持った平面を基準とすることになる。実際の地形の傾斜は、単純な平面ではないことが予測されるので、より詳細には複雑な曲面を基準とすべきであるところだが、傾向の抽出という点では、この方法でも一定の成果を得られると考える。
- ④等距離円の作成 等距離線図による遺物集中部の設定、把握方法については、関根ほか(1991)などを参照。ここでは、分布の集中をより客観的に抽出するために、ブロックごとに最近隣距離 r を基準とした円を描く方法を採用了。最近隣距離 r は、座標資料各点からもっとも隣接する他の点までの距離： I_n の平均値 I_n 。ただし、まず座標資料全点についての平均値 I と標準偏差 SI を算出した上で、 I_n が平均値 I と標準偏差 SI の2倍より大きい資料： $|I_n - I| > 2SI$ を除外した後に、再度算出した平均値 L と標準偏差 SL を用いている。これは、分布が集中する範囲から、極端に離れて分布する点の影響を除外するためである。その上で、各点の中心から、最近隣距離 r と標準偏差 $z = r + 2Sd$ を半径とする円を描き、その範囲内に次の点が1以上あれば、その点を中心として次の円を描くことにより、等距離円を描出した。統計学上、この範囲内には約95%の確率で次の点が存在することが予測されるので、この基準をもって分布のまとまり、連続性の把握を試みた。なお、ここでは、分布のまとまりの度合い、またはばらつきを視覚的に把握するため等距離円を利用したのであり、閉塞する一連の等距離円のまとまりを、集中部や「ブロック」として区分することを企図したものではない。
- ⑤k-means法クラスター分析 たとえばブロック3では、全体が3つの単位(クラスター)に区分される可能性が指摘された。そこで、まず座標資料全点をランダムに3区分し、次いで各資料間の距離を計算、ある点から同じクラスターに帰属する点への距離が、他のクラスターに帰属する点への距離よりも大きい場合には、この点の帰属を変更する。この作業を、同一のクラスター内に帰属する点の距離がより小さくなり、一方で異なるクラスター間では距離がより大きくなるまで繰り返すこと、最終的な帰属クラスターを確定させる。各クラスターの関係は平均値とユークリッド距離によって示され、その数値が充分大きければ、区分が有効であることを意味する。この場合、平均値とは各クラスターを平面分布上に配置した時の中心座標 x, y であり、ユークリッド距離は中心座標間の距離に等しい。区分が有効であれば、各クラスター間の距離は、どれも充分に離れていることになる。一方で、区分が有効でないと判断されるのは、あるクラスターとの間の距離が充分であっても、他のクラスターとは近いという場合である。ここでは、推定した数=1個のクラスターを設定した際のクラスター間の距離と平方距離を検討し、クラスター区分の有効性を検討した。

なお、ここでの適用例とは異なる視点にもとづくk-means法による遺物分布範囲の区分方法と事例分析としては、森本(1991)がある。

⑥対象とする資料群相互の平面分布上の関連を検討するための指標。たとえば、チャート(黒)とサスカイトの関連指標は、 $\{(チャート(黒)各点の間の平均相対距離/チャート(黒)各点とサスカイト各点間の平均相対距離) \times (サスカイト各点間の平均相対距離/チャート(黒)各点とサスカイト各点間の平均相対距離)\}$ として求められる(オルトン 1987: 167-168)。Hodderの関連指標Aを用いた遺物分布の検討については、金田ほか(2001: 47-49)を参照。

註

- 藤井寺市はさみ山遺跡(85-7区:石神ほか1990)では、柱穴をもつ住居址状の遺構、墓壙と想定された土坑が検出されているが、このような遺構は、日本列島全体を見ても例数がきわめて限られており、現状では一般的なものとはいえない。時期や地域を逸れているとはいえ、限られた「住居址状」遺構の各事例については、それぞれ共通点よりも相違点が目立つ状況にあり、その認定をめぐる議論は尽きない。墓壙とされるものについても、決定的な要素である人骨の検出がない以上、同様である。貯蔵穴、または隠し穴とされる土坑、あるいは石組みをともなう炉址は、特定の地域の限られた時期に繰り返し検出されつつあるが、日本列島全体からみた時には、限られた特徴性を持つ。旧石器時代の遺構全般については、岡村(1999)を参照。住居址状遺構の各事例の問題点は、栗島(1989)により指摘されている。陥入穴状土坑については、鈴木ほか(1998)に集成されている。
- プロックそのものが住居址に相当し、その上部に上屋構造があったとする見解がある(近藤 1976, など)。一方で、いくつかのプロックのまとまる範囲の中の、遺物分布の空白部分に居住施設があったとする見解もある(小野 1976, など)。住居址状遺構の検出例では、石器集中部と重なるものと重ならないものに分かれる。ただし、分布が重なるものについても、それが「床面直上」の状態にあるものは、ほとんど認められないようである。
- 実験使用痕跡研究と遺物分布、「遺跡構造」を連動させる試みは、宮城県座敷乱木遺跡第3次調査においてはやく試みられていた(石器文化談話会編『座敷乱木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、1983)。しかし遺物だけでなく、出土状況も含めた遺跡そのものが「捏造」されていたとされる状況(日本考古学協会2002年度総会における前・中期旧石器問題調査研究特別委員会報告書: 2002/5/26)にあって、分析、検討の成果も白紙に戻ざるをえない。
- ガリ版刷りの小冊子でおそらく原本の入手・閲覧が困難と思われる同書は、「大和市史7 資料編 考古」(1986: 大和市)に全文再録されている。
- 表面採集による分布調査では、一定の範囲で大量の遺物が採集される場合があり、発掘調査により、1つのプロック、ないし複数のプロックがまとまる範囲とほぼ対応することが確認できる。縄文時代以降の遺跡において、地表面(または上層)の遺物分布の状況から堅穴住居址など遺構の所在を推測できるとの同じである。悉皆的な調査で、こうしたまとまりを「地点」とし、さらに一定の地形の広がりの上にある地点の集合を「遺跡」と捉えている。その上で、立地上、ほかとは区分される単独の「地点」については「地点遺跡」としての区分を試みている(矢島 1981、戸沢ほか編 1989、飯田・野口編 1997、安藤ほか編 1999)。調査主体、年次の違いにより区分される「地点」との混同に注意する必要があるが、たとえば、近隣の郡家今城遺跡は「地点」の集合した「遺跡」であり、長原・八尾南遺跡はそうした「遺跡」が多数集合、ないし累積したものと捉えることができる。調査範囲等の制約によらない、遺跡規模の整理把握の枠組みも、今後、さらに検討する必要があるだろう。

参考文献

- 赤木克視・森屋美佐子・江浦洋 1996 「太井遺跡」、大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター
安藤政雄 1977 「遺跡の中の遺物」『季刊どるめん』第15号、JICC出版局
安藤政雄 1990 「先土器時代人の生活空間-先土器時代のムーラー」『日本村落史講座2 景観I』、雄山閣出版
安藤政雄 1992 「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」『駿台史学』第86号、駿台史学会
安藤政雄・勝見謙・野口淳・門内政広・岩泉辰子編 1999 「鷹山遺跡群」、長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団
飯田充晴・野口淳編 1997 「砂川旧石器時代遺跡」、埼玉県所沢市砂川流域旧石器時代遺跡分布調査、砂川遺跡範囲確認調査報告書、所沢市教育委員会・砂川遺跡調査団
五十嵐彰 1999 「遺跡形成」「用語解説 現代考古学の方法と理論I」、同成社
石神怡・一瀬和夫ほか 1990 「南河内における遺跡の調査I 旧石器時代基礎資料編I」、大阪文化財センター(府文化財調査報告書第38輯)
大阪市文化財協会 1978 「長原遺跡発掘調査報告」
大阪市文化財協会 1997 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ」
大阪市文化財協会 1999 「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-」
大阪市文化財協会 2000 「長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ」
岡村道雄 1999 「増補版 日本旧石器時代史」、雄山閣出版
小野 昭 1976 「後期旧石器時代の集團關係」『考古学研究』第23卷1号、考古学研究会
オルトン、C. (小沢一雅・及川昭文訳) 1987 「数理考古学入門」、雄山閣出版

- 金田明大・津村宏臣・新納泉 2001 「考古学のためのG I S入門」、古今書院
- 賀納章雄 2001 「吉志部遺跡第4次・第5次 第7次発掘調査」「吹田の石器時代」、吹田市教育委員会
- 川島利道 1983 「先土器時代遺物集中個所の広がりについて」「研究連絡誌」第4号、千葉県文化財センター
- 糸川一徳 1999 「大阪市長原遺跡14層出土石器群について」「「櫛石鳥技法」の再検討」、第23回近畿旧石器交流会発表資料
- 栗島義明 1986 「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」「土曜考古」第11号、土曜考古学研究会
- 栗島義明 1989 「旧石器時代住居と遺物分布に就いて(上)」「土曜考古」第14号、土曜考古学研究会
- 桑原武志・久保弘幸 1987 「枚方市藤阪宮山遺跡出土の石器群」「旧石器考古学」第35号、旧石器文化談話会
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥健三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」「第四紀研究」第10巻4号、日本第四紀学会
- 近藤義雄 1976 「先土器時代の団塊構成」「考古学研究」第22巻4号、考古学研究会
- 桜井隼也 1991 「遺物平面分布の統計系の把握-旧石器時代石器集中部の分析-」「考古学研究」第37巻4号、考古学研究会
- 三宮昌弘・川端智 1999 「尺度遺跡I」、大阪府文化財調査研究センター(同センター調査報告書第44集)
- 三宮昌弘・松宮昌樹 1997 「螢池西遺跡」「宮の前遺跡・螢池東遺跡・麻田藩陣屋跡・螢池遺跡・螢池南地区・螢池西遺跡 1993-1996年度発掘調査報告書」、大阪府文化財調査研究センター(同センター調査報告書第22集)
- 1)
- 鈴木忠司編 1980 「寺谷遺跡」、平安博物館I
- 鈴木忠司 1982 「野沢遺跡」、平安博物館
- 鈴木忠司・辻本崇夫・横山秀昭・伊林修一・笠原芳郎・富樫孝志・植木真吾・馬場健司・中根秀二 1996 「下原遺跡の陥没状況とその周辺一箱根・愛鷹山麓を中心として-」「下原遺跡II」、静岡県埋蔵文化財調査研究所(同研究所報告書第72集)
- 須藤隆司編 1991 「立科F遺跡」、佐久市教育委員会
- 関根唯己ほか 1992 「湘南藤沢キャンバス内遺跡第2巻 岩宿時代・縄文時代」、慶應義塾湘南藤沢校地理藏文化財調査室
- 高野学・高橋章司ほか 2001 「翠園遺跡発掘調査報告書 -旧石器編-」、羽曳野市教育委員会
- 竹原伸二 2001 「西大井遺跡1995年度の調査」「第25回近畿旧石器交流会」発表資料
- 月見野遺跡群調査団・明治大学考古学研究室 1969 「概報・月見野遺跡群」
- 戸沢光則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」「考古学集刊」第4巻1号、東京考古学会
- 戸沢光則 1979 「先土器時代論」「日本考古学を学ぶ(3)」、有斐閣
- 戸沢光則・安藤政雄・矢島國雄・小菅将夫編 1989 「鷹山遺跡群I」、長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団
- 富曾哲也・大船孝弘 1976 「津之江南掘調査報告書」、高槻市教育委員会
- 富曾哲也・大船孝弘 1978 「郡家今城遺跡発掘調査報告書」、高槻市教育委員会
- 中沢祐一 2000 「遺物重量と遺物の上下拡散-石器群の垂直分布の多角的分析による「生活面」の設定-」「MICROBLADE」創刊号、ハケ旧石器研究グループ
- 野川遺跡調査会 1971 「野川遺跡調査概報」
- 野口淳 1999 「遺跡内研究」「石器文化研究7」、石器文化研究会
- 原秀樹 1999 「右京第570次調査概報」「長岡京市埋蔵文化財センター」
- 原口正三 1977 「先土器時代」「高槻市史 第一巻」、高槻市
- 平川清式 1977 「北河内の旧石器」「まんだ」第2号
- 福田英人・吉原早智子 1989 「八尾南遺跡 -旧石器出土第3地点-」、大阪府教育委員会(府文化財調査報告書第36輯)
- 藤永正明・岸本道昭 1982 「大園遺跡発掘調査概要・Ⅶ」、大阪府教育委員会
- 松藤和人 1978 「土器以前の文化」「大阪府史 第1巻 古代I」、大阪府
- 森田克行 1981 「郡家川西遺跡」「シンポジウム二上山旧石器遺跡をめぐる諸問題」、帝塚山大学考古学研究室
- 森本和男 1992 「コンピュータによる網石器遺跡の分析」「研究連絡誌」第33号、千葉県文化財センター
- 矢島國雄 1981 「矢出川遺跡群の分布調査」「報告・野辺山シンポジウム1980」、明治大学考古学研究室編
- 山口卓也 1983 「先土器時代における「移動」について」「ヒストリア」第101号
- 山口卓也 1991 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地-遺跡立地の差と地域性の発生について-」「関西大学考古学等資料室紀要」第8集
- 山下秀樹編 1985 「広野北遺跡」、豊田町教育委員会
- 山田隆一・宮野淳一 1993 「八尾南遺跡II 旧石器出土第6地点の調査」、大阪府教育委員会(府文化財調査報告書第44稿)
- Schiffer, M.B. 1972 Archaeological context and systemic context, American Antiquity, 37 (1), Society for American Archaeology (西藤清秀訳 1983 「考古学の情況と体系の情況」「考古学論考」第9冊、権原考古学研究所)
- Schiffer, M.B. 1976 Behavioral Archaeology, Academic Press
- Schiffer, M.B. 1987 Formation Process of Archaeological Record, University of New Mexico Press

表19 粧生間谷遺跡各ブロック・構成クラスターの一覧表(1)

生間谷遺跡ブロックの空間的属性一覧表

	中心座標		座標の標準偏差		面積		出土点数 ^a		分布密度 ^b		出土重量 ^c		重量分布密度 ^d	
	X	Y	SX	SY	S	n/N	w/b'	w	w'	w/w'	w	w/g/m ²	w	w/g/m ²
1	-128.261.095	-43.440.325	1.8849m	5.458m	324/593	3.324/6.085	445.1g	478.8g	4.567/4.913	0.133/0.207	0.133/0.207	0.133/0.207	0.133/0.207	0.133/0.207
2	-128.217.952	-43.426.515	4.1048m	5.5844m	648.128m ²	7/15	0.011/0.023	86.5g	/134.1g	0.088/4.681	0.088/4.681	0.088/4.681	0.088/4.681	0.088/4.681
3	-128.228.014	-43.579.629	4.5835m	2.5268m	327.467m ²	305/526 ^e	0.931/1.606	1.338.8g	/153.9g	0.4088/0.890	0.4088/0.890	0.4088/0.890	0.4088/0.890	0.4088/0.890
4	-128.249.668	-43.602.424	4.2146m	2.0924m	249.341m ²	38/56 ^f	0.152/0.225	191.0g	/221.8g	0.786/1.955	0.786/1.955	0.786/1.955	0.786/1.955	0.786/1.955
5	-128.220.103	-43.424.369	1.0460m	1.0855m	32.106m ²	16/63	0.498/1.962	159.1g	/166.7g	4.955/5.192	4.955/5.192	4.955/5.192	4.955/5.192	4.955/5.192
6	-128.247.704	-43.621.629	2.7931m	2.8855m	227.817m ²	530/550	2.326/2.414	1.860.0g	/143.8g	8.162/8.530	8.162/8.530	8.162/8.530	8.162/8.530	8.162/8.530

^a: 地質資料のみ(左) / 一括、水洗選別資料を含む(右) ^b: 2段階を含む

	ブロック1			ブロック2			ブロック3		
	変換前	変換後	変換前	変換後	変換前	変換後	変換前	変換後	変換前
平均面積 ^g	0.0402±0.0714m	0.0368±0.722m	0.0987±0.1716m	0.0421±0.0626m	0.0729±0.1162m	0.0570±0.1120m			
最大面積 ^g	0.340m	0.362m	0.804m	0.326m	0.772m	0.765m			
最大値(上方) ^g	0.120m	0.117m	0.377m	0.135m	0.324m	0.299m			
最大値(下方) ^g	-0.220m	-0.245m	-0.427m	-0.191m	-0.448m	-0.467m			
深さ	-1.1744	-1.3466	-0.4364	-0.0963	-0.0962	0.0161			
高さ	2.2200	3.5251	1.0630	0.0260	0.8439	2.1843			

^c: 平均面積±標準偏差 (変換後±とも) ^d: 平均重量±標準偏差の2倍^e: 最大値(上方) = (標準偏差-平均値)の最大値、最大値(下方) = (標準偏差-平均値)の最小値

ブロック-回収区分別出土石器点数

ブロック	座標	点数	総点数	水洗	合計
1	324	69	200	593	
2	7	8	—	15	
3	305	7	214	526	
4	38	18	—	56	
5	16	—	47	63	
6 ^g	530	20	—	550	
合計	1220	122	461	1,803	

ブロック-回収区分別出土石器重量

ブロック	座標	一括	水洗	純重量
1	445.1g	8.6g	25.1g	478.8g
2	86.5g	47.6g	—	134.1g
3	1,338.8g	14.6g	171.5g	1,524.9g
4	191.0g	30.8g	—	221.8g
5	159.1g	—	7.6g	166.7g
6 ^g	1,860.0g	83.8g	—	1,943.8g
合計	4,080.5g	185.4g	204.2g	4,470.1g

ブロック別出土石器サイズ(重量、最大長)

ブロック	点数	総重量	平均重量(±2s)	最大重量	最大長 ^g
1	593	473.3g	0.79±5.24g	27.0g	57mm
2	15	134.1g	0.59±24.87g	30.8g	66mm
3	476	1,532.6g	2.91±12.73g	81.6g	70mm
4	56	221.8g	3.96±8.58g	59.5g	66mm
5	29	159.1g	5.75±23.83g	52.1g	72mm
6 ^g	550	1,943.8g	3.53±11.08g	39.0g	67mm

ブロック別石材別出土石器サイズ(重量)

ブロック	石材	総重量	平均重量(±2s)	最大重量
1	Sa	136.0g	0.94±4.56g	16.0g
	Gh	336.8g	1.03±5.69g	27.0g
2	Sa	124.9g	12.49±27.54g	30.8g
	Gh	9.2g	2.39±3.40g	4.8g
3	Sa	1,434.5g	2.98±13.04g	81.6g
	Gh	91.4g	3.05±10.20g	20.9g
4	Sa	150.0g	4.69±9.20g	19.5g
	Gh	69.2g	3.01±7.62g	10.7g
5	Sa	147.2g	9.81±31.10g	52.1g
	Gh	3.5g	1.75±3.82g	3.1g
6 ^g	Sa	1,317.7g	3.25±11.26g	39.0g
	Gh	608.5g	4.38±10.50g	27.0g

^g: ブロック6の累計種は、砾石(ハシマーストーン)を除く^g: 最大長、幅、厚さのうち最も大きな部位の計測値

ブロック3	点数	総重量	平均重量(±2s)	最大重量	最大長 ^g
座標	305	1,338.1g	4.39±15.41g	81.6g	70mm
一括	6	13.9g	2.32±5.80g	7.7g	38mm
水洗	165	180.6g	0.84±5.33g	21.0g	64mm

ブロック6 ^g	点数	総重量	平均重量(±2s)	最大重量	最大長 ^g
座標	529	1,860.0g	3.52±10.84g	39.0g	67mm
一括	20	83.8g	4.19±8.31	35.1g	59mm

ブロック構成クラスターの空間的属性一覧表

BL	CL	中心座標	座標の標準偏差	面積(m)	出土点数	分布密度	重量	重量分布密度
		X	Y	SX	SY	S	n	(g/m ²)
1	1	-128.260.701	-43.440.124	1.1393	1.7667	56.910	303	5.324 366.5 6.440
2	2	-128.266.514	-43.443.090	0.5637	1.329	18.057	21	1.163 78.6 4.353
1	1	-128.225.631	-43.582.897	1.9476	2.0318	111.882	60	0.536 333.9 2.984
3	2	-128.230.387	-43.580.671	1.4958	1.4826	62.704	123	1.962 575.8 9.183
3	3	-128.236.762	-43.578.815	1.7921	2.4719	125.250	121	0.966 428.8 3.424
4	1	-128.246.182	-43.602.385	2.1604	1.5017	91.731	20	0.218 0.0 0.000
2	128.253.542	-43.602.428	1.9512	2.6157	144.303	18	0.125 0.0 0.000	
1	-128.253.677	-43.623.954	2.0936	3.1337	185.496	62	0.334 301.3 1.624	
6	2	-128.247.347	-43.620.353	1.4339	1.2951	52.506	394	7.504 1.076.5 20.502
3	-128.245.213	-43.626.538	2.1410	2.3367	141.450	73	0.516 482.2 3.409	
5 ^g	-128.220.103	-43.424.369	1.0460	1.0855	32.106	16	0.498 159.1 4.955	
						63	1.962 166.7 5.192	

^g: 出土点数、分布密度、重量、重量分布密度 上段: 座標資料のみ

下段: 水洗選別資料含む

表20 粟生間谷遺跡各ブロック・構成クラスターの一覧表(2)

各ブロックの石器群組成一覧表(上段:点数、下段:重量)

ブロック	出土点数	残渣				Tool A		Tool B		Tool C		Tool D	
		Co	Fl	Cp	Kn	TrP	ES	Sq	ほか	RF	UF	HS	
1	563	11	118	420		14			2	28	0		
		549					0		1	1	0		
2	15	13		0			0		1	0	1		
		2	11	0			0		10	36		0	
3	524 ^{**}	458			20		9	1	24	12			
		17	275 ^{**}	166			1		8	0			
4	55 ^{**}	46		0			0	1	5	3			
		1	30	15			0	0	3	0			
5	63	60		0			0		4	62	1		
		0	11	49			1	3	50	12			
6	551	445			39		1		18	138	1		
		38	298	109			10	8	100	39			
合計	1,801	1,571			73		10						
		69	743	759			10	8	100	39			

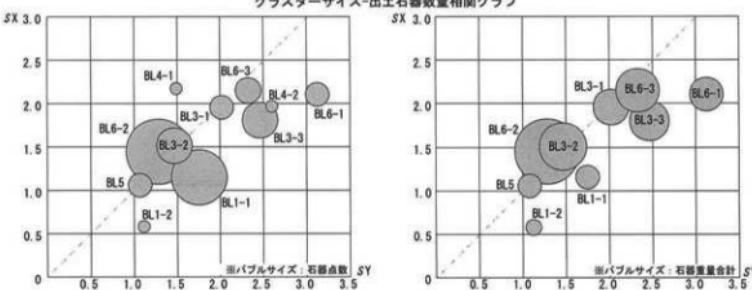
ブロック	総重量	残渣				Tool A		Tool B		Tool C		Tool D	
		Co	Fl	Cp	Kn TrP	ES	Sq	ほか	RF	UF	HS		
1	463.8g	370.1g			5.7g		1.2g		101.8g		0.0g		
		119.8g	217.2g	33.1g		0.0g		0.0g	1.2g	66.1g	35.7g		
2	134.1g	127.9g			0.0g		4.8g		1.4g		0.0g		
		61.1g	66.8g	0.0g		0.0g	4.8g		0.0g	1.4g			
3	1,527.8g ^{**}	1,063.6g			50.9g		165.9g		247.4g		0.0g		
		342.7g	690.4g ^{**}	21.5g		161.7g	4.2g	149.7g	97.7g				
4	221.2g ^{**}	140.9g			0.0g		5.5g		74.8g		0.0g		
		9.6g	128.7g	2.6g		5.5g	0.0g	58.4g	16.4g				
5	166.7g	117.0g			0.0g		0.0g		49.7g	0.0g			
		0.0g	108.8g	8.2g		0.0g	0.0g	49.7g	0.0g				
6	2,222.8g	1,506.9g			105.6g		35.5g		295.8g		279.0g		
		582.4g	902.8g	21.6g		23.4g	12.1g	224.8g	71.0g				
合計	4,730.4g	3,326.4g			162.2g		212.9g		770.9g		279.0g		
		1,115.6g	2,123.8g	87.0g		190.6g	22.3g	548.7g	222.2g				

*1:石器を除く *2:ブランディングチップを含む *3:組成表にはすべて水洗選別・一括資料を含む

ブロック1,3,6各クラスターの石器組成一覧表(左:点数、右:重量)

器種	BL1			BL3			BL6		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
石核	8	82.3g	2	34.0g	4	110.1g	6	132.1g	4
剝片	86	176.5g	14	23.3g	34	148.8g	70	176.5g	83
背部整形剝片				4	3.2g	7	4.8g	8	5.7g
骨片	170	16.3g	2	1.2g	5	5.2g	14	2.0g	3
ナイフ形石器	12	4.9g	1	0.7g	2	4.6g	6	21.2g	10
角座状石器							24.6g	6	20.6g
猿器				1	13.0g	1	9.9g		
円形板器				1	7.4g	5	123.5g	1	7.9g
削器								1	23.4g
石鏃				1	4.2g			1	0.8g
ノッチ	2	1.2g						1	3.1g
楔形石器								2	5.5g
二次加工剝片	15	47.6g	2	19.4g	5	11.3g	9	67.4g	6
剝片(微細剝離痕有)	10	35.7g			3	26.1g	5	38.4g	4
石核							33.2g	2	12.7g
合計	303	366.5g	21	78.6g	60	333.9g	123	575.8g	121
							428.8g	62	301.3g
							394		1,076.5g
								73	482.8g

クラスターーサイズ-出土石器数量相関グラフ



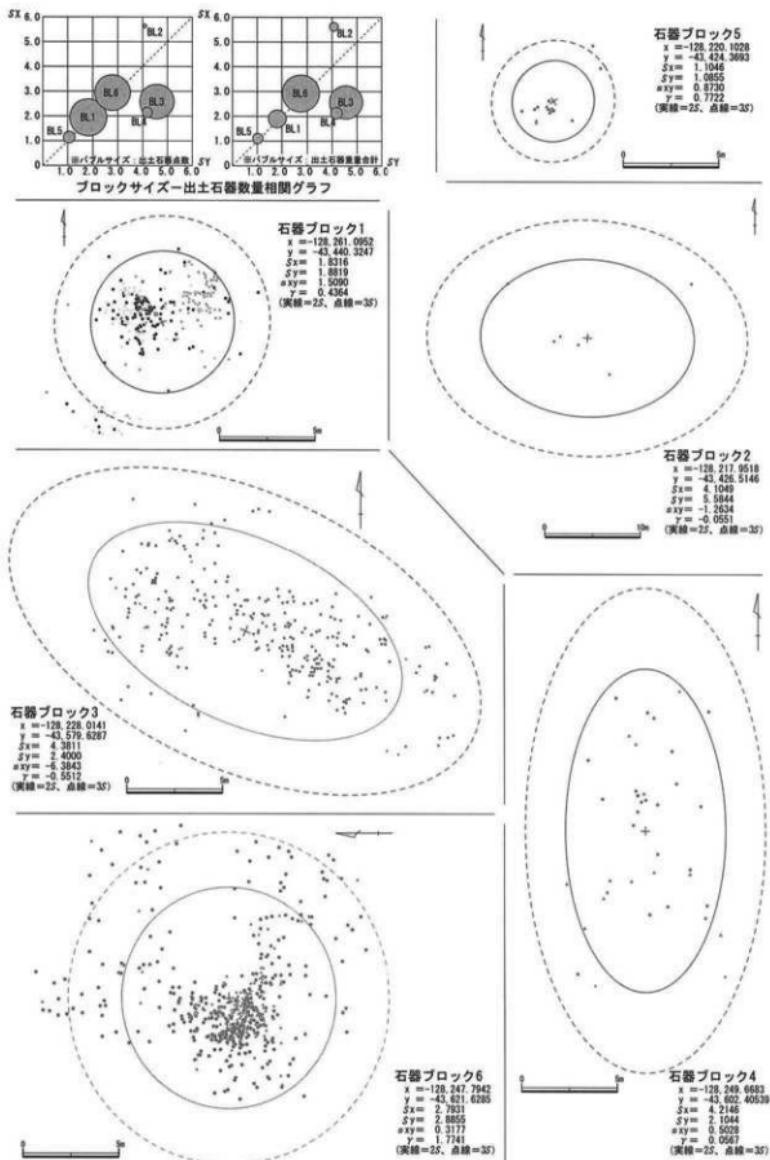


図82 粟生間谷遺跡各ブロックの規格円

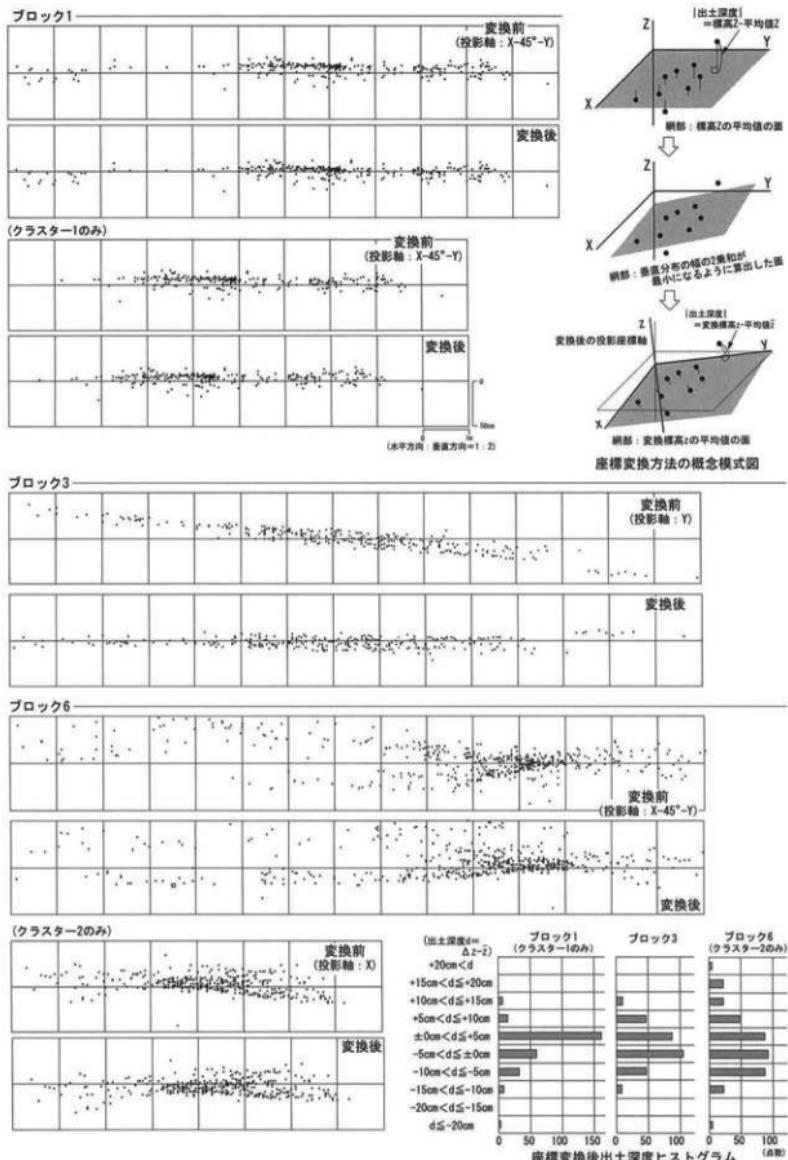


図83 ブロック1・3・6 石器垂直分布の解析図

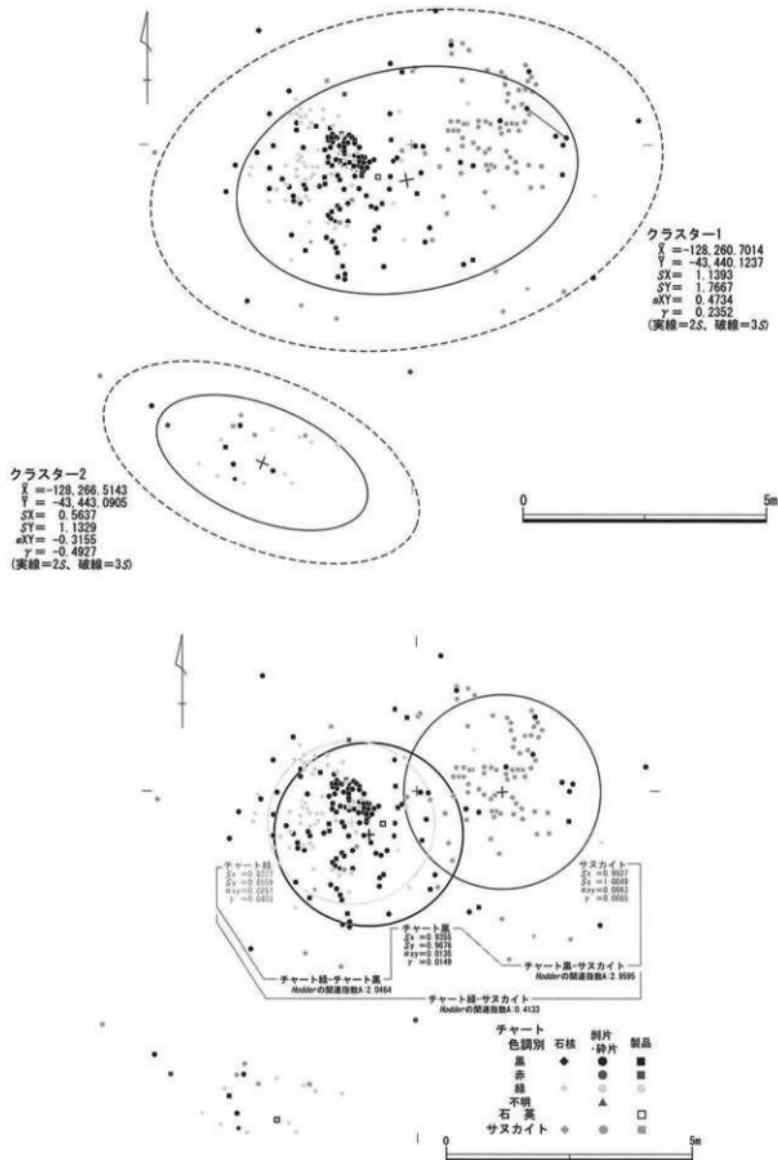


図84 ブロック1構成クラスターの規格楕円図

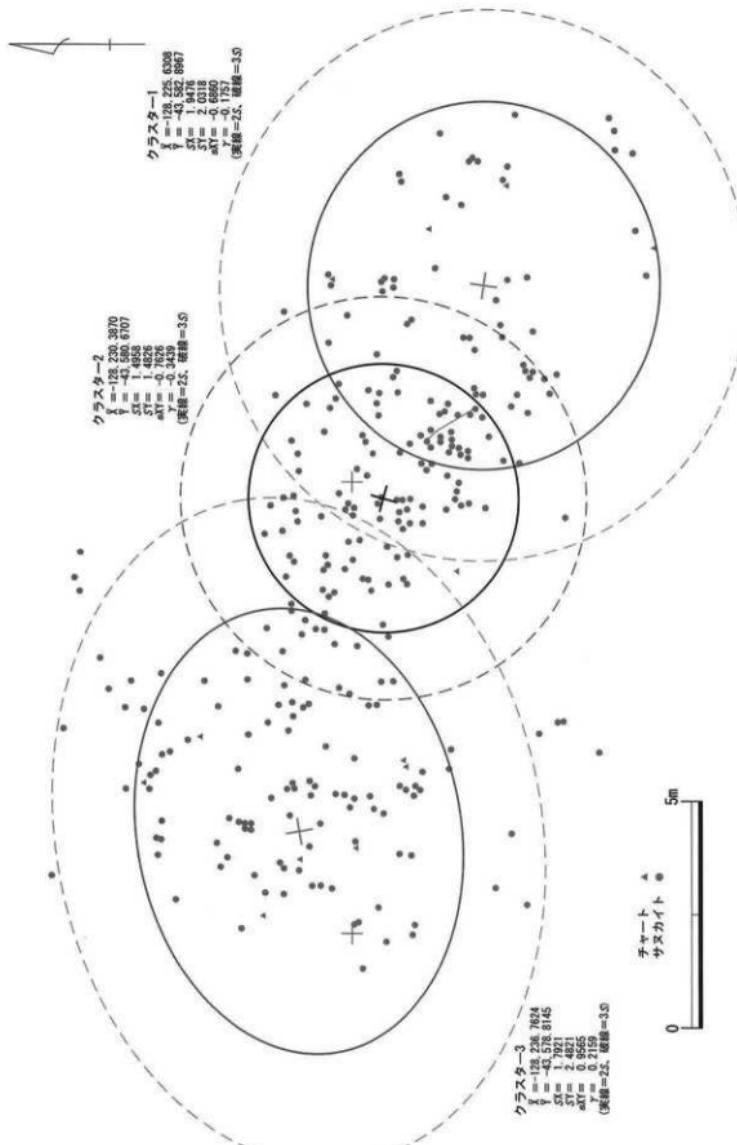


図85 ブロック3構成クラスターの規格楕円図

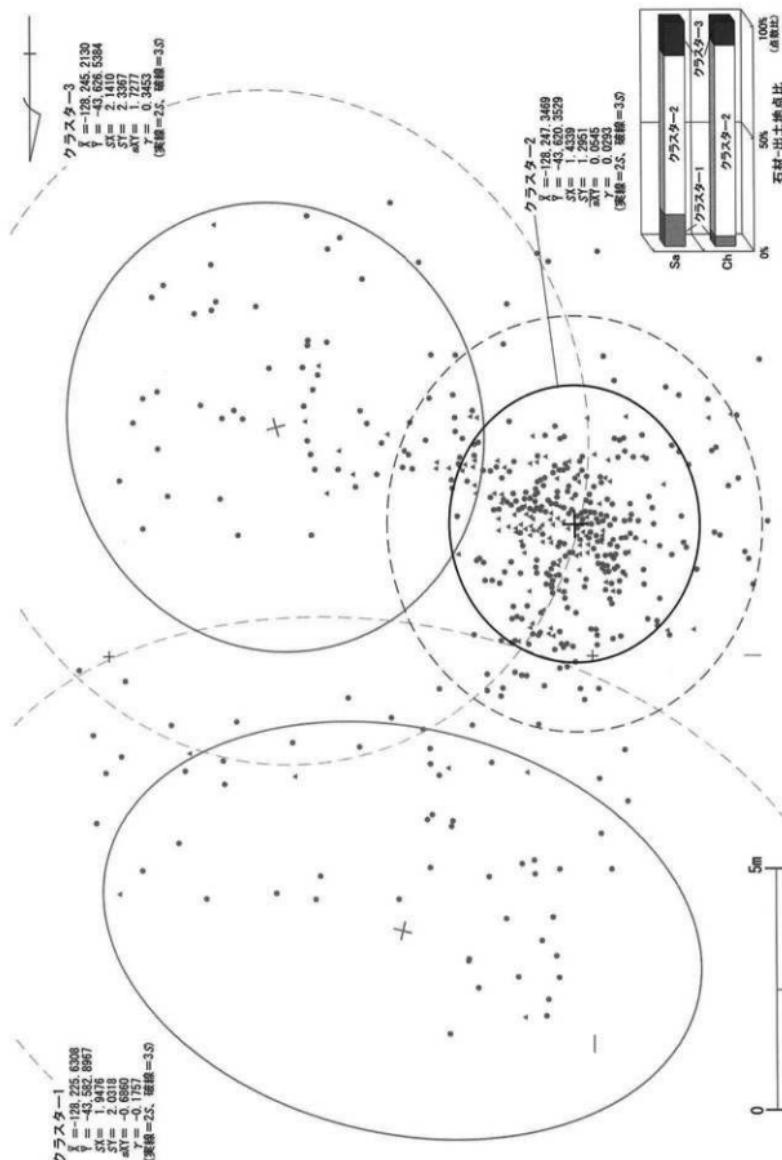
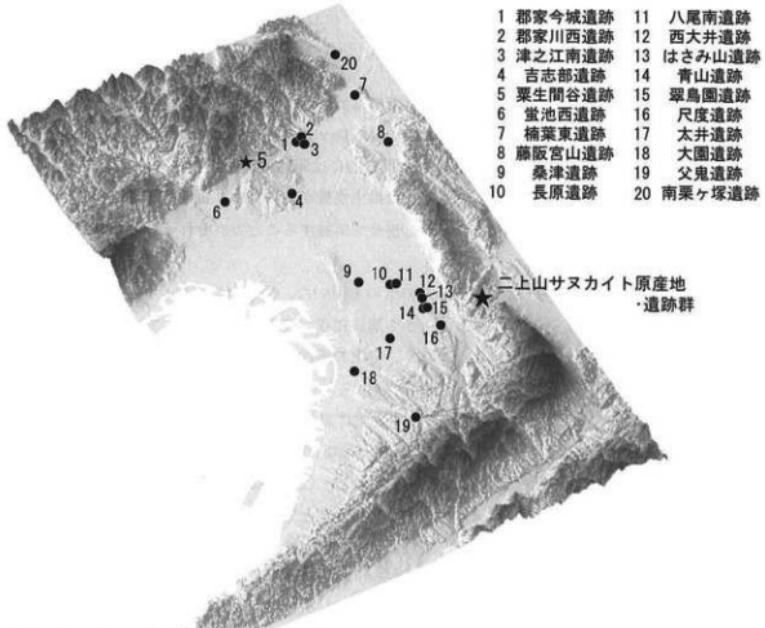


図86 ブロック6構成クラスターの規格積円図



No.	遺跡・地点名	ナイフ形石器		出土点数 (微細化)	ブロック	埋群		文献
		国府	ほか・角鉢			出土点数	出土点数	
1	郡家今城	A地点	○	765	1?	なし		原口1977、松藤1978
		C地点	○	1,114	8個16ブロック	複数	(95.2kg)	富成・大船1978
2	郡家川西	H地点	○	21,000	1?	2?		森田1981
3	津之吉南	○	○	110	3?			富成・大船1978
4	吉忠郷	第5・7次	○	162	1	1		資賀2001
5	原生岡谷	その3	○	○	6	(1)		本書
6	當池西	○	○	19	1?	なし		三宮・松宮1997
7	補葉東	○	○	>800	3	?		平川1977、久保1994
8	藤阪宮山	○	○	84	1			桑原・久保1987
9	桑津	96-13次	○	2		埴土あり		大阪市文協1999b
		III-北区		52	1	なし		大阪市文協1982
		III-南区	○	91	1	なし		"
		BB-41次	○	44	1	なし		森本ほか1989
		BB-4-4次	○	135	272	3	なし	(大阪市文協1999a)
		BB-37次	○	129	343	3	埴あり・炭化物あり	大阪市文協1995
		BB-69-69次	○	217	2,525	4	埴あり	1
		BB-22-22次	?	91	1,025	1	なし	大阪市文協1997
		BB-37-37次	○	687	3,700	3	埴あり	7
		BB-72-72次	○	248	3,745	3	なし	大阪市文協1999b
		BB-12-12次	○	395	14,757	2	なし	大阪市文協2000
		第2地点	○	462	1			原田ほか1988
		第3地点	○	380	1?	埴あり	37	福田・吉原1989
		第6地点	○	2,909	10+1			山田・宮野1993
10	長原	BB-25区		65	1	なし		石井ほか1990
		1999年度	○	671	11	なし		石神ほか1990、竹原2001
13	はさみ山	BB-7-5区	○	238	1	なし		石神ほか1990
14	青山	3次・4-5区	○	25	1	なし		"
15	翠島園	(上層)	○	23,300	(8,906.1g)	54	なし	高野ほか2001
		(下層)	○	1,891	(1.9g)	1+α	埴あり	"
16	尺度	○	○	27	1?	なし		三宮・川嶋1999
17	太井			36	2	なし		赤井ほか1996
18	大園	21次	○	145	189	3	なし	麻永・岸本1982
19	兎鬼			22	1?			松藤1978
20	南原ケ塚	○	○	16	1	なし		原1999

図87 大阪平野周辺のおもな後期旧石器時代遺跡

第3節 ブロック1・3・6の分析・比較

1 分析意図と方法

前章までの記載で明らかなように、栗生間谷遺跡では計7箇所で石器ブロックが検出された。このうち、石器の出土点数や内容から様相が明らかなものはブロック1・3・6である。地理的に見て同じ丘陵上に位置し、数十～数百mの距離を隔つても巨視的には同じ地理的条件下にあるにもかかわらず、3者の内容は著しく異なっている。そこで本節では出土点数が多い剝片の属性分析から、ブロック1・3・6の比較をおこなう。また、石核との対照も併せて実施することで、それぞれのブロックにおける石器製作の内容を改めて検討する。

剝片は最大長・最大幅のどちらかが10.0mm超のものを用いた。標本数はブロック1で121点、同3で245点、同6で287点となる。石核はブロック1から順に12点、17点、38点出土している。なお、ブロック2・4・5出土の剝片・石核は資料数が少なく、定量的属性の分析・検討においてもそれぞれ30点以下にとどまる。したがってそのデータを一部掲載するが、以下に述べる分析結果ではとくに触れない。なお、属性の代表値一覧（ブロック1・3～6）を文末に記してあるので、併せて参照されたい。

本稿ではおもに剝片・石核がもつ属性のうち、長さ・幅などの定量的属性を用いた比較を中心となる。したがって、これらの属性を適切に要約する必要があるが、これには度数分布表が有効である。度数分布表は階級数が8～14程度となるように階級幅を設け、度数と累積度数を併記した。また、平均値などの代表値と標準偏差、および標本数も表示している。定量的属性の記載およびブロック間の比較は、おもにこれらの度数分布にしたがい実施する。このほか、打面構成・打面形状など定性的属性の分析も併せておこない、定量的属性との対照を適宜はかりつつブロック間の相違点を明らかにしたい。

2 石材構成

剝片・石核の属性分析をおこなう前に、主要石材であるチャートとサスカイトの構成比を比較しておきたい¹¹⁾。各ブロックで出土したすべての剝片・碎片・石核を対象とし、チャート・サスカイトの実数を示したのが表21である。まず剝片・碎片を見ると、ブロック1ではサスカイトが35.2%、同3では93.5%、同6では78.5%とかなりの開きがある。これを補完するのがチャートで、同様にブロック1で64.8%、同3で6.5%、そして同6で21.5%を占めている。つまり、ブロック3はサスカイトの占める割合がきわめて高く、同6・1の順でその構成比が小さい。

統いて石核について見ると、ブロック1・3は剝片・碎片の石材構成にきわめて近いといえるが、同6では主客が入れ替わっている。すなわち、石核ではチャートを用いた例が60.5%を占めているのだが、これは赤色チャートの石核が18点と多いためである。そこで、石材別に剝片・碎片と石核との比（以下、F/C比と呼ぶ）を求めてみると、サスカイトに関してはすべてのブロックを通じてほぼ似通った比率を示す(21.2～24.5)のに対し、チャートではブロックごとで大きく食い違っている(3.8～33.9)のがわかる。また、チャートも色調で黒色・赤色・緑色の3種に分けてF/C比を比較すると（表22）、どのブロックでも決して一様ではないことが判明する。剝片・碎片の出土量が多いブロック1の黒色チャートと、同6の赤色チャートを比べてみよう。F/C比は前者で58.7、後者では3.4となる。F/C比の大小は単純に考えると剝離効率との関係で解釈しがちであるが、実際には石材の搬入・搬出によって本来のバランスを大きく崩している可能性が高い。先の事例に従うならば、ブロック1の黒色チャートでは石核の実

表21 サヌカイト・チャートの構成比

		BL 1		BL 3		BL 6	
		CH	SN	CH	SN	CH	SN
剥片・碎片	度数	271	147	25	359	87	318
	%	64.8	35.2	6.5	93.5	21.5	78.5
石核	度数	8	6	1	16	23	15
	%	57.1	42.9	5.9	94.1	60.5	39.5
合計	度数	279	153	26	375	110	333
	%	64.6	35.4	6.5	93.5	24.8	75.2
F/C比		33.9	24.5	25.0	22.4	3.8	21.2

表22 チャートの色調別構成比

		BL 1			BL 3			BL 6		
		黒	赤	緑	黒	赤	緑	黒	赤	緑
剥片・碎片	度数	176	6	74	6	2	10	2	62	26
	%	66.7	2.3	28.0	31.6	10.5	52.6	1.8	54.9	23.0
石核	度数	3	0	5	0	0	1	4	18	1
	%	1.1	0.00	1.9	0.00	0.00	5.3	3.54	15.93	0.9
合計	度数	179	6	79	6	2	11	6	80	27
	%	67.8	2.3	29.9	31.6	10.5	57.9	5.3	70.8	23.9
F/C比		58.7	∞	14.8	∞	∞	10.0	0.5	3.4	26.0

数が少なすぎ、ブロック6の赤色チャートでは逆に多すぎる印象も受ける。とくに後者については、搬入時にはすでに使用停止の状態にあった石核がそのままブロック内に残されたようにもみえる。

3 剥片の属性分析

(1) 剥片の大きさ

剥片の大きさを表わす属性として「最大長」・「最大幅」・「最大厚」・「重量」を計測し、階級幅5.0mmで度数分布表を作成した(表23~26)。併せて各属性の代表値・標準偏差も示してある。最大長・最大幅・最大厚は完形値かそれに近い実測値のみを用いているので、標本数は一致しない。例えば、一部を折損する剥片が長さにおいて完形値であるときは、その幅は「折損幅」として採用していない。なお、重量は著しい折損例を除きほぼ全点を用いており、したがって標本数は各ブロックで出土した剥片の総数に近い。

まず最大長を見ると、ブロック1・3・6の順で最頻値²¹⁾のある階級が大きい方へとずれている(表23)。すなわち、ブロック1から順に15.0mm、17.5mm、22.5mmと大きくなっている。平均値を求めてみると、ブロック1では18.63mm、同3では21.43mm、同6では23.62mmとなる。これらの代表値によれば、ブロック1と同6との間に約5mmの較差がある。この傾向は石材別でも変わらない。

続く最大幅では傾向がやや異なる(表24)。最頻値はブロック1で12.5mmと小さく、ブロック3で22.5mmと最も大きい。ブロック6では17.5mmと両者の中間に位置する。平均値はブロック1・3・6の順で19.82mm、22.83mm、23.20mmとなる。

先に示した最大長の代表値も勘案すると、ブロック3における最大幅の大きさがやや目立つ。サヌカイトの剥片がきわめて多く、結果として横長となる傾向が強まった可能性が高い。ちなみに完形剥片の長幅指数を算出してみると、3つのブロックとも100.0前後の平均値を示している。ブロック1が平均値

表23 最大長の度数分布

最大長(mm)	BL 1						BL 3						BL 6					
	階級値	CH		SA		合計	CH		SA-AN		合計	CH		SA		合計		
		度数	Zf	度数	Zf		度数	Zf	度数	Zf		度数	Zf	度数	Zf			
10	7.5	0	0	6	6	6	0	0	12	12	12	0	0	3	3	3		
15	12.5	7	7	10	16	17	0	0	38	30	38	4	4	19	22	23		
20	17.5	7	14	10	26	17	3	3	47	97	50	6	10	32	54	38		
25	22.5	5	19	3	29	8	0	3	27	124	27	9	19	33	87	42		
30	27.5	1	20	3	32	4	0	3	16	140	16	6	25	19	106	25		
35	32.5	3	23	1	33	4	0	3	11	151	11	3	28	13	119	16		
40	37.5			2	35	2	0	3	8	159	8	5	33	4	123	9		
45	42.5						1	4	4	163	5	1	34	2	125	3		
50	47.5								5	168	5	1	35	2	127	3		
55	52.5								0	168	0		0	127	0			
60	57.5								1	169	1		1	128	1			
N=		23		35		58		4		169		173		35		128	163	
平均値		20.28		17.54		18.63		23.50		21.38		21.43		25.69		23.05	23.62	
中央値		20.00		16.00		17.00		18.00		19.00		19.00		24.00		22.00	22.00	
標準偏差		6.66		7.95		7.52		12.40		9.93		9.96		8.71		8.55	8.62	

表24 最大幅の度数分布

最大幅(mm)	BL 1						BL 3						BL 6					
	階級値	CH		SA		合計	CH		SA-AN		合計	CH		SA		合計		
		度数	Zf	度数	Zf		度数	Zf	度数	Zf		度数	Zf	度数	Zf			
10	7.5	1	1	1	1	2	0	0	6	6	6	2	2	5	5	7		
15	12.5	10	11	13	14	23	0	0	33	39	33	5	7	20	25	25		
20	17.5	8	19	10	24	18	1	1	30	69	31	12	19	35	60	47		
25	22.5	4	23	6	30	10	1	2	36	105	37	13	32	25	85	38		
30	27.5	3	26	2	32	5	1	3	18	123	19	5	37	18	103	23		
35	32.5	1	27	2	34	3			10	133	10	3	40	7	110	10		
40	37.5	2	29	1	35	3			9	142	9	1	41	11	121	12		
45	42.5			0	35	0			2	144	2		4	125	4			
50	47.5			1	36	1			4	148	4		0	125	0			
55	52.5								0	148	0		2	127	2			
60	57.5								1	149	1		2	129	2			
65	62.5								0	149	0							
70	67.5								1	150	1							
N=		29		36		65		3		150		153		41		129	170	
平均値		19.86		19.78		19.82		22.57		22.83		22.83		21.41		23.76	23.20	
中央値		19.00		18.00		18.00		25.00		22.00		22.00		21.00		21.00	21.00	
標準偏差		7.13		8.06		7.60		4.93		9.95		9.86		6.75		10.68	9.91	

表25 最大厚の度数分布

最大厚(mm)	BL 1						BL 3						BL 6					
	階級値	CH		SA		合計	CH		SA-AN		合計	CH		SA		合計		
		度数	Zf	度数	Zf		度数	Zf	度数	Zf		度数	Zf	度数	Zf			
2.5	1.25	5	5	11	11	16	1	1	27	27	28	1	1	19	19	20		
5.0	3.75	32	37	34	45	66	1	2	97	124	98	26	27	112	131	138		
7.5	6.25	4	41	15	60	20	1	3	68	192	69	13	40	46	177	59		
10.0	8.75	6	47	5	65	11	2	5	23	215	25	17	57	29	206	46		
12.5	11.25	2	49			2	2	7	11	226	13	3	60	10	216	13		
15.0	13.75	1	50			1	0	7	4	230	4	3	63	2	218	5		
17.5	16.25	1	51			1	0	7	3	233	3	1	64	2	220	3		
20.0	18.75	2	53			2	1	8	1	234	2	2	66	1	221	3		
22.5	21.25								0	234	0							
25.0	23.75								0	234	0							
27.5	26.25								1	235	1							
N=		53		65		119		8		235		243		66		221	287	
平均値		5.43		4.46		4.91		8.99		5.60		5.72		7.02		5.34	5.72	
中央値		3.90		4.10		4.10		9.45		4.80		5.00		6.10		4.60	4.70	
標準偏差		3.96		1.90		3.02		5.47		3.28		3.41		3.96		2.80	3.18	

表26 重量の度数分布

重 量(g)	BL 1						BL 3						BL 6					
	CH		SA		合 計		CH		SA-AN		合 計		CH		SA		合 計	
階級の上限	階級値	度数	Σf_i	度数	Σf_i	度数	Σf_i	度数	Σf_i									
0.5	0.25	18	18	24	24	42	0	0	58	58	58	6	6	35	35	41		
1.0	0.75	14	32	15	39	29	0	0	46	104	46	13	19	57	92	70		
2.0	1.50	10	42	13	52	23	1	1	43	147	44	14	33	50	142	64		
3.0	2.50	4	46	6	58	10	4	5	31	178	35	8	41	24	166	32		
4.0	3.50	0	46	2	60	2	0	5	15	193	15	11	52	10	176	21		
5.0	4.50	1	47	1	61	2	0	5	8	201	8	2	54	9	185	11		
6.0	5.50	0	47	1	62	1	1	6	11	212	12	1	55	9	194	10		
7.0	6.50	2	49	3	65	5	0	6	3	215	3	2	57	5	199	7		
8.0	7.50	1	50	1	66	2	0	6	5	220	5	1	58	4	203	5		
9.0	8.50	1	51			1	0	6	3	223	3	1	59	2	205	3		
10.0	9.50	0	51			0	0	6	2	225	2	2	61	2	207	4		
15.0	12.50	2	53			2	2	8	6	231	8	5	66	5	212	10		
20.0	17.50	0	53			0			4	235	4			7	219	7		
	<37.5	1	54			1			2	237	2			2	221	2		
N=		54		66		120		8		237	245		66		221		287	
平均値		2.39		1.48		1.89		4.75		2.72	2.78		3.30		2.98		3.05	
中央値		0.85		0.80		0.80		2.55		1.30	1.30		2.10		1.30		1.50	
標準偏差		4.43		1.72		3.25		4.04		3.94	3.95		3.36		4.44		4.22	

表27 打面幅の度数分布

打面幅(mm)	BL 1						BL 3						BL 6					
	CH		SA		合 計		CH		SA-AN		合 計		CH		SA		合 計	
階級の上限	階級値	度数	Σf_i	度数	Σf_i	度数	Σf_i	度数	Σf_i									
5	2.5	4	4	3	3	7	0	0	4	4	4	5	5	9	9	9	14	
10	7.5	7	11	8	14	15	1	1	35	39	32	15	20	34	43	35		
15	12.5	7	18	7	15	14	1	2	30	65	31	7	22	26	60	33		
20	17.5	5	23	4	19	9	1	3	24	89	25	5	27	26	86	31		
25	22.5			3	22	3	1	4	16	105	17	2	29	8	94	10		
30	27.5			0	22	0			8	113	8	2	31	7	101	9		
35	32.5			1	23	1			3	116	3			2	103	2		
40	37.5								2	118	2			3	106	3		
45	42.5								1	119	1			1	107	1		
50	47.5								2	121	2							
55	52.5								0	121	0							
60	57.5								0	121	0							
65	62.5								1	122	1							
N=		23		26		49		4		122	126		31		107		138	
平均値		11.05		12.81		11.98		16.40		16.61	16.60		11.69		14.94		14.21	
中央値		10.50		12.55		11.70		15.85		14.85	14.85		10.20		13.30		12.95	
標準偏差		5.18		6.39		5.86		6.02		9.74	9.62		7.01		8.42		8.21	

表28 打面厚の度数分布

打面厚(mm)	BL 1						BL 3						BL 6					
	CH		SA		合 計		CH		SA-AN		合 計		CH		SA		合 計	
階級の上限	階級値	度数	Σf_i	度数	Σf_i	度数	Σf_i	度数	Σf_i									
2.5	1.25	10	10	11	11	21	0	0	28	28	28	11	11	35	35	46		
5.0	3.75	10	20	16	27	26	2	2	73	39	75	11	22	64	99	75		
7.5	6.25	4	24	6	33	10	1	3	34	107	35	9	31	28	127	37		
10.0	8.75	4	28	1	34	5	2	5	8	115	10	4	35	14	141	18		
12.5	11.25					1	6		8	123	9	3	38	3	144	6		
15.0	13.75								5	128	5	0	38	1	145	1		
17.5	16.25								0	128	0							
20.0	18.75								0	128	0							
22.5	21.25								0	128	0							
25.0	23.75								0	128	0							
27.5	26.25								1	129	1							
N=		28		34		62		6		157	163		39		146		185	
平均値		4.19		4.00		4.09		6.97		5.03	5.10		4.87		4.57		4.64	
中央値		3.45		3.80		3.60		7.00		4.10	4.20		3.60		4.00		3.90	
標準偏差		2.34		2.32		2.31		2.59		3.38	3.36		3.44		2.56		2.76	

で93.9と最も幅広で、200.0を超える継長剝片(石刃)は皆無である。標準偏差も34.8と小さめで、他のブロックに比し指數値のばらつきが少ない。ブロック3・6では長幅指數200.0超の剝片が認められ、これが平均値をやや大きめに引き上げているように見える。そこで中央値の比較をおこなうと、ブロック3が83.9、ブロック1が86.8となり、前者の方がやや幅広であることがわかる。ブロック6では96.2と平均値から大きく離れず、他のブロックよりやや幅狭の傾向が変わらない。ブロック3では横長の剝片が目立つようと思われたが、その印象を裏付けるものといえよう。

剝片の最大厚は、階級幅2.5mmで度数分布表を作成している(表25)。最頻値はいずれも3.7mmと変わらない。平均値はブロック1から順に4.91mm、5.72mm、5.72mmとなる。最大厚でもブロック1の代表値がやや小さい。

剝片の重量は、階級幅0.5~5.0gで度数分布表を作成している(表26)。ここでもブロック1が平均値1.89gと小さく、次いでブロック3(2.78g)、同6(3.05g)となる。

この傾向は、サスカイト剝片の重量でとくに著しい。なお、石材間で較差が大きくなる傾向が認められるが、これは両石材の比重差からも影響を受けた結果であろう。

ここで主要石材(サスカイト・チャート)別の度数分布に改めて着目すると、最大長・最大幅ではサスカイトの最大値がつねにチャートのそれを上回っているのがわかる。この傾向はブロック3・6の最大幅で顕著となるが、ブロック1では両石材間に大きな較差を認めることができない。また、同じサスカイトについていえば、ブロック1のサスカイト剝片の最大厚は10mm以下と、ブロック3・6の最大値(それぞれ26.2mm、18.0mm)を大きく下回っている。なお、各ブロックで出土したサスカイトの剝片素材石核で、厚さ10mm未満のものは4例にすぎない。これらの事実からは、ブロック1では石核素材に適した大形の剝片が遺存しにくい状況があったことが知られるが、その要因を考えるために石核自体の分析(後述)が必要である。

大きさについての検討をまとめると、剝片が最も小さく、薄いのはブロック1である。とはいえる、ブロック3・6との較差は最大長・最大幅で5mm前後にとどまり、3者間に大きな懸隔はないといえる。この傾向は栗生間谷遺跡における石器の製作過程で大形の剝片が生じにくかったことに起因している可能性が高いが、他遺跡との比較・検討を要する。

(2) 打面幅・打面厚

打面幅は階級幅5.0mm、打面厚が階級幅2.5mmで度数分布表を作成した(表27・28)。どちらの属性でも最頻値は同じ階級(打面幅7.5mm・打面厚3.75mm)にあるが、平均値をとるとブロック間の較差がやや明確になる。すなわち、打面幅ではブロック1から順に11.98mm、16.60mm、14.21mmとなり、打面厚では4.19mm、5.10mm、4.64mmとなる。ここでもブロック1の剝片は打面が薄く、幅狭となる。逆にどちらの属性でも最大となるのはブロック3の剝片である。打面幅・打面厚の大小が剝片の大きさにある程度の影響を与えている可能性を指摘できる。

(3) 打面構成・形状

打面構成は「単剝離面」・「多剝離面」・「自然面」・「節理面」を基本分類とし、自然面と剝離面との複合状態から別項目「[自+剝]」を設けて集計した。各ブロックで相似した傾向を示している(表29)。単剝離面からなる打面はブロック1・3でそれぞれ51.6%、51.5%と同率を示したが、ブロック6では

表29 打面構成

度数	BL 1				BL 3				BL 6			
	CH		SA		CH		SA-AN		CH		SA	
	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数
單列圓齒	10	35.7	23	65.7	33	51.6	0	0.0	84	53.5	9	24.3
多列圓齒	13	46.4	12	34.3	25	39.1	4	66.7	61	38.9	65	39.9
自+刺	1	3.6	0	0.0	1	1.6	0	0.0	4	2.5	4	2.5
自然齒	1	3.6	0	0.0	2	3.1	1	16.7	8	5.1	9	5.5
節圓齒	3	10.7	0	0.0	3	4.7	1	16.7	0	0.0	1	2.7
合計	28	100.0	35	100.0	64	100.0	6	100.0	152	100.0	163	100.0
											37	100.0
											145	100.0
											182	100.0

表30 打面調整の頻度

	BL 1				BL 3				BL 5			
	CH		SA		CH		SA·AN		CH		SA	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
あり	5	14.7	3	7.3	8	10.7	0	0.0	35	19.8	35	19.2
なし	29	85.3	38	92.7	67	89.3	5	100.0	142	80.2	147	80.8
合計	34	100.0	41	100.0	75	100.0	5	100.0	172	100.0	182	100.0

表31 打面形態

	BL1			BL3			BL6		
	CH 度数	SA 度数	合計 度数	CH 度数	SA-AN 度数	合計 度数	CH 度数	SA 度数	合計 度数
平 型	23	65.7	36.732	53	69.7	58.833	111	62.7	116.834
山 形	5	14.3	5.122	10	13.2	1.167	25	25.4	26.251
立 村	4	11.4	3.73	7	9.2	0.0	8	4.4	2.49
綿 級	3	8.6	3.73	6	7.9	0.0	13	7.1	1.24
合 計	35	100.0	41.1000	6	100.0	12.7000	83	100.0	41.1000
							158	100.0	109.1000

表32 削離角の度数分布

制離角(°)		BL 1					BL 3					BL 6				
上限	階級値	CH		SA		合計	CH		SA-AN		合計	CH		SA		合計
		度数	Ztj	度数	Ztj	度数	度数	Ztj	度数	Ztj	度数	度数	Ztj	度数	Ztj	度数
90		0	0	2	2	2	0	0	3	3	3	2	2	3	3	5
100	95	2	2	1	3	4	0	0	18	21	18	5	7	15	18	20
110	105	13	15	9	12	22	2	2	41	62	43	13	20	43	61	56
120	115	7	22	12	24	19	2	4	44	106	46	13	33	46	107	59
130	125	5	27	7	31	12	2	6	31	137	33	3	36	28	135	31
140	135	1	28	1	32	2			14	151	14	2	38	7	142	9
150	145								1	152	1			1	143	1
160	155								2	154	2					
N=			28		32	61		6		154	160		38		143	181
平均値			111.36		113.38	112.43		115.00		114.26	114.29		110.13		112.97	112.38
中央値			109.50		114.50	111.50		114.00		113.00	113.00		109.00		112.00	112.00
標準偏差			9.46		11.31	10.45		9.03		12.85	12.70		11.22		11.29	11.30

43.4%とやや少ない。次いで構成比が大きいのは多剝離面の打面で、3つのブロックで40%前後を占めている。自然面打面はすべてのブロックで10.0%未満と少なく、自然面と剝離面、あるいは節理面からなる打面はともに5.0%未満にすぎない。まとめると、ブロックごとで多少の変動はみられるものの、単剝離面→多剝離面→自然面の順で少くなり、百分率もほぼ同率となる。また、「多剝離面」は明確な打面調整を施した例³⁾も含む。ブロック別にその割合を示すと(表30)、ブロック1では8点(10.4%)、同3では35点(19.1%)、同6では32点(16.1%)となる。ブロック6では入念かつ細密な打面調整を施して剝離した剝片が目立つが、その割合はブロック3のそれよりやや少ない。

打面形状を「平坦」・「山形」・「点状」・「線状」の4種に分け、それぞれ度数を求めた(表31)。ちなみに先の「単剥離面」はすべて「平坦」に含まれ、「多剥離面」は一部に山形を含む。「点状」・「線状」はその性格上、打面構成の判別をおこなっていない。最も多いのは平坦な打面で、山形の打面がこれに次ぐ。この傾向は3つのブロックを通じて認められ、点状打面・線状打面はどちらも10.0%未

満である。ただ、ブロック3で山形打面の占める割合が高い点(25.1%を構成)には注目すべきである。この傾向はサスカイトを多用する横削ぎ石器群の特徴とも考えられる。そうした打面状況が好都合であるがゆえに多く選択されたのであろうが、サスカイト製ナイフ形石器の素材生産と無関係ではあるまい。この点、石核やナイフ形石器とも整合的であり、ブロック3における特徴のひとつとして注目に値する。

(4) 剥離角

10度刻みの階級を設けて度数分布表を作成した(表32)。ブロック1は同3・6よりも最頻値の属する階級がひとつ小さめであるが、3者に大きな隔たりはない。ブロック1から順に平均値を示すと、112.2度、114.3度、112.4度となり、互いに近似している。

(5) 背面構成

主要剥離面と同一の剥離方向を「方向I」とし、順次時計回りに「方向II～IV」と表わす。II・IVは側方からの剥離方向を示し、IIIは方向Iに対向する。各ブロックできわめて似通った傾向が認められる(表33)。まず、背面が方向Iのみからなる剥片がどのブロックでも70%弱を占めている。次いで方向Iと異方向との組み合わせを見せる例が多く、方向Iの剥離痕をもたない例はいずれも10%未満である。こうした傾向は栗生間谷遺跡のブロック出土資料に特有なのではなく、石器製作一般の特徴と考えるべきであろう。

(6) 自然面の付着

各ブロックで出土したすべての剥片を観察し、自然面の付着程度を表わす。まず自然面の有無を調べ、

表33 背面構成

背面構成		BL 1		BL 3		BL 6	
		度数	%	度数	%	度数	%
背面方向Iのみ	I	73	67.6	164	69.2	188	69.4
	I + II	9	8.3	26	11.0	22	8.1
	I + II + III	2	1.9	0	0.0	4	1.5
	I + II + IV	1	0.9	1	0.4	2	0.7
I + 異方向	I + II + III + IV	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	I + III	6	5.6	18	7.6	19	7.0
	I + III + IV	2	1.9	0	0.0	2	0.7
	I + IV	10	9.3	13	5.5	17	6.3
IIのみ	II	3	2.8	7	3.0	5	1.8
II + III・IV	II + III	0	0.0	0	0.0	1	0.4
	II + III + IV	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	II + IV	0	0.0	0	0.0	2	0.7
IIIのみ	III	0	0.0	3	1.3	0	0.0
	III + IV	0	0.0	0	0.0	1	0.4
方向面のみ	IV	2	1.9	5	2.1	8	3.0
	N	108	100.0	237	100.0	271	100.0

表34 自然面の付着

	BL 1			BL 3			BL 6					
	CH		SA	CH		SA・AN	CH		SA	CH		
	度数	%										
一部	12	22.2	5	7.6	17	34.2	4	50.0	87	36.7	91	37.1
全面	2	3.7	2	3.0	4	3.3	0	0.0	3	1.3	3	1.2
付着率 なし	25.9		10.6		17.5		50.0		62.0		38.4	
	40	74.1	59	89.4	99	82.5	4	50.0	147	38.0	151	61.6
合計	54	100.0	66	100.0	120	100.0	8	100.0	237	100.0	245	100.0
									66	100.0	220	100.0
											286	100.0

自然面をもつ剥片をその付着程度から「全面」と「一部」とに二分する。大きく2つの傾向が認められた（表34）。すなわち、自然面の付着率が17.5%のブロック1と、同様に38.4%、39.9%となったブロック3・6とを区別できる。自然面の付着程度がほぼ「全面」と判定されたのはいずれのブロックでも5.0%未満に過ぎず、「一部」とされた剥片の割合が付着率に大きく影響している。また、石材別に同様の検討をおこなうと、ブロック1出土のサスカイト剥片における付着率が10.6%と低率なのに対し、ブロック3・6ではそれぞれ38.0%、41.4%とほぼ近似した百分率を示している。先に指摘した2つの傾向はおもにサスカイト剥片の傾向を直接反映したもので、ブロック1と同3・6とは好対照をなしているといえる。

(7) 小 結

剥片の属性分析でとくにブロック間の差が顕著であったのは、石材構成と自然面の付着率であろう。チャートとサスカイトが主要石材となる点では共通しているが、実際にはその構成比はブロックごとで大きく異なる。すなわち、チャートがサスカイトを凌駕しているのはブロック1のみであり、ブロック3は実質的にサスカイトからなる。 F/C 比はサスカイトでは近似するが、チャートではブロック別に大きな較差がある。また、チャートは黒色・赤色・緑色の3者間でその構成比および F/C 比が大幅に異なっており、サスカイトとは異なる搬入・搬出状況を考慮する必要がある。自然面の付着率は20%未満のブロック1と、40%弱のブロック3・6とに分かれる。この相違点については解釈が難しいが、後2者では自然礫素材とみられる石核が出土しており、それを用いた剥片生産によって付着率が高まったようみえる。ただし、自然面打面の剥片はいずれのブロックでも10%未満となる。

最大長・最大幅など剥片の大きさを表す計量属性では、サスカイト・チャートの双方でブロック1の剥片が同3・6のそれを下回り、やや小形であることが示された。さらに、最大厚ではブロック1のサスカイト剥片が他ブロックのそれよりも著しく小さいことから、石核素材に適した剥片の不在を確認できた。

4 石核の大きさ

統いて、前項までに記した剥片の分析結果との整合性をはかる意味で石核の大きさに関する分析をおこなう。石核はどのブロックでも出土点数が少なく、ブロック1・3・6でそれぞれ11点、17点、38点であった。おもに大きさに関する比較をおこなうこととし、剥片の分析結果と併せ石核の変形度について検討を加える。

剥片におけるのと同様に、石核の大きさを表わす属性として「最大長」・「最大幅」・「最大厚」・「重量」を計測し、各属性の代表値・標準偏差も示した（表35～38）。最大長・最大幅・最大厚は完形値かそれに近い実測値のみを用いているので、標本数は一致しない。

まず最大長を見ると、ブロック1（平均値27.0mm、標準偏差6.3mm）→同6（同様に32.5mm、11.5mm）→同3（38.6mm、10.8mm）の順で大きい。最大幅もほぼ似通っており、ブロック1（平均値36.0mm、標準偏差12.3mm）→ブロック6（39.0mm、11.8mm）→同3（41.2mm、10.1mm）となる。最大厚ではブロック3（平均値14.9mm、標準偏差7.4mm）が薄手となり、次いで同1（15.1mm、7.8mm）、同6（16.4mm、4.9mm）となるが、三者の較差は小さい。そこで重量を見ると、ブロック1（平均値10.9g、標準偏差6.3g）→同6（16.1g、9.6g）→同3（20.3g、19.1g）の順で大きい。つまり、ブロック1の石核は小さく、逆にブロック3の石核が大きい

表35 石核最大長の度数分布

最大長(mm)		BL 1						BL 3						BL 6						BL 1									
上限	階級幅	CH			SA			合計			CH			SA-AN			合計			CH			SA			合計			
		度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i		
10	7.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
15	12.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
20	17.5	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	7	0	0	0	0	0	0	0	0	5		
25	22.5	0	1	3	3	3	0	0	2	2	2	2	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
30	27.5	3	4	1	4	4	1	1	1	3	2	3	2	3	11	2	2	2	2	2	2	2	2	2	5	5			
35	32.5	1	5	1	1	1	0	3	6	3	3	14	2	4	4	14	2	4	4	5	5	5	5	5	5	5			
40	37.5	0	5	0	0	0	0	1	7	1	4	18	3	7	7	18	3	7	7	7	7	7	7	7	7	7			
45	42.5	1	6	1	1	1	0	2	9	2	0	18	3	10	10	18	3	10	10	10	10	10	10	10	10	3			
50	47.5								1	10	1	1	19	1	11	11	19	1	11	11	11	11	11	11	11	11	2		
55	52.5								2	12	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
60	57.5								1	13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
N=		6		4		10		1		13		14		19		19		13		13		13		13		13		32	
平均値		28.83		24.25		27.00			39.54		38.57		27.29		40.15		40.15		32.52										
中央値		28.00		24.00		26.50			38.00		36.50		28.00		40.00		40.00		36.80										
標準偏差		7.78		1.50		6.32			10.62		10.83		10.00		7.57		7.57		11.47										

表36 石核最大幅の度数分布

最大幅(mm)		BL 1						BL 3						BL 6						BL 1									
上限	階級幅	CH			SA			合計			CH			SA-AN			合計			CH			SA			合計			
		度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i		
10	7.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
15	12.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
20	17.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
25	22.5	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
30	27.5	0	2	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	2	2	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
35	32.5	3	5	0	0	3	0	1	2	1	4	10	3	4	4	10	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4			
40	37.5			0	0	0	0		5	7	5	4	14	1	5	14	1	5	5	14	1	5	5	14	1	5	2		
45	42.5			0	0	0	0		1	8	1	3	17	0	0	5	17	0	0	5	17	0	0	5	3	3			
50	47.5			1	1	1	1		2	10	2	2	10	2	2	10	2	2	7	2	7	2	7	2	7	2			
55	52.5			0	1	0	0		1	11	1	1	11	1	1	11	1	1	8	1	8	1	8	1	8	1			
60	57.5			1	2	1	1		0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	8	0	8	0	8	0	8	0			
65	62.5								0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	8	0	8	0	8	0	8	0			
70	67.5								1	12	1	1	12	1	1	12	1	1	9	1	9	1	9	1	9	1			
N=		5		2		7		1		12		13		17		17		8		8		8		8		8		16	
平均値		29.40		52.50		36.00			23.83		41.23		32.41		42.22		42.22		39.00										
中央値		32.00		52.50		33.00			22.00		39.00		31.00		38.50		38.50		39.25										
標準偏差		5.03		6.36		12.27			14.78		10.10		7.73		12.91		12.91		11.77										

表37 石核最大厚の度数分布

最大厚(mm)		BL 1						BL 3						BL 6						BL 1								
上限	階級幅	CH			SA			合計			CH			SA-AN			合計			CH			SA			合計		
		度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	度数	Σf _i	
7.5	6.25	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
10.0	8.75	2	2	0	1	2	0	0	0	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
12.5	11.25	1	3	0	1	1	1	0	0	0	7	10	7	1	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3		
15.0	13.75	2	5	1	2	3	0	0	0	2	12	2	5	8	5	8	5	8	5	8	5	8	5	8	5	7		
17.5	16.25	0	5	2	4	2	0	0	0	2	14	2	2	10	0	8	0	8	0	8	0	8	0	8	0	8		
20.0	18.75	1	6	1	1	1	1	0	0	0	14	0	0	3	13	3	11	3	11	3	11	3	11	3	11	3		
22.5	21.25	0	6	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	3	16	3	14	3	14	3	14	3	14	3	14	3		
25.0	23.75	0	6	0	0	0	0	0	0	0	14	1	0	1	16	1	15	1	15	1	15	1	15	1	15	1		
27.5	26.25	0	6	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	1	17	1	16	1	16	1	16	1	16	1	16	1		
30.0	28.75	0	6	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	1	18	1	17	1	17	1	17	1	17	1	17	1		
32.5	31.25	0	6	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	18	0	0	0	18	0	0	0	18	0	0	0		
35.0	33.75	0	6	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	1	19	1	18	1	18	1	18	1	18	1	18	1		
37.5	36.25	1	7	1	1	1	1	1	1	1	16	1	1	1	17	1	16	1	16	1	16	1	1					

表38 石核重量の度数分布

重 量(g)	BL 1						BL 3						BL 6					
	CH		SA		合計		CH		SA・AN		合計		CH		SA		合計	
上級	階級値	度数	Zf _i	度数	Zf _i	度数	CH	度数	Zf _i	度数	Zf _i	度数	CH	度数	Zf _i	度数	Zf _i	
2.5	1.25	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	1
5.0	3.75	1	1	1	1	2	0	0	2	3	2	2	3	1	1	1	3	
7.5	6.25	1	2	0	1	1	0	0	1	4	1	5	8	0	1	1	5	
10.0	8.75	2	4	0	1	2	0	0	2	6	2	3	11	0	1	3		
12.5	11.25	0	4	1	2	1	0	0	0	6	0	1	12	1	2	2		
15.0	13.75	1	5	0	2	1	0	0	1	7	1	3	15	3	5	6		
17.5	16.25	1	6	2	4	3	0	0	1	8	1	1	16	1	6	2		
20.0	18.75	0	6			0	0	0	3	11	3	2	18	3	9	5		
22.5	21.25	1	7			1	1	1	1	12	2	1	19	0	9	1		
25.0	23.75								0	12	0	1	20	1	10	2		
30.0	37.50								3	15	3	2	22	5	15	7		
100.0	75.00								1	16	1							
N=		7		4		11	1		16		17	22		15		37		
平均値		11.61		11.88		11.71			20.28		20.31	12.73		20.94		16.06		
中央値		8.90		14.00		12.40			17.50		18.00	10.50		18.60		14.20		
標準偏差		6.34		5.81		5.86			19.74		19.12	8.26		9.47		9.56		

ことが知られる。先に述べた剝片の大きさに関する検討ではブロック1の剝片が3者のなかで最小となることを示したが、石核の大きさともおむね一致する。

また、ブロック1のサヌカイト剝片が最大厚10mm以下となる点については前述した通りであるが、剝片素材石核との比較をここでおこなっておきたい。サヌカイトの剝片素材石核（ポジティブ面を有する石核）はブロック1で3点、同3で10点、同6で13点出土している。その度数分布は5.0mm～27.5mmの範囲にある。どのブロックでも、サヌカイト剝片の最大厚は最頻値が2.6～5.0mmの階級にあり、剝片素材石核の度数分布はこれを大きく上回っている。両者の重複が著しいのはブロック3・6の剝片・石核の度数分布においてであり(7.6～20.0mmの範囲で重複)、これらのブロックでは石核素材となる剝片が遺跡外から搬入されたか、もしくはそれらをブロック内で生産した可能性がある。一方、ブロック1では石核素材に適した剝片がほぼ皆無といえ、少なくとも厚手・大形の剝片をブロック内で生産した痕跡が認められない。

5まとめ

以上の分析結果と石器製作の具体的な内容とを対照し、各ブロックの特徴を概観して集束したい。

まず、ブロック1ではナイフ形石器の素材生産が他のブロックに比しやや低調であり、とくにサヌカイトについてはその痕跡が希薄である。チャートの場合は黒色チャート製のナイフ形石器が散見されるが、接合資料からはその製作を積極的に裏付ける証拠を見いだせなかった。一方、おもに緑色チャート(母岩53～59)を用いた石器製作の痕跡が認められるが、これに対応するナイフ形石器はブロック内に遺存していない。なお、石核自身を何らかのツール(例えは搔器)に転用した可能性がある⁴⁾。

他方、ブロック3・6ではナイフ形石器の素材生産と、それらを用いた仕上げ加工とがおこなわれている。このことはブロック3における背部整形剝片の存在と、ブロック6におけるナイフ形石器の製作過程を示す接合資料とによってすでに明確である。

このような状況に石材構成の差(とくにF/C比に表された相違)を加味し、3者を比較する。サヌカイトはF/C比が21.2～24.5と常に安定しており、石質が均質で母岩全体を石器製作に利用できることと関係があるようにみえる。しかし、剝片・石核の大きさをみるとブロック1での小形化が著しい。

このブロックにおける石核素材剥片の不在と、低い自然面付着率をも考慮するならば、剥片・石核の小型化は単純にサスカイトの消耗(漸減)によるものと解釈できる。すなわち、ブロック1ではサスカイトが減少しつつあり、ブロック3・6では石器製作に充分な量を依然保持している。

チャートは各ブロックでF/C比が大幅に異なり、色調別に細分すると相違点がさらに強調される結果となった。要約すると、F/C比が極端に小さいブロック6の赤色チャートは見かけ上石核が多く、石器製作は活発であるがすでに底しかかっている⁵⁾。そして、これを補ったのがサスカイトである。また、F/C比が極端に大きいブロック1の黒色チャートは、ブロック内に多数の剥片・碎片を遺しているにもかかわらず石核が2点と少なく、まだ利用できる石核をブロック外に搬出した蓋然性が高い。ここではこれに緑色チャートが加わり、漸減したサスカイトを補完しているかに見える。このように、活発な石器製作をおこなってはいるがF/C比が大きく食い違う状況の裏側では、赤色チャートと緑色・黒色チャートとが相補的な関係にあるものと推測できる。つまり、サスカイトとチャートが相補的であるのに加えて、チャートのなかにも同様の関係が組み込まれていると解釈できる。

まとめると次の通りとなる。まず、サスカイトの専用的利用という点ではブロック3が同1・6から区別できる。その内容も大形ナイフ形石器の製作であり、この目的に応じてサスカイトの構成比が見かけ上大となった可能性もある。このような状況下ではサスカイトが排他的に利用されるようである。次いでブロック1と同6の相違点についていえば、赤色チャートと黒色チャートの主客が逆転しており、好対照をなしていることが了解される。石器製作の内容をみると、サスカイト・チャートの併用によるナイフ形石器の集中製作を示すブロック6と、黒色チャートを用いたナイフ形石器の製作が主体と目されるブロック1との差も認められる。サスカイトの剥片の大きさ・自然面の付着率からは、ブロック1における当該石材の消耗が想定される。さらにいえば、ブロック1と同6とではサスカイトとチャートの間で補完・被補完の関係が逆転しているわけで、例えばサスカイトの不足はチャートで補うといったような、一方的な補完関係が存在していたのではないことがわかる。したがって想像を逞しくすれば、小形の切出形ナイフ形石器⁶⁾は石材の別とは無関係に作られるものであり、ブロック6ではサスカイトとの互換の関係から、チャートにおけるのと同一の意図による異なる技術的表現として、サスカイトの切出形ナイフ形石器が製作されたのである。これらのことから、粟生間谷遺跡ブロック1・3・6の内容差は、ひとつには大形ナイフ形石器の製作痕跡の有無から、ふたつめにはサスカイト・チャートの保有状況と両者の相補的関係からもたらされたものと結論する。

末尾においていくつかの仮定を重ねることとなったが、それらの正否は消費地石器群での分析事例の増加、並びに原産地・石材採取が可能な地域に位置する石器群との比較によって決まるであろう。

(森川 実)

註

- 1) これら 2 石材のほかにも若干の異種石材を用いているが、その種類および構成比などについては各ブロックでの事実記載を参照されたい。
- 2) 度数分布表において度数の最も大きい階級値。度数分布表では最頻値を含む階級を太字で示してある。
- 3) 調整打面は打撃点を明確に認めうる剥離痕からなる。ただし、2 剥離面からなる場合は「打面調整」と認定していない。
- 4) 裏面での平坦剥離—表面での急斜度調整という剥離経過の反復を、ツール(例えば搔器)への作り直し・維持に間違づけることもできる。詳細は事実記載を参照されたい。
- 5) 仮に剥片の搬出により、F / C 比の分子が小さくなっているとしても、分母にあたる石核の数は依然として大きい。急減著しい赤色チャートがサヌカイトによって補われることで、縮小化した石核を保持する必要がなくなったためと考えることもできる。
- 6) ブロック 6 の切出形を呈するナイフ形石器は、高槻市塚原遺跡(四手井ほか 1964)に類例が認められる。また、京都府綾部市以久田野(綾部市教育委員会編 1976)、京都府京都市広沢池遺跡(鈴木編 1997)の各 1 例(探集品)に酷似している。後 2 者はともにチャート製であり、さらなる類例の増加が期待される。

参考文献

- 綾部市教育委員会編 1976 「第 1 章 繩文・弥生時代－村のはじまり－」『綾部市史』上巻 原始古代編
鈴木忠司編 1997 「ヒトの来た道」
四手井晴子・田代克己・西谷 正 1964 「大阪府高槻市塚原遺跡発見の石器について」『古代学研究』39

表39 計量属性の代表値

ブロック	代表値	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	打面幅 (mm)	打面厚 (mm)	(°)	重量 (g)
BL 1	平均値	18.7	20.0	4.9	12.2	4.1	112.2	19
	中央値	17.0	19.0	5.0	12.0	8.5	111.0	0.40
	最頻値	20.0	19.0	3.8	14.4	3.2	108.6	0.75
	最大値	40.0	47.0	18.3	31.1	12.2	132.0	27.0
	N =	59	66	11.9	50	64	61	121
BL 3	平均値	21.4	22.8	5.7	16.6	5.1	114.3	28
	中央値	19.0	22.0	5.0	14.9	4.2	113.0	1.30
	最頻値	21.7	26.3	4.3	14.8	3.9	111.9	1.25
	最大値	57.0	68.0	26.2	62.0	27.5	157.0	25.7
	N =	173	153	24.3	12.6	16.3	16.0	245
BL 4	平均値	28.5	25.2	7.4	18.1	4.7	113.4	43
	中央値	30.0	20.0	7.6	18.4	4.2	113.0	2.70
	最頻値	-	-	-	-	-	-	-
	最大値	52.0	36.0	16.0	29.8	8.8	140.0	10.7
	N =	15	9	30	12	21	21	30
BL 5	平均値	28.1	41.3	8.3	32.8	8.7	121.7	9.8
	中央値	28.0	37.0	6.4	35.5	6.5	120.0	5.9
	最頻値	-	-	-	-	-	-	-
	最大値	54.0	72.0	20.0	54.2	20.8	135.0	52.0
	N =	9	7	12	6	11	9	12
BL 6	平均値	23.6	23.2	5.7	14.2	4.6	112.4	3.1
	中央値	22.0	21.0	4.7	13.0	3.9	112.0	1.50
	最頻値	25.2	23.5	4.5	14.6	3.6	111.0	1.25
	最大値	59.0	61.0	19.3	42.9	15.3	143.0	35.1
	N =	163	171	28.7	13.8	18.5	18.1	287

第4節 粟生間谷遺跡におけるブロック出土石器の検討

1はじめに

粟生間谷遺跡では、旧石器時代に帰属する7箇所のブロックが認められ、ナイフ形石器・石材組成・石器組成から、各ブロックの出土石器の内容を明確にし、さらに、淀川流域およびその周辺に位置する郡家今城遺跡、津之江南遺跡、塚原遺跡、板井寺ヶ谷遺跡との比較から、粟生間谷遺跡の編年的位置づけを検討する。

2粟生間谷遺跡における石器群の様相

(1)ナイフ形石器

ナイフ形石器は104点出土しており、ブロック1で14点、ブロック3で20点、ブロック6で38点(1点は折れ面接合のため37点)、包含層で32点である。ここでは、ナイフ形石器における石材・素材・加工・大きさの各属性から、ブロック出土のナイフ形石器の特徴を把握する(表40・図88)。

ナイフ形石器の石材は、ブロック1でチャート10点・サスカイト4点、ブロック3でサスカイト19点・安山岩1点、ブロック6でサスカイト31点・チャート6点で構成され、ブロック1ではチャートを主要石材とするのに対し、ブロック3・6はサスカイトが主要石材である。しかし、ブロック6ではチャートも一定量存在し、ナイフ形石器の石材組成は各ブロックで相違する。淀川流域に位置する各遺跡と比較すると、郡家今城遺跡A～C地点、津之江南遺跡C地点は、すべてサスカイトで構成され、ブロック3と類似する。一方、塚原遺跡は、サスカイトを主体とし一定量のチャートを組成する点で、ブロック6との類似性が指摘できる。

ナイフ形石器の素材は、ブロック1で剝片10点・平坦面を有する剝片4点で構成され、素材の用い方は、横位6点・斜位2点・縦位4点(正位3点・逆位1点)で、横位を主体とするが、素材の利用方法は多様である。ブロック3では平坦面を有する剝片17点・剝片3点で構成され、素材の用い方は、横位7点・斜位3点・縦位3点(正位2点・逆位1点)で、平坦面を有する剝片を横位に用いるものが主体を占める。ブロック6では剝片21点・平坦面を有する剝片14点・剝片素材石核1点で構成され、素材の用い方は、横位10点・斜位15点・縦位9点(正位7点・逆位1点)で、素材の用い方が多様である。素材は、ブロック3が平坦面を有する剝片を主体とするのに対し、ブロック1・3では剝片が主体を占める。素材の用い方は、各ブロックで類似し、塚原遺跡との共通性が指摘できる。

ナイフ形石器の加工は、加工方向・部位について検討する。ブロック1では裏面から表面が10箇所、表面から裏面(内向調整削離)が5箇所、対向調整削離が2箇所で構成され、内向調整削離の占める割合が他のブロックに比べ高いのを特徴とする。加工部位は、1側縁加工11点・2側縁加工3点で、1側縁加工が主体を占める。ブロック3では裏面から表面が18箇所、表面から裏面(内向調整削離)が3箇所、対向調整削離が3箇所で構成され、加工部位は、1側縁加工15点・2側縁加工5点で、裏面から表面に背部加工を施す1側縁加工のナイフ形石器が主体を占める。ブロック6では裏面から表面が44箇所、表面から裏面が13箇所、対向調整削離が1箇所で構成され、加工部位は、1側縁加工17点・2側縁加工17点・部分加工2点・基部加工1点で、2側縁加工の占める割合が高いのを特徴とする。加工方向は、各ブロックでほぼ類似し、対向調整削離は各ブロックで認められる。加工部位は、ブロック1・3が1側縁加工を主体とする点で類似するが、ブロック3では裏面から表面に背部加工を施すナイフ形石器が大半を占めるのに対し、ブロック1では希少である。ブロック6は1側縁加工と2側縁加工の割合が均一であり、刃部側の縁辺の

表40 ナイフ形石器の属性表

石材	Sa	Ch	An	合計
要生間谷道跡BL1	4	10		14
要生間谷道跡BL3	19		1	20
要生間谷道跡BL6	31	6		37
郡家今城道跡A地点	14			14
郡家今城道跡B地点	11			11
郡家今城道跡C地点	65			65
津之江南道跡C地点	6			6
埋原道跡	17	2		19

石材	横位	斜位	縦位	不明	合計
要生間谷道跡BL1	6	2	4	2	14
要生間谷道跡BL3	7	3	3	7	20
要生間谷道跡BL6	10	15	9	3	37
郡家今城道跡A地点	4		1	9	14
郡家今城道跡B地点	10			7	17
郡家今城道跡C地点	57	2	1	5	65
津之江南道跡C地点	5			1	6
埋原道跡	10	3	6		19

加工方向	裏→表	表→裏	対向	合計
要生間谷道跡BL1	10	5	2	17
要生間谷道跡BL3	18	3	3	24
要生間谷道跡BL6	44	13	1	58
郡家今城道跡A地点	5	1		6
郡家今城道跡B地点	11			11
郡家今城道跡C地点	56	3	8	67
津之江南道跡C地点	8		1	9
埋原道跡	24	4	1	29

加工部位	1側縁	2側縁	部分	基部	合計
要生間谷道跡BL1	11	3			14
要生間谷道跡BL3	15	5			20
要生間谷道跡BL6	17	17	2	1	37
郡家今城道跡A地点	4	1			5
郡家今城道跡B地点	10	1			11
郡家今城道跡C地点	56	5	1		62
津之江南道跡C地点	3	3			6
埋原道跡	10	9			19

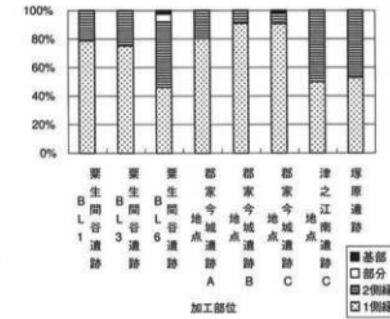
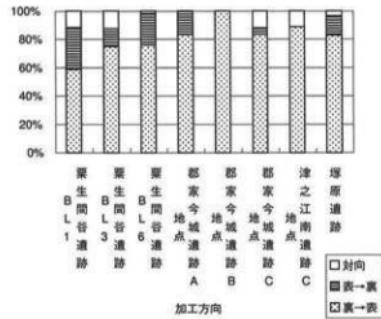
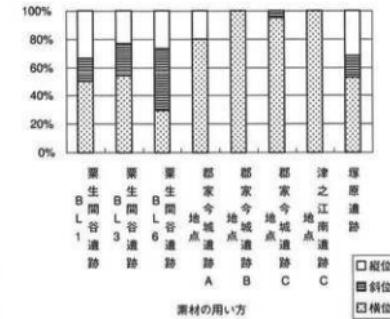
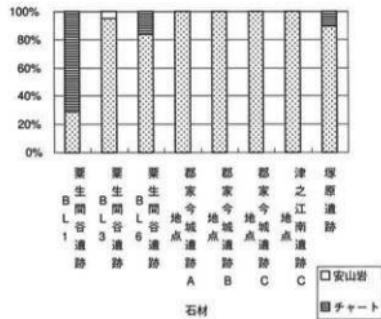
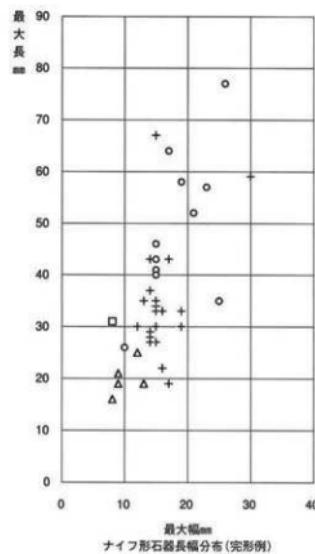
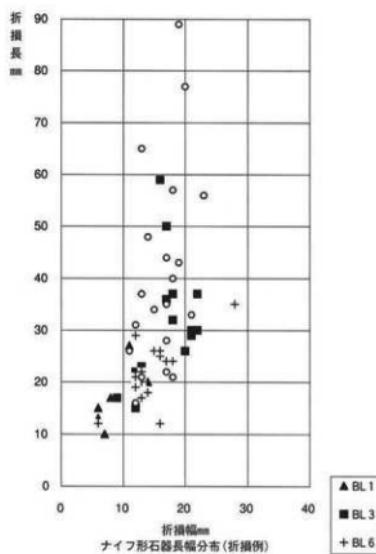


図88 ナイフ形石器の諸属性



ナイフ形石器長幅分布(完形例)

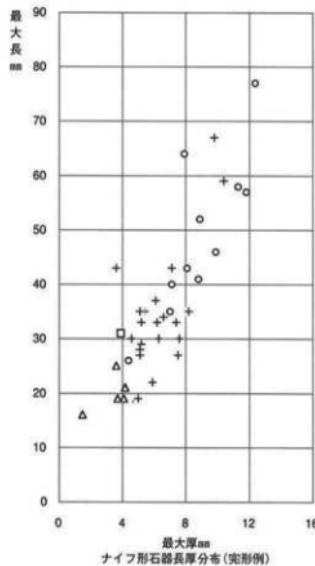
△ BL1
□ BL3
+ BL6



ナイフ形石器長幅分布(折損例)

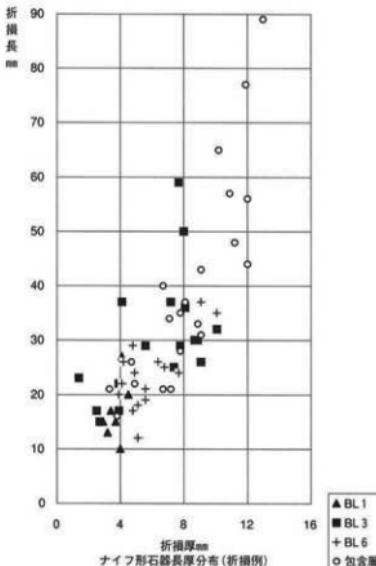
▲ BL1
■ BL3
+ BL6

図89 ナイフ形石器の長幅分布



ナイフ形石器長厚分布(完形例)

△ BL1
□ BL3
+ BL6
○ 包含層



ナイフ形石器長厚分布(折損例)

▲ BL1
■ BL3
+ BL6
○ 包含層

図90 ナイフ形石器の長厚分布

半分以上に調整剝離を施す2側縁加工の切出形のナイフ形石器が一定量認められる。加工部位は各ブロックで相違し、ブロック3は、裏面から表面に背部加工を施すナイフ形石器を主体とする点で、郡家今城遺跡A～C地点・津之江南遺跡C地点と類似するのに対し、ブロック6は、塚原遺跡との類似性が認められる。

ナイフ形石器の大きさは、完形例および折損例も検討対象として扱う(図89・90)。ブロック1では最大長が1.6～2.5cm、最大幅が0.8～1.2cm、最大厚が0.15～0.49cmに分布し、最大長2cm・最大幅1cm前後の小形で、最大厚が0.4cm前後の薄手のナイフ形石器が大半を占める。ブロック3は、1点を除きすべて折損例で構成され、最大長が3.1～5.9cm、最大幅が0.8～2.2cm、最大厚が0.14～1.01cmに分布し、大きさの変異が顕著である。また、最大長3cm・最大厚0.4cm前後の小形のナイフ形石器と最大長3cm以上、最大厚0.8cm前後の大型と想定されるナイフ形石器が共存している。ブロック6では最大長が1.9～6.7cm、最大幅が1.2～3.0cm、最大厚が0.36～1.01cmに分布し、最大長4cm・最大幅2cm以下のナイフ形石器を主体とするが、最大長6cm・最大厚0.8cm以上の大型のナイフ形石器も認められる。

以上、栗生間谷遺跡の各ブロックのナイフ形石器を、石材・素材・加工・大きさにおいて検討した。素材の用い方・加工方向は、各ブロックで類似するのに対し、石材組成・加工部位では、相違点が顕著である。ブロック1は、チャートを主要石材とし、素材の用い方が多様な小形で薄手のナイフ形石器を主体とするのを特徴とする。ブロック3は、大半がサスカイトで構成され、平坦面を有する剝片を横位に利用し、裏面から表面に背部加工を施す1側縁加工のナイフ形石器が主体を占め、石材組成・加工部位において郡家今城遺跡A～C地点・津之江南遺跡C地点との類似性が指摘できる。ブロック6は、サスカイトを主体とするがチャートも一定量認められ、素材の用い方が多様で2側縁加工の割合が高いのを特徴とし、石材組成・素材の用い方・加工部位において、塚原遺跡と極めて類似する。

(2)石材組成

石材組成は、主要石材のあり方から、各ブロックにおける石材組成の特徴を把握する(表41)。ブロック1は、チャート402点・サスカイト180点・安山岩5点・泥質ホルンフェルス1点・碧玉1点・石英1点などで構成され、チャートを主体とするのが特徴である。チャートの色調別は、黒色202点・緑色82点・赤色8点・識別不能25点であり、黒色が最も多い。ブロック3は、サスカイト484点・チャート32点・安山岩4点などで構成され、サスカイトが大半を占める。チャートも一定量認められるが、ナイフ形石器には利用されていない。ブロック6は、サスカイト407点・チャート139点・碧玉3点・頁岩1点・珪岩1点で構成され、サスカイトが主体を占めるが、チャートも一定量認められる。チャートの色調別では、赤色92点・緑色33点・黒色14点であり、赤色を主体とし、ブロック1とは対照的なあり方を示している。ブロック2・4は、サスカイトを主体としチャートが一定量認められる点で、ブロック6と類似する。ブロック5は水晶を主要石材とし、定型石器は皆無ではなく剝片・碎片のみで構成される。

ブロック1は、チャートを主要石材とし、ナイフ形石器におけるチャート利用が顕著な点で、他のブロックとの差異が明確であり、淀川流域の旧石器遺跡において、チャートが主体を占める遺跡は認められない。ブロック2～4・6は、サスカイトを主体とし一定量のチャートを有するが、ブロック6以外は、定型石器におけるチャート利用が希少である。ブロック3は、大半がサスカイトで構成され、ナイフ形石器にチャートが利用されていない点で、郡家今城遺跡A～C地点・津之江南遺跡C地点と極めて類似するのに対し、ブロック6は、ナイフ形石器におけるチャート利用が認められるうえで、塚原遺跡との類似性が指摘できる。また、ブロック6では、頁岩製の縦長剝片が単独で出土しており、淀川流域

の旧石器遺跡では、郡家今城遺跡C地点・津之江南遺跡B地点において頁岩が認められる。

(3) 石器組成

石器組成は、定型石器のあり方から、各ブロックにおける石器組成の特徴を把握する(表42)。ブロック1は、ナイフ形石器14点・ノッチ2点・二次加工ある剝片および微細剝離痕ある剝片29点・剝片および碎片537点・石核11点で構成され、ナイフ形石器を主体とし、定型石器は単純な組成を示している。また、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片は、最大長5cm前後のものが一定量認められ、ナイフ形石器に比べ大形のものが多い。ブロック3は、ナイフ形石器20点・プランティングチップ29点・搔器2点・削器7点・石錐1点・二次加工ある剝片および微細剝離痕ある剝片36点・剝片および碎片412点・石核17点で構成され、搔・削器の占める割合が高い。また、ブロック3では、多数のプランティングチップが認められ、プランティングチップの特徴・ナイフ形石器の折損例から、本来、大形のナイフ形石器が組成していた可能性が高い。ブロック6では、ナイフ形石器38点・角錐状石器1点・円形搔器1点・ノッチ2点・楔形石器1点・敲石1点・二次加工ある1片および微細1離痕ある剝片61点・剝片および碎片408点・石核38点で構成され、定型石器の組成が多様である。ブロック2・4・5・7は、ナイフ形石器が皆無で、定型石器も希少である。

ブロック1では、ナイフ形石器以外の定型石器がほぼ皆無であり、定型石器の組成が単純な点では、郡家今城遺跡A地点・津之江南遺跡C地点との類似性が指摘できる。ブロック3は、定型石器において搔・削器の占める割合が高い点で、郡家今城遺跡C地点との共通点が認められる。ブロック6では、ナイフ形石器を主体とし円形搔器が組成するうえで、塚原遺跡と極めて類似する。

表41 淀川流域の旧石器時代遺跡における石材組成

石材	Sa	Ch	An	Cr	Sh	Qz	MH	Ja	Si	Rh	Tu	ST	Qu・Cr	その他	合計
瀬生間谷遺跡BL.1	180	401	5				1	1					1	4	593
瀬生間谷遺跡BL.2	10	5													15
瀬生間谷遺跡BL.3	484	32	4											4	524
瀬生間谷遺跡BL.4	31	23										1	1		55
瀬生間谷遺跡BL.5	15	2			11									35	63
瀬生間谷遺跡BL.6	407	139			1	1		3							551
瀬生間谷遺跡BL.7	2	1	1	1											5
郡家今城遺跡A地点		765													765
郡家今城遺跡B地点	126	1													127
郡家今城遺跡C地点	992	25			2	1			3	1	1		3		1036
津之江南遺跡A地点	1														2
津之江南遺跡B地点	43					1									44
津之江南遺跡C地点	66														66
塚原遺跡	25	3	1										1		30

表42 淀川流域の旧石器時代遺跡における石器組成

器種	Kn	BC	Ka	Rn	En	Sc	Gr	No	PE	Dr	HS	RF・UF	Fl・Cp	Co	合計
瀬生間谷遺跡BL.1	14							2			29	537	11	593	
瀬生間谷遺跡BL.2										1	1	11	2	15	
瀬生間谷遺跡BL.3	20	29			2	7				1	36	412	17	524	
瀬生間谷遺跡BL.4								1			8	45	1	55	
瀬生間谷遺跡BL.5											3	60		63	
瀬生間谷遺跡BL.6	38		1	1				2	1	1	61	406	38	551	
瀬生間谷遺跡BL.7											1	3	1	5	
郡家今城遺跡A地点	14											745	6	765	
郡家今城遺跡B地点	15	2		1	1	1				1		90	16	127	
郡家今城遺跡C地点	65	5	4	6	1	2					3	10	957	12	1036
津之江南遺跡A地点	1												1		2
津之江南遺跡B地点	2				1								40	1	44
津之江南遺跡C地点	7												57	2	66
塚原遺跡	19			1	4	1							1	4	28

	ナイフ形石器	その他の石器	剥片・石核
ブロツク1	1 2 3 4	5 6	7 8 9 10
ブロツク3	11 12 13 14 15	16 17	18 19 20 21 22
ブロツク6	23 24 25 26 27 28 29	30 31	32 33 34 35 36 37

図91 粟生間谷遺跡の主要ブロックにおける石器群 [S = 1 : 2]

(4) 小 結

以上、ナイフ形石器・石材組成・石器組成から、各ブロックの出土石器の内容を検討し、淀川流域の旧石器遺跡との比較を試みた。ナイフ形石器は、ブロック1・3・6で認められ、各ブロックのナイフ形石器における差異が顕著である。ブロック3は、石材組成・加工部位において郡家今城遺跡A～C地点・津之江南遺跡C地点と類似するのに対し、ブロック6は、石材組成・素材の用い方・加工部位において塚原遺跡との共通性が指摘できる。石材組成は、ブロック1がチャートを主要石材とするのに対し、ブロック3・6は、サスカイトを主体とし一定量のチャートを有するのが特徴である。ブロック3は、郡家今城遺跡A～C地点と類似するのに対し、ブロック6は塚原遺跡との共通点が認められるが、チャートを主体とするブロック1との類似例は、淀川流域の旧石器遺跡において皆無である。石器組成は、各ブロックの差異が明確であり、ブロック1では、定型石器の組成が単純な点で、郡家今城遺跡A地点・津之江南遺跡C地点と類似する。ブロック3は、定型石器における搔・削器の占める割合が高いうえで、郡家今城遺跡C地点と共に通するのに対し、ブロック6は、円形搔器が組成する点で、塚原遺跡との類似点が認められる。次に、主要ブロックであるブロック1・3・6の出土石器を個別に検討し、栗生間谷遺跡における石器群の特徴を把握する(図91)。

ブロック1は、チャートを主要石材とし、小形で薄手のナイフ形石器が特徴的である。ナイフ形石器は、素材剥片を横位および縦位に利用する2側縁加工のもの(図91-1・2)、素材剥片を縦位に利用する1側縁加工のもの(図91-3)、平坦面を有する剥片を横位に利用する1側縁加工のもの(図91-4)などが共存しており、ナイフ形石器の特徴に多様性が認められる。素材剥片を縦位に利用する2側縁加工のナイフ形石器は、茂呂型ナイフ形石器と形態的に類似する。ナイフ形石器以外の定型石器はノッチのみであり(図91-5)、単純な組成を示しているが、図91-8のように石核転用の搔器として認定できる可能性が高い石器も認められる。定型石器は、大半が小形のもので構成されるのに対し、二次加工ある剥片・微細剝離痕ある剥片では、一定量の大形のものを保有している(図91-6)。剥片・石核では、縦長剥片ないし寸詰まりのある剥片の製作を示す石核(図91-7)・小形の平坦面を有する剥片の製作を示す剥片素材石核(図91-9)のように、ナイフ形石器の素材剥片に対応する資料も認められるが、剥片素材石核(図91-10)から製作されたと考えられる大形の平坦面を有する剥片は皆無であり、ブロック1では、本来の石器群の組成が欠落している可能性が高いと考えられる。

ブロック3は、大半がサスカイトで構成され、裏面から表面に背部加工を施すナイフ形石器を特徴とする。ナイフ形石器は、1点を除きすべて折損例であり、平坦面を有する剥片を横位ないし斜位に利用するものを主体とするが(図91-11・12・15)、素材剥片を縦位に利用するものも認められる(図91-13・14)。平坦面を有する剥片を素材とするものとしては、大きさの変異が顕著である。定型石器には、弧状の刃部を有する搔器(図91-16)、大形の剥片の側縁部に連続的に二次加工を施す削器(図91-17)などが認められ、定型石器の組成は多様である。剥片・石核では、平坦面を有する剥片の製作を示す剥片素材石核(図91-18・20)・平坦面を有する剥片(図91-19・21)のように、ナイフ形石器の素材剥片の製作に関連する資料が特徴的である。平坦面を有する剥片は、打面調整がほぼ皆無であるが(図91-19)、翼状剥片に形態的に類似するものも認められる(図91-21)。

ブロック6は、サスカイトを主体とするがチャートも一定量保有し、ナイフ形石器の特徴に多様性が認められる。ナイフ形石器は、素材剥片を横位ないし斜位に利用する2側縁加工の切出形のもの(図91-23・24)、素材剥片を縦位に利用する2側縁加工のもの(図91-25・34)、平坦面を有する剥片を横位に利

用するもの(図91-26・29)を中心とするが、平坦面を有する剝片を縦位に利用するもの(図91-28)やチャート製では寸詰まりの剝片を横位に利用するもの(図91-27)などが共伴しており、多様なあり方を示している。定型石器では、横長剝片を素材とする周辺加工で横断面形が台形を呈する角錐状石器(図91-30)、幅広で厚手の剝片を素材とし弧状の刃部を有する円形搔器(図91-31)を組成し、淀川流域の旧石器遺跡において、角錐状石器と円形搔器が共伴する遺跡は皆無である。剝片・石核では、サスカイトとチャートにおいて相違するのが特徴であり、サスカイトでは、平坦面を有する剝片の製作を示す剝片素材石核(図91-35)、横長ないし寸詰まりの剝片の製作を示す円盤状石核(図91-33)などが認められ、ナイフ形石器の素材剝片を製作していたと考えられるが、厳密な対応関係は不明である。チャートでは、打面と作業面を頻繁に転位し寸詰まりの剝片の製作を示す石核(図91-37)のように、ナイフ形石器の素材剝片の製作に関連する資料が特徴的である。また、縦長剝片の製作を示す資料も認められるが(図91-34・36)、縦長剝片を連續的に製作する縦長剝片剥離技術は皆無である。

以上、ブロック1・3・6の出土石器を、ナイフ形石器・その他の定型石器・剝片および石核ごとに検討し、栗生間谷遺跡における石器群の特徴を把握した。栗生間谷遺跡では、各ブロックにおける石器群の差異が顕著であり、多様な石器群により構成されているのが特徴である。次に、淀川流域およびその周辺の旧石器遺跡との比較から、栗生間谷遺跡における編年的位置を検討する。

3 栗生間谷遺跡の編年的位置

從来、近畿地方の旧石器編年研究は、良好な層位的出土例に恵まれず、瀬戸内技法の崩壊過程とナイフ形石器の小形化という解釈の枠組みを前提として石器群の変遷が把握されてきた(松藤 1980・1992、久保1989、佐藤 1989他)。近年では、始良丹沢火山灰(AT)を中心とした広域火山灰と石器群の関係から、編年研究が進展しつつあるのが現状である。栗生間谷遺跡では、ATと石器群の関係から、ブロック3・6の出土石器がAT降灰以後の石器群であり、ここでは、栗生間谷遺跡の石器群を、從来の編年の枠組みのなかで把握する。

まず、栗生間谷遺跡における瀬戸内技法の占める割合を検討すると、ブロック3では、国府型ナイフ形石器・翼状剝片に形態的に類似する資料が若干認められるのに対し、ブロック6では、国府型ナイフ形石器に形態的に類似する資料が単独で出土している。また、ブロック3・6では、大半の石核が剝片素材石核で構成されており、いわゆる櫃石島技法を技術基盤とする石器群として把握可能である。しかし、翼状剝片石核と認定できる資料は皆無であり、翼状剝片石核・翼状剝片・国府型ナイフ形石器のセット関係をもって存在することが瀬戸内技法の認定の条件とすると(松藤 1985)、栗生間谷遺跡では、瀬戸内技法の存在を確認することはできない。従って、石器群内における瀬戸内技法および国府型ナイフ形石器の組成率を石器群の編年基準とすると、栗生間谷遺跡の石器群は、国府石器群に後続する時期に位置づけられ、從来の編年研究では、藤阪宮山期(松藤 1980)、藤阪宮山石器群(久保 1989)、グループ5(佐藤 1989)に対比できる。しかし、栗生間谷遺跡の石器群は多様である。

次に、郡家今城遺跡C地点・津之江南遺跡C地点・塚原遺跡との比較から、淀川流域における栗生間谷遺跡の編年的位置を検討する。

郡家今城遺跡C地点は、芥川と安威川に挟まれた低位段丘(富田台地)を貫流する女瀬川のほぼ中央に位置し、1973年に高槻市教育委員会により発掘調査が実施されており、国府石器群に位置づけられている(富成・大船 1978)。郡家今城遺跡C地点では、国府型ナイフ形石器(図92-1~4)・角錐状石器(図92-5)・搔器(図92-6)・翼状剝片(図92-7・9)・翼状剝片石核(図92-9)を組成し、瀬戸内技法を

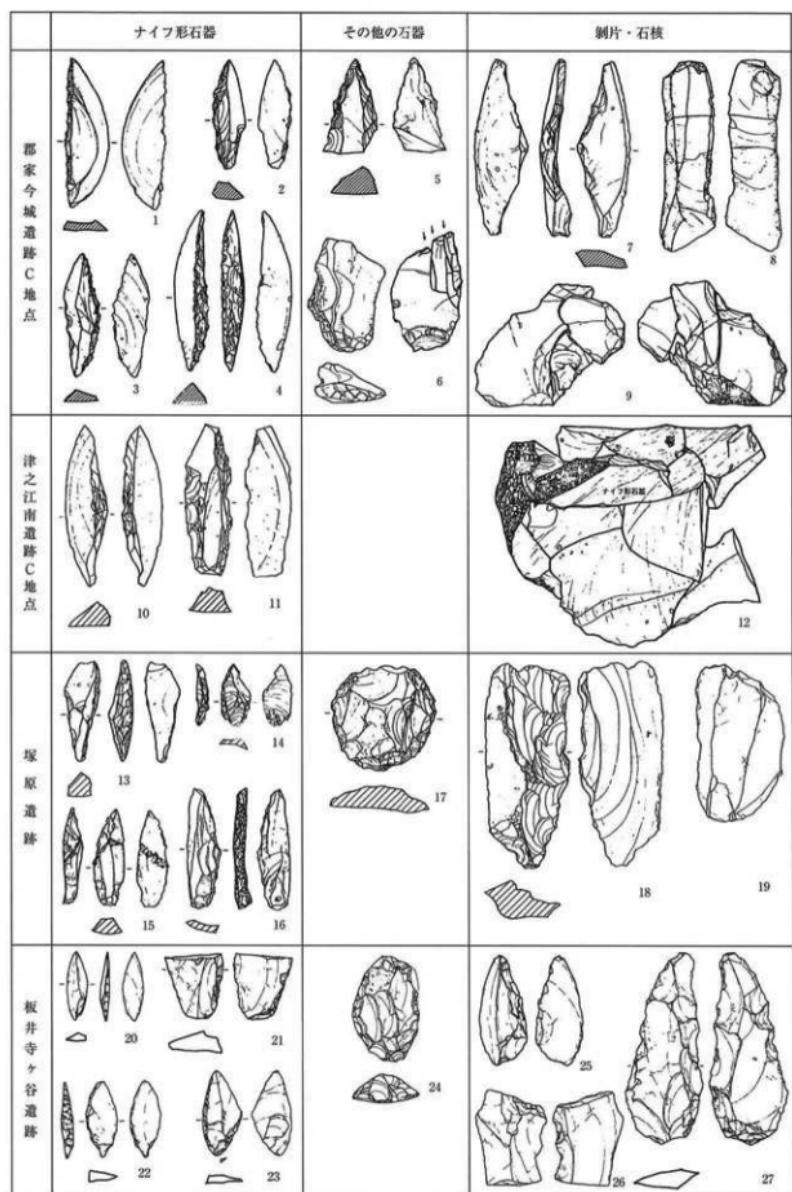


図92 淀川流域およびその近隣旧石器遺跡における石器群の様相 [S = 1 : 2]

主要な技術基盤とし国府型ナイフ形石器の製作を主体とする石器群として把握できる。従って、瀬戸内技法が皆無である粟生間谷遺跡との差異は明確である。

津之江南遺跡C地点は、芥川と女瀬川との合流点近くに位置し、1972年に高槻市教育委員会により発掘調査が実施されており(大船・富成 1976)、瀬戸内技法の衰退ないし崩壊過程において国府期の直後に位置づけられている(松藤 1980)。津之江南遺跡C地点では、平坦面を有する剝片を素材とするナイフ形石器を主体とし(図92-10・11)、平坦面を有する剝片の製作技術(図92-12)が主要な技術基盤を構成しており、ナイフ形石器・石器群の技術基盤から、ブロック3との類似性が指摘できる。

塚原遺跡は、阿武山から南斜面にのびた丘陵上に位置し、出土遺物は表面採集品および塚原A-46号墳の発掘調査によるものであり(四手井他 1964、大船・富成 1976)、極小形のナイフ形石器を組成する石器群として把握されている(松藤 1980)。塚原遺跡では、ナイフ形石器の特徴が多様であり、素材剝片を横位に利用する2側縁加工の切出形のもの(図92-13)、素材剝片を縱位に利用するもの(図92-14・16)、平坦面を有する剝片を横位に利用する1側縁加工のものを(図92-15)組成し、ブロック6でも同様のナイフ形石器が認められる。ナイフ形石器以外の定型石器では、円形搔器(図92-17)・搔器・削器を組成し、淀川流域の旧石器遺跡において円形搔器が認められるのは、塚原遺跡とブロック6のみである。剝片・石核では、剝片素材石核(図92-18)および縦長剝片石核(図92-19)が認められる。

以上、粟生間谷遺跡では、郡家今城遺跡C地点の石器群との差異が顕著であり、ブロック3は津之江南遺跡C地点、ブロック6は塚原遺跡との類似性が指摘できる。淀川流域の石器群の変遷は、従来、郡家今城遺跡C地点→津之江南遺跡C地点→塚原遺跡という流れが想定されており、ブロック3・6の石器群の差異を時期差として把握し、国府石器群に後続する時期に位置づけることが可能である。しかし、淀川流域の旧石器遺跡では、層位的出土例が皆無であり、石器群の時期的変遷が不明確であるのは否めないので現状である。そこで、粟生間谷遺跡の石器群を、淀川流域の近隣に位置しAT降灰以前に位置づけられる板井寺ヶ谷遺跡下層の石器群と比較すると、板井寺ヶ谷遺跡下層では、サヌカイトを主要石材としつつもチャートが一定量認められる。また、平坦面を有する剝片を横位に利用するナイフ形石器(図92-20~22)、素材剝片を斜位に利用する2側縁加工の切出形ナイフ形石器(図92-23)、搔器(図92-24)、平坦面を有する剝片(図92-25)、打面調整および石核調整が皆無で平坦面を有する剝片の製作を示す剝片素材石核(図92-26・27)を組成し、石材組成・ナイフ形石器の特徴・石器群の技術基盤において、粟生間谷遺跡の石器群と共通する点が多いといえる。とくに、ブロック6の石器群は、板井寺ヶ谷遺跡下層の石器群との類似性が高いことから、AT降灰後の近接した時期の石器群として把握することも可能である。今後、淀川流域の旧石器遺跡における層位的出土例の検出に努めるとともに、淀川流域の石器群の変遷を再検討することが重要である。

(伊藤栄二)

引用文献

- 大船孝弘・富成哲也 1976 「津之江南遺跡発掘調査報告書－三島地方の旧石器時代について－」 高槻市教育委員会
久保弘幸 1989 「大阪湾岸地域における小型ナイフ形石器とその福年について」『旧石器文化談話会』38 旧石器文化
談話会
佐藤良二 1990 「近畿地方におけるナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』38 旧石器文化談話会
四手井晴子・田代克巳・西谷 正 1964 「大阪府高槻市塚原遺跡発見の石器について」『古代学研究』39
富成哲也・大船孝弘 1978 「郡家今城遺跡発掘調査報告書」 高槻市教育委員会
松藤和人 1980 「近畿地方西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」『旧石器考古学』21 旧石器文化
談話会
松藤和人 1985 「瀬戸内技法・国府石器群研究の現状と課題」『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会
山口卓也編 1991 「板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査－」 兵庫県教育委員会

第5節 粟生間谷遺跡出土の縄文石器の位置付け

田部剛士

山添村教育委員会

1はじめに

粟生間谷遺跡において縄文時代に帰属するであろう石器として、有舌尖頭器をはじめ尖頭器、石鎌、石匙、石錐、異形部分磨製石器（いわゆる、トロトロ石器）、削器、板状石材、石皿、敲石・磨石類、凹石など多くの器種が出土している。これらの石器は一時期に帰属する資料とは考えられず、複数の時期のものが混在していることは明らかである。

従来、縄文時代の石器製作については、剝片剝離の技術基盤が不安定だと考えられてきた。これは現在の研究者の視点から旧石器時代のような、ある一定の規則性を持った明瞭な剝片剝離技術が抽出できないためであった。そして、縄文時代にはシステムチックな剝片剝離技術を持たず、偶発的に生産された不定形な剝片を素材として石器製作がなされていたと考えられてきた。また、これは素材剝片の形状を大きく変更して目的とする形状を作りだすことが可能な押圧剝離技法が存在することと併せて肯定的に受け入れられてきた。そのため、有舌尖頭器や神子柴型石斧、異形部分磨製石器などの極めて限定された器種を除き、石器資料のみから時期比定することは困難だと考えられてきた。しかし、これらは十分に検討された結果とは言い難く、今後詳細に検討される必要がある。そこで、本稿では粟生間谷遺跡出土の縄文石器について、その製作において技術的特徴が見出せる尖頭器とスクレイバーについて、周辺遺跡出土の類例から帰属時期の問題について若干の検討を加えたい。

2粟生間谷遺跡出土の縄文石器とその問題点

（1）有舌尖頭器

4点出土している。2点はほぼ完形である。残りの2点は欠損により舌部を失っているが、有舌尖頭器に特徴的な斜並行剝離が顕著に認められることから、有舌尖頭器として考えられる資料である。

有舌尖頭器は草創期において最も特徴的な器種であることは周知の事実であり、石器そのものからその帰属する時期を限定できる資料である。有舌尖頭器は山地や丘陵、平野部などにおいて表面採集されることの多い器種であり、これは有舌尖頭器の利用場所を考える上で興味深い。また、発掘調査による資料は極めて少なく、併せて土器との共伴例も極めて少ないのが現状である。一部、早期前半の押型文土器に伴う例も報告されているが、近畿圏内のみでの確認であり、今後議論されるべき問題であろう。

（2）尖頭器

4点出土している。2点は完形であり、もう2点は下半部を欠損する。欠損する2点については弥生時代の槍先形尖頭器と考えられるものと作りの粗い尖頭器としてよいのか疑問のあるものである。よって、ここでは完形品の2点のみについて検討したい。

尖頭器は縄文時代においてその古い時期において認められ、前期以降には一部を除いてほとんどその姿を消してしまう。ここで特に注意したいものは、器面の中央部に素材となった剝片剝離の素材面を大きく残し、その周辺に簡単な調整を加えて整形しているもので、側面形態が彎曲している尖頭器の位置付けについてである。また、比較的細長くかつ部厚の左右非対称をなす尖頭器の位置付けについても以下において検討する。

(3) 異形部分磨製石器

1点のみ出土している。白色チャート製であり、両脚部に浅い抉りを施し、先端を丸くおさめている。また、器面中央には両面ともに磨滅痕が観察される。いわゆる「トロトロ石器」と呼ばれているものであり、早期前半の押型文土器（高山寺式）に共伴するものと考えられている。その分布範囲も九州から中部高地にかけての押型文土器の分布圏と一致することから、古くから押型文土器との関連性が指摘されてきた。また、その石材には大部分においてやや灰色がかった白色チャートを用い、若干ではあるが石英を利用するものも認められる。

近畿地方において確実に土器と共に出土している例は皆無であるが、大部分は押型文土器などと共に表面採集されたものである。押型文土器の中にあっても、高山寺式土器と共に共伴する例が多いようである。このように異形部分磨製石器は石器自体から時期比定が可能な器種といえる。また、その機能については最近、木崎康弘氏によって男性器形石製品との関係について指摘されているが（木崎 1997）、実際にその機能については不明な点が多い。

(4) 削器

2点出土している。1点は素材となる横長剣片の末端に、主要剥離面から背面側に向けて片面調整により急角度の刃部を作出しているものである。そのために素材剣片本来の形状を大きく変更して刃部が製作されている。また、素材剣片の打面側にも調整が施されており、ちょうど打瘤部分が除去されているかのようである。この資料は旧石器時代の堆積層を削って形成されている流路内からの出土であり、このことから少なくとも旧石器時代まで遡ることはなく、縄文時代に帰属することが明らかである。また、同一堆積層から検出されている木炭片を放射性炭素年代測定したところ、 8320 ± 40 y BPという測定値が出されている。この流路の埋没過程はほとんど花粉が検出されなかったこと（渡辺 第10章第4節参照）などから、ある時期に一気に埋没したと考えられ、この削器についても 8320 ± 40 y BPという年代値から大きく移動することは考え難い。ちなみに、 8320 ± 40 y BPというのは、縄文時代早期前半の押型文土器期に相当する時期である。

もう1点は、肉眼観察による限り金山産サスカイトと考えられる削器である。サスカイトの母岩識別は非常に困難だが、板状石材と同一母岩である可能性が極めて高い。横長剣片の末端側に両面調整によって刃部を作り出すが、その調整角度は両面共に極めて浅いものであって、もともとの素材剣片の形状をほぼそのまま残している。これは自然面を打面としており、金山産サスカイトの石質を上手に利用した作りであるといえる。

(5) 板状石材

3点出土している。蛍光X線分析によって、2点は金山産サスカイトで、もう1点が二上山産サスカイトと同定されている資料である（栗原 第10章第2節参照）。金山産サスカイトの2点は土坑内に集積された状態で検出されている。金山産サスカイトについては後で考察するのでここでは省略したい（田部 第11章第4節参照）。もう1点の二上山産サスカイト製の板状石材は晩期後半の突尖頭器と共に伴すると考えられる。当遺跡出土遺物の中で供伴土器から時期が決定できる極めて少ない資料である。

3 近畿地方における類例

縄文時代における石器にはその特徴から、ある程度帰属時期を限定することが可能な有舌尖頭器や異形部分磨製石器などがある。これらの器種の時期比定については、それほど問題となることはないので、

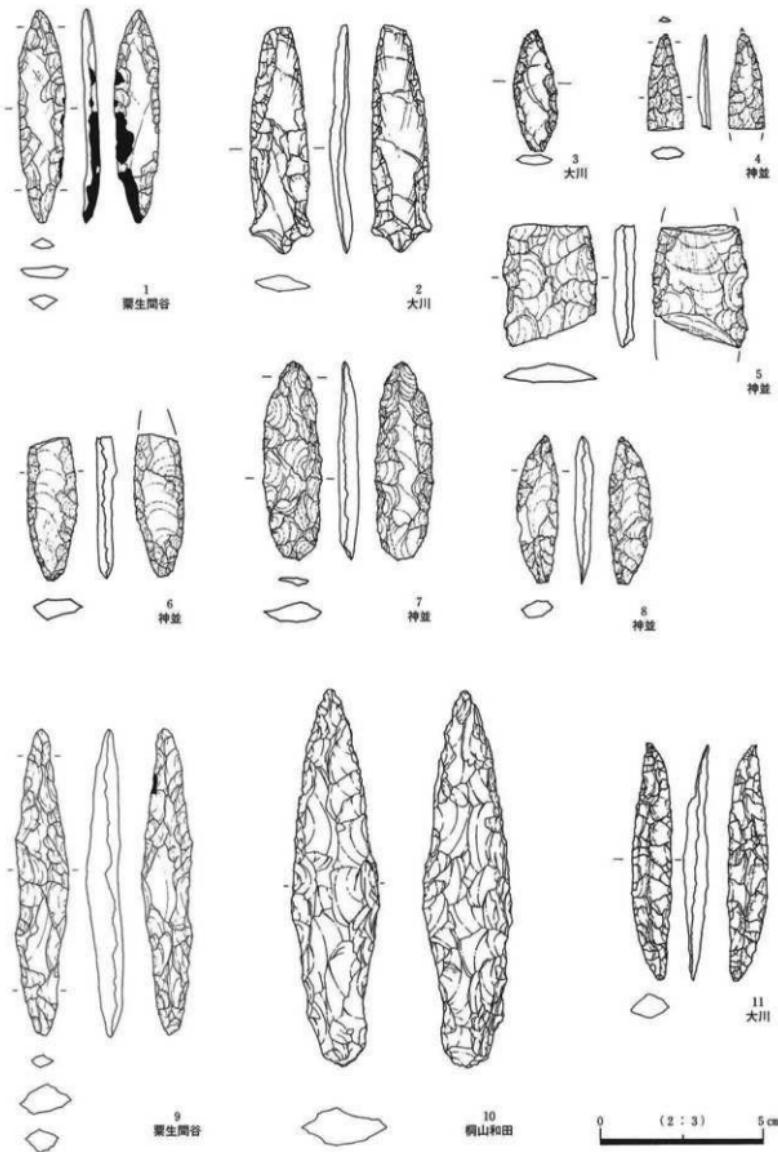


図93 縄文時代草創期～早期の尖頭器

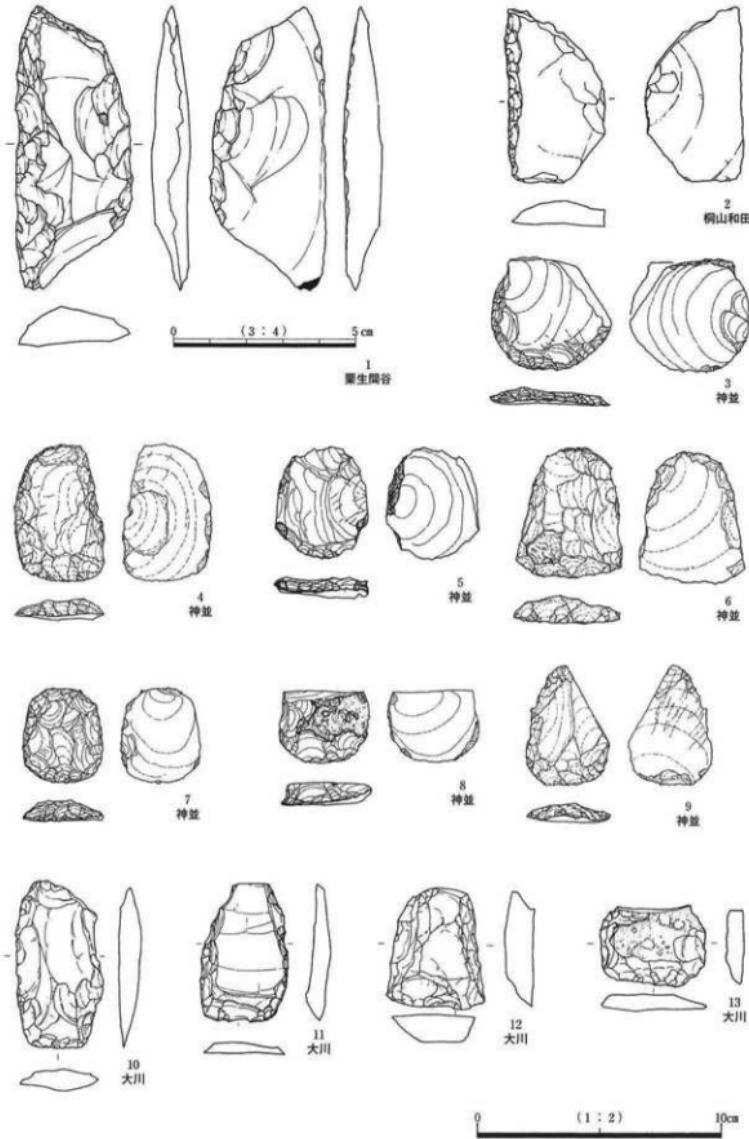


図94 繩文時代草創期～早期の削器

ここでは主に尖頭器の一部と削器の一部について検討をおこないたい。ただし、粟生間谷遺跡出土の石器は縄文時代の遺構に伴うものはほとんどなく、土器と共に伴する資料も皆無であることを付け加えておきたい。

(1) 有舌尖頭器

近畿地方において有舌尖頭器が草創期の土器に伴って出土した例は極めて少なく、奈良県桐山和田遺跡・北野ウチカタビD遺跡において隆起線文土器に共伴している。また、大阪府神並遺跡や福井県岩の鼻遺跡、奈良県桐山和田遺跡、三重県鴻ノ木遺跡、同坂倉遺跡などにおいて、早期の押型文土器の古い段階において土器との共伴が指摘されているが(西口1991、大下・久保1998など)、これまでに近畿地方以外の地域において確認された例はなく、これが一般的な様相であるのかどうかは今後の課題といえる。よって有舌尖頭器が早期まで存続する器種なのかについては、今後議論されるべき問題であり、ここでは一応草創期の資料と捉えておきたい。

(2) 尖頭器

近畿圏内の遺跡において縄文時代の尖頭器が出土している遺跡には、大阪府神並遺跡、奈良県北野ウチカタビロ遺跡、滋賀県栗津貝塚、三重県鴻ノ木遺跡などが挙げられる。これらの資料は木葉形の尖頭器が多いが、一部において粟生間谷遺跡出土の尖頭器と類似する資料が認められる。

素材面を大きく残す尖頭器(図93-1)の類例は、奈良県大川遺跡(図93-2・3)や大阪府神並遺跡(図93-4~8)において認められる。これらの資料は大川遺跡例が早期前半の大川式に帰属するものであり、神並遺跡例は神宮寺式~神並上層式にかけての資料である。近畿地方においてこの素材面を大きく残す尖頭器は現在のところ、早期前半の遺跡に多く認められ、当該期に帰属する可能性が極めて高いといえる。

比較的細長でかつ部厚の左右非対称である尖頭器(図93-9)の類例は、奈良県桐山和田遺跡(図93-10)や大川遺跡(図93-11)において認められる。桐山和田遺跡出土例は草創期の石器集中部から検出されているものであり、草創期の隆起線文土器に共伴するものである。また、大川遺跡出土例はやや小形であるが、早期の大川式に帰属する資料であり、このことから草創期から早期前半の押型文期までは残存することは間違いないようである。

(3) 異形部分磨製石器

近畿地方において、異形部分磨製石器を出土する遺跡としては、兵庫県神鍋遺跡や大阪府穂谷遺跡、奈良県高井遺跡、滋賀県石山貝塚、三重県神籠遺跡、和歌山県長谷川遺跡などが挙げられる。これらの大部分は押型文土器の遺跡であり、どちらかというと押型文土器の中でも後半に位置する遺跡である。従来から異形部分磨製石器の分布は押型文土器の分布圏と一致し、特に九州地方、近畿地方、中部地方に多く、古くからその関連性が指摘されてきたが、これまでの研究成果から早期前半に帰属する資料と考えてよい。

(4) 削器

主要剥離面から背面側にかけて、素材剥片の形状を大きく変更すように設けられた急角度の刃部をもつ削器(図94-1)の類例としては、桐山和田遺跡(図94-2)や神並遺跡(図94-3~9)、大川遺跡(図94-10~13)が挙げられる。特に、図94の2及び同4、同10は、刃部を剥片の末端側に設定することなど、粟生間谷遺跡出土の削器と全く同様の製作方法をとっているといえる。その他の資料は剥片の側縁を含めた部位に刃部が設けられるなどの若干の差異が認められるものの、刃部角度が急角度でありかつ片刃

である点は類似するものである。これら資料の大部分は早期の包含層中からの出土であるが、一部草創期において存在する可能性も考えられる。ただし、近畿地方において草創期の遺跡数が少なく、それに伴う石器群自体が不明である。しかし、このような削器の特徴は旧石器時代にも認められるものであり、縄文時代早期前半に至っても同様の製作をおこなっていることから、草創期においても存在していたと考えられる。

(5) 板状石材

金山産サヌカイト製の板状石材については、近畿地方において兵庫県佃遺跡や滋賀県穴太遺跡などで出土している。金山産の板状石材については第11章第4節において後述する。また、二上山産サヌカイト製の板状石材については詳細な報告例は少ないが、二上山山麓の奈良県桜ヶ丘遺跡や大阪府久宝寺遺跡などでその類例が挙げられる。金山産の板状石材は全てが後期後半～晩期にかけての資料であり、その利用時期は後期後半以降であろう。また、二上山産の板状石材は桜ヶ丘遺跡が早期前半押型文期といわれている他、久宝寺遺跡例においては晩期の資料であり、縄文時代を通じて認められるといえる。

4 粟生間谷遺跡出土縄文石器の位置付け

粟生間谷遺跡出土の縄文石器には少なくとも縄文時代草創期から早期前半、後期から晩期にかけての石器が混在している。以下から粟生間谷遺跡出土石器の帰属問題について述べるが、これらのことまとめると表43のようになる。

草創期に帰属すると考えられる遺物には、有舌尖頭器の4点が挙げられる。有舌尖頭器については、草創期の所産である可能性が極めて高いが、上述してきたように一部早期前半まで残存するという指摘もされていることから今後の検討が必要であろう。また、草創期から早期の間に帰属する資料として、尖頭器がある。ここでいう尖頭器とは、細長でかつ部厚である左右非対称の柳葉形尖頭器のことである。これは近畿地方において、桐山和田遺跡や大川遺跡などの例から草創期～早期の間に位置付けられる。また、早期前半に特徴的なものが、もともとの素材面を大きく残し、側面形態がやや湾曲する柳葉形尖

表43 粟生間谷遺跡出土石器消長表

	有舌尖頭器	尖頭器	異形部分磨製石器	削器	板状石材
草創期					
早期前半	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
早期後半					
前期前半					
前期後半					
中期前半					
中期後半					
後期前半					
後期後半				⋮	⋮
晚期前半				⋮	⋮
晚期後半					

頭器である。これは大川遺跡や神並遺跡など押型文期の遺跡に認められるとことから、早期前半に位置付けられる。

同じ早期前半の押型文期の資料として、片面調整により急斜度の刃部を持つ削器が挙げられる。このような資料は旧石器時代の石器製作に通じるものがあり、縄文時代においても桐山和田遺跡や大川遺跡、神並遺跡などといった草創期から早期前半にかけての比較的古い時期に多く認められるものである。ただし、栗生間谷遺跡出土の削器は、放射性炭素年代測定の結果から早期(8320 ± 40 y BP)に帰属すると推測されるものである。また、若干時期が新しくなる可能性があるが、異形部分磨製石器もほぼこの早期押型文期に帰属する資料といえる。

その後、特に中期の資料として抽出できた資料はない。統いて、後期以降の資料と考えられるものに、金山産サスカイト製の板状石材や同削器、二上山産サスカイト製の板状石材が挙げられる。金山産サスカイトの利用については後で詳細に検討するが、一乗寺K式～元住吉山I式以降にその利用が増す石材であることから、縄文時代後期後半以降に位置付けられる可能性が極めて高い(田部 第11章第4節参照)。また、金山産サスカイト製の板状石材と同一母岩と考えられる削器も後期後半以降の資料といえる。この削器の特徴は両面加工により素材剝片の形状そのまま沿うように刃部が形成されていることである。後期以降の削器が簡単で粗雑な作りであることがしばしば指摘されているが、これは刃部形成が素材の形状をそれほど変化させずに製作されていることに起因するものと考えられる。先述した草創期から早期にかけての削器とは明らかに製作技術が異なることから、削器においてその古いものと新しいもののとの分離が可能であると考えられる。その変化する時期については漠然と早期後半から前期にかけての時期であると認識しているが、詳細については今後検討したい。

また、二上山産サスカイト製の板状石材は後期後半の突帶文土器に共伴しているものであり、当遺跡において唯一帰属時期が明瞭である。二上山産サスカイト製の板状石材については、大阪府久宝寺遺跡(後期)や奈良県桜ヶ丘遺跡(早期前半?)などに認められ、そのもの自体からの帰属時期はまだ十分に検討されることがないため不明である。少なくとも栗生間谷遺跡例や久宝寺遺跡例などから後期には存在していたと考えられるが、早期まで遡る可能性があるのかについては今後検討する必要があろう。

以上のことから、栗生間谷遺跡出土の石器には草創期から早期にかけての時期と、後期から晩期にかけての時期とが認められることが明らかとなった。ここで検討した以外の石器についてもこのいずれかの時期に帰属するものと考えられる。

5 おわりに

以上におこなってきた検討は、石器そのものから時期比定を試みたものである。周辺遺跡の出土例から可能な限り時期比定をおこなってきた。これは、縄文時代の石器は有舌尖頭器や異形部分磨製石器などのある特定器種を除いて、石器そのものから時期比定が困難であるという、十分に検討されることなく暗黙的に捉えられてきた従来の考え方に対し一石を投じるものである。

しかし、類例を挙げてその可能性を指摘するに留まったため、十分な検討がなされたとは言い難い。このように検討することにより土器と共に伴していない出土の石器資料について、石器資料そのものから現状よりも細かな時期比定できる可能性を示すことができたことと思う。今後、製作技術の点から検討すると共にその素材となった石核あるいは剝片などの分析から、剝片剝離技術との関連性も併せて考慮する必要があるであろう。

引用・参考文献

- 網谷克彦・畠中清隆(編) 1987 「岩の鼻遺跡Ⅱ」 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 石神幸子 1992 「久宝寺遺跡(北地区)縄文時代包含層出土集積サヌカイトについて」 『河内平野遺跡群の動態V』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 伊庭 功(編) 2000 『栗津湖底遺跡 自然流路(栗津湖底遺跡Ⅲ)』 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財協会
- 大下明・久保勝正 1998 「Ⅶ. 3 石器群の評価と問題点」 『鴻ノ木遺跡(下層編)』 pp.238-254 三重
- 大野嶺夫・藤井保夫著 1992 『日本の古代遺跡46 和歌山』 保育社
- 岡本東三 1983 「トロトロ石器考」 『人間・遺跡・遺物-わが考古学論集1-』 pp.119-132 文獻出版
- 樅原考古学研究所(編) 1994 「一万余年前を掘る」
- 岸本道昭(編) 1987 「久宝寺北(その1~3)」 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 木崎康弘 1997 「男性器形石製品とトロトロ石器とのただならぬ関係について」 『人間・遺跡・遺物3-麻生優先生退官記念論文集-』 pp.300-311 文獻出版
- 下村晴文 1987 「神並遺跡」 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 田村陽一(編) 1998 『鴻ノ木遺跡』 三重県埋蔵文化財センター
- 仲川 靖(編) 1997 「穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ」 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 西口陽一 1991 「近畿・有舌尖頭器の研究」 『考古学研究』第38卷第1号 pp.86-106 考古学研究会
- 樅原町教育委員会 1988 「遺跡で見る むかし、むかしの樅原」 pp.5-6
- 深井明比古(編) 1998 「個遺跡」 兵庫県教育委員会
- 松田真一(編) 1989 「大川遺跡」 山添村教育委員会・樅原考古学研究所
- 松田真一(編) 1989 「布目川流域の遺跡5 第5次発掘概要」 樅原考古学研究所
- 松田真一・近江俊秀(編) 1991 「布目川流域の遺跡6 第6次発掘概要」 樅原考古学研究所
- 光石鳴巳 2001 「縄文文化の期限を探る-はじめて土器を手にしたひとびと-」 樅原考古学研究所附属博物館
- 山田 猛(編) 1994 「大鼻遺跡」 三重県埋蔵文化財センター
- 樅原考古学研究所編 1979 「二上山・桜ヶ丘遺跡」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十八冊

第6節 丹波帯におけるチャートの産出状況と 粟生間谷遺跡出土のチャート石器群の関係について

井本伸廣

1はじめに

日本の遺跡から出土する石器の素材としては、黒曜石、サスカイト、珪質頁岩などのほか、チャートが用いられている。粟生間谷遺跡からもチャート石器が出土しており、それらの岩質や含有化石に基づく地質年代を検討することによって素材の産出地を推定することができれば、往時の物流の状況を考えることにつながりうる。

チャートの岩質については、1960年代の末からフッ化水素酸による腐食法を適用することによって、従来の薄片観察では得られなかつ立体的な観察が可能になり、実体顕微鏡や走査型電子顕微鏡を併用することで、チャートについて豊富な情報を得ることができるようになった(Imoto (1984))。また、1970年代から1980年代にかけては、世界的に放散虫化石の研究が爆発的に進行し、特に中生代・後期古生代チャートの地質年代の判定が容易に行えるようになってきている。今回の検討は、地質学分野におけるこうした研究の成果をチャート石器に応用しようとするものである。

粟生間谷遺跡はいわゆる丹波帯南縁部に位置しているところから、チャート石器素材の原産地として、先ず丹波帯を想定することが妥当であろう。なぜならば、丹波帯にはいわゆる秩父中・古生層が広く分布しており、そこには岩質的にみて多様なチャートが大量に含まれており、素材の選択や採取が容易に行いうるからである。

丹波帯の地質研究は明治20年代、地質調査所の図幅調査に始まる。本格的な研究は、中村ほか(1936)による京都西山の報告を嚆矢とする。松下(1950, 1953)はその後の研究成果を、次のように総括した。それによると、丹波帯は一連整合の古生界(ペルム紀-石炭紀)からなり、東西軸をもつ褶曲と衝上断層によって繰り返しているとした。坂口も独自の研究の結果、同様の見解を示した(Sakaguchi, 1961, 1963)。

1960年代にはいり、丹波地帯研究グループは、丹波帯中央部から南部にかけて精力的に研究を行ったが、1975年頃までは従来の見解を受けついで、ペルム紀を主とする古生界の層序を提起していた。ただ、京都府北桑田郡京北町周山で三疊紀後期を示す二枚貝化石が発見されたことから、地層の年代の上限が三疊紀に及ぶ可能性も指摘されていた(丹波地帯研究グループ、1974)。

丹波帯に中生代三疊紀の地層が広く分布する可能性の指摘は、Nakazawa and Nogami(1967)に始まり、つづいて吉田・脇田(1975)により、層状チャート中に後期三疊紀のコノドント化石の生層序が見出された。さらにIsozaki and Matsuda(1980)は保津川流域において、コノドントや放散虫などの微化石の研究から三疊系からジュラ系にいたる一連のチャート・珪質頁岩層の存在を確認した。丹波帯にジュラ系の存在することは、その後、泥質岩からの放散虫化石化石の産出確認があいつぎ、現在では幹層岩類の年代はジュラ紀を主とすることが判明してきている。

古生界チャートの放散虫生層序については、Ishiga and Imoto(1980)以来の研究によって石炭紀後期からペルム紀にかけての一つのスタンダードが作られてきている。

このような微化石生層序の研究によって、丹波帯を構成する地層について、従来の一連整合の古生-

中生界という見解から大きく変わり、チャート・緑色岩などの遠洋性相と泥岩・砂岩などの陸源碎屑岩相が混合した付加体堆積相とする見方が定着するようになった。さらにそれらは地城毎に、岩相と年代の組み合わせの異なる構造的なまとまり（ユニットやコンプレックスと呼ばれる）が衝上断層を境に、互いに重なっているという構造的層序ユニットの概念を取り入れられるようになった。その背景には、プレートテクトニクス論を基礎にした付加体形成過程についての研究の進展があった。

こうした見方に立って、石賀（1983）は丹波層群を岩層・地質年代の異なる2組の地層群に分けることを提案し、それらを丹波層群Ⅰ型地層群、丹波層群Ⅱ型地層群と呼んだ。Imoto（1984）も同様の見解に基づき、両地層群に含まれる層状チャートの特徴について論じた。

1989年からは新しい観点に基づいて、丹波帯に関わる5万分の1地質図幅が次々と発行されるようになり、現在までに丹波帯のほぼ全域が完成している（京都西北部、1989；綾部、1989；福知山、1990；園部、1991；篠山、1993；四ツ谷、1994；広根、1995；京都東北部、1998；熊川、1998；敦賀、1999；竹生島、2001；北小松、2001）。

2 丹波帯から産出するチャートの特徴

丹波帯に分布する構造的層序ユニットとしてのⅠ型及びⅡ型地層群にはそれぞれチャートが伴なう。チャートは硬くて緻密な微粒石英からなる珪質堆積岩の総称で、産状によって団塊状、塊状、層状チャートなどに区分される。

団塊状チャートは径数センチ～数10センチ程度の不規則な団塊として、石灰岩や苦灰岩などの炭酸塩岩中に産することが多い。歐米でフリントと呼ばれ石器の素材に用いられるものは、チョーク中に産する団塊状チャートの一類である。能登半島先端部に近い狼煙集落付近の珪藻土から産出する“子ぶり石”と呼ばれている円柱状～樹枝状の結核体もこの区分に含まれる。地下水に溶けたシリカによる交代作用で形成されると考えられている。また流紋岩や安山岩中に産する“赤玉”やジャスパー（碧玉）は热水からの沈殿物、または交代作用によるものであるが、岩質的にはチャートに類似する。佐渡の“赤玉”は庭石としても珍重される。

塊状チャートは数10センチ～数メートル以上の厚さの地層を形成したり、後述する層状チャートのうち層理の不明瞭な場合を指すこともある。本来の塊状チャートは热水から沈殿したり、既存の岩石が热水に含まれるシリカで交代されて形成される。丹波帯では、層状マンガン鉱床の下盤に産する黒色チャートと白色石英細脈が混在した岩石（親盤と呼ばれていた）とかつて耐火煉瓦の原料として採掘された赤白珪石や青白珪石などがある。これらは海底噴出玄武岩や同質の火山碎屑岩に伴われており、海底火山活動の終末期に形成されたものであろう。放散虫などの化石の痕跡は認められない。

層状チャートは、丹波帯で最も多産するチャートである。一般的には、厚さ数センチの珪質層と数ミリの粘土質層がリズミカルな互層をなすもので、珪質部は放散虫遺骸や海綿骨片など珪質微化石の集積に由来する。

I型地層群とⅡ型地層群に含まれる層状チャートに次のような特徴がある。

I型地層群の層状チャートは、厚さ3～6センチの珪質層と数ミリの粘土質岩が互層をなすもので、灰～黒灰色を呈することが多い。珪質部は放散虫遺骸及びその破片を主とし、少量のイライト、緑泥石などの粘土鉱物を伴う。粘土質薄層にかわって苦灰岩を挟むことがある。かつて“丹波マンガン”として採掘された層序マンガン鉱床は、このチャート層に特徴的に挟まれる。チャート層の年代は三疊紀中

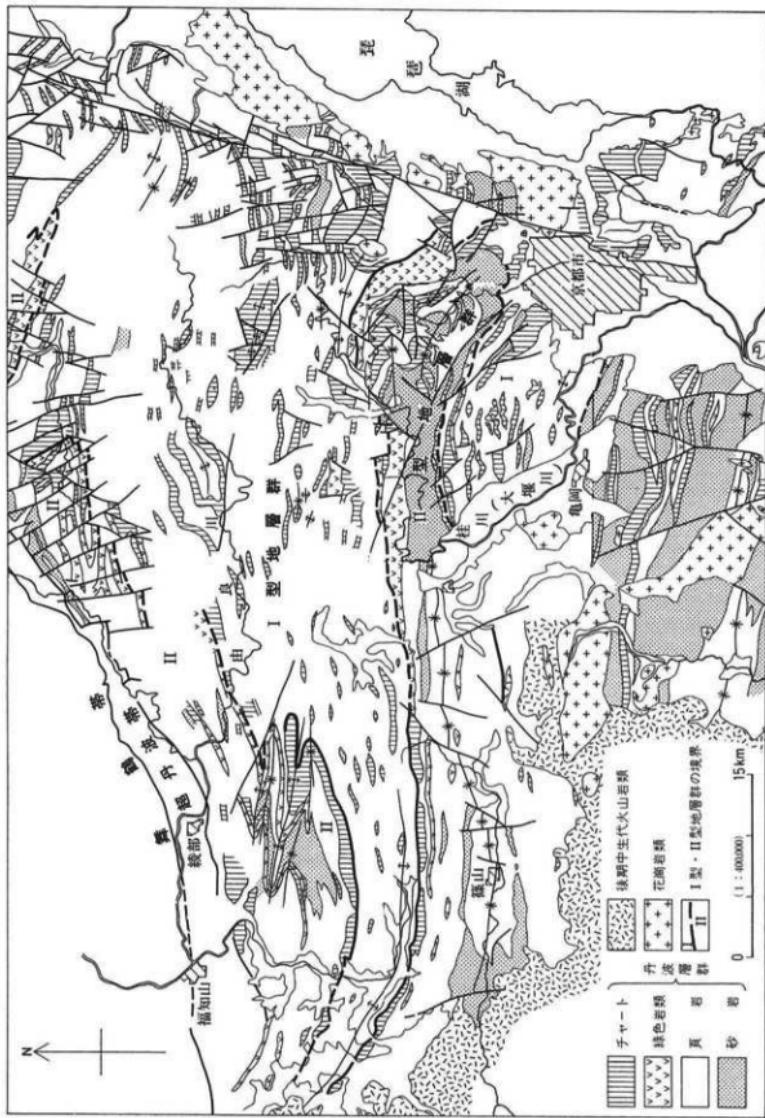


図95 丹波帶の地質概略図 (井本ほか1989に基づき一部修正)

世～ジュラ紀中世にわたる。層状チャート全体の厚さについては、上・下底ともに断層で切られることが多く、正確な見積もりは困難であるが、連続する露頭の規模や産出化石の推移から判断して50メートル程度とみなしうる。みかけ数100メートルの厚さを示すチャート層の場合には、断層やスランプによる繰り返しが生じているものであろう。

II型地層群の層状チャートはI型地層群のチャートに比較して、下部では珪質層、粘土質岩挟み共に単層の厚さの変化が著しく、色調も赤褐色や緑色、両者が混在するものが多い。また放散虫化石のほか多量の海綿骨片を含む場合がある。上部では灰黒色を呈するようになり、単層の厚さも薄く、均一化する傾向がみられる。地質年代は、石炭紀新世～ペルム紀新世を示すものが一般的であるが、三疊紀～ジュラ紀古世を示すチャートも存在するが、いずれも最上位の碎屑岩層を構成するオリストストローム層にオリストリスとして含まれるもので、ペルム紀チャートからの連続は知られていない。

ペルム紀層状チャート層全体の厚さは数10メートルと推定されるが、断層やスランプによる繰り返しによって数100メートルの厚層をなすことがある。

3 石器の素材としてのチャート

チャートという岩石名は、堅くて緻密な微粒珪質堆積岩の総称として用いられる。フリント、ノバキュライトなども広義にはチャートに含まれる。構成鉱物は微粒石英を主とし、ごく少量の粘土鉱物や鉄鉱物、炭素物質などを含む。チャートの色調は、含有される隨伴鉱物によって変化する。灰色はイライト、緑色は緑泥石、赤色は赤鉄鉱、黒色は炭素物質により呈色される。

石器の素材となる場合の重要な条件としては、まず岩質が緻密で硬く、破断面が貝殻状断口を示すことがあげられる。黒曜石は流紋岩～デイサイト質のガラス質火山岩であり、サスカイトは非晶質古銅輝石安山岩であるが、どちらも緻密で硬く、破断面は貝殻状断口を呈するところから、石器素材としての要件を備えている。これに対しチャートは堅固・緻密ではあるが、破断面は常に貝殻状を示すとは限らず、特に丹波帯に産する層状チャートの場合には、層理面に垂直ないし高角度で交わる節理が発達し、直方体の小ブロックに砕けることが多い。こうした節理は、チャート層が埋没や付加の過程で圧縮され、脱水・固結する際に形成されるものと考えられる。また、花崗岩類の貫入を受け熱変成作用によって再結晶が進み、ガラスに類似した性質が失われていることが多い。

前述したように、層状チャートは、深海底での放散虫や海綿骨片などの珪質生物遺骸の集積に由来する。生物遺骸は、もともと非晶質シリカで構成されており、続成作用を経て微粒石英の集合体へと変化していく。石英の粒径は最小で0.2ミクロン程度である。このサイズの粒径の石英で構成されているチャートにあっては、フッ化水素酸でエッチングすると細部の構造まで観察可能な生物遺骸のレリーフが現れる。またチャートの見かけはガラス質であり、破断面も貝殻状断口を示す。

続成作用が進行すると石英粒径は増し、それにつれて生物遺骸の保存状態は劣化する。さらに熱変成作用が加わり粒径が10ミクロンにも達すると、放散虫殻の構造の細部は完全に失われてしまい、チャートの見かけもガラス様光沢が無くなり、破断面も節理に沿って割れるか不規則な断口を示すようになる。従って石器製作に適した要件を備えているチャートは、丹波帯の随所に産するチャート層のなかでも、かなり限定されることになる。筆者の調査した限りにおいて石器の素材に適したチャートが含まれる地層群や産出する地域はきわめて限られている。

まずI型地層群とII型地層群のチャートを比較すると、II型地層群中のチャートに石器素材に適した

ものが多い。これはⅡ型地層群が地質構造的にⅠ型地層群の上位に位置するところから、埋没深度が浅かったため被熱効果が弱く、チャートを構成する石英の再結晶度が低いことによるものと推定される。さらに白亜紀花崗岩類の貫入による熱変成作用も、当然のことながら構造的下位に位置するⅠ型地層群を構成する地層に大きな影響を及ぼすことになる。能勢花崗岩・行者山花崗岩・花脊花崗閃綠岩・比叡花崗岩などの周辺の地層は、いずれもⅠ型地層群に属しており、また花崗岩体は露出していないものの弱いホルンフェルス化の認められる地域（例えば愛宕山周辺）に分布する地層もⅠ型地層群に属することが知られている。また丹波帯南部で領家帯に近接するとⅠ型地層群、Ⅱ型地層群ともチャートは明らかにホルンフェルス化を蒙っている。

こうした状況や微化石の保存状態を勘案すると、丹波帯において石器の素材に適したチャートの産出する地域としては、兵庫県篠山盆地周辺、京都府北桑田郡京北町周山から京都市北区大森・左京区雲ヶ畑にかけての地域などが候補に挙げられる。こうした地域にはⅡ型地層群が広く分布しており、赤色チャートやジャスパーとみなしうる赤白珪石も産出する。またⅠ型地層群には赤色チャートの産出は稀であるが、京都市北区中川北山町から駿河谷山にかけて分布するⅠ型地層群に属するチャート層には赤色で保存良好な放散虫化石を産するところから候補地域のひとつとなりうる。

4 粟生間谷遺跡チャート製造物分析試料

(財)大阪府文化財調査研究センター新海正博氏ならびに大阪大学文学部考古学研究室森先一貴氏・同志社大学文学部文化史学研究室森川 実氏のご好意により提供を受けた粟生間谷遺跡から産出したチャート製造物と丹波帯を貫流する河川疊洲及び近傍から採集された赤色チャート試料について、それらの岩質、含有される微化石に基づくチャートの地質年代の推定を試みた。

検討の方法は、約20%に希釈したフッ化水素酸で腐食した試料表面を実体顕微鏡で観察し、一部の試料については走査型電子顕微鏡による観察と写真撮影をおこなった。なお、フッ化水素酸の使用や観察にご協力いただいた京都市青少年科学センター田中功一氏ならびに同志社大学理工学研究所鈴木博之教授に感謝する。

検討の結果は下記のとおりである。

粟生間谷遺跡チャート製造物

番号	器種	岩質	色調	放散虫保存状態	特徴的な微化石	地質年代	備考
104	剥片	jp	5Y3/2	-			
124	碎片	radch	10YR2/2	融合			
133	碎片	radch	5Y5/2	良好			
134	碎片	radch	5Y5/2	良好			
183	碎片	radch	10YR4/2	良好			
205	碎片	radch	N 3	良好	<i>Triassocampe(?) japonica</i> ? 三疊紀中期 ?		
226	剥片	radch	5Y3/2	良好			
412	剥片	jp	5YR2/2	-			
706	剥片	radch?	5Y5/2	-			白色微粒結晶

1007	碎片	radch	5Y3/2	良好		
1150	剥片	radch	10R3/4	極良好	<i>Triassocampe deweveri</i>	三疊紀中期
1199	剥片	radch	10GY5/2	良好	螺旋形の棘	三疊紀？
			10R3/4 II mottled			
1228	剥片	radch	5G5/2	良好		
1233	剥片	radch	5YR3/2	極良好	<i>Triassocampe deweveri</i>	三疊紀中期
1340	剥片	radch	5YR3/4	良好		
1373	剥片	radch	5YR3/2	極良好	<i>Triassocampe deweveri</i>	三疊紀中期
			5Y3/2 II mottled			
1474	碎片	radch	5YR3/4	極良好	<i>Triassocampe deweveri</i>	三疊紀中期
1530	碎片	radch	10GY5/2	極良好	放散虫棘多し	
566	剥片	silsh	N 3	-	櫛型コノドント	三疊紀？
1400	碎片	jp	10R4/6	-		

* 岩質: radch 放散虫チャート, jp ジャスパー silsh 珪質頁岩

** 色調記号はRock-color chart (Geological Society of America) に準拠

なお、安威川、大悲山、保津川などの河床から採集された赤色チャートについてフッ化水素酸腐食の後、実態顕微鏡により観察したところ、安威川産のチャートでは櫛型コノドントが見出されたところから三疊紀チャートと推定した。また大悲山産からは *Canoptum triassicum*、保津川産からは *Capnodoce* sp., *Capnocosphera* sp. とみなしうる放散虫化石が確認されたことにより、これらのチャートの地質年代は、三疊紀後期と推定した。そのほか木津川や三重県出張遺跡周辺採集などのチャート標本からは、時代判定に用いられる微化石は確認できなかった。ただしこれらのチャートに含まれる放散虫化石の保存状態については、栗生間谷チャートに比較して、いずれも良好とはいえない。

以上のような検討結果から、栗生間谷遺跡から産出したチャート製石器について以下のような特徴が認められる。

- 岩質については放散虫チャートのほか、ジャスパーを含む。
- 赤・緑・灰・黒等、多様な色調のチャートを含む。
- 放散虫チャートと認定したものについては、赤色チャートの微化石の保存状態は、他の色調を呈するものに比較して極めて良好である。
- チャートを構成する石英粒子は、すべての試料について微粒であり、再結晶の進行しているものは認められない。
- 赤色チャートに含まれる放散虫化石で地質時代の判定に資すると判断したものは、いずれも三疊紀中期を示す *Triassocampe deweveri* 群集を特徴づけるものであり、チャート石器素材は限られた産地から、選択的に採取された可能性がある。
- 栗生間谷周辺の丹波帯を貫流する河川や近傍のチャート産地から得られた赤色チャートについては、岩質・地質時代とともに、栗生間谷産のチャート石器素材に同定または比定しうるものは、現在までのところ確認できていない。ただ、井本ほか(1989)によれば、丹波帯に産する赤色チャート

トの一部に、*Triassocampe deweveri*群集の放散虫化石を伴うチャートが報告されているところから、栗生間谷チャート製石器の産地については、なお丹波帯からもたらされた可能性も残されており、今後の検討にゆだねたい。

5 まとめ

栗生間谷遺跡から産出したチャート製石器について、それらの岩質及び含まれる放散虫などによる地質年代の検討を行い、チャート石器素材の産地の検討を試みた。こうした検討の手法は考古学の分野では必ずしも一般的とは言いがたい状況にある。今回は幸い素材の一部をフッ化水素酸によって腐食するという、チャートの岩質や含有化石を検討するための必須の手法を導入することが決断されたことよって実現した。結論的には必ずしも当初の期待に充分に応えるには至らなかったものの、岩質や微化石に基づく地質年代の検討といった地質学の分野でチャート研究に用いられてきた研究法を考古学の分野に導入することによって、チャート製石器素材の原産地を特定するといった課題の検討に寄与しうる可能性は開けたのではないかと考えている。今後の展開を期待したい。

文献

- Imoto, N. (1984) Late Paleozoic and Mesozoic cherts in the Tamba Belt, Southwest Japan. *Bull. Kyoto Univ. Education*, vol. 65, p.15-71.
- 井本伸広・清水大吉郎・武藤謙 実・石田志朗 (1989) 京都西北部地域の地質、地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 84p.
- 石賀裕明 (1983) “丹波層群”を構成する2組の地層群について、丹波帯西部の例。地質雑誌, vol. 89, p.443-454.
- Ishiga, H. and Imoto, N. (1980) Some Permian radiolarians in Tamba district, Southwest Japan. *Earth Sci. (ChikyuKagaku)* , vol. 34, 332-345.
- Isozaki, Y. and Matsuda, T. (1980) Age of the Tamba Group along the Hozugawa "Anticline", Western Hills of Kyoto, Southwest Japan. *Journ. Geosci. Osaka City Univ.*, vol. 23, p.115-134.
- 松下 進 (1950) 京都府地質誌 (1). 地学, vol. 2, p.41-49.
- 松下 進 (1953) 日本地方地質誌「近畿地方」。朝倉書店, 313p.
- 中村新太郎・松下 進・館林寛吾 (1936) 京都西山山地の地質。地球, vol. 26, p.311-334.
- Nakazawa, K. and Nogami, Y. (1967) Problematic occurrence of the Upper Triassic fossils from the Western Hills of Kyoto. *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Miner.*, vol. 34, p. 9-22.
- Sakaguchi, S. (1961) Stratigraphy and Palaeontology of the South Tamba District. Part I, Stratigraphy. *Mem. Osaka Gakugei Univ., Ser. B*, vol. 10, p. 35-76.
- Sakaguchi, S. (1963) Stratigraphy and Palaeontology of the South Tamba District. Part II, Palaeontology. *Mem. Osaka Gakugei Univ., Ser. B*, vol. 12, p. 89-173.
- 丹波地帯研究グループ (1974) 丹波地帯の古生界 (その3), 京都市北方大森, 雲ヶ畠地域の古生層。地球科学, vol. 28, p. 57-63.
- 吉田光広・脇田全啓 (1975) 京都西北山地のコノドントの産出について。地団研専報, no. 19, p.43-48.

第7節 チャート石材の分布と石質について

1 調査の目的

石材産地推定研究は、かつては自然科学的手法を用いた火山岩系石材の産地推定が主であったが(例えば鈴木 1969、薦科 1972など)、近年は関東地方を中心として河川における石材分布調査を通して、堆積岩系石材の採取可能地を推定する研究も精力的に進められている(笠懸野岩宿文化資料館岩宿フォーラム実行委員会編 1995・1997、柴田 1994、千葉県文化財センター 1987、中東・飯島 1984、山本 1993、山本・金山・柴田 1991など)。現在では、このような研究はより質の高い石材分類・記載を追究する方向へと進んでおり、また関東地方以外の地域でも同様の研究が行われるようになりつつある(富樫 1997、秦 1998、藤野 2001など)。

ところで大阪平野周辺ではこれまでサヌカイト以外の石材に焦点をあてた研究はほぼ皆無であった。というのは近年にいたるまで、非サヌカイト石材がどのようななかたちで利用されるのかということを示す資料が少なかったためであろう。非サヌカイト石材の大半を占めるチャートについても、わずかに『枚方市史』(片山 1967)や藤阪宮山遺跡の概要報告(桑原・久保 1987)の中で、その産地についての言及がみられる程度である。しかし最近も山口卓也氏によって指摘されたように(山口 2001)、そして栗生間谷遺跡や吹田市吉志部遺跡(吹田市教育委員会編 2001)の調査を通してチャート利用についても少しずつながらその実態が明らかになろうとしている今、非サヌカイト石材についても可能な限り分布調査を重ね、その採取可能な範囲の推定を行っていく努力は今後とも不可欠であるといえる。ここではその第一歩として基礎的な分布調査により、特にチャート石材に限定してその大まかな採取可能範囲を推定するという作業を行いたい。

2 調査の方法

チャートの分布状況を調べるためにには、①まず地質図(ここでは通商産業省工業技術院地質調査所発行「京都及大阪」20万分の1地質図1986年)を参照しつつチャートの露頭やチャートが分布する可能性の高い河川を選定し、②次に選定した河川のいくつかの河原を調査地点として、可能な限り広い範囲で採集したチャートの諸属性を記載する¹⁾。観察した属性は、疊状態(角疊～円疊)・肌理粗さ(3段階評価: 1・2・3)・節理の多寡(3段階評価: 1・2・3)・剥離面の光沢の有無・大きさ(最大長・最大幅・最大厚)・色調(黒色～暗灰色・暗青色・緑色・赤色・黄色・白色)である。③これらの属性を総合的に検討することにより石器石材としての利用が可能であるもの(石質評価Ⅰ)/不可能なもの(同Ⅲ)/両者の中間的なもの(同Ⅱ)の3つに分類する。さらに、中間的なもの(Ⅱ)については遺物との対比の中で判断したところ、ほとんど利用されていないことが分かった。このため基本的には評価Ⅰのみを石器石材として利用可能な良質チャートであると判断することにし、④このチャートについて大まかな分布を検討する、という方法をとった²⁾。

③の段階で石質の評価を行うと述べたが、その方法を簡単に説明したい。この場合、専門的な測定機器を用いた研究(渡辺1995)は、一個人が行うには困難が伴うため、いくつかの認定基準を設けて肉眼観察によることとした。すなわち「肌理粗さ」と「節理の多寡」の2つの属性である。これら2属性に「大きさ」の基準を加えて総合的に判断し、石器石材としての利用可能な石質を備えているかを否かを評価することとした。

- A. 肌理粗さ…剝離面の滑らかさに関する属性。
- B. 節理の多寡…実際の剝離によって判断される剝片取得の難易度に関する属性。
- C. 大きさ…石器石材として利用するに足る大きさを備えているか否か。

A・Bは密接に関係していることは確かであるが、必ずしも同質の属性ではない。Aが低く(肌理が粗い)、Bが高く(剝片取得が容易)評価されることもあるが、その逆もまた認められるからである。しかし剝片剝離が可能であっても、Aの評価が低いと縁辺に鋭い刃は形成されず、石器素材としての利用には適さない。また逆に、Aの評価が高くてBの評価が低ければ剝片剝離の段階で困難が生じる上、加工の段階でも折損しやすいという経験から、両者がいずれも高く評価できるものを石器石材に適した良質チャートと考えることにした。すなわち、A・Bとも評価Ⅰのもののみを石質評価Ⅰとした。石質評価ⅢはA・Bいずれか、もしくはいずれも評価Ⅲとなるもので、石質評価Ⅱはそれら以外のものとする。肉眼観察と経験的評価によるものであり心もとない面もあるが、3つの基準による総合的判断である点で、印象的判断より幾つかは客觀性をもった評価を与えられると考えられる。

3 調査の結果

さて、調査の結果をまとめたものが図96・表44である。調査地点と、地点ごとのチャート石材の石質評価について整理したものである。地域を北摂山地、枚方地域、京都府域、兵庫県域と便宜的に区分して解説する。

(1) 北摂山地の河川及び露頭（余野川・箕面川流域露頭・勝尾寺川・佐保川・安威川・芥川・檜尾川・黒柄岳露頭）

チャート自体が採取できないか、石質評価がⅡかⅢのチャートのみが採取できた河川としては、余野川全地点・箕面川流域露頭・勝尾寺川全地点・佐保川が挙げられる。余野川・勝尾寺川ではチャートと呼ぶことのできる石材自体はある程度確認できるが、その石質は非常に不良で礫径も小さい（拳大以下）。箕面川沿いの露頭ではフェンスによって護岸されているためチャートの採取が困難であったが、観察からは灰色を呈し、節理の多くはいたた悪質のチャートであることが確認できた。

石質評価がⅠで石器製作に利用できる大きさをもったチャートがごくわずかに確認した河川としては、安威川・芥川・檜尾川が挙げられるが、やはりほとんどは質の悪い（石質評価Ⅱ・Ⅲ）チャートで占められる。比較的良質チャートを多く採取できた芥川でも、礫のサイズは上流ほど大きなものも認められるが、そのうち良質な部分は、下流で認められる転磨によって脆い（悪質）部分が剥落したチャート礫のように、拳大以下程度でしかないと考えられる。これらの河川では黒色・緑色・赤色など、比較的多様な色調のチャートが確認できたが、光沢をもつものはほぼ皆無であるといってよい。いずれの河川でも亜円礫～亜角礫のものが多く、後に述べる桂川の礫面状態とはかなり異なっている。

総体的にみて、これら3河川のサンプルも栗生間谷遺跡の遺物と比較すれば、良質のものであっても光沢の有無や礫径等を含め石質的にはかなり見劣りするものと言わざるを得ない。ただ、安威川・芥川の最上流に位置する黒柄岳山頂部にある露頭から採取したチャートは剝離面に光沢もあり、色調も多様で、栗生間谷遺跡のものと比較してもそれほど見劣りしない良質のチャートを多く含む。露頭であるため当然充分な大きさを備えている。

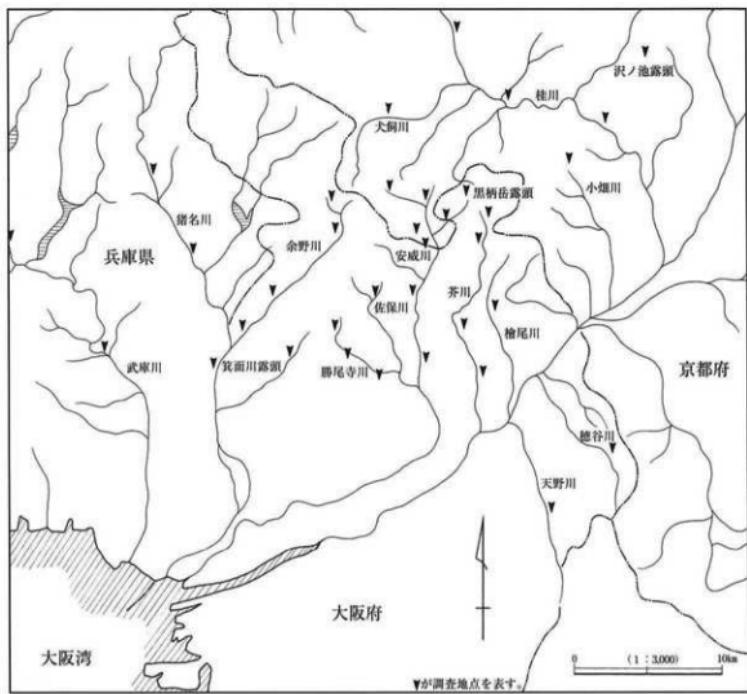


図96 調査地点分布図

(2) 枚方地域の河川（天野川・総谷川）

当地域の河川では、質のよいチャートも非常に少量ではあるが採取できる。特に天野川では特徴的に円磨した表皮をもつチャートが採取でき、質的にも石器生産に供することは不可能ではないものもわずかに含まれる。しかし岩石生成時の性状をとどめるチャート（いわゆる「生チャート」）とは色調がやや異なり、不鮮明であったり多色であったりと特異なものである。また、当河川のチャートにみられる特徴的な円磨は、河川の流域長から考えて河川を転流する間に形成されたものではないことが指摘できる。つまりこれらのチャートは大阪層群中などに含まれるものである可能性が高く、本来的に当地に産出するものではないと考えられよう。そして色調の特異性は、当地域が地質構造上は領家変成帯に含まれることから、変成作用が及んだ可能性を考慮しなければならないであろう。このようなチャートは管見の限りでは遺物においては確認しえなかった。

(3) 京都府域の河川及び露頭（桂川・小畑川・犬飼川・沢の池周辺露頭）

京都府域を長距離にわたって流れ、宇治川・木津川と合流して淀川をなす桂川（場所によって大堰川・千代川・保津川などとも呼ばれる）では、丹波帯中央部を貫流していることもあり良質なチャート

表44 チャートの石質評価

河川名	採取チャートの石質			分布量
	評価Ⅰ	評価Ⅱ	評価Ⅲ	
余野川				少
浜田川露頭				中間
鶴尾寺川				無し
佐保川	—	—	—	中間
安威川				中間
芥川				中間
袖尾川				中間
黒柄岳露頭				—
穂谷川				中間
天野川				多
桃川				多
小畑川				少
犬飼川				少
沢の池露頭				—
猪名川				極少
武庫川				少
篠山川				多
大恋山露頭				—

市一つの河川内で調査地点ごとに大きな違いがない為、一河川全体での評価を表す。

非常に少ない。全体の数%にとどまる。

一定認められる。10~30%程度。

多量に認められ、大半を構成する。

と同様の転磨面を有している。桂川流域のチャートの色調は非常に多様である。

向日市を流れ、桂川に注ぐ小畑川でも良質のチャートが僅かに採取し得るが、分布量自体は非常に少ない上、護岸が進んでおり調査の信頼性にはやや欠けると言わざるを得ない。犬飼川ではチャートの分布が極めて少い上、石質評価は全てⅡあるいはⅢである。

露頭調査として京都市沢の池周辺に観察できる露頭を対象とした。当地は旧石器遺物の散布地として著名な沢の池跡地でもある(四手井・木村・武山 1973)。池の周囲数ヶ所に露頭が確認でき、池周辺やそこへいたる林道にはチャートの角礫が大量に散乱している。石質はまちまちで、節理が多く石器石材としては不適なものもあり、石質評価がⅠと判断することができる良質なものも多く採取できる。いずれであっても充分な大きさと光沢をもっている。また、当地でサンプリングした赤色チャートは、赤色チャートとしてはこれまでの中でも最良のもので、栗生間谷遺跡の良質なチャート遺物と比較しても見劣りしないものである。

(4) 兵庫県域の河川（猪名川・武庫川）

兵庫県域の河川については、大阪府に隣接する兵庫県東南部を流れる猪名川・武庫川に限定して調査を行った。両河川とも良質なチャートはほぼ皆無であるが、武庫川においては、光沢はないがやや質のよい(評価Ⅱの中でもやや良質)チャートが採取できた。しかし色調が不鮮明で曇ったようなものが多く、変成作用を受けたものかもしれない。自然面は比較的の上流であるにも関わらず極めて円磨している。このような転磨面は先に述べた桂川のチャートの礫面とは大きく異なる。

いずれにせよチャート分布量は僅少で、石器石材としての利用が見込めるものはほぼ皆無であった。地質図上では両河川の最上流部にレンズ状にチャートの分布が表記されているため、河川によってそれらが運搬されている可能性を考慮しての調査であったが、当地域では良質チャートの採取は不可能であった。

(5) その他の調査地点

紙幅の関係から地図上には示していないが、他にも兵庫県篠山川流域の河川や、京都府では桂川水系

を多量に採取することが可能であった。これまでに挙げた良質チャートの採取が可能な河川と比較しても、質・量・大きさともに卓越している。量的にはやや減少するが、嵐山付近に至ってもこの傾向に大きな変化が見られないことは注意しなければならず、海水準が現在よりも低く下刻作用の強かった旧石器時代の当時にあっては、さらに下流においても良質チャートの採取が可能であったと思われる。自然面は非常に転磨が進んでいるものが多く、この自然面の場合は枚方地域のチャートとは異なり、長距離を転流してきたことによつて形成されたものと考えるべきだろう。

遺物において観察される礫面も、円礫を使用していると考えられるものについては、これ

の最上流域に位置する大悲山山中の露頭を調査しているので簡単に説明しておくと、篠山川では桂川のものと比べて縁がかったものが多いことが特徴で、桂川と同様に縁の充分な、石質評価の高いチャートが比較的多く採取できる。縁面状態は桂川のものとも類似しており、良質チャートの転石に共通する特徴といえる。大悲山の露頭では節理の少ない極めて良質のチャートが良く層をなしているが、赤色チャートがほとんど見られない点が注意される。

4 良質チャートの採取可能地域について

以上の調査結果から、石器石材に適したチャートが採取できる地域を可能な限りで推定してみたい。栗生間谷遺跡ブロック1やブロック6のチャート資料に残る自然面からは、角縁・亜角縁を用いていたことが推察される。その他にも、吉志部遺跡の場合は自然面を大きく残す資料がないため判断し難いが、角縁を分割したと思われる分割縁が1点検出されている。しかし一方で、例えば郡家今城遺跡や塚原遺跡では、良質チャートの転石に特有の転磨面をもった石核等が存在している。

角縁・亜角縁と円縁・亜円縁のいずれを用いるかについてどのような意味や理由があるかは、現状では不明であるが、ともかく、栗生間谷遺跡については角縁・亜角縁の状態での採取であったと考えられる。このような縁状態で良質なチャートを産する地点としては、比較的近傍では黒柄岳、遠方では沢の池周辺や大悲山が考えられる。もちろんこの地点以外に無いと言うことではなく、現状ではこの3候補が挙げられるというに過ぎないということである³⁾。板井寺ヶ谷遺跡の資料なども考慮すれば、篠山地域にも良質チャートを含む露頭が多く分布していることは想像に難くない。ただし河川調査とあわせて考えれば、北摂山地には黒柄岳山頂付近の露頭の他には良質チャートを多量に産する露頭の存在はあまり期待できないのではないだろうか。

一方で郡家今城遺跡にみられるような円縁状態での良質チャートが採取できる河川はどうであろうか。先述したように、北摂山地の諸河川におけるチャートは遺物に見られるチャートとは石質・色調ともやはり見劣りする部分が多く、縁面状態や分布量的な問題からも該当するとは考えにくい。篠山川という可能性もあるが、この場合遺跡との位置関係を考えればやはり桂川流域の可能性が高いといえる。これ以外には、今回扱った地域の河川で良質なチャート円縁を安定して入手できる地点はないと言っても良い。

良質のチャート円縁についてはこれまでに挙げてきた河川、特に桂川と篠山川以外での安定的採取は困難であると言うことを、一定程度の確かさをもって言うことができるが(表44)、角縁状態の良質チャートの分布については調査地点が少ないため、確実なことはいえない。露頭調査についてはまだまだ不十分に過ぎるところがあり、今後とも継続的な調査が必要である。また縁層中に含まれるチャートについても検討する必要がある⁴⁾。さらに調査方法についても、より客観的なものへと洗練させることが重要な課題として実感された。今回は基礎的な調査であり、大まかな採取可能地域を推定することをその目的としているため、今後とも調査を重ね、調査地点を増やしていく必要があり、またそれによって修正すべき点も多々出てくることもあろうかと思われる。

それにも関わらず、今回敢えて不十分な状態での活字化を試みたのは、今後の新たな研究視点に対する布石をなしたいと願う一心による。今後はチャートの分布調査の継続とともに、これを踏み台としてチャートが当時の生活の中にあってどのように利用され、いかなる位置づけにあったのかを追究する視点をもつことも重要となってくるであろう。これについては、いずれ別の機会に果たしたい。

(森先一貴)

註

- 1) 本稿では石材をチャートに限定していることから、サンプリングに関しては、石材分布調査でよく用いられる「枠法」(桜井・井上・岡口1993、富樫1996・1997など)を採用しなかった。チャートの分布量が数地点を除いて少なく、「枠法」では十分なサンプルを確保できないと考えたためである。河原の面積は調査地点によってもまちまちであるが、できるだけサンプル数を確保できるよう心がけた。現状での分布量についての所見は本文中に記載している。
- 2) ただし、兵庫県七日市遺跡や板井寺ヶ谷遺跡では本稿での石質評価ではⅡ・Ⅲに該当するようなチャートについても利用していることは注意しなければならない。
- 3) 露頭レベルでの採取可能地推定は本報告書所収の井本伸廣氏の考察を参照されたい。
- 4) 粟生間谷遺跡付近の襷層中に含まれるチャートの質は概して不良なようである。

参考文献

- 阿部朝衛 1998 「石材研究について」『石器文化研究6』石器文化研究会
- 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編 1995・1997 『石器石材』I・II
- 片山長三 1967 「第1章先土器時代」「枚方市史」第1巻 枚方市史編纂委員会
- 桑原武志・久保弘幸 1987 「枚方市藤阪宮山遺跡の石器群」「旧石器考古学」35 旧石器文化談話会
- 四手井春子・木村孝雄・武山峯久 1973 「京都市広沢池・沢池の石器」「古代文化」24-10 古代学会協会
- 柴田 健 1994 「使用石材から見た旧石器時代の南関東における地域性について」『松戸市立博物館紀要』1 松戸市立歴史博物館
- 吹田市教育委員会編 2001 『吹田の石器時代-旧石器-縄文時代草創期を中心に-』
- 鈴木正男 1969 「フィッショントラック法による曾根遺跡出土黒曜石片の原産地推定」「考古学ジャーナル』36 ニューサイエンス社
- 高槻市教育委員会編 1976 「津之江南遺跡発掘調査報告書-三島地方の旧石器時代について-」
- 高槻市教育委員会編 1978 「郡家今城遺跡発掘調査報告書-旧石器時代遺構の調査-」
- 千葉県文化財センター 1987 「千葉県文化財センター研究紀要」11 千葉県文化財センター
- 富樫孝志 1997 「磐田原台地における旧石器時代の石材採取活動」「研究紀要」5 静岡県埋蔵文化財調査研究所 中沢圭二・市川浩一郎・市原 実編 1987 『日本の地質6 近畿地方』 共立出版
- 中東耕津・飯島静男 1984 「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材-黒色頁岩と黑色安山岩-」「群馬県立歴史博物館年報」5 群馬県立歴史博物館
- 秦 昭繁 1998 「珪質頁岩とその分布」「考古学ジャーナル」432 ニューサイエンス社
- 藤野次史 2001 「石器石材からみた西日本における旧石器時代集団関係の研究-中国地方西部の石器石材に関する基礎調査-」
- 山口卓也 2001 「サヌカイトの産地」「季刊考古学」第77号 雄山閣
- 山本 薫 1993 「緻密黑色安山岩製石器の石材产地推定法について」「筑波大学先史学・考古学研究」4 筑波大学歴史・人類学系
- 山本 薫・金山喜昭・柴田 健 1991 「石材組成の変遷」「石器文化研究」3 石器文化研究会
- 渡辺彦彦 1995 「1 お仲間林遺跡における頁岩の入手と利用」「お仲間林遺跡の研究-1992年度発掘調査-」慶應大学文学部民族学・考古学研究室
- 薙科哲男 1972 「サヌカイトの蛍光X線分析」「考古学と自然科学」5

第9章 八尾南遺跡第6地点石器群の分析

第1節 遺跡の概要

八尾南遺跡第6地点は大阪府八尾市若林町に所在する。調査は調整池造成に伴うもので、大阪府教育委員会によって1989～90年に実施された。調査では旧石器時代・縄文時代後期・縄文時代晚期～弥生時代前期・弥生時代後期・古墳時代前期の遺構面および遺物を確認している。

八尾南遺跡では本地点以外に5箇所の旧石器出土地点が知られ、それぞれ第1～5地点と呼称される。遺跡は羽曳野台地から派生した低位段丘が、東大阪平野に連なる沖積層に埋没する地形変換点に立地する。この段丘上には大阪市長原遺跡の各地点も形成され、旧石器時代の遺跡集中地点として耳目を集めている(図97)。

第6地点では標高8m前後(T.P値)に存在する第11層(灰色あるいは灰黄色シルト層)中から2909点の石器が、標高7.3m前後にみられる第12層(緑灰色を呈する非常にかたくしまったシルト質粘土層)中から3点の石器が出土している。緻密な分層を行なっている長原遺跡との対応関係から前者は長原13層に、後者が長原14層に相当すると捉えられている(図98)。調査の過程で火山灰分析が行なわれており、第11層の石器群はAT火山灰よりも上位に位置することが確実とされる。また、大山ホーキ火山灰との関係は不明瞭ながら、石器の出土状況と大山ホーキ火山灰の降灰層準から、相対的に大山ホーキ火山灰よりも上位である可能性が指摘されている。なお、下層の第12層出土石器群はAT火山灰よりも下位に位置する。

第11層中から出土した石器群は10箇所のブロック・拡散分布域1箇所に伴うものである。調査地の南側で7箇所のブロックが10m四方の範囲に集中して形成され、その北側には点在する3箇所のブロック

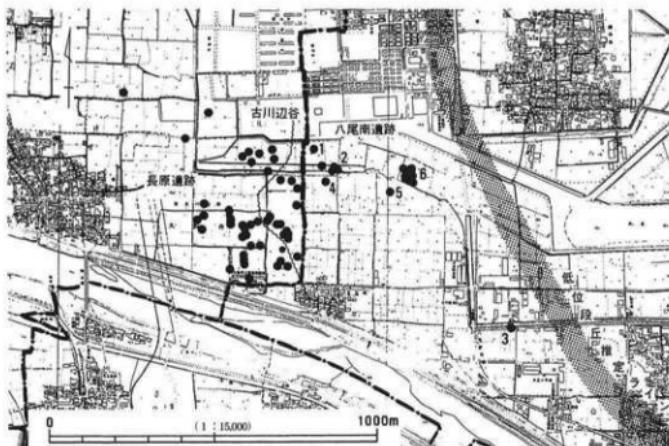


図97 八尾南遺跡第6地点周辺の遺跡分布図

と拡散分布域が営まれる。検出された各ブロックの規模はまちまちで、石器の出土点数もバラつきがある。確認された最大規模のブロック（5 ブロック）では 2.5×2.0 m の範囲から1023点の石器が出土している。

出土石器にはナイフ形石器43点、角錐状石器7点、彫器1点、エンドスクリイバー3点、ノッチ69点、石核46点などがある。使用石材はサスカイトを主要なものとし、僅かにチャートが搬入されている。各ブロック内あるいはブロック間で152資料704点（報告書刊行時点）。今回の再検討で新たに接合資料同士の接合3例7組が確認された（次節を参照）。）の接合資料が確認されている。接合率は24.2%にも昇り、剥片剥離技術や使用した原礫の大きさ、さらには石器の移動（搬出入）状況などを理解する上で貴重な資料となっている。

遺構としてのまとまりや接合資料の豊富さを考慮すると、石材原産地近傍の遺跡と遠隔地に位置する遺跡との比較において、この八尾南第6地点資料は第一級の資料と目される。今回、粟生間谷遺跡の資料整理にあたり、比較資料として八尾南第6地点の資料調査を行なう機会を得た。次節以下で接合資料の再検討と遺跡構造の検討を行い、粟生間谷遺跡を考察するための一助としたい。

参考文献

山田隆一編 1993 「八尾南遺跡Ⅱ 旧石器出土第6地点の調査」 大阪府教育委員会

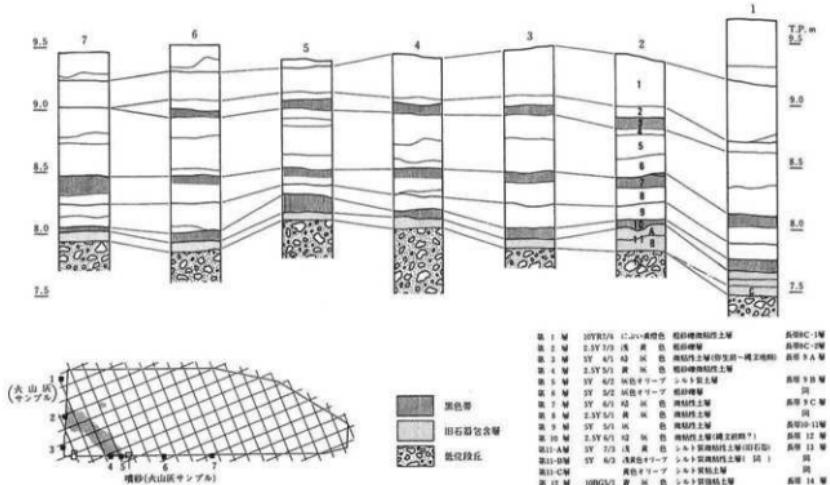


図98 八尾南遺跡第6地点基本層序柱状図

第2節 八尾南遺跡第6地点の接合資料

1 はじめに

近年、サスカイト製石器類は接合に不適であるとの先入観は完全に覆されている。圧巻なのは羽曳野市翠島園遺跡の接合資料群であろうが、先日報告書が刊行された(高野・高橋編 2001)。また、長原・八尾南遺跡群でも良好な接合資料が知られるようになって久しい。例えば八尾南遺跡第2地点(原田ほか 1989)や、長原遺跡89-37次調査地(趙編 1996)、同97-12次調査地(絹川編 2000)などで石器集中地点内におけるひんばんな接合関係が確認されており、母岩の形状をほぼ復元できる接合資料がいくつか報告されている。ここ八尾南遺跡第6地点においても例外ではなく、総数2,909点の出土石器群のうち、実に704点(24.2%)の資料が何らかの接合関係にある(山田編 1993)。報告書の記載によれば合計9ブロック(石器集中部)が認められ、このほかにも拡散的分布域と称される遺物の集中密度がやや散漫な範囲が知られている。技術的様相については、まず亜円礫・亜角礫を用い、打面転位をひんばんにおこなって剝片を剥離する技術が認められ、また小形ナイフ形石器の製作に関与するものとしてはいわゆる櫛石島技法などが存在するという。「櫛石島技法」という用語はともかくとしても、良好な接合資料がナイフ形石器をはじめとするツールの製作に強く関係しているのはほぼ間違いない。とくに小形ナイフ形石器の製作過程のうちで、第1工程に相当する部分の実態が未だ不明確な現在にあっては、きわめて重要な接合資料群なのである。本稿ではこれらの接合資料を分析・記載し、おもに小形ナイフ形石器の製作技術を含む技術構造の復元を第1義の目的とする。

2 工程の区分

八尾南遺跡第6地点の接合資料を分析するにあたり、記載上の難点がひとつある。それは工程の区分法である。瀬戸内技法の工程概念(第1～第3工程；松藤1979)に示されるように、ひとつの母岩において單一種のツールの製作が意図されている場合には、一貫した工程の区分が可能となる。この技法では、盤状剝片の生産(石核素材の準備：第1工程)→翼状剝片の連続剝離(目的剝離：第2工程)→ナイフ形石器の製作(細部調整：第3工程)という3つの過程を経ることが知られているが、この区分を接合資料にそのまま当てはめるのが難しい場合も出てくる。同一母岩内における異なる意図の共存を目にしたとき、工程区分の食い違いがまま生じうるからである。例えば、八尾南遺跡第6地点の接合資料には、先の第1～第3工程で整理しやすい部分(ナイフ形石器の製作に関与)と、単純に剝片の剥離→ツールの製作へと移行する部分とを同一母岩のなかに認めることができる。後者を第1～第3工程で整理するのは適当ではない。また、実際には母岩消費の各段階に限定した意味づけを与えることも容易ではなくなる。母岩の消費がいくつかの段階を経て進むにせよ、それぞれの段階の意味までが同一なのではないからである。

そこで、本稿では母岩から剝片を剥離する段階を「工程Ⅰ」とし、すべてのツール・石核の素材生産をおこなう過程ととらえる。この段階の意味はあらかじめ定まっておらず、単に剝片を連続剝離する過程としてとらえてもよい。その後、ツール素材・石核素材に適した剝片の選別(または不要な剝片の除外)がおこなわれ、次にそれぞれの目的に応じた変形が施される。この最初の変形過程を「工程Ⅱ」と呼ぶ。削器などのツールは、使用時の変形を考慮に入れなければこの段階で製作が完了する。これに続く段階は2度目の変形過程(「工程Ⅲ」)で、剝片素材石核から剥離した剝片に施される変形と石核自体

の転用とを含む。石核の転用は新たなポジティブ面を介した変形ではなく、新たなネガティブ面を付加してゆくという意味では工程Ⅱの延長線上にあるので、接合状況や剥離痕の連なり具合から帰属を判断することになる。また、詳細については後述するが、工程Ⅰで得た剥片を打撃して分割するという特殊な過程も観察できた。分割片の一部を石核素材・ツール素材の双方に利用しているが、この過程は工程Ⅱに含める。

このように、本稿で用いる「工程」は特定の作業内容・意味と結びつくものではなく、単に通過してきた変形過程の数でしかない。このような製作順序の整理法が最適であるとは思えないが、単に事実に基づく記載の尺度として、「工程」という用語を用いたい。

3 接合資料の記載法

記載上の便宜を図る意味で、接合関係にあるすべての剥離物を整理しておきたい。ひとくちに接合関係といつても、剥離面を介する場合と折れ面での接合がある。また、剥離面接合の例でも、場合によっては折れ面接合と区別することにあまり意味がないこともある。例えば、ある大形剥片からさらに剥片を得ると剥片と石核が生じることになるが、それらは大形剥片の側からすればその一部でしかない。つまり、ある剥片がかつて実在した別の剥片の一部でもあるときは、どちらに着目するかによって呼称を変えざるをえない。本稿では次の2つのレベルで石器類を整理するが、それは上記したような理由によるものである。

個体：固有の注記番号をもつ資料。個体数は接合総数と同義である。

単位：1回の打撃で剥離された剥片、または最後に残った石核。あるいは、それらを素材にしたツール。複数の個体からなる場合がある。実際に接合する剥片・石核は実在単位、それに相当する空白部は空白単位と呼んで区別する。なお、各単位には接合資料Noと剥離順序を組み合わせた固有シリアル（例えば2-1など）を付してあるが、前の数字は接合資料の番号を、後の数字（枝番号）は打撃順位（あるいは、推定による前後関係）を示している。また、ある単位が複数の単位からなる場合は、後者を仮に小単位と呼び、枝番号にアルファベットを付して剥離の順序を示す。以下、実在単位はシリアルをゴチクで表し、空白単位と区別する¹⁾。

図99に個体と単位の関係を模式的に示した。これを例として解説すると、この接合資料は8個体から

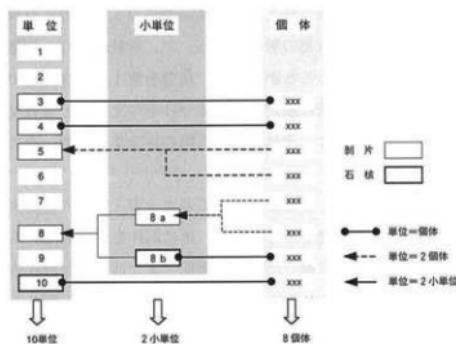


図99 記載上の概念

成り立っている。これが接合総数である。しかし、接合総数は剥離回数ではない。それは残されたネガティヴ面を数えてゆけば判明するはずであるから、空白単位数（1・2・6・7・9の5単位）と実在単位数（3～5・8・10の5単位）の総和で示される。つまり、判明した範囲での剥離回数は10単位分となる。また、実在単位8は別の単位8a（剥片）と8b（石核）からなり、明確な工程連鎖を示している。言い換えれば、單

位 8 a・8 b の接合によって見えてきたのが、かつて実在した剥片(単位 8)である。さらに、単位 5 は 2 個体の接合によって剥離時の姿に復している。個体に対する認定と完全に一致するのは、実在単位 3・4・10 のみとなる。まとめると、この例では接合総数 8、工程 I での剥離回数 10、工程 II での剥離回数 1 となる。単位・小単位は剥離の経過における有意なまとまりであるから、本稿ではおもにそれらの形成順序にしたがい記載を進める。なお、法量の計測は、原則として実在する単位・小単位について実施した。

4 接合資料の記載

本稿で記載をおこなう接合資料は、工程 I～II・IIIまでの内容から構成されている例(母岩から直接的に剥片を剥離)と、工程 I の内容を示さない例とに大別できる。後者は剥片素材石核からさらに剥片を剥離したもので、ナイフ形石器の製作に関与している蓋然性が高いが、帰属する母岩は判然としない。以下、まずは前者について述べ、次いで後者に関する記載をおこなう。

接合資料 No. 2 + No. 80 (第 62～65 図)

自然礫から大～中形の剥片を剥離し、石核・ツール素材の双方に用いている。今回の再分析で、接合資料 No. 2 の下底部に、別の接合資料 No. 80 が新たに接合した。用いた亜角礫は長さ・幅はともに現状で約 12.0cm、高さは約 6.0cm < を測る。総重量は 398.7 g である。

工程 I

総数 31 点の個体は 14 単位(うち実在単位数は 7)にまとめられる。剥離作業は直交する 2 側面(自然面)を打面とし、同一作業面を更新するように進行している。打面転位は 5 度確認できる。1 度目の打面転位は第 1 打直後(長軸側→短軸側)で、2 度目の転位(第 3 打直後)で長軸側に戻る。この間に 2-1・2-2・2-3 を得ているが、2-3 の剥離は石核側にヒンジ・フラクチャーの高まりを残した。これに続く長軸側での剥離(2-4・2-5・2-6)は、その高まりを除去する石核調整であろう。その後、3 度目の打面転位を経て短軸側から 2-7・2-8・2-9・2-10・2-11 を連続剥離。そして 4 度目の打面転位で長軸側に打面を戻し、2-12・2-13 を剥離。最後に 5 度目の打面転位を経て短軸側から 2-14 を剥離している。この後の剥離経過は石核側を欠くため詳らかではない。

工程 II・III

実際に接合している 6 単位のうち、2-5・2-14 以外はすべてツール・石核の素材に利用している。とくに複雑な処理を経たのは 2-2 で、ポジティブ面から剥片を剥離する際に折損した 2-2 の打面側を石核に転じ、小単位 2-2a～2-2c を連続剥離したのち(工程 II)、残核 2-2d を削器に仕上げている(工程 III)。末端側も分割を経て 3 片以上に破断しているが、分割片を用いた形跡はない。2-8 も分割後、中半部の 1 片をノッチに加工している。2-10 は末端部を折損しているが、これもノッチの素材となっている。2-14 は意図的な分割を受け 6 片以上に破断しているが、ツール・石核には利用していない。

接合資料 No. 3 + No. 4 + No. 7 (第 66～69 図)

自然礫から剥片を剥離し、一部を石核素材に用いている。再分析の過程で、接合資料 No. 3 に同 No. 4・同 No. 7 が新たに接合した。その結果、用いられた自然礫は長さ約 17.0cm、幅約 15.0cm、高さ約 4.5cm < となった。重量は 499.4 g を測る。

工程 I

総数24点の個体は8単位(うち6単位が接合)にまとめられる。打面転位は4度確認できる。まず、自然環の1端から3-1・3-2を剥離。3-2は剥離と同時に大小4片に折損している。続いて打面を石核の反対側に移し、3-3・3-4を剥離。剥離にいたらない潜在割れも同時に形成され、3-3のネガティヴ面(3-8背面)と複雑に切り合っている。その後打面を再び短軸側に戻し、大形の剝片3-5+3-5'・3-6を剥離する。どちらも末端部でヒンジ・フラクチャーを起こしており、作業の障害となる高まりを石核側に残した。そこで、続く第7打ではこの障害を避けるべく、打撃位置を時計周りに約6.5cm転位して3-7を剥離したが、これも垂直割れと階段状剥離を併発している。最後に石核の上端部に打面を移し、板状の剝片3-8を得ている。3-8の腹面には先行する3-7剥離時の潜在割れが残っている。これ以降は石核側を欠いているため不明である。

工程 II・III

実在する4単位のうち、石核素材となったのは3-2・3-5・3-6である。3-2は剥離時に折損しているが、最も大きい打面側の破片を石核に転じ、ポジティブ面から少なくとも3小単位の剝片を剥離している。最後に得た小単位3-1a(剝片)は垂直割れを起こしており、同時に石核3-1bも折損している(工程II)。単位3-5からは小形の剝片3-5a+5bを剥離している(工程II)が、これは垂直割れで半折した状況を示す。このうち大きい方の破片3-5aには2次調整を施している(工程III)。あとに残った石核3-5cは、腹面末端部に2次加工を施す際に折損している。3-6は7片以上に分割している(工程II)。

接合資料No20+No22 (第70・71図)

自然環から剝片を剥離し、一部をツール素材に用いている。接合資料No20の前面に別の接合資料No22が接合したため、13個体の接合関係から16単位(うち実在単位数は9)分の剥離経過が復元できた。用いられた亜円環は現状で長さ9.0cm<、幅8.0cm<、高さ7.5cmを測るが、石核側は空白部となっている。重量は412.0gである。

工程 I

10点の個体が接合することで、合計16単位分の剥離状況が復元できる。まず、自然環の平坦面を打面とし、その1端から20-1・20-2・20-3・20-4・20-5を剥離。20-3の背面には、それ以前に得た剝片のネガティヴ面が残っている。次いで、作業範囲を打面縁の中央部に移動し、打撃点をジグザグ状に後退させつつ20-6・20-7・20-8・20-9・20-10・20-11・20-12・20-13・20-14・20-15を連続剥離している。剥離はおもに作業面の左半部で実施しており、右半部から剥離したのは20-10のみである。続いて、打撃位置を打面縁の右半部に移して20-16を得ているが、石核側を欠くためそれ以後の剥離経過は明らかでない。

工程 II

20-3・20-7を削器の素材とし、片側縁に調整を施している。20-3は3片に分割しているが、細部調整に先立つものは不明確である。

接合資料No27 (第72・73図)

自然環から剝片を剥離し、一部をツール素材に用いている。接合状況からは長さ約11.0cm、幅約9.5cm<、高さ4.1cm<の円環を使用したとみえ、重量は259.5gを測る。円環の周囲から求心状の剥離をお

になっているのが特徴である。

工程 I

22点の個体が接合することで、合計23単位分の剥離経過をある程度まで推定できる。剥離が求心状に展開したため、最古の単位27-1のネガティヴ面はわずかに残存しているにすぎない。続く27-2のネガティヴ面は古い剥離面を一掃しており、これを切る後続の剥離面27-3・27-4は作業面の左端部を、27-5・27-6・27-7は上端～右端部を打面としている。27-8・27-9・27-3・27-4・27-12は下端部に打面を移して得られた剥片で、27-9は剥離後に4片に折れている。27-3・27-4・27-5はいずれも碎片で、27-12の剥離と同時に剥落したものとみなせる。その後、打面を右端中央部～上端部に移し、27-6・27-7・27-8・27-9・27-20・27-21・27-22・27-23を連続剥離。このうち、27-6・27-9は右端中央部から剥離している。27-16の剥離が垂直割れで失敗したのち、打面は上端部に固定され、打撃点を左右に反復移動させて剥離を進めている。27-23も垂直割れを起こしているが、石核側が未接合のためその後の状況は定かでない。

工程 II・III

27-6が分割（工程II）を経たのち、削器となる（工程III）。2次加工は急斜度で、施す部位も厚い。やや鋸歯状をなす刃部を見せており、搔器の一種ともいえる。同じ単位に属する残余の分割片は接合していない。また、27-12も分割を経た可能性がある。

接合資料No28（第74図）

長さ約8.0cm、幅7.7cm、高さ3.0cm＜の扁平な円盤から剥片を剥離している。重量は128.2gを測る。

工程 I

合計6個体から構成され、10単位分の剥離経過を復元できる。まず、裏面右側縁の自然面を打面とし、表面から28-1・28-2・28-3を連続剥離。28-3は表面右側縁にネガティヴ面を残しているが、アンデュレーションが著しい。次いで同一の打面から28-4を剥離する。28-1・28-2のネガティヴ面はおもに28-4の背面に残る。その後裏面左側縁から28-5を剥離したのち、石核の両側縁に錯向剥離（剥離群28-6・28-7）を施している。この調整剥離の意味は定かでなく、また28-6・28-7の前後関係も明らかでない。最後に上端部に残る自然面に打面を転じ、裏面から28-8・28-9・28-10を剥離。28-10が最終剥離で、石核28-11に残されたネガティヴ面に接合する。ツールなどを製作した形跡はない。

接合資料No69（第75～77図）

長さ約15.0cm＜、幅約10.0cm＜、厚さ4.3cmを測る大形剥片から剥片を剥離している。その大きさは自然礫を石核素材とする他の接合資料に匹敵し、重量も364.8gに達する。

工程 I

19点の個体は16単位（うち実在単位数は10）にまとめられる。まず、石核素材の背面側から69-1・69-2を剥離。続いて打面と作業面を交替させ、以後は専らポジティヴ面を作業面とする。ポジティヴ面での作業は自然面との交線を取り込むかたちで始まり、69-3・69-4・69-5・69-6・69-7を連続剥離しているが、69-5以外はすべて垂直割れで折損している。69-7を剥離した時点で素材のポジティヴ・バルブは消失するが、代わりにポジティヴ面と69-7の剥離痕との間に明確な稜線が形成される。続く69-8・69-9・69-10の剥離はこの稜線を取り込みながら進行する。69-11・69-12・69-13・69-14・69-

15の打撃点移動は振幅が激しく、また剥片も次第に大形化してゆく。最後に残ったのは半折した石核69-16であるが、折れ面を介したもう一方の側は大きな空白部となっている。

工程II・III

69-5・69-9・69-10・69-13がノッチ・削器となる。69-13は剥離時に垂直割れで半折したが、双方に調整を施している。また、69-11が石核となり、小単位69-11a(剥片)と69-11b(石核)とに分解できる。69-11の打面縁に連なる剥離痕は工程IIの剥離にともなう可能性があり、69-11aもこの過程で得られている。ただ、単位69-11の片側縁に残る浅い剥離痕が小単位69-11aの剥離後の2次調整であるかは判然としない。69-15は分割(工程II)を経て6片に分かれたのち、大形の分割片69-15aが削器、69-15bが石核となる(工程III)。69-15bの作業面は分割時の打撃点を示す空白部に面しているため、分割過程で同時形成された可能性も残る。

接合資料No84(第78~81図)

長さ約16.0cm<、幅約11.0cm<、厚さ約4.5cmを測る大形剥片から剥離している。重量は510.6gに達し、図化した接合資料の中では最大である。

工程I

個体数は31点を数え、合計19単位(うち15単位が接合)にまとめられる。まず、石核素材のボジティヴ面から84-1・84-2・84-3を剥離。84-2・84-3間の打撃点移動は12.0cmにおよぶ。その後打面を石核素材の背面(自然面)に移し、素材の打面側から84-4・84-5・84-6・84-7・84-8・84-9・84-10を連続剥離する。

統いて石核素材の中半部から84-11・84-12・84-13を剥離。84-13は打面幅6.2cm、打面厚2.4cmを測る大形の剥片であったが、打面へ末端部にかけて折損している。ただ、84-13の剥離は石核の破損をも招いており、そのときの折れ面が後述する84-17の側面に残存している。なお、折損した石核は双方とも空白部となっている。

第13打における石核の折損により、得られる剥片もにわかに小形化する。84-14・84-15・84-16・84-17・84-18・84-19は小さい方の石核片から得た剥片であるが、84-14・84-16は垂直割れで半折している。以後の剥離経過は石核側を欠くため明らかでない。

工程II

84-4・84-19に二次加工を施しているほか、半折した84-13の大きい方の破片を石核に転じ、84-13aを剥離している(工程II)。また、84-6を分割して一部に急斜度調整を加えている(工程III)。

接合資料No100(第82~84図)

長さ約13.5cm、幅約8.0cm<、高さ8.3cm程度の亜円錐から剥片を剥離し、一部をツール素材に用いている。石核側は空白部となっている。重量は481.7gを測る。

工程I

総数31点の個体は最少24単位(うち19単位が接合)にまとめられる。まず、亜円錐の平坦部を打面とし、自然縫を取り込むかたちで100-1を剥離。統いて100-1のネガティヴ面と自然面との接線(一部摩滅)に沿って100-2を剥離。以後、打撃点をジグザグ状に後退させながら100-3・100-4・100-5・100-6・100-7・100-8・100-9・100-10・100-11・100-12・100-13・100-14・100-15を連続剥離する。

100-15は先行剝離面をほぼ一掃しているが、同時にバルブの膨隆による「庇」を石核側に残した。そこで、100-15の剝離面を打面に転じ、もとの打面～石核側面から100-16・100-17・100-18・100-19・100-20・100-21・100-22を連続剝離する。100-16～100-22はほぼ密着接合しており、先の剝離で生じた稜線を持ち送り式に取り込みつつ剝離を進めている。この後の剝離経過は不明確だが、石核側のネガティブ面100-16～100-18と100-22との切り合いで生じた稜線をガイドとして100-23を剝離しているらしい。その実在を示す剝離面を100-24の末端部に見るが、厳密には23打目のネガティブ面であるかは判然としない。100-24は実在する最新の単位で、石核下端部を打面としている。ただし、その打順は定かでない。

工程 II

100-2・100-19・100-20・100-22に2次加工を施している。また、100-15を3片に分割しているが、分割片を用いて石器を製作した痕跡は認められない。

接合資料No105（第85図）

自然礫から剥片を剝離し、一部をツール素材に用いている。利用した亜円礫は長さ11.5cm<、幅7.5cm<を測る。重量は248.0gである。

工程 I

8個体の接合関係から、7単位分の剝離経過が復元できる。剝離経過はきわめて単純で、自然礫の側面から打撃位置をほぼ直線的に後退させながら105-1・105-2・105-3・105-4・105-5を剝離したのみである。105-2～105-4はいずれも折損している。続く105-5の剝離は石核の折れを引き起こしており、以後は折れた石核の双方から剥片を剝離する。実在する石核片105-7の側からは105-6を剝離したのみで、その後の剝離作業は手詰まりとなっている。もう一方の石核片からは少なくとも1枚の剥片(105-8)を剝離しているが、石核片は未接合である。

工程 II

105-5が搔器となる。急斜度調整で作りだした鋸歯状の刃部をもち、先刃形の搔器とみなしうる。腹面側には打撃クラックが残り、調整時の打撃の強さを示している。

接合資料No132（第86・87図）

長さ約9.0cm<、幅約7.5cm、高さ約5.0cm程度の亜円礫から中～小形の剥片を連続剝離している。重量は303.8gを測る。

工程 I

総数24個体が接合しあうことで、合計21単位分の剝離経過が判明している。剝離作業は礫の1端で打面・作業面を適宜交替させつつ進行し、最後にチョッピング・ツール状の石核を残している。まず、左面から132-1・132-2・132-3を剝離し、次いで右面から132-4・132-5・132-6・132-7・132-8・132-9・132-10・132-11・132-12・132-13を連続剝離。この間は打撃点が左右に振幅する。その後作業面を左面に戻し、132-14・132-15・132-16・132-17・132-18・132-19・132-20・132-21を剝離する。最後に石核132-22が残るが、これは被熱により16片に破碎している。

工程 II

132-4のみが石核となるほかはすべて無加工である。132-4はポジティブ面から4小単位の剥片を得た石核で、本来の打面側に位置する折れ面が工程II時の打面として機能している。

以下に述べる接合資料は1単位分の剥片に(石核素材)戻るにすぎず、帰属する母岩は定かでない。サスカイトの接合資料はいずれも工程IIにおける小形剥片の剥離経過を示しており、ナイフ形石器の素材生産に強く関係しているものとみられる。また、一部にチャートの接合資料を含むが、内容はきわめて断片的である。石材に関してとくに触れない場合は、すべてサスカイトを用いている。

接合資料No72 (第88図)

打面調整を施して打面を山形とし、石核素材の平坦面を背面末端部に付着させた横形の剥片(72-a・72-b)が密着接合している。72-bの剥離に際しては新たに打面調整を施している。石核側を欠くためその後の剥離経過は不明確であるが、山形打面を意図的に作りだしている。なお、剥片に付着した平坦面(底面)はきわめて平滑であり、ポジティヴ面であるかは判然としない。

接合資料No73 (第88図)

最大厚1.7cm程度の厚手の剥片を石核素材とし、打面側から剥片を連続剥離している。素材の背面がポジティヴ面に対してほぼ水平であるため、石核の厚さもほぼ均一である。接合総数は5個体(3小単位分)に限られるため空白部も多く、石核が放棄される直前の剥離経過しか示していない。ただ、ポジティヴ面側での剥離後、打面・作業面を交替させて石核の表面からさらに数枚の剥片を得る、という過程を最低2度繰り返しているのがわかる。表面での剥離は打面上にやや突出した稜線を作りだしており、打面調整と考えられる。まず、石核の裏面(ポジティヴ面)側から剥片73-a・73-b・73-cを剥離したのち、打面・作業面を入れ替えて73-d・73-e・73-f・73-gを剥離。その後再び打面・作業面を交換し、表面から73-hを剥離している。続いて今度は表面から73-i・73-jを得たうえで、再度ポジティヴ面側から73-k1・73-k2・73-k3・73-k4を連続剥離する。この間は作業面の右端→左端へと打撃点が移動している。最後に73-k1～73-k4の剥離痕を打面に転じ、表面から73-lを剥離。引き続き表面側に残された剥離群73-mは打面中央部に細密な剥離痕を連ねることで、やや山形をなす新たな打面を準備している。最後に残った石核73-nは半折しているが、これは剥離群73-mを打面とする剥離の試行時に生じたものと考えられる。

接合資料No74 (第89・90図)

厚さ2.1cmを測る剥片の両面から剥片を剥離している。総重量は325.5gである。石核素材剥片は折損しており、その折れ面をも剥離作業の打面とする。折れ面で接合しあう石核(2個体分)に7小単位がさらに接合し、第1打～最終打までの剥離経過がほぼ判明している。実際には切り合い関係がない場合もあるが、剥離痕のまとまり・位置関係をも加味して剥離経過を推測してみよう。まず、石核裏面(ポジティヴ面)側上端～右側縁から74-a・74-bを剥離。両者の前後関係は不明確だが、どちらも背面にポジティヴ面を広く取り込んでいる。次いで側面に示した折れ面を打面とし、表面から74-cを剥離する。74-cの背面は石核素材の平滑なネガティヴ面と自然面からなる。続いて74-cの剥離痕を切るかたちで、裏面側から74-d、表面上端から74-eを得ている。さらに打撃点を再び折れ面側に戻し、74-f・74-g・74-h・74-i・74-j・74-kを連続剥離。74-e～74-hを剥離する間に、石核素材の構成面であったネガティヴ面はほぼ消滅する。74-kはのちに急斜度調整で打面を除去し、2次加工ある剥片となる。最後に74-k'のネガティヴ面を打面とし、裏面右側縁から74-lを剥離しているが、これと同時に石核74-mも折損している。

接合資料No96（第91図）

小単位同士の接合関係から、合計2単位分(96-1・96-2)を連続剥離していたことが判明している。本接合資料の中核をなす単位96-2は合計9個体からなり、接合状況から6小単位の剥離経過を観察できる。96-2は背面左側縁～末端部にかけて自然面を取り込んだ厚手の剥片で、ポジティヴ面からの剥離はすべてこの自然面を打面に用いている。まず、ポジティヴ面右側縁から96-2aを剥離したのち、打撃点を石核素材の末端側に移して96-2b・96-2c・96-2dを剥離。次いで96-2eを得ているが、剥離と同時に石核は折損している。この後、石核の下端(ポジティヴ面末端)側から96-2fを剥離して石核を放棄。96-2fは剥離がウートラバッセとなり、96-2eの剥離時に生じた折れ面を末端部に付着させている。なお、96-2の背面を構成するネガティヴ面には小単位96-1aが接合し、その背面はポジティヴ面のみからなる。石核側を欠くものの、単位96-1でも96-2と同様の剥離経過を経たのであろう。96-2のポジティヴ面打撃点近くには96-2が接合しており、同時剥離と考えられる。

接合資料No97（第92図）

7個体が接合しあうこと、合計8小単位分(うち実在は4単位)の剥離経過を復元できる。石核素材は最大厚2.4cmを測る厚手の大形剥片で、打面側はのちの剥離により除去されている。表面(石核素材の背面)に付着した自然面を打面として剥片を剥離しており、まず打撃点を左右に振り分けつつ裏面(ポジティヴ面)側から97-a・97-b・97-cを連続剥離する。97-cは同時剥離で2枚の小単位(97-c・97-c')に分かれ、それぞれ垂直割れを起こしている。続いて打撃点を右に約5.5cm移動させ、上端部から97-d・97-eを剥離。その後打撃点を左方に移し、97-f・97-gを剥離している。石核である97-hは97-eの剥離以後に半折しているが、これは97-cの剥離時に生じた潜在割れによるものと考えられる。

接合資料No90・101（第92図）

2例ともチャート剥片の接合資料。接合資料No90は折れ面を介して合計2個体が接合している。接合資料No101は剥片のポジティヴ面に石核の破片が接合する。

接合資料No52（第93図）

合計5個体が接合している。石核素材となった剥片はまず3片に分割され、末端側の破片が石核(52-a)となる。とはいえ、剥離作業ではポジティヴ面から小単位52-bを得たのみで、52-a自体がノッチなどの製作失敗例であった可能性も残る。なお、分割時の打撃クラックが52-1の背面中央部に認められ、その付近からY字状に折れている。

接合資料No75（第93図）

やや厚手の剥片(単位75-1)を石核に転じ、ポジティヴ面から剥片を剥離している。合計3個体からなり、5小単位分の剥離経過を復元できる。石核素材の側面をなす自然面が打面として用いられ、ポジティヴ面を付着させつつ75-a・75-b・75-c・75-d・75-eを連続剥離している。石核である75-fは折損しているが、これは75-eの剥離以後に発生したものである。石核素材としての形状・その用い方は前述の接合資料No97に類似している。

5 剥片の特徴

接合資料の分析で有利なのは、すでに石核やツールになっている「素材」を本来の剥片の姿に戻し、単なる剥片と比較できることである。ツールや石核の素材は、単なる剥片とは違う。ここまで記述では、すべての剥離物を「単位」・「小単位」とのみ記してきたが、剥片をその性格から4つに分類しておきたい。

I類：自然縫やそれに相当する大形剥片から直接剥離したのち、石核素材となった剥片。あるいは、のちに分割された剥片³⁾。

II類：削器、ノッチ、2次加工ある剥片の素材（ツール素材）。

III類：自然縫やそれに相当する大形剥片から直接剥離したもの、無加工の剥片。

IV類：I類剥片を素材とする石核から剥離した小形の剥片。

さて、長さや幅などの計量属性でI～IV類を比較してみると、明らかに大きさが異なっているのがわかる。各属性の度数分布を表45～53に示し、長さ・幅については散布図も作成した(図100)。それによれば、最大長の平均値はI～IV類の順序で76.87mm、63.56mm、46.23mm、32.84mmとなり、順次小形化していく。最大幅でも同様の傾向が知られ、72.87mm、53.70mm、46.71mm、40.63mmとなる。最大厚もこの傾向にしたがっており、I類から順に16.80mm、14.85mm、11.94mm、11.22mmと薄手になる。重量ではI類が本来の重さを大きく損なっているはずだが、平均値は79.14gとII類のそれ(42.68g)の2倍弱を示している。III類・IV類ではそれぞれ21.00g、9.97gとさらに軽量である。

統いて打面幅・打面厚を見る。これらの属性でもI～IV類の順で小形化している。まず打面幅の平均値ではI類が166.0mmとなり、II類では40.20mmと大幅に小さくなる。III類では36.39mmとII類と大差なく、IV類では28.37mmとなっている。打面厚でも同様で、I類から順に15.90mm、11.65mm、10.92mm、8.90mmと小形化していく。すなわち、I類剥片は打面縁から奥まった部位を敲いて得たものが多く、自然縫から直接剥離した点で同類となるII類・III類に比し大形・厚手となっている。

打面構成は「自然面」、「単剥離面」、「複剥離面」、「調整」に4大別し、自然面と剥離面との複合状態から項目「自+剥」を設けた。この基準にしたがい打面の構成を集計すると、最も多いのは「自然面」であった。「単剥離面」・「複剥離面」がほぼ同数でこれに次ぎ、「調整」・「自+剥」はそれぞれ1例、6例を数える。自然面打面が目立つのは自然縫から直接剥片を剥離しているからで、打面・作業面の交替により剥離面を打面とするケースがきわめて少ないと示唆している。打面・作業面の交替は接合資料No100・No132の2例でしか確認できず、自然縫を母体とする残余の接合資料は打面を自然面に固定している。

打面形状では「平坦」が最多となり、じつに全体の83.8%を占めている。「山形」・「点状」がこれに続くが、ともにほんの10%以下と少ない。

剥離角は101～120度の範囲に集中している。標本数が少ないこともあり、類型別に大きな較差を認めることができない。全体の平均値は114.3度となる。

まとめると、I類が最大でII・III類がこれに次ぐ大きさを示す。重量では較差がさらに明瞭となる。いずれも工程Iで得た剥片であるが、母岩を消費するなかでI類とII類がある程度区別されていた可能性がある。III類は石核・ツールの素材候補であろうが、何らかの理由で使用されていない。IV類が最小となるが、これはI類剥片を石核として得たためで、おそらくナイフ形石器の素材候補とみられる。

表45 剥片の長さ度数分布表

長さ(mm)	階級値	I類		II類		III類		IV類		合計
		度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	
10	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	15	0	0	0	0	1	1	3	3	4
30	25	0	0	0	0	6	7	11	14	17
40	35	0	0	1	1	19	26	7	21	27
50	45	0	0	3	4	13	39	2	23	18
60	55	3	3	4	3	10	49	0	23	17
70	65	6	9	5	9	7	56	2	25	20
80	75	1	10	1	10	3	59			5
90	85	2	12	2	12	0	59			4
100	95	1	13	2	14	0	59			3
110	105	0	14			1	60			1
120	115	1	15							1
N		14		18		60		25		117
平均値			76.87		63.56		46.23		32.84	49.93
中央値			66.00		62.50		42.00		29.00	46.00
標準偏差			24.69		16.39		16.47		13.11	21.80

表46 剥片の幅度数分布表

幅(mm)	階級値	I類		II類		III類		IV類		合計
		度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	
10	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	15	0	0	0	0	3	3	3	3	6
30	25	0	0	1	1	6	9	11	14	18
40	35	0	0	6	7	9	18	7	21	22
50	45	1	1	4	11	15	33	2	23	22
60	55	4	3	3	14	9	42	0	23	16
70	65	1	5	3	17	6	48	2	25	12
80	75	5	10	1	18	2	50			8
90	85	2	12	1	19	1	51			4
100	95	1	13	0	19	1	52			2
110	105	0	14	0	19					0
120	115	1	15	1	20					2
N		15		20		52		25		112
平均値			72.87		53.70		46.71		40.63	50.19
中央値			72.00		49.00		47.50		39.00	49.00
標準偏差			20.77		24.70		17.55		13.37	20.94

表47 剥片の厚さ度数分布表

厚さ(mm)	階級値	I類		II類		III類		IV類		合計
		度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	
5	3.75	0	0	0	0	3	0	2	0	5
7.5	6.25	0	0	0	0	10	13	3	5	13
10	8.75	1	1	4	4	17	30	10	15	32
12.5	11.25	1	2	1	5	10	40	5	20	17
15	13.75	5	7	8	13	11	51	2	22	26
17.5	16.25	6	13	3	16	6	57	2	24	17
20	18.75	3	16	2	18	6	63	2	26	13
22.5	21.25	3	19	1	19	2	65	0	26	6
25	23.75	1	20	0	19	1	66	1	27	3
27.5	26.25			1	20	1	67			2
N		20		20		67		27		134
平均値			16.80		14.85		11.94		11.22	12.96
中央値			16.50		14.00		11.00		10.60	12.50
標準偏差			3.56		4.60		4.91		4.67	5.00

表48 刷片の重量度数分布表

重量(mm)	階級値	I類		II類		III類		IV類		合計
		度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	
15	7.5	0	0	3	3	35	35	20	20	58
30	22.5	2	2	7	10	17	52	4	24	30
45	37.5	2	4	2	12	8	60	3	27	15
60	52.5	3	7	3	15	5	65			11
75	67.5	2	9	2	17	1	66			5
90	82.5	5	14	0	17	0	66			5
105	97.5	2	16	1	18	0	66			3
120	112.5	2	18	1	19	0	66			3
135	127.5	1	19			0	66			1
150	142.5	0	19			1	67			1
165	157.5	0	19							0
185	175	1	20							1
N		20		19		67		27		133
平均値			79.14		42.68		21.00		9.97	32.01
中央値			78.70		26.60		13.80		7.40	20.60
標準偏差			39.27		28.72		21.63		8.44	33.67

表49 刷片の打面幅度数分布表

打面幅(mm)	階級値	I類		II類		III類		IV類		合計
		度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	
10	5	0	0	0	0	2	2	1	1	3
20	15	1	1	4	4	4	6	4	5	13
30	25	0	1	2	6	11	17	7	12	20
40	35	0	1	3	9	9	26	5	17	17
50	45	0	1	3	12	9	35	2	19	14
60	55	0	1	0	12	2	37			2
70	65	1	2	2	14	2	39			5
80	75	1	3	0	14	0	39			1
90	85	2	5	0	14	2	41			4
				1	15					
N		5		14		41		19		79
平均値			66.00		-0.20		36.29		28.37	37.05
中央値			74.00		33.00		37.00		29.00	34.00
標準偏差			27.85		29.26		18.33		10.75	21.46

表50 刷片の打面厚度数分布表

打面厚(mm)	階級値	I類		II類		III類		IV類		合計
		度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	
5.0	2.50	0	0	1	1	8	8	3	3	12
7.5	6.25	1	1	2	3	5	13	5	8	13
10.0	8.75	0	1	6	9	15	28	8	16	29
12.5	11.25	3	4	2	11	8	36	0	16	13
15.0	13.75	1	5	3	14	5	41	1	17	10
17.5	16.25	1	6	0	14	4	45	2	19	7
20.0	18.75	2	8	2	16	7	52	1	20	12
22.5	21.25	0	8	1	17	1	53			2
25.0	23.75	2	10							2
N		10		17		53		20		100
平均値			15.90		11.65		10.92		8.90	11.06
中央値			16.00		10.00		10.00		8.00	10.00
標準偏差			5.65		5.05		5.09		4.47	5.24

表51 打面構成

	I類		II類		III類		IV類		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
自然面	10	76.02	5	31.25	35	63.64	9	42.86	59	56.19
单剥離面	2	15.38	5	31.25	9	16.36	4	19.05	20	19.05
複剥離面	1	7.69	4	25.00	6	10.91	8	38.10	19	18.10
調整	0	0.00	0	0.00	1	1.82	0	0.00	1	0.95
自+剥	0	0.00	2	12.50	4	7.27	0	0.00	6	5.71
	13	100.00	16	100.00	55	100.00	21	100.00	105	100.00

表52 打面形状

	I類		II類		III類		IV類		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
平坦	13	100.00	14	87.50	49	89.09	12	57.14	88	83.81
山形	0	0.00	1	6.25	3	5.45	7	33.33	11	10.48
点状	0	0.00	1	6.25	3	5.45	2	9.52	6	5.71
	13	100.00	16	100.00	55	100.00	21	100.00	105	100.00

表53 剥離角の度数分布表

剥離角(°)	I類		II類		III類		IV類		合計
	階級値	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	累積度数	度数	
90	85	0	0	0	0	3	0	1	4
100	95	0	0	3	3	5	8	3	11
110	105	4	4	3	6	15	23	3	25
120	115	0	4	5	11	14	37	5	24
130	125	2	6	2	13	13	50	4	21
140	135	4	10	3	16	3	53	2	12
150	145	0	0	1	1	54			1
N		10		16		54		18	98
平均値			121.00		114.13		113.70		112.72
中央値			126.00		113.50		112.50		113.00
標準偏差		15.33		13.56		13.41		15.07	13.91

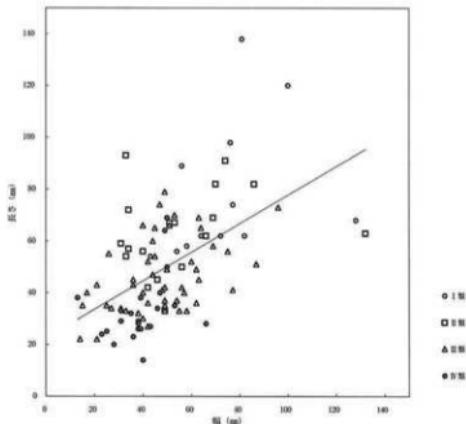


図100 剥片の長さ・幅散布図

6 母岩の大きさと接合状況

ここでは母岩あるいはそれに相当する大形・厚手の剥片を母体としている接合資料を用い、その大きさと石核の有無・剥片の大きさ・石器の製作内容を比較する。自然礫が母体となっている接合資料はNo.2+80、No.3+4+7、No.20+22、No.27、No.28、No.100、No.105、No.132の8例あり、大形剥片を母体とするのはNo.69、No.84の2例である。

まず、母岩あるいはそれに相当する大形剥片の大きさを比べる。接合資料の第1長～第3長(表54)を見ると、それぞれ80～170mm、75～150mm、30～60mmの範囲におさまっている。ただし、第3長(接合資料の高さ)は石核を欠く場合もあり、本来の自然礫・剥片より小さくなっている。ともあれ、実際には拳大～幼児頭大の自然礫を用いていることがこれで判明する。統いてやや粗い推定になるが、第1長～第3長の積を仮に母岩の体積とみなした場合、350cm³未満のもの(No.28・No.105・No.132)と400～1150cm³のものとに二分できる。前者は工程Iの石核を含んでおり、自然礫本来の大きさをほぼ復元できたのに対し、残余の接合資料はその石核を欠いている。したがって、後者の母体となった自然礫はやや小さく見積もられたことになるが、それでも両者の較差は大きい。最も大きいのはNo.3+4+7である。一方、No.69・No.84は母体が剥片であるが、350cm³未満の接合資料より大きく、そして重い。

統いて工程Iで得られた剥片(I～III類)の大きさについて比較する(表55・図100)。母岩(あるいはそれに相当する剥片)が大きいほど剥片も大形となりやすい傾向が認められる。最大長の平均が最大となるのは接合資料No.3+4+7(平均値83.4mm)で、最小は接合資料No.132(42.4mm)となる。また、最大幅でも接合資料No.3+4+7の平均値が最も大きく(92.3mm)、最小となるのは接合資料No.105(33.7mm)である³⁾。最大厚の平均が大きいのはNo.20+22とNo.3+4+7で、前者は平均値で18.6mm、後者は18.4mmとほぼ同じ値を示す。最も小さいのは接合資料No.28(平均値9.3mm)で、No.132(10.7mm)がこれに次ぐ。重量の平均値では接合資料No.3+4+7が最も重く(平均値87.5g)、逆に軽量なのは接合資料No.132(18.8g)となる。すなわち、母岩が最大であったNo.3+4+7の剥片が最も大きく厚手であるといえ、小形・薄手となるのは体積350cm³未満の接合資料である。

次に検討するのは石器製作の内容(剥片の用途)である。先に述べた剥片の分類(I～IV類)にしたがい、石核素材となった剥片とツール素材に利用したものとを接合資料別にカウントする。石核素材となったI類は石器群の内容からみてナイフ形石器の製作に関与するものと考えられるので、これを含む接合資料はその製作をある程度念頭においていたものとみなす。この項でとりあげた接合資料のうち、No.28以外には石核素材(I類)・ツール素材(II類)が含まれる。その内訳は表56に示してあるが、I類のみを含

表54 接合資料の大きさ・剥離回数・利用パターン

接合資料 No.	第1長 (mm)	第2長 (mm)	第3長 (mm)	体積 (L×W×T)	重量 (g)	石核の有無		剥離回数	石器製作の内容		
						工程I	工程II		I類	II類	IV類
石核なし	2+80	120	120	60	864000	398.7	1	14	1	3	
	3+4+7	170	150	45	1147500	499.4	3	8	2		1
	20+22	90	80	75	540000	412		16		2	
	27	110	95	41	428450	259.5		20		2	
	100	135	80	83	896400	481.7		23		5	
	69	150	100	43	645000	364.8		15	1	4	
石核あり	84	160	110	45	792000	513.6	1	19	2	1	1
	28	80	77	30	184800	128.2	1	10			
	105	115	75	38	327750	248	1	7			1
	132	90	75	50	337500	303.8	1	21			

表55 接合資料別にみた剥片の大きさ

最大長(mm)	2+80	3+4+7	20+22	27	28	69	84	100	105	132
最大値	120	110	82	73	79	66	72	93	54	56
最小値	47	68	33	22	49	33	30	18	31	27
平均値	82.8	83.4	58.8	44.0	67.3	53.8	49.9	52.3	44.4	42.4
標準偏差	29.9	16.3	18.1	13.8	16.1	12.3	13.6	18.8	10.8	11.7
N=	5	5	9	10	3	9	14	19	5	7

最大幅(mm)	2+80	3+4+7	20+22	27	28	69	84	100	105	132
最大値	100	128	86	96	62	132	82	69	43	60
最小値	44	70	33	14	47	40	34	17	25	31
平均値	66.8	92.3	53.1	59.2	52.7	65.5	57.8	37.8	33.7	45.6
中央値	66.0	79.0	50.0	60.0	49.0	56.5	56.5	36.0	33.0	45.0
標準偏差	20.8	31.2	15.8	26.6	8.1	34.3	13.3	14.6	9.0	9.8
N=	6	3	9	10	3	6	12	17	3	7

最大厚(mm)	2+80	3+4+7	20+22	27	28	69	84	100	105	132
最大値	20	21	27	19	11	17	18	27	19	19
最小値	10	15	12	3	8	6	8	5	6	7
平均値	13.7	18.4	18.6	11.0	9.3	12.3	13.9	12.1	12.7	10.7
中央値	12.5	20.0	18.0	11.0	9.0	13.0	15.0	12.0	12.5	10.0
標準偏差	4.3	3.1	4.6	5.3	1.5	3.2	3.3	5.7	5.3	4.1
N=	6	5	9	11	3	9	15	20	6	7

重量(g)	2+80	3+4+7	20+22	27	28	69	84	100	105	132
最大値	184.9	136.8	110.3	53.2	27.6	119.2	103.3	104.7	39.7	43.9
最小値	15.2	64.2	6.2	0.9	23.1	3.6	4.4	1.6	4.6	5.6
平均値	66.5	90.1	45.8	23.3	25.2	38.7	32.5	23.9	20.1	18.8
中央値	45.6	86.2	38.8	18.9	25.0	24.7	26.6	12.6	19.7	14.7
標準偏差	63.2	28.8	30.7	18.5	2.3	35.6	25.2	26.5	13.9	14.9
N=	6	5	9	11	3	9	15	20	6	7

表56 接合資料別にみた剥片の利用／折損状況

接合資料 No.	石核の有無		単位数	折損率(工程Ⅰ)		石核素材(Ⅰ)		ツール素材(Ⅱ)		合 計(Ⅰ+Ⅱ) 度 数	利用率(%)	利用率(%)
	工程Ⅰ	工程Ⅱ		(工程Ⅰ)	度 数	折損率(%)	度 数	利用率(%)	度 数			
2+80		1	14	2	14.3	1	7.1	3	21.4	4	28.6	0.50
3+4+7		3	8	4	50.0	2	25.0			2	25.0	2.00
20+22			16	2	12.5			2	12.5	2	12.5	1.00
27			20	8	40.0			2	10.0	2	10.0	4.00
28	1		10	1	10.0					0	0.0	0.00
100			23	8	34.8			5	21.7	5	21.7	1.60
105	1		7	3	42.9			1	14.3	1	14.3	3.00
132		1	21	1	4.8	1	4.8			1	4.8	1.00
69			15	3	20.0	1	6.7	4	26.7	5	33.3	0.60
84		1	19	6	31.6	2	10.5	1	5.3	3	15.8	2.00
			153	38	26.08	7	4.6	18	11.8	25	16.3	1.52

むもの(Na3+4+7、Na132)、II類のみを含むもの(Na20+22、Na27、Na100、Na105)、両者を含むものの(Na2+80、Na69、Na84)に大別できる。また、I類・II類とともに含む接合資料(Na2+80、Na69、Na84)でもI類の方が大形となる。見方によつては、母岩が大きいために剥片も大形となったNa3+4+7と、条件がそろえば大形の剥片が得られるNa2+80などとは本来同一物で、両者の差はどちらの傾向が強く出るかの違いにすぎない可能性がある。もちろん、II類のみを含む接合資料(Na20+22、Na27、Na100、Na105)もこれに加えるべきで、実際には石核素材・ツール素材の二項の強弱（あるいは混淆した状態）によってこれらの接合資料を並べることもできよう。

I類・II類剥片のカウント数を単位数（判明した範囲での剥離枚数）で除して百分率とし、それぞれの「利用率」とみなして接合資料を比較してみた（表56）。単位数は7~23と接合資料ごとでまちまちであるが、ひとつの接合資料に含まれるI類は2単位まで、II類も5単位までに限られる。I類の利用率は単位数8の接合資料Na3+4+7で25.0%と高く、II類では接合資料Na69（単位数15）の26.7%が最も大きい。I類・II類の合計利用率が最も高いのもNa69(33.3%)である。空白単位をどのように用いたかが明らかでないことから、実際の利用率はこれらを上回るものと考えられる。一方、利用率と同様に工程Iにおける剥片の「折損率」を求めてみると、4.8%（接合資料Na132）~50.0%（接合資料Na3+4+7）とばらつきを見せている。

母岩別の分析をまとめると次の通りとなる。母岩あるいはそれに相当する大形・厚手の剥片は拳大～幼児頭大のサイズをもち、体積が大きい場合は例外なく石核を欠いた接合状況を示している。石核は単に未接合であるというよりも、調査地外に運び去られた可能性が高い。一方、体積が小さい接合資料(Na28・Na105・Na132)は石核を含んでおり、それらの母岩は遺跡内で消費が完了したことを暗示させる。母岩の大きさは剥片の大きさにも反映し、母岩サイズが最大とみられる接合資料Na3+4+7はI類（石核素材）のみを含む。おおむね母岩サイズが小さくなるにつれ、接合資料の内容がI類+II類→II類のみへと遷移してゆくようにみえる。これには例外もあり、接合資料Na132は最小ともいえる母岩サイズながらI類を含んでいる。ただし、実在単位はI類（1単位分）を除けばすべて無加工で、効率は著しく悪い。

7まとめ

八尾南遺跡第6地点の接合資料の分析から判明した事実を要約し、まとめとする。

分析意図として冒頭に掲げたのは、小形ナイフ形石器の製作技術を含む技術構造の復元であった。とくに、石核素材の準備段階にあたる「第1工程」の実態を探るのが大きな課題であったわけだが、それのみを示す接合資料は皆無であることが判明した。石核素材（I類）とツール素材（II類）とが同一母岩内で共存している場合もあり、全体としては瀬戸内技法第1～第3工程に対応しうる一貫した製作過程を示してはいない。利用された母岩は拳大～幼児頭大のサスカイト亜円礫で、一部でこれに匹敵する大形・厚手の剥片を用いている（接合資料Na69・同84）。また、体積が大きい場合は石核を欠くのも大きな特徴である。小形の亜円礫を用いた接合資料Na28・同105・同132は工程Iの石核を含んでおり、遺跡内で母岩の消費が完了しているが、母岩の大きさ・石核の有無と製作内容とはほぼ無関係である。すなわち、母岩別に削器・ノッチなどのツールと、石核素材とを明確に作り分けている事実はなく、剥片の大きさに応じて使い分けをおこなっている可能性が指摘できる。この点はI類（石核素材）とII類（ツール素材）とで大きさが異なることからも首肯されるであろう。

その一方で、IV類剝片の生産過程のみを示す接合資料(№73・74・96・97)にも注目する必要がある。その性格上、小単位同士の接合関係から1単位分のI類剝片に復するにすぎず、石核素材がいかに生産されたかはいまだ明らかでない。石核素材それ自体が、遺跡外から搬入された可能性も考慮する必要がある。とくに接合資料№72・№73は明らかに打面を山形に整形して剝片を得ており、残余の接合資料中に含まれていた剝片素材石核とは剝離の進め方が異なっている。要約するならば、ナイフ形石器の素材生産に深く関与しているIV類剝片の剝離技術は、石核素材を遺跡内で生産した痕跡が希薄で、かつ山形の打面調整を施す一群と、石核素材を遺跡内で準備し、明確な石核調整をおこなわずに剝片を得る一群とに大別できる。両者の差は単に技術的なバリエーションであるにとどまらず、場を越えた工程連鎖のあり方とも関係があるようみえるが、この点については別途詳述を要するであろう。

接合資料の分析から、八尾南遺跡第6地点がアトリエ的な様相を見せていているのはほぼ明らかであるが、必ずしもすべての石器製作の起点ではないことが了解されよう。このような点において、最も近い大規模原産地(二上山北麓遺跡群)の様相とは大きく異なる。また、单一器種(国府型ナイフ形石器)の製作を専らとする二上山北麓地域の「国府石器群」と、様相がより複雑な八尾南遺跡第6地点とを比べたとき、両者の相違点が時期差を含む以上に、それぞれの場における環境・条件の差が大きいように感じられる。その解明には詳細な比較が必要であるが、これは別の機会を待ちたい。

文末になりましたが、本稿の執筆機会を与えて下さった新海正博氏、森屋美佐子氏、山田隆一氏、つねに有益なご教示をいただいた手島美香氏、野口淳氏、ともに接合資料の実測にたずさわった伊藤栄二氏、森先一貴氏に対し、感謝の意を表したいと思います。

(森川 実)

註

- 1) また、形成順序が明らかだがひとまとまりの剝離(打面調整など)として認識するのが妥当な場合は、73-k 1～73-k 4のように同じアルファベット記号の末尾に算用数字を加える。このほか、同時剝離で生じた付随的な個体・剝離痕には3～5'のようにダッシュ記号を加え、帰属単位を明示している。
- 2) 工程Ⅰ段階での接合関係を示さず、工程Ⅱ段階での接合関係のみとなる場合は、その接合資料の大きさがI類剝片の大きさとなる。剝離の進行にともなう減損により、「I類剝片」としての計測値はやや不正確になる。
- 3) ただし、接合資料№105には折損値ながら幅が50mmを超える剝片が2例あり、それらを加えて算出した平均値は44.7mmとなる。

参考文献

- 網川一徳編 2000 「大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ」(財)大阪市文化財協会
高野 学・高橋章司編 2001 「翠鳥園遺跡発掘調査報告書-旧石器編-」羽曳野市教育委員会
趙哲 済編 1996 「大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅸ」(財)大阪市文化財協会
原田昌則・長屋幸二・三原慎吾・松藤和人 1989 「八尾南遺跡第2地点の旧石器」
『旧石器考古学』38 pp.19～57
松藤和人 1979 「再び瀬戸内技法について」『二上山・桜ヶ丘遺跡』
山田隆一編 1993 「八尾南遺跡Ⅱ 旧石器第6地点の調査」大阪市教育委員会

表57 接合資料に含まれる剥片・石核属性表(1)

単位	小單位	ブロック	個体数	種類		剥片の 形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	打面機成	打面形態	打面幅 (mm)	打面厚 (mm)	剥離角 (°)	重量 (g)	備考
				工程I	工程II・III											
2-2		2	10	剥片	I	120	100	20	自然面	平頭	83	20	104	184.9		
2-2-a	2	2	1	剥片	N	26	38	5	自然面	平頭	7	1	98	4.4		
2-2-b	2	1		剥片	N'	28	39	7	直状	点状				79		
2-2-c	2	1		剥片	N	25	33	14	剥離面	山形	49	8	133	103.8		
2-2-d	2	2		石核		37	73	12						429	搬器に転用	
2-5	2	3		剥片	III	47	44	10	自然面	平頭	(22)	5	107	15.2	直面剥れ	
2-7	2	3		剥片	I	58	58	10	自然面	平頭	7	7	108	20.9		
2-7-a	2	1		剥片	N	46	46	11						15.9		
2-8	2	1		剥片	N'	(44)	49	10	自然面	平頭	45	10	107	25.2		
2-10	2	8		剥片	III	91	74	15	自然面		61	15	100	613.3		
2-10-a	2	2		剥片	N	83	41	15	自然面	成形				102	29.1 同時剥離	
2-10-b	2	6		剥片	N'	72	78	13	自然面	平頭	61	10		32.3		
2-10-c	2	1		剥片	N	12	(12)	2	单剥離面	平頭	(12)	2		0.3 調査剥片		
2-14		5	6	剥片	I	98	76	17	自然面	平頭	(62)	11	101	82.2 四面合資料No.80		
3-2		2	7	剥片	I	92	74	15	自然面	平頭				69.2		
3-2-a	2	2		剥片	N	34	46	9	自然面	平頭	43	13	133	9.8 垂直剥れ		
3-2-b	2	2		石核	N'	555	76	11	剥離面					43.9 刃頭と同時に平削		
3-4	2	2		剥片	III	68	(60)	15	自然面	平頭	(52)	7	132	42.7 四面合資料No.7		
3-5	2	3		剥片	III	110	(110)	21	自然面	平頭	(75)	16	134	136.8 垂直剥れ		
3-5-	2	1		剥片	III	(27)	34	9						6.4 3-5と同列		
3-6	2	4		剥片	I	68	128	21	自然面	平頭	(85)	23	124	86.2		
3-6-a	2	1		R.F.		44	17	6						3.9 内面状石器未品?		
3-6-b	2	1		剥片	N	26	(27)	10			27	7	130	4.2 垂直剥れ		
3-6-c	2	2		石核	N'	64	128	19	自然面	平頭	(85)	23	124	78.1		
3-7	2	1		剥片	III	157	80	20	自然面	平頭	(59)	24	132	64.1		
3-8	2+3	7	剥片	I	81	(88)	15	—	平頭					94.0 四面合資料No.4		
20-3	4	3	剥片	R.F.	II	82	86	14	自然面	平頭	30	11	118	110.3 四面合資料No.22		
20-7	4	1	剥片	R.F.	II	82	70	17	自然面	平頭	42	15	113	59.2		
20-9	4	1	剥片		II	49	50	27	自然面	平頭	45	22	98	38.8		
20-10	4	1	剥片		II	60	44	23	自然面	平頭	23	19	100	33.8		
20-11	4	1	剥片		II	33	33	12	自然面	平頭	23	11	123	6.2		
20-12	4	1	剥片		II	70	53	21	自然面	平頭	28	19	112	69.4		
20-14	4	2	剥片		II	66	51	19	自然面	平頭	23	11	117	44.4 中下部で削組		
20-15	4	2	剥片		II	52	43	18	自然面	平頭	22	18	99	24.7 中下部で削組		
20-16	4	1	剥片		II	35	49	16	自然面	平頭	41	15	108	25.2		
27-6	45	1	剥片	削器	II	45	46	19	—	平頭	69	18	106	26.0 分割剥片素材		
27-8	6	3	剥片		II	41	77	18	自然面	平頭				25.6		
27-9	6	3	剥片		II	42	56	9	自然面	平頭	62	10	111	18.9		
27-11	4	1	剥片		II	41	(17)	8	—					3.2 垂直剥れ		
27-12	4	4	剥片		II	73	96	12	自然面	平頭	37	2	113	46.9		
27-14	4	1	剥片		II	(30)	23	3	自然面	平頭	(13)	3	108	2.7 垂直剥れ		
27-15	4	1	剥片		II	22	14	3	—					6.9 扉頭		
27-16	4	3	剥片		II	56	75	11	自然面	平頭	89	10	112	45.9 扉頭		
27-19	4	4	剥片		II	51	87	15	自然面	平頭	87	14	105	53.2 垂直剥れ		
27-19'	4	1	剥片		II	(20)	(20)	16	自然面		(30)	(5)		31.27-9と同時剥離		
27-22	4	1	剥片		II	33	58	13	自然面	平頭	43	17	109	16.4 垂直剥れ		
27-23	4	2	剥片		II	36	62	10	自然面	平頭	14	4	108	16.7 垂直剥れ		
28-4	4		剥片		II	49	62	11	自然面	平頭	42	7	127	25.0		
28-9	4		剥片		II	74	47	8	自然面	平頭	43	8	104	27.6		
28-10	4	3	剥片		II	79	49	9	自然面	平頭	47	9	106	23.1		
28-11	5		石核			62	68	17	—					52.5		
37		4255276	5	剥片	I	(90)	(74)	15	—						89.4	
52		5	5	剥片	N	62	72	17	半剥離面	平頭	18	11	103	49.3		
52-a		5		剥片	N	20	38	9	半剥離面	平頭	15	7	111	21		
52-b		5		石核												

表58 接合資料に含まれる剥片・石核属性表(2)

単位	小單位	ブロック	個体数	各種		剥片の 種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	打抜き様	打面形態	打面幅 (mm)	打面厚 (mm)	倒産角 (°)	重量	備考
				工程Ⅰ	工程Ⅱ・Ⅲ											
69		5	24	大剥片			1460	99	43	自然面						38.0 < -
69-1		5	2	剥片		II	33	49	17	单面削面	平頭	38	19	119	17.7	垂直剥れ
69-5		5	1	剥片	ノッチ	II	56	40	13	单面削面	平頭	23	9	114	24.7	
69-6		5	1	剥片		II	39	(26)	6	单面削面	平頭	(17)	6	107	3.6	垂直剥れ
69-7		5	1	剥片		II	61	(41)	12	双面削面	平頭	(17)	7	125	18.0	垂直剥れ
69-9		5	1	剥片	RF	II	62	42	9	双面削面	平頭	36	8	136	14.0	
69-10		5	2	剥片	RF	II	62	66	14	双面削面	平頭	62	15	104	30.2	
69-11		5	2	剥片		I	62	64	13	单面削面	平頭			135	47.6	削器に転用?
69-11a		5	1	剥片	RF	II	50	50	11	单面削面	平頭	29	6	118	22.1	
69-13		5	2	剥片	ノッチ	II	63	132	13	双面削面	山形	129	12	132	64.6	垂直剥れ
69-15		5	6	剥片		I	66	(126)	14	双面削面	平頭	87	15	137	115.2	
69-15a		5	1	剥片	RF	II	69	50	14	-					31.8	
69-15b		5	1	石核		II	49	49	14	双面削面					23.2	
69-15c		5	1	剥片	RF	II	39	27	12	单面削面					10.2	
69-15d		5	1	剥片	RF	II	18	18	7	点状					1.5	
69-16		5	1	石核		(20)	(40)	21	-						16.2	
72-a		5	1	剥片	N	14	49	11	双面削面	山形	40	9	121	4.4		
72-b		5	1	剥片	N	38	13	9	双面削面	山形	29	4	107	2.8		
73-h		5	3	剥片	N	27	43	17	双面削面	山形	33	16		15.3		
73-i		5	2	剥片	N	28	66	9	单面削面	平頭	21	5		12.0		
73-n		5	2	石核		41	85	17	-						55.5	
74		5	9	剥片	I	(75)	(112)	21	不明	山形	37	16	75	119.9		
74-a		5	1	剥片	II	29	38	16	自然面	山形	37	16	75	13.1	背面にボジ面	
74-b		5	1	剥片	II	23	36	10	自然面	平頭	29	9	100	2.7	背面にボジ面	
74-c		5	1	剥片	II	(57)	41	18	不明						34.0	長軸剥片
74-e		5	1	剥片	II	29	31	11	双面削面	平頭	25	10	93	7.1		
74-j		5	1	剥片	II	25	25	5	双面削面	不明	(16)	(5)		2.2	打面を一部低面	
74-k		5	1	RF	II	40	47	10	-						14.9	
74-l		5	1	剥片	II	28	38	10	双面削面	山形	37	8	125	4.7		
74-m		5	2	石核		68	107	21	-						119.9	
75		5	3	剥片	I	(77)	57	17	-						60.0	
75-c		5	1	剥片	N	33	31	10	自然面	平頭	23	10	105	3.3		
75-e		5	1	剥片	N	24	23	6	自然面	平頭	17	6	115	2.2		
75-f		5	1	石核		59	60	17	-						57.5	
84-1		5	2	剥片	II	60	(83)	17	調整	平頭	(42)	17	116	40.4	博文館76	
84-2		5	1	剥片	II	33	55	11	双面削面	山形	51	11	99	10.6		
84-3		5	1	剥片	II	40	57	12	自然面	平頭	47	11	106	20.2		
84-4		5	1	剥片	RF	II	72	34	14	点状					26.6	博文館77
84-5		5	1	剥片	II	58	69	16	自然面	平頭	21	10	118	27.8		
84-6		5	4	剥片	I	63	(113)	16	自然面	平頭	74	17	138	103.3		
84-6'		5	3	剥片	RF	II	(35)	26	13	-					11.6	84-6と同時剥離
84-7		5	3	剥片	II	45	63	11	自然面	平頭	45	14	123	21.5		
84-7'		5	2	剥片	II	28	(42)	16	-						11.9	84-7と同時に剥離
84-9		5	2	剥片	石核	1	62	82	16	自然面	平頭	68	12	54.0		
84-10		5	2	剥片	II	65	64	15	自然面	平頭	26	12	125	58.8		
84-12		5	1	剥片	II	30	(33)	8	自然面	平頭	(62)	24	131	37.4		
84-13		5	2	剥片	I	40	71	18	自然面	平頭	35	12	127	10.2		
84-13a		5	1	剥片	N	26	39	20	双面削面	山形	39	29	110	15.1		
84-14		5	2	剥片	II	60	40	9	自然面	平頭	35	12	127	10.2		
84-16		5	2	剥片	II	37	54	11	自然面	平頭	(18)	5	125	12.6		
84-17		5	1	剥片	II	41	48	18	自然面	平頭	38	17	130	28.3		
84-19		5	1	剥片	RF	II	50	56	17	自・斜	平頭	33	19	113	21.0	博文館79
87		5	1	剥片	I	138	81	22	点状						121.7	

表59 接合資料に含まれる剥片・石核属性表(3)

単位	小単位	ブロック	個体数	形種		剥片の 型態	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	打削側或 打削面	打削形態	打削面 (mm)	打削厚 (mm)	鋸歯角 (°)	重量 (g)	備考
				工程I	工程II・Ⅲ											
90			5	2		剥片	III	(31)	(30)	8	不 明				4.8	チャート表
96-1 a	7		6	剥片		N	32	35	9	自然面	平削	19	9	119	13.7	
	6±7		6	剥片	I	74	77	18	自然面	平削				75.2		
	96-2 a	7	2	剥片	R F	B	33	49	10	自+剥	平削	45	9	116	13.9	
	96-2 b	7	2	剥片	B	36	42	15	自然面	山形	42	15	72	7.2		
	96-2 e	6±7	2	剥片	B	37	49	10	自然面	平削	29	9	115	13.7	垂直剥れ。	
	96-2 f	1	1	剥片	B	(34)	57	14	-					131	打削側を折損	
	96-2 j	7	1	剥片		59	72	17	-					331		
97	7	4		分離剥片		I	86	56	24	-				89.9		
	97-c	7	2	剥片	N	47	(34)	11	自然面	平削	(17)	.8	111	5.6	垂直剥れ	
	97-c'	7	2	剥片	N	22	(39)	6	点状	点状				3.2	垂直剥れ	
	97-e	7	1	剥片	N	64	49	25	自然面	平削	29	6	125	24.2		
	97-n	7	2	石核		41	82	24	-					52.9	剥離時に半折	
100	2	1	剥片	R F	I	93	33	20	單剝離面	平削	20	7	137	53.7	搬文B85	
	3	2	剥片		B	30	40	7	複剝離面	平削	27	8	118	4.7	垂直剥れ	
	4	2	剥片		B	43	36	10	自+剥	平削	36	9	90	8.4		
	6	7	1	剥片	B	55	26	10	單剝離面	平削	3	2	118	8.9		
	7	1	剥片		B	22	21	6	点状					2.8		
	9	1	剥片		B	(42)	(25)	13	自+剥	平削	(22)	10	122	13.7		
	10	4	剥片		B	66	40	13	自+剥		(18)	(8)	110	30.0	剥離時に破砕	
	11	1	剥片		B	18	(22)	6	自然面	平削	(15)	5	112	1.6	垂直剥れ	
	12	1	剥片		B	52	(26)	14	自然面	平削	(26)	6	100	9.9	垂直剥れ	
	13	1	剥片		B	45	36	14	自然面	平削	15	10	84	11.8	搬文B88	
	14	1	剥片		B	24	27	8	破 錐					4.9		
	15	1	剥片		B	35	15	7	点状					2.9	100-15と同時剥離	
	15	7	4	剥片	R F	B	68	69	27	自然面	平削	32	22	95	104.7	加工後に分離
	16	1	剥片		B	65	45	13	複剝離面	山形	40	13	131	36.6		
	17	1	剥片		B	67	51	13	複剝離面	平削	16	8	124	44.6		
	18	1	剥片		B	40	17	5	点状	点状				2.7		
	19	1	剥片	R F	B	67	53	22	單剝離面	平削	13	4	121	54.4	搬文B87	
	20	1	剥片	R F	B	58	31	11	單剝離面	平削	13	7	102	17.7	搬文B85	
	21	2	剥片		B	69	63	14	單剝離面	平削	28	9	104	51.7		
	22	2	剥片	R F	B	57	34	9	單剝離面	平削	(8)	8	94	13.4	搬文B84	
	24	1	剥片		B	43	21	7	單剝離面	平削	40	20	161	34		
101	5±7	3		剥片		III	31	30	8	-				7.8	チャート表	
103	2	1	剥片		B	(34)	(26)	9	破 錐					6.7	打削破砕・垂直剥れ	
	3	2	剥片		B	48	(51)	19	自然面		(77)	18	146	39.7		
	4	1	剥片		B	21	(26)	9	自+剥	平削	37	8	139	13.8		
	5	1	剥片		B	34	33	17	-					25.5		
	6	1	剥片		B	35	25	6	点状	点状				4.6		
	7	1	石核		B	49	63	31	-					127.7		
	8	1	剥片		I	54	43	16	自然面	平削	(25)	19	139	36.0		
132	4	1	剥片	石核	I	56	54	11	-					31.5		
	10	1	剥片		B	32	60	12	複剝離面	平削	38	11	123	43.9		
	11	1	剥片		B	32	38	7	單剝離面	平削	10	3	130	5.6		
	14	1	剥片		B	34	31	10	單剝離面	平削	18	10	128	6.4		
	17	1	剥片		B	42	49	9	單剝離面	平削	23	9	128	14.7		
	20	1	剥片		B	27	42	7	單剝離面	平削	14	6	108	5.8		
	21	2	剥片		B	54	43	19	複剝離面	平削	33	11	120	23.6		
	22	16		石核		83	63	45	-					171.8	熱熱破砕(BL5%)	

第3節 八尾南遺跡第6地点における遺跡形成過程の再検討

1 遺跡構成の概要

八尾南遺跡第6地点では、計10ヵ所のブロックが設定区分され、報告されている。各ブロックは、出土石器点数、組成などの内容に違いが認められる。一方で、垂直分布の幅はいずれも20cm前後とまとまっており、2～7ブロックでは、分布の広がりの中で頻繁な接合関係が認められることから、同時性はきわめて高いと判断された。

各ブロックは、旧石器時代遺物の検出範囲の全面に、まんべんなく分布しているわけではない。1～7ブロックは、南東側8×9mほどの範囲に集中している。北側では、8～10ブロックが間隔をおいて分布しているほか、8ブロックを含む範囲に、明瞭な集中部が認められない「拡散的分布域」が設定されている。拡散的分布域の範囲は、面積の上では、1～7ブロックが集中する範囲とほぼ同じである。その範囲内では、原礫、石核各2点ずつが、集積されたような状況で検出されており、範囲内での接合関係も少なくない。

これらのブロック、および拡散的分布域は、石器の接合関係、および特徴の共通する「母岩」の分布にもとづいて、南群(2、3ブロック)、中央群(4～7ブロック)、北群(8、10ブロック+拡散的分布域)の3つのまとまりが、それぞれ「同時期性」を示す単位として把握された。そして、これらのブロック群に含まれなかつた1ブロック、9ブロックもあわせて、出土石器の特徴、技術、類似する母岩の存在などから、遺跡全体として同時期に形成された可能性が極めて高いと判断された。

このような遺跡の構成に対して、報告時には、遺跡の形成過程についての仮説が提示されている。その要点は、次のとおり。

(1) 地形に対する遺物分布の状況から、自然営力による二次的な移動の可能性はほとんどないとして、遺物分布の状況が人間活動の結果形成された。

(2) ブロック、とくに遺物点数の多い4、5ブロックを代表とし、2、7ブロックを含め、平面的な遺物分布が「半ドーナツ」状を呈することが指摘された。これは、石器製作時に、作業者が腰を下ろした位置から前方周間に石器が散乱した状況であり、「作業者1人の石器製作によって形成された遺構」つまり「短期間に形成された石器製作址」と解釈する。

(3) 「拡散的分布域」については、遺物分布は散漫であるが、離れた距離で接合するものが少なくなっていることから、上記のようなブロックとは異なり、一時的な遺物分布の形成後、人間により二次的な移動が行なわれたとする。つまり石器製作作業の後に、散乱した石器をそのままに(遺棄)せず、拾い上げるなどして他処へ捨てた(廃棄した)と解釈する。拡散的分布域の範囲内での分布、および接合関係の粗密は、そうした二次的移動の頻度(強度)の差とする。

(4) 以上のブロック、ブロック群、および拡散的分布域は、接合関係その他から、ほぼ同時に形成されたと理解する。その上で、遺物分布の粗密、調査区内での配置の差は、石器製作址-遺棄状況(南群、中央群)、石器製作址の周縁-廃棄状況(北群東半部)、居住域-遺物分布希薄、原礫・石核集積遺構あり(北群西半部)といった空間構成を示すものと解釈する。

以上の仮説は、そもそも旧石器時代遺跡の発掘調査事例が少ない近畿地方の中で、比較的広い範囲の調査成果にもとづいている点で、大きな意味を持つ。

今回の再検討作業は、まず接合資料の詳細な分析を主眼としている。八尾南遺跡第6地点における剥

片剝離、石器製作技術の様相を明らかにするためである。そして、その過程で新たに、2、5ブロック間の接合関係が確認された。さらに、接合資料の平面分布についても再検討を試みた結果、報告時に提示された仮説を検証し、さらに遺跡の形成過程について明らかにすることができるのではないかとの見通しが得られた。出土資料全点についての、平面分布の再検討までには至らなかったが、以下に、視点、方法論とともに、分析の経過と結果を、順を追って報告する。

2 遺跡形成過程分析の視点と方法

言うまでもなく、遺跡に残された石器群は、そこに居住したヒトによる石器製作作業の結果、作り出されたものである。構築物としての遺構がほとんど検出されない日本列島の旧石器時代開拓地遺跡は、基本的に、石器群の分布の広がり－まとまりによって把握される。つまり、旧石器時代の遺跡構成とは石器群の分布の状況であり、その形成過程とは、石器群が作り出され、残される過程にはかならない。

石器群が作り出される過程は、各石器資料の上に残る製作時の痕跡を総合化することで理解できる。さらに接合資料からは、具体的な打ち削りの手順を知ることができる。今回の再検討作業では、報告書に掲載された資料を中心に接合資料の詳細な分析を行なった。同時に、一連の接合資料が遺跡内にどのように分布しているのかを検討することができた。

もちろん、遺跡の形成、埋没・遺存から、発掘調査による検出までの間には、長い時間が経過している。人間活動による遺物分布の形成が完了した後は、埋没・遺存が進むまで、自然營力による二次的な遺物の移動が想定されるし、また堆積層の形成後にも、各種の作用による遺物の移動が起こり得る。こうした現象により、本来の人間活動(石器の製作－廃棄)の結果を反映していた分布状況が、変形、搅乱を被っていることも想定しなければならない。

八尾南遺跡第6地点の場合、南群、中央群のブロック集中部を横切る形で、縄文時代の自然流路(SD-1)が形成されている。流路の覆土中からも計253点の石器が出土しており、流路内、あるいは流路に隣接するブロック(2、3、4)との間に接合関係が認められる。これらのブロックの一部は、後の時代の流路形成に際して侵食され、構成資料の一部が流出、散逸していることは明らかである。さらに1ブロックについても、調査範囲外に続く流路内に流出した資料が少なくなかったことが想定されている。しかし一方で、各ブロックの範囲内に残された資料については垂直分布の幅が20cm内外とまとまっており、一定のレベルにきわめて集中している傾向が認められる(八尾南報告書第14～15図)。関東平野一帯の平均的な出土状況、さらに全国的な状況(中沢 2000)と比較して、まとまりが良いといえるあり方である。頻繁に接合関係が認められることも含め、ブロックのまとまり－広がりの検討に際しては、2次的な移動の影響は考慮しなくともよいと判断される。また、遺跡全体については、報告書で指摘されたとおりであろう。なお拡散的分布域については、後にやや詳しく検討する。

また、遺物の埋没－堆積層の形成過程やその後の自然營力による影響が少ないか、ほとんどなかつたとしても、遺物分布の形成過程を単純化して捉えることはできない。これまで、「遺跡の構造論的研究」としてまとまられてきた論考では、形成過程への注意がきわめて欠如している。分布上の単位=人間活動の単位とし、さらには活動の場そのものであるとする解釈の枠組みにしても、あるいは分布上の単位=人間集団の単位とし、接合関係などを経済－社会的関係の反映とする枠組みにしても同様である。

たとえば、遺跡における石器群の組成のうち、石核、調整剝片、碎片などは、石器製作の副産物である残渣であり、生じると同時に不要品として廃棄されるものである。一方で、必要とされる石器素材は、

そのままで、あるいは加工を施されて道具としての石器となり、使用された後に廃棄される。作られた時点で、作られたその場所に残されるのではない。製作の時点から時間差をもって、さらに異なる場所に残されることが多いだろう。また残滓類であっても、製作作業時の状態そのままで残されているとは限らない。後片付け、そして別の場所への廃棄といった行為が介在することも予測される。遺跡における石器群は、こうしたさまざまな状況での廃棄物の集合体である。

今回の作業では、接合資料の上で読み取れる作業工程が、平面分布の上でどのように捉えられるのかを検討するための、分布図の再構成をまず行なった。個々の資料の性格（残滓、素材、製品）、作業工程の中での位置づけ（作業面や打面の変更、打点の大幅な移動の有無など）や技術的特徴だけでなく、効果的な打ち割りだったのか、剥離事故が起こっているのかといった状況も加味している（図101～110）。これにより、原石－石核の打ち割り＝石器製作作業の遂行の各時点における、様々な状況の結果が、どこに残されているのかをトレースすることを試みたのである。従来おこなわれてきた遺跡の構造論的研究では、こうした詳細な状況が検討されないまま、遺物分布や接合関係が直截的に解釈される傾向が強かった。分布図上の接合線が、すなわちモノの動きやヒトのつながりを示すとされがちだったのである。この点に配慮して、可能な限りの情報を読み取り整理することが、今回の作業における最大の目的である。

なお、本稿では紙面の都合もあり、あらたにブロック間、接合個体間の接合が得られた資料（個体2+80、3+4）を中心に詳細な検討を行い、その後、再検討資料全体の傾向を確認した上で、遺跡形成過程と人間行動について考察する。

3 接合資料の分布とその解析

（1）接合資料分布範囲の状況

南群（2、3ブロック） 繩紋時代の河川流路SD-1との間を含めて、16例の接合資料が報告されていたが、今回の作業の結果、個体3+4+7が接合したため14例となった。この接合個体3+4はSD-1南東部、とくに19Gグリッド東側の分布のまとまりにも分布しており、この範囲の他の資料についても、本来2ブロックに含まれていた可能性が高い。周囲に分布する接合個体については、やや北側にはなれた接合個体8を含め、適宜、本群に含めて検討する（八尾南報告書付図4、および本書図101）。なお、今回の作業により、本群と北側に隣接する中央群との間に1例の接合関係が確認された（接合個体2+80）。SD-1内19Gグリッド東側のまとまりと中央群との間にも1例の接合関係が認められているが、今回の検討対象外である（接合個体63）。

接合関係は、おおむね2ブロックの範囲内に収束し、そこからブロック外、あるいは3ブロックへ派生している資料がある。遺物点数の少ない3ブロック内では、接合例、点数も少ない。2ブロックについては、さらにいくつかの小さな集中部（仮クラスター）に区分できる可能性があるが、今回は座標資料全点のデータ化まで至らなかったため、詳細な空間分析は行なっていない。

中央群（4～7ブロック） 4、5ブロックを中心に、80例の接合資料が報告されていたが、今回の作業の結果、個体20+22が接合したため79例となった（八尾南報告書付図5、本書図103）。また、南側に隣接する南群との間に新たな接合関係が確認された（接合個体2+80）。SD-1内19Gグリッド東側のまとまりとの間にも、1例の接合関係が認められている（接合個体63）。

接合資料は、4、5ブロックに集中し、とくに5ブロックでは範囲内に収束する傾向がある。4-5-

6ブロック間には接合関係が認められる。4ブロックでは、範囲内に収束する接合資料と、5、6ブロック、あるいはブロック外との接合関係が認められる。7ブロックでも、範囲内に収束する資料のほか、6ブロック、ブロック外との接合関係が認められる。6ブロックの接合資料は、すべて他ブロックと接合するものである。南群と比較して、構成ブロック数が多いだけでなくブロック間やブロック外との接合関係が顕著である。

4、5ブロックは、原報告者によって「半ドーナツ」状の平面分布が指摘されている。実際には、いくつかの小集中部が隣接、重複した結果のようである。

北群(8、10ブロック、拡散分布域) 南群、中央群とはやや離れた位置に、より広い範囲に分布している。8ブロックを内包する拡散分布域に、35例の接合資料が報告されている(八尾南報告書付図6、本書図110)。南群、中央群との接合関係は認められない。

接合資料は、拡散分布域のほぼ全体に広がるように分布しており、南群、中央群のように狭い範囲に収束、集中することはない。全体的な平面分布も、小規模な分布のまとまりがいくつか隣接しているのではなく、範囲全体に散漫に遺物が認められる状態である。8ブロックは、そうした散漫な分布の南東隅に位置し、集中した2ないし3の小集中部から構成されているようである。10ブロックは、拡散分布域の北西にやや離れて位置し、8ブロックや拡散分布域との間に接合関係は認められない。

(2)接合個体とその分布状況

接合個体2+80 南群2ブロック範囲を中心には、ブロック外とSD-1、さらに5ブロックとも接合する。工程I~IIIを含むが、石核は残されていない(接合していない)。作業の前段階に相当する部分もなく、中間段階のみが遺跡内に残されているかたちになる。欠落資料を一部含むが、残されている部分については、作業の流れはほぼ連続している。

工程順の各資料の分布と接合関係は図102のとおり。ただし、分布図上では、接合していない不在の単位は飛ばして、実在単位同士を結線している。このため、不在の単位への作業時に行なわれた打面転位の一部は表示されていない。

旧個体80を除くほとんどの資料が2ブロックほぼ中央の小集中部に集中している。その他の小集中部やブロック周縁、ブロック外にも若干の資料が分布している。工程Iで生じた単位については、不在単位が介在するため断言はできないが、一回の打撃ごとに、分布位置が移動する傾向にある。単位2-2は中央にあるが、不在の2-3を経て打面転位の後、2-5は南西周縁部(折れた一片は南の小集中部)にあり、不在の2-6を経て打面転位の後の2-7は中央の北縁部付近(一部SD-1)にある。連続する2-8は南の小集中部、不在1単位をはさんで2-10は中央に戻り、その後、打面転位を介在して5ブロックへと大きく移動する。2-2から派生する工程II、IIIの資料は、北の小集中部やブロック周縁にも分布している。

ブロック群間の移動を作業の一区切りとし、一方、礫面の形状から想定される単位2-1より以前の作業についても、南群の外、おそらくは遺跡(調査区)外にあるとする。と、その間、2-2~2-12の11単位のうち、約半分6単位が南群2ブロックとその周辺にあり、その中には垂直割れなど剥離事故を起こして放棄されたと考えられるものも含むため、基本的に、連続する作業が南群に関連して行なわれたと考えることができるだろう。資料がもっとも集中して分布する中央の小集中部については、剥離作業が行なわれ、不要な残滓類がそのまま残された場所といえるかもしれない。一方で、剥離事故による断

片などは必ずしも集中しておらず、2-5のように若干離れて分布しているものもある。石核や石器素材として選択され、持ち出された可能性のある不在単位のことともあわせて、連続的な剥離作業により形成された一次的な分布状態が、選別、持ち出しなどの行動を経て二次的に動かされている状態を示しているとみるべきであろうか。あるいは、作業自体は他所で行なわれ、選別、持ち出しを経た後の残滓がまとめて廃棄された状態を示しているのかもしれない。この点については、後段でさらに検討する。

選択されたものの一部は、そのまま工程Ⅱ、Ⅲの石核、石器素材となり、南群2ブロックとその周辺に残されている。繰り返しになるが、また別の一部は不在単位となっている。工程Ⅰを一区切りさせ、次に工程Ⅱ、Ⅲを行なうが、その場で得た素材の全てを使い切るのではなく、素材として、あるいは石器に加工した状態で、次の生活地への移動に伴い持ち出されている。おそらく、残されなかつた石核も、さらに工程Ⅰを継続するために持ち出されたものと思われる。

それでは、次の移動先となったのは中央群5ブロック（とその周辺）だったのだろうか。しかし、5ブロックには1単位しか残されておらず、しかも工程Ⅲの素材となっている。南群にみられたように、連続的な単位=作業の痕跡は認められない。考えられるのは、2-14+aの単位まで南群で作業が行なわれ、そこで選別されたものの中から1単位が中央群にもたらされた可能性、あるいは2-13以降の作業は遺跡外のどこか、つまり他の遺跡で行なわれ、そこで選別された1単位が中央群にもたらされた可能性である。現在のところ、ブロック群間の接合はこの1例限りであり、一方、南群から持ち出されたと考えられる石核や素材はまだほかにも見受けられることから、南群から中央群へと、直接、あるいは近接した移動は考えにくいかもしれない。

以上、指摘してきた事柄をもう一度まとめる。

- ① まず、おそらくは原石の状態からではなく、ある程度、剥片の剥離作業が進められた石核の状態から、工程Ⅰの作業が他所からの継続として開始され、打面転位などを介在させながら連続的に行なわれる。
- ② 作業に一区切りがつけられる。注意すべきなのは、この区切りは、石核の消耗などにより作業が行き詰ったからではなく、おそらく、まだ作業が継続できる状態の石核を、途上で残しているところである。作業の開始も他所からの継続であり、終了もまた、他所への継続を意図していると考えられる。一ヶ所で、集中的に作業を行ない完遂させる枠組みではない。同様な状況は、ほかにもいくつかの接合個体に認められる。
- ③ 作業の一区切りとともに、選別と持ち出しが行なわれる。あるいは、選別や持ち出しは、一回から数回の打撃ごとに任意に行なわれているのかもしれない。いずれにせよ、その過程で一次的な遺物分布の状態が動かされる。意図的に動かされるだけでなく、付隨的、偶発的に動かされるものもあるだろう。あるいは、まとまった廃棄が行なわれているのかもしれない。工程Ⅱ、Ⅲの結果についても同様である。破損した石器の分布が、剥離作業の残滓類と重なるものもあることから、次々に別の不要物が付加的に廃棄されていくこともあったと考えられる。
- ④ 工程Ⅱ、Ⅲについては、工程Ⅰが進行する途上で、随時、挿入されることはあるのだろうか。打面転位などを介在しているとはいえ、石核への調整をほとんど行なわずに、連続的に進められている工程Ⅰの作業をいちいち中断させてまで、別の作業工程をさしはさむとは考え難いので、工程Ⅰ→工程Ⅱ、Ⅲという流れが想定される。この時、工程Ⅱ、Ⅲで生じた残滓類の分布が、工程Ⅰのそれと重なるということは、場所を変えずに次の作業を続けて行なったか、あるいはひと

まとめに廃棄されたということを示していると考えられるだろう。

このように、いくつかの工程段階の作業が次々に進められる中で、分布が比較的まとまり、2ブロック中央の小集中部が形成される核となつたのであろうか。

接合個体3+4+7 南群2ブロック範囲を中心、3ブロックとSD-1にも接合関係が認められる。接合個体2+80と同様、大きめの円礫を素材とし、工程I～IIIを含むが、石核は残されていない。作業の前段階に相当する部分もなく、中間段階のみが遺跡内に残されているかたちになる。欠落資料を一部含むが、残されている部分については、作業の流れは比較的よく連続している。工程順の各資料の分布と接合関係は図102のとおりである。

接合資料は、2ブロック中央の小集中部と、南の小集中部にまとまっている。工程Iで生じた単位のうち、実在する最初の単位3-2は、2ブロック中央の小集中部を中心に分布し、打面転位の後、不在単位を介して3-4は東に、さらに打面転位の後に3-5・5'は中央(一部SD-1)、3-6は南を中心に一部中央に分布する。次の打面転位の後、3-7は中央とその縁辺、3-8は分割され、2ブロック中央と、南の小集中部と3ブロック、SD-1にまで分布している。分布の移動には規則性を読み取り難く、ランダムなようにもみえる。なお、3-8以降の作業については遺跡内に痕跡が残っていない。石核は、作業を継続させるのに十分な大きさを保っていたと考えられるので、作業に区切りがつけられた上で、他所へ持ち出されたものと思われる。ここでも、接合個体2+80と同様に、工程Iを一ヶ所で完遂せずに途上で終了、他所へ継続する一方、その合間に工程II、IIIが挿入されるという枠組みが認められる。

工程II、IIIで生じた個体は、不要な残滓と思われるものでも南群のあちこちに散っている状態である。3ブロックに分布するものの接合距離は3mを越えており、意図的に持ち運ばれたものと考えられる。そのほかも、比較的まとまっている小集中部からみて、一定の方向に散っているわけではないので、打撃時などに飛び散った状態とは考え難い。工程Iの単位のランダムにみえる分布の移動もあわせて考えると、一ヶ所での連続的な作業の結果がそのまま残されているのではなく、廃棄行動などが分布状態に大きく影響しているのだろう。

接合個体20+22 中央群4ブロック範囲を中心、SD-1にも接合関係が認められる。接合状態では、個体2+80、3+4+7よりやや小さめの円礫だが、礫面の状態からみて、同程度の大きさがあったとも考えられる。工程I・IIを含むが、石核は残されていない。作業の前段階の欠落部分はあまり多くなく、一方、石核側が大きく欠落している様子がうかがえるので全体として、作業の前半段階が遺跡内に残されているといえる。欠落資料は少なく、残されている部分については、作業の流れはほぼ連続している。工程順の各資料の分布と接合関係は図104、105のとおりである。

接合資料は、4ブロック東の小集中部にまとまっており、一部が西の小集中部にある。工程Iで生じた単位のうち、実在する最初の単位20-3だけが、4ブロック西の小集中部(一部SD-1)に分布する。不在の単位を介在させ、また打点をやや移動させた後、打面転位は経ずに、20-7以降のほぼ連続する単位が同一打面から剥離されている。分布は狭い範囲によくまとまっている。

接合個体27 中央群4ブロックと6ブロックにまたがる接合関係が認められる。接合状態では、個体20+22と同様の円礫を素材としていると考えられる。工程I～IIIを含むが、石核は残されていない。作業の前段階は大きく欠落しており、石核側も大きく欠落しているので、作業の中間段階だけが遺跡内に残されているといえる。欠落資料は少なく、残されている部分については、作業の流れは比較的よく連続している。工程順の各資料の分布と接合関係は図104、105のとおりである。

接合資料は、4ブロックでは中央の小集中部にまとまっているほか、北側の周縁部～ブロック外にも分布しており、このほかに6ブロックにも分布している。工程Iで生じた単位のうち、実在する最初の単位27-6は石器に加工されており、4ブロック北東のブロック外にある。その後、打点を移動させてから、実在する単位1つごとに、6ブロックと4ブロック間を往復するように移動、27-12以降の実在する単位は、ほぼ4ブロック中央の小集中部に分布する。

この「モノ」の「移動」を、「ヒト」の動きに付随するものと捉えると、連続する作業の一一手ごとに、腰が据わらずに2mの距離を行き来していたということになる。一方、「ヒト」を固定させて「モノ」を移動させた場合、受け取った石核上で、前の作業者の手順をしっかりと踏まえながら一手、すぐにはまた相手に手渡すということを最低3～4回繰り返したということになる。実在単位の後半段階に小型の調整剝片や碎片が多く分布もまとまっていることから、4ブロック中央の小集中部が、剥離作業が行なわれた場所か、あるいは一まとめに廃棄された状態と考えられ、その中から抜き取った(取られた)ものが結果的にブロック6の側に残されたと考えるべきなのであろうか。この解釈が成り立つなら、接合個体27に関しては、ブロック4→6へという先後関係を設定することができる。しかし、6ブロックにも破碎片の一部があり、選別、持ち込まれたものだけが分布しているとは言い難い。単純に、廃棄行動の段階で偶発的に区別され、あるいは一緒にされたものが、それぞれ別の場所に捨てられただけなのかもしれない。

接合個体28 中央群4ブロック範囲内を中心に、5ブロックにも接合関係が認められる。ソフトボール大程度の扁平な円礫を素材とする。工程Iだけからなり、石核は残されている。作業の前半段階は大きく欠落しており、一方、後半の3単位は連続して残されている。欠落資料は少なく、残されている部分については、作業の流れはほぼ連続している。工程順の各資料の分布と接合関係は図104、105のとおりである。

接合資料は、4ブロック中央の小集中部にまとまっている、石核だけが5ブロックにある。不在の單位や、石核周囲での打点の移動を介在するにもかかわらず、分布は狭い範囲によくまとまっている。上述の各接合個体とは異なり、遺跡外から継続して開始された作業が、遺跡内で完了している状況にある。

接合個体69 中央群5ブロックの範囲内に分布する。きわめて大型の剝片を石核素材として剝片を剥離している。工程I～IIIを含むが、石核素材自体が、いまひとつの工程Iの産物であり、そこから派生した作業工程の部分だけが残されることになる。石核は、折れた破片の一部のみが認められ、大半の部分は残されていない。大型剝片が石核とされて以降の作業段階はおむね残されており、作業の流れはほぼ連続している。工程順の各資料の分布と接合関係は図105、107のとおりである。

接合資料は、5ブロック北西の小集中部にまとまっている、一部は中央の集中部にも分布している。ブロック周縁部にも一部資料がある。石核素材となった大型剝片が持ち込まれて以後の作業は、前半段階から最終段階まで連続して完遂されているといえるが、石核素材を作り出す段階については、作業の痕跡がまったく残されていない。また、残されていない石核片の大きな側については、持ち出されてさらに作業が継続されている可能性も残る。

接合個体84 中央群5ブロックの範囲内に分布する。接合個体69と同様、きわめて大型の剝片を石核素材として剝片を剥離している。工程I～IIIを含むが、石核素材自体が、いまひとつの工程Iの産物であり、そこから派生した作業工程の部分だけが残されることになる。石核は、作業途上で大きく

折損しており、最終的には残されていない。大型剝片が石核とされて以降、石核が消耗しきる最終段階以前の作業が残されていることになるが、その間の作業の流れは比較的よく連続している。工程順の各資料の分布と接合関係は図107、108のとおりである。

接合資料は、5ブロック中央の小集中部にまとまっており、一部は東、北西の集中部や周縁部にも分布している。石核が大きく破損することとなった打撃の前後でも分布はまとまっており、とりたてて移動している状況はみられない。基本的には、遺跡内に残されている範囲の作業は、連続して行なわれているといえるだろう。

4 まとめにかえて

再検討を行なった接合個体は上記以外にもまだあるが、個別の分布状況については記載しない。基本的には、上記個体のいずれかに近いパターンに類型化が可能である。

まず、まとまっている接合資料、実在単位が多い個体では、多くの場合、各ブロックの特定の小集中部にまとめて分布することが多い。碎片や剝離事故とともに大きな破碎片なども、その範囲にまとまる場合が多いようである。作業の行なわれた場所を示しているか、あるいはまとまっている廃棄の単位を示しているのだろう。

しかし、個別にみると、やや離れた場所や他ブロックにも破碎片などが分布している場合もあり、單純に、一ヵ所での作業→他所への持ち出しと理解するわけにはいかないようである。一方で、離れた場所や他ブロックへの移動は、打面転位などの作業の区切りとは一致しない場合が多く、分布図上の接合線を、一意的に社会的、経済的関係として読み替えると、石器製作作業の進行上、不自然な区切りを挿入することになりかねない。遺物の接合関係、分布図上の接合線を単純に読み解くことの問題点を浮き彫りにしているといえるだろう。

接合資料の状態からみると、きわめて大型剝片を石核素材とする作業工程は、もっとも遺物点数が集中するブロック、小集中部に限られている(5ブロック北西、中央の小集中部:接合個体69、84)。調査範囲の制約により、ブロック、およびブロック群の広がりが明確でない長原遺跡の各調査区でも、類似する作業工程を示す接合資料は規模の大きい、出土点数の多いブロックに認められるようである。比較的大型の礫から剝片を剝離する作業工程の部分的な段階、やや小型の礫から剝片を剝離する作業工程の前半、あるいは後半段階などを示す接合個体は、もちろん、このようなブロック、小集中部にも分布している。小集中部を、クラスターに類するものとするならば、石器製作の作業内容がもっとも集中した類型ということになるだろう。

次いで、比較的大型の礫から剝片を剝離する作業工程の部分的な段階、やや小型の礫から剝片を剝離する作業工程の前半、あるいは後半段階の認められる小集中部(クラスター)がある。八尾南遺跡第6地点では、中央群5ブロックに隣接する4、6、7ブロックや、南群2ブロックを構成する小集中部(クラスター)に、この類型が認められる。さらに、やや小型の礫から剝片を剝離する作業工程の前半、あるいは後半段階のみが認められる小集中部(クラスター)がある。あまり大きくなかった剝片を石核素材とする作業工程も、この小集中部の中に認められるだろう。八尾南遺跡第6地点では、拡散分布域や8ブロックを構成する小集中部(クラスター)に、この類型が認められる。長原遺跡のいくつかの調査区も同様である。

一方で、先にみた栗生間谷遺跡の各ブロックークラスターの構成内容は、上記3番目の中集中部(ク

ラスター)と比較しても、まだ懸隔が大きいものである。一方で、八尾南遺跡第6地点や長原遺跡の一部に認められる、もっとも石器製作作業の集中した小集中部(クラスター)の類型であっても、サヌカイト原石からの一貫した作業工程は完遂されていない。さらに前段階の作業が行なわれていた場を解明しなくてはならない。

二上山サヌカイト原産地での石材の獲得、運搬、その過程での処理方法、移動の経路、大阪平野一帯の遺跡=生活地における石材の供給、補充の機会など、検討すべき課題は山積している。の中でも、比較的大型の砾から剝片を剥離する作業工程が遺跡内に部分的に残されている状況、遺跡間にまたがつて継続的に作業が行なわれていると思われる点は興味深い。従来、近畿地方のナイフ形石器群を代表する剝片剝離-石器製作の枠組みとして分析されてきた瀬戸内技法では、石核素材を得る段階(第1工程)、石器素材を得る段階(第2工程)が、技術工程上きわめて明瞭に分節化されており(松藤 1979)、またその遂行が「工程の異所展開」(山口 1991)というかたちで、遺跡レベルで区分的になされていると指摘されている。この「異所展開」については、さらに遺跡内の分布状態、ブロックークラスターのレベルでの分析を行なう必要があるが、現時点ですべて予察するところでは、八尾南遺跡第6地点で明らかになりつつある状況とは大きく異なると思われる。

石器群の編年的位置づけは、いまだに定まったとは言い難い。八尾南遺跡第6地点のような状況が、分節化が確立する「以前」の状態なのか、分節化が緩む「以後」の状態なのか、あるいは同時期における異なる石材利用行動のパターンを示しているのか、ここで判断することはできない。しかし、今後、石器群の比較検討を行なう上で、石器形態や組成、技術に付け加える新たな視点として、遺物分布の分析による遺跡形成過程をクローズアップしてゆくことには大きな意義があると考える。個体分類の困難なサヌカイトが主要石材であることから、近畿地方の遺跡、石器群には、いわゆる「遺跡構造論」的な分析研究は向かないのではないかと捉えられてきた。しかし、接合資料の読み取りにもとづく石器製作作業内容を遺物分布の上に戻すことで、遺跡における人間活動を復元することも可能である。そのための基礎資料のデータ化と解析は、時間のかかる作業ではあるが、今回、その一端に触れることができたのではないかと考えている。分析は完遂しておらず、検討すべき項目はまだ多い。今後の議論の展開に向けてご意見、ご批判を得るために端緒とならんことを願って、小稿を終えることとしたい。

(野口 淳)

参考文献

- 大阪市文化財協会編 2000 「長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ」
松藤和人 1974 「瀬戸内技法について」『あたがみ 二上山北麓石器時代遺跡分布調査報告』、学生社
山口卓也 1991 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地-遺跡立地の差と地域性の発生について-」『関西大学考古学等資料室紀要』8
山田隆一編 1993 『八尾南遺跡Ⅱ 旧石器出土第6地点の調査』、大阪府教育委員会(府文化財調査報告書第44輯)

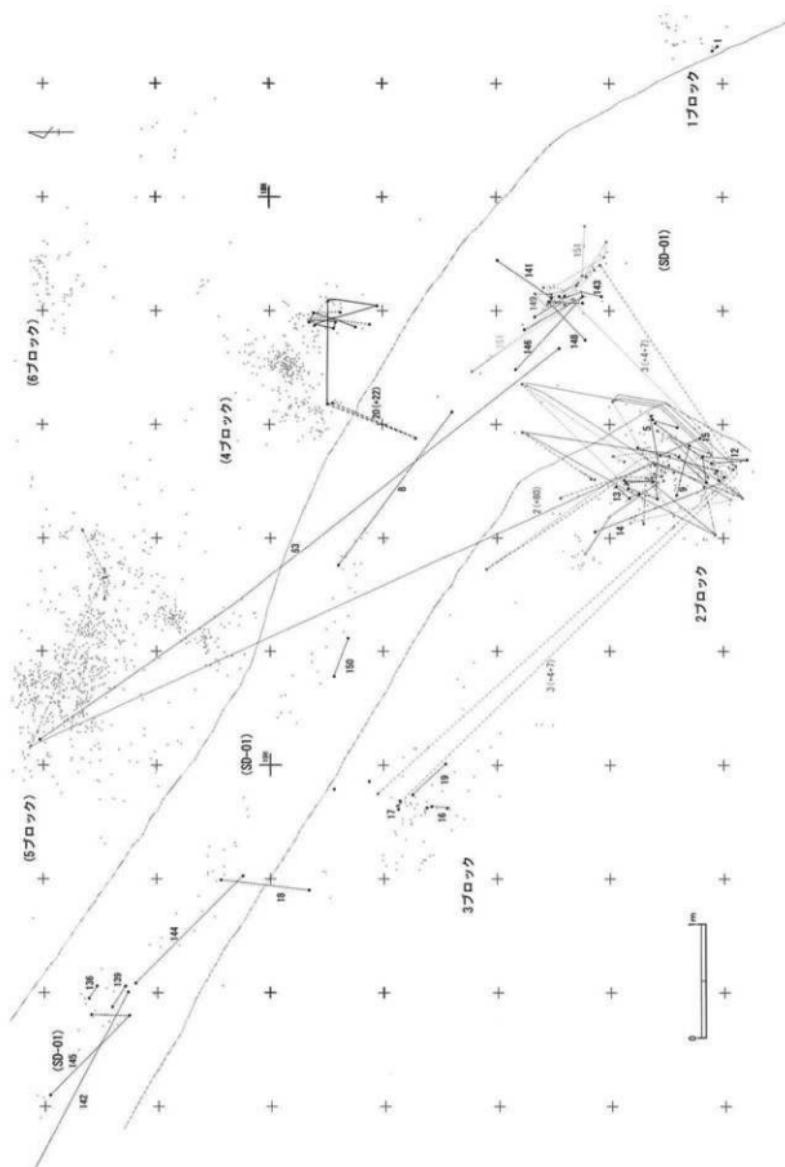


図101 八尾南遺跡第6地点南群全体図

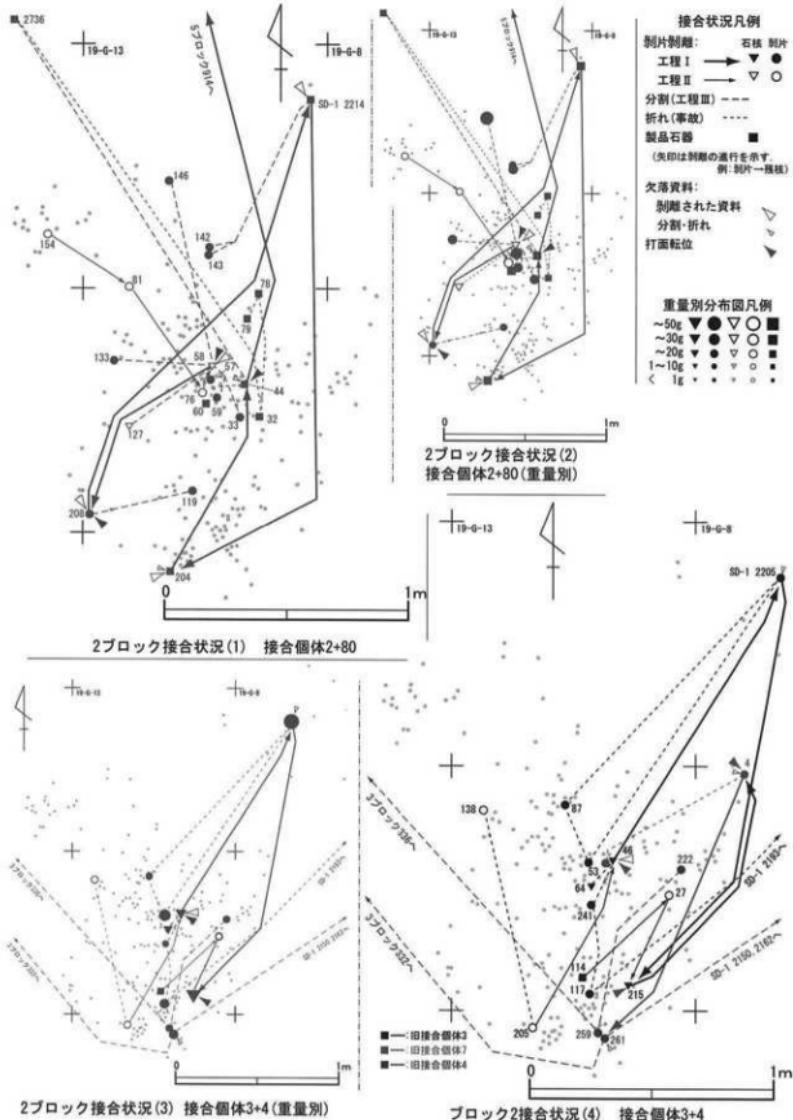


図102 八尾南第6地点南群 2ブロック接合状況

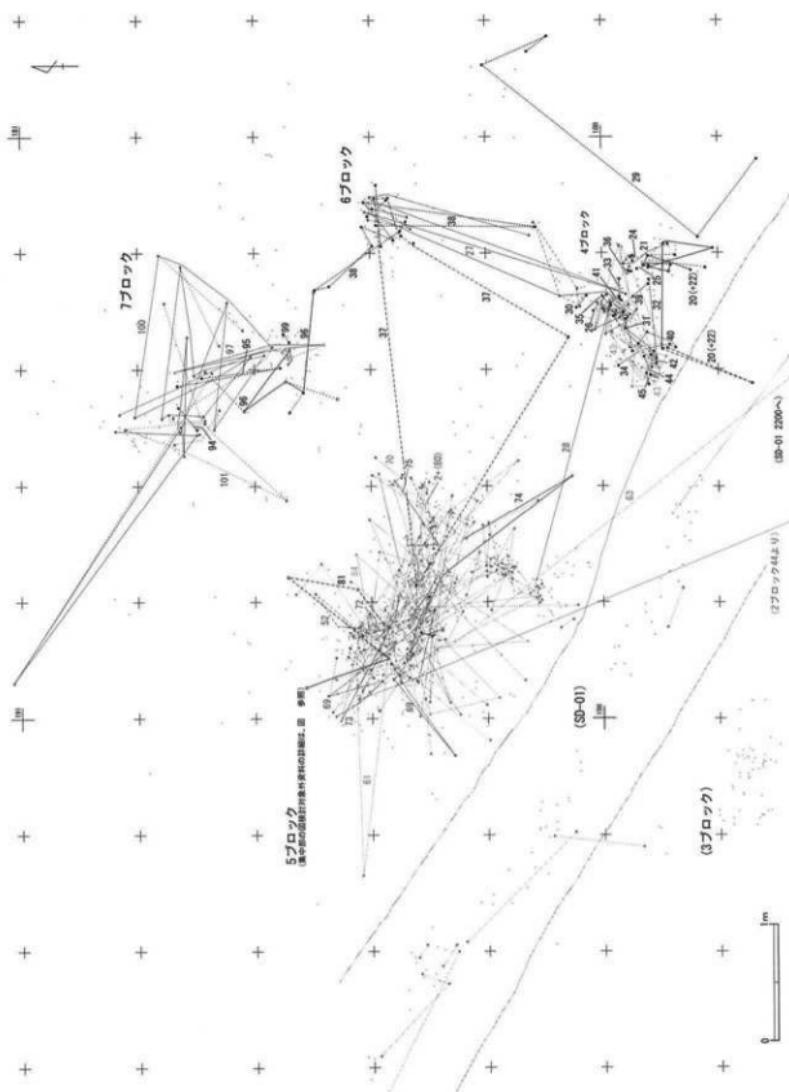


図103 八尾南遺跡第6地点中央群全体図

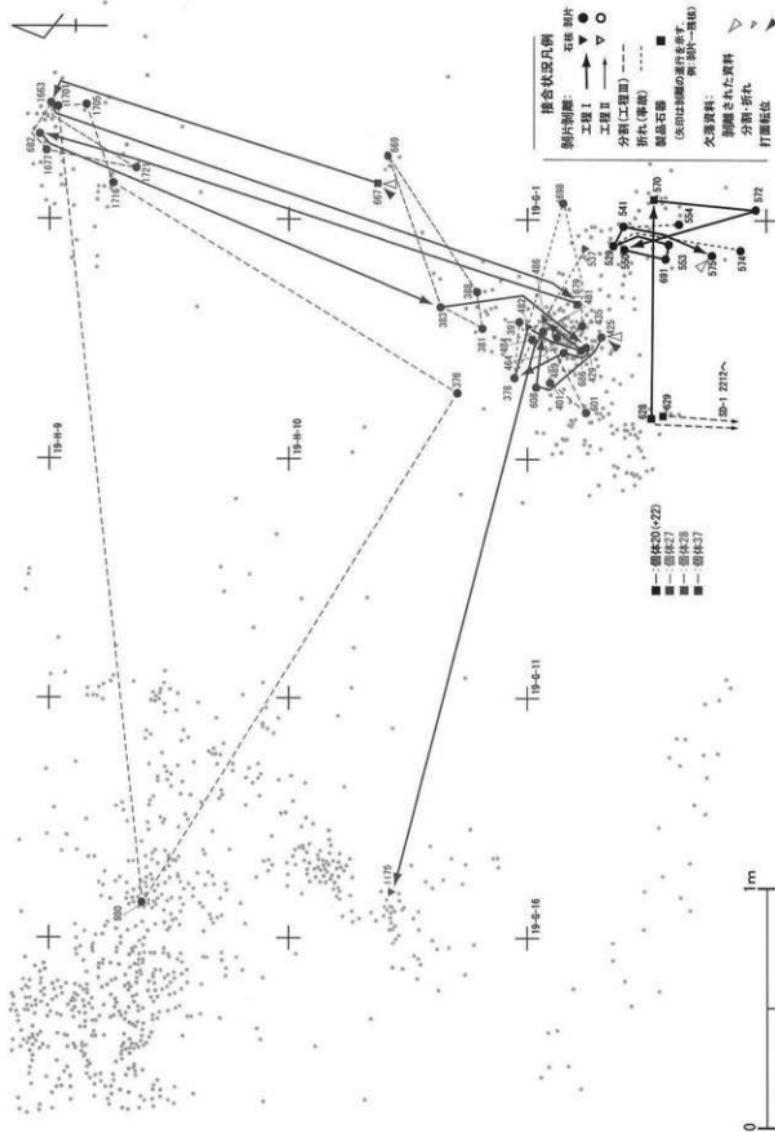


図104 八尾南遺跡第6地点中央群4・5・6ブロック接合状況（1）

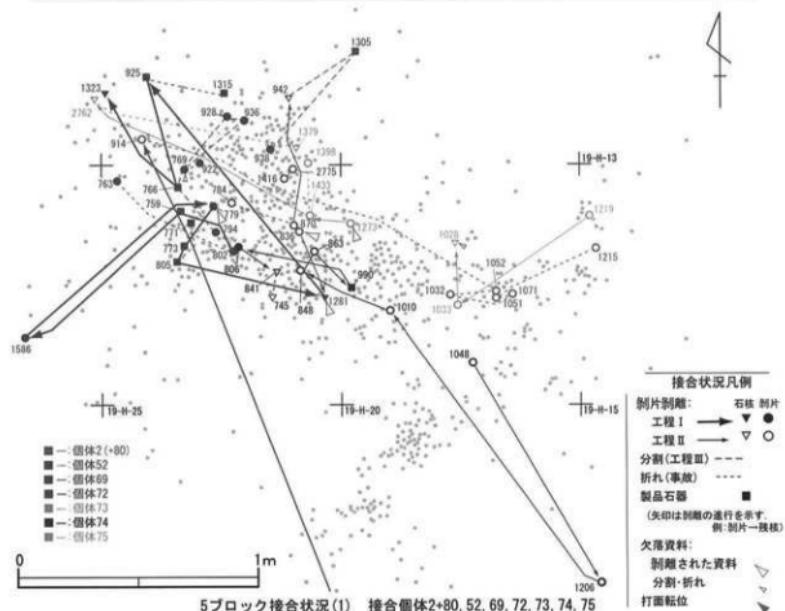
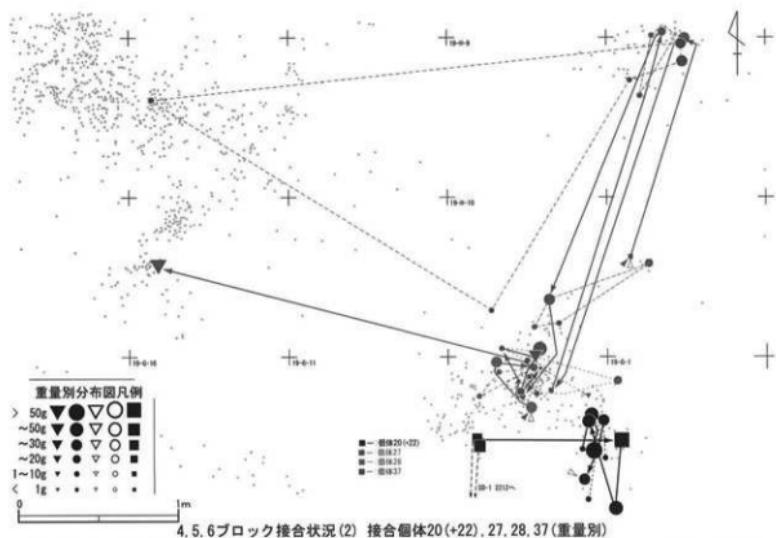
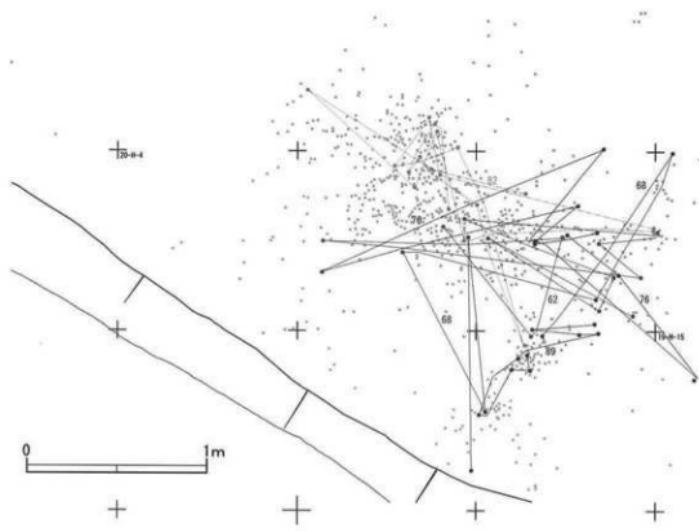
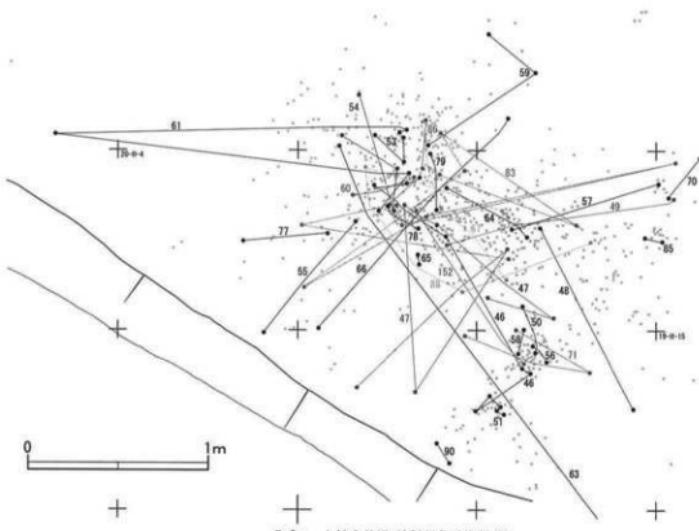


図105 八尾南遺跡第6地点中央群4・5・6 ブロック接合状況(2)・5 ブロック接合状況(1)



5ブロック接合状況・検討対象外資料(1)



5ブロック接合状況・検討対象外資料(2)

図106 八尾南遺跡第6地点中央群5ブロック接合状況（検討対象外資料）

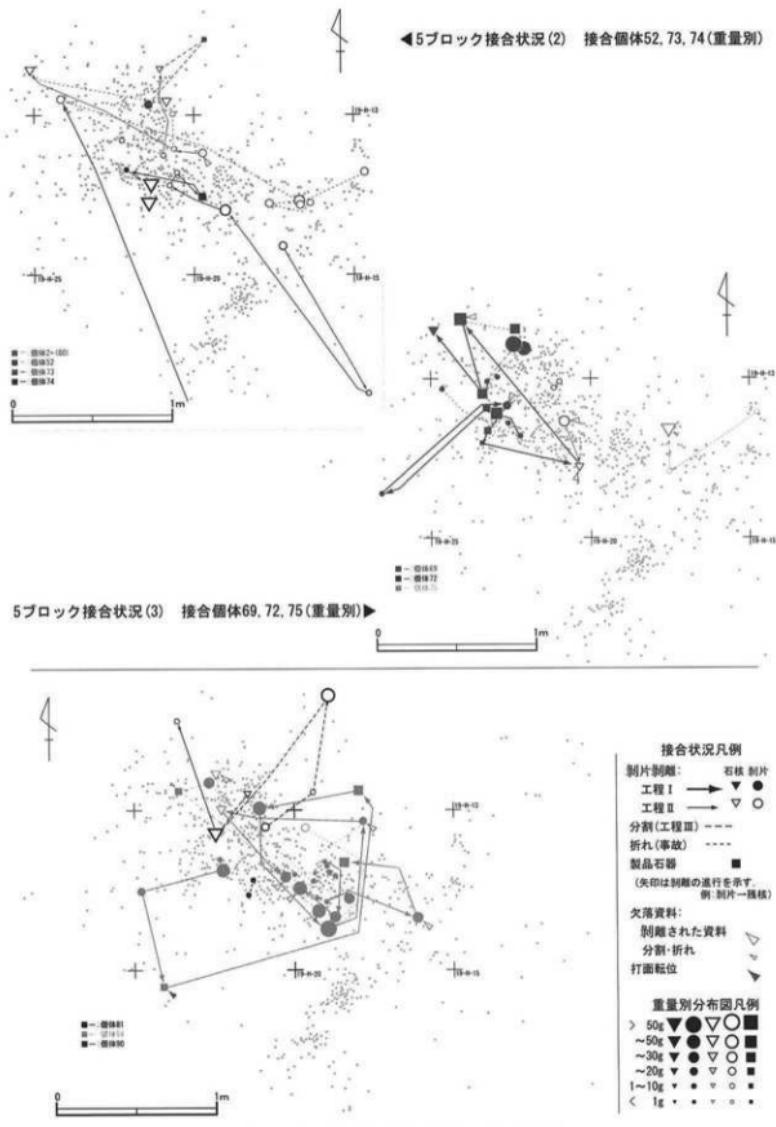


図107 八尾南遺跡第6地点中央群5ブロック接合状況(2)～(4)

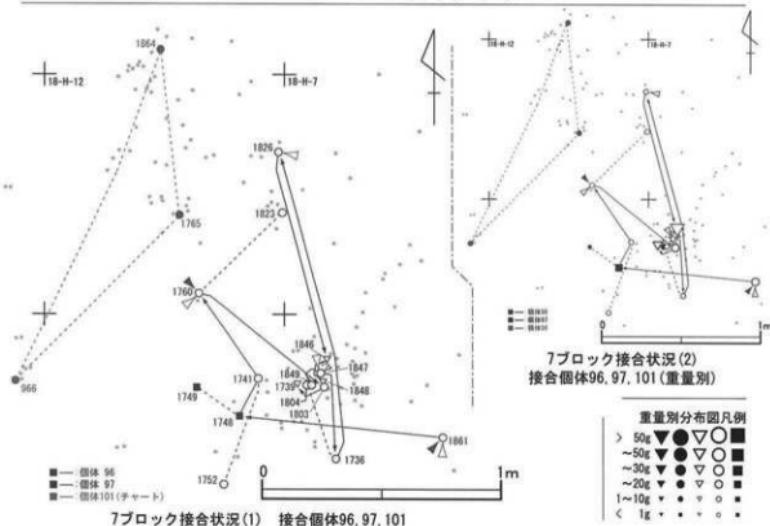
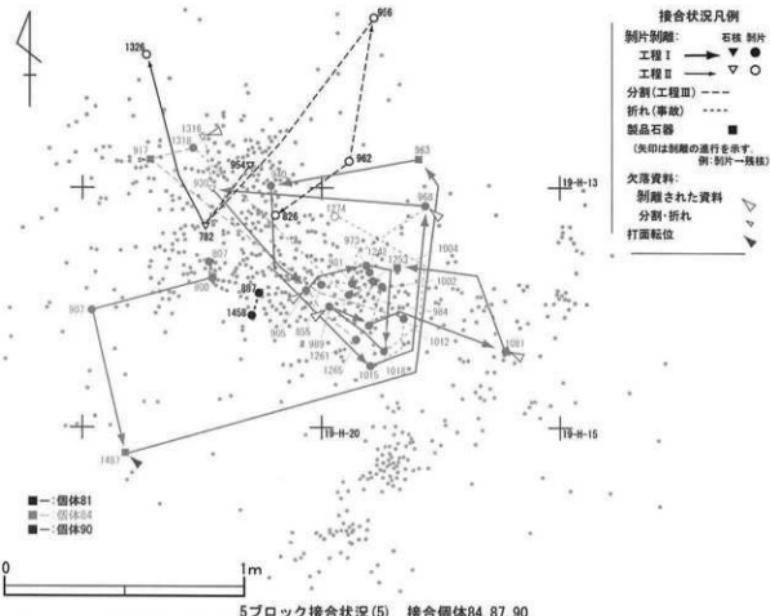
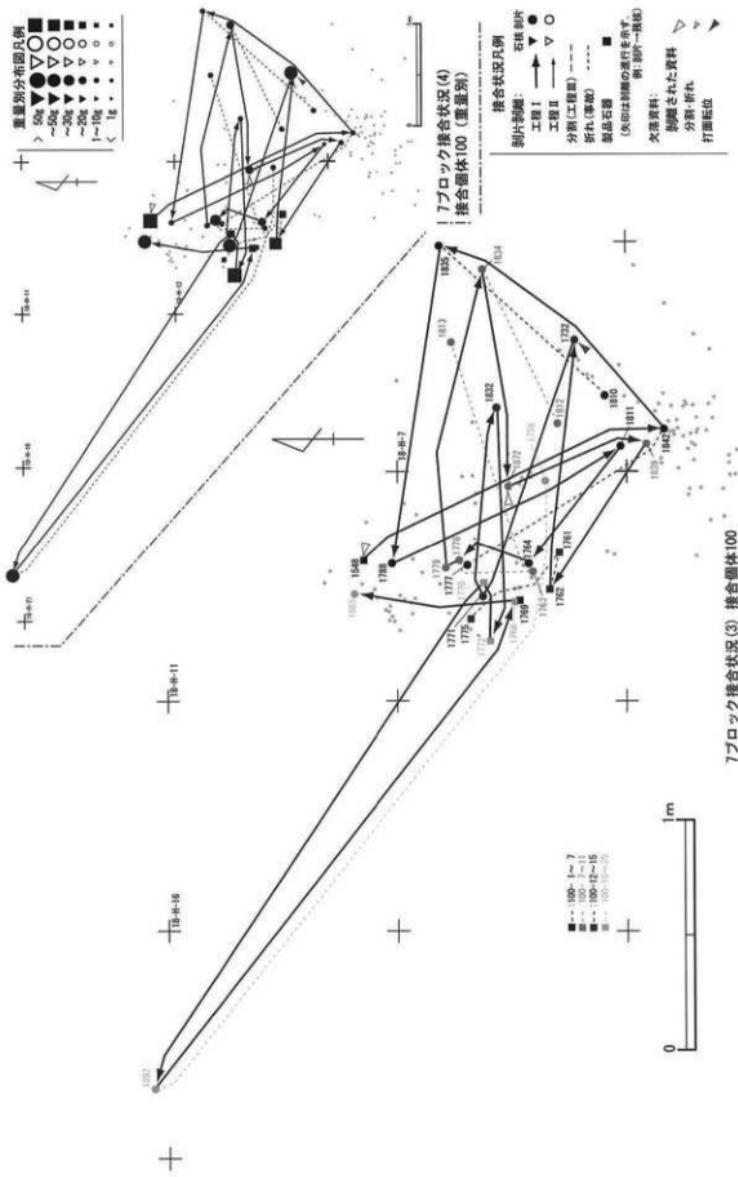


図108 八尾南遺跡第6地点中央群5ブロック接合状況(5)・7ブロック接合状況(1)(2)



接合状況凡例

剥片剥離: 石片 剥片
 工程 I: ▼ ●
 工程 II: ▽ ○
 分割(工程Ⅱ): ---
 折れ(事故): - - -
 製品石器: ■
 (矢印は剥離の進行を示す。例: 剥片→剥片)

欠落資料:
 剥離された資料: △
 分割・折れ: ▽
 打面転位: ▲

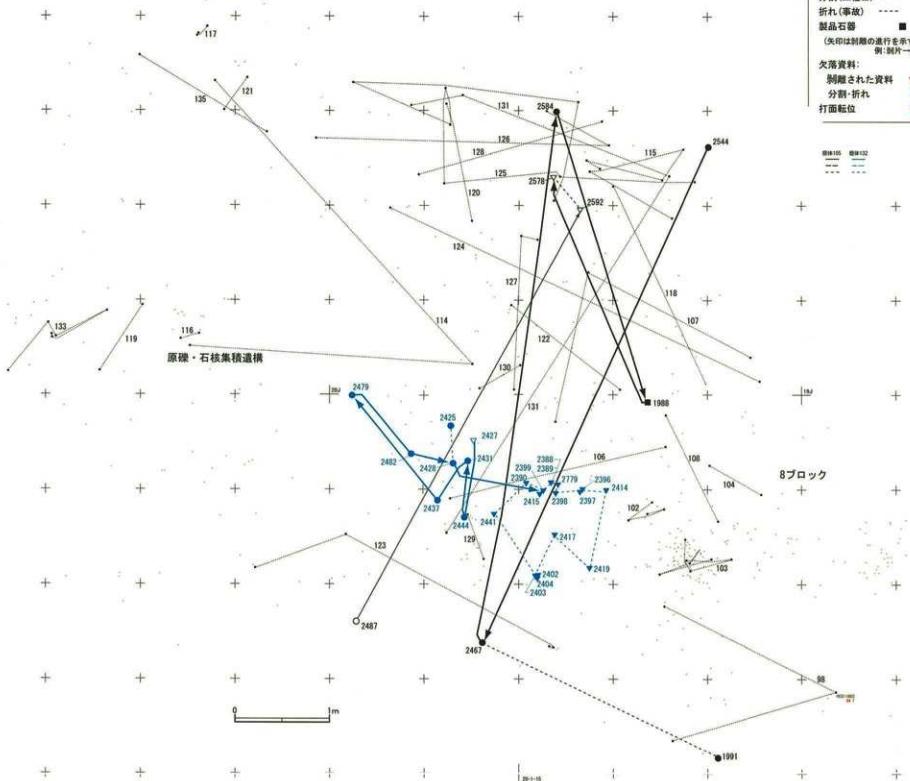


図110 八尾南遺跡第6地点北群全体図